

東小倉遺跡Ⅳ

(～公共下水道工事・集落道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書～)

2005・3

長野県南安曇郡三郷村教育委員会

東小倉遺跡Ⅳ

(～公共下水道工事・集落道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書～)

2005・3

長野県南安曇郡三郷村教育委員会



11号住居址



11号住居址



26号住居址



27号住居址



31号住居址



33号住居址



33号住居址



33号住居址



34号住居址



34号住居址



37号住居址



37号住居址



36号住居址土偶出土状况



36号住居址



26号住居址



38号住居址遺物出土狀況



38号住居址



38号住居址



38号住居址



40号住居址



42号住居址



44号住居址



50号住居址



51号住居址



47号住居址埋甕出土状況



47号住居址



埋甕 1 出土状況



埋甕 1



埋甕 2



32号住居址



アルプス学園前工事立会い



39号住居址



11号住居址



28号住居址

序

東小倉遺跡は、縄文時代を中心とする包蔵地が集まる黒沢川流域の中で最も下流に位置する遺跡で、かねてから土器、石器の密度の濃い散布地として知られており、三郷村でも最大級の縄文集落があった所とみられています。

今回、三郷村の公共下水道工事ならびに道路改良工事が遺跡内を通ることになり、平成14年4月と8月～11月にかけて発掘調査が行われました。東小倉遺跡では通算5度目の調査となり、これまでに見つかった住居址は53軒に及びます。いずれも下水道敷設や道路改良など、線的なごく限られた範囲を発掘しただけの結果で、まとまった面積を発掘すれば、どれだけの遺構が出てくるのか想像もつきません。東小倉遺跡の全容は未だ見えたとはいえないのです。

しかし、一連の調査で遺跡の範囲がほぼ確認できたことや、焼失住居址の発見で、近代的な年代測定ができたこと、土器・石器・土偶などの豊富な遺物から、当時の人々の暮らし振りが見えてきたことなど、その意義は大きいといえます。また、現在編纂中の「三郷村誌Ⅱ」の中に、発掘の成果を反映できたことも幸いでした。

こうした緊急発掘に伴う遺構の多くは、保全されることが極めて稀といえます。この地で暮らした先人たちのことを想うとき心が痛みます。今回の発掘では小学生たちの見学会が行われ、昨日までそこに縄文人たちが座っていたかのような、生々しい住居址の床や炉を見ることができました。また土に埋もれる縄文土器を見て、その匠の技に驚きもしました。こうした体験や発掘の成果が、学校教育や生涯学習を通じて郷土の理解を深める一助になることを願うものです。

最後になりましたが、調査全般に渡りご指導、ご協力をいただいた山田瑞穂団長・今村 克調査主任をはじめとする調査団の皆様、公共下水道工事ならびに道路改良工事の関係者他、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝を申し上げます。

平成17年3月

三郷村教育委員会
教育長 中村 孝信

例 言

- 1 本書は、東小倉遺跡内の県道小倉梓橋停車場線と集落道12号線とに沿って設置される下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、三郷村教育委員会が調査団を組織して実施した。
- 3 本書の編集は、主として那須野雅好と山田瑞穂、今村克が行った。
- 4 本書の執筆は、調査団で決定した分担によって行い、各文末に氏名を明記することにより、文責を明らかにした。

- 5 本書作成における分担は次のとおりである。

遺構図整理・トレース	今村 克	荒井留美子	
遺物整理	山田 瑞穂	田々井誉子	畑中智恵子
	上兼 美香	河野 由子	
土器復元	山田 瑞穂	田々井誉子	畑中智恵子
	上兼 美香	河野 由子	
遺物実測・トレース	山田 瑞穂	畑中智恵子	
写真（発掘調査）	今村 克	那須野雅好	
写真（遺物）	中田 育成	那須野雅好	
測量・実測図	今村 克	荒井留美子	
石質鑑定	木船 清		
石器計測一覧	木船 清	田々井誉子	

実測図等の縮尺は図に示してある。

- 6 調査の諸記録・実測図・遺物は、三郷村教育委員会において保管している。
- 7 遺構番号は、本調査に先行する平成9年の東小倉遺跡発掘調査から、Ⅲ次の県道小倉梓橋停車場線・Ⅳ次村道514号線・Ⅴ次東小倉12号線と続く一連のカウントである。

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査にいたるまで	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の方法	5
第2章 東小倉遺跡周辺環境	6
第1節 地形・地質	6
第2節 歴史的環境と村内の遺跡	7
第3章 III次調査の遺構と遺物	19
1. 住居	19
2. 土坑	34
3. 溝状遺構	41
4. 遺構外出土遺物	41
第4章 V次調査の遺構と遺物	51
1. 住居	51
2. 土坑	118
3. 遺構外出土遺物	135
付属資料	
石器計測一覧	137
黒曜石産地推定結果	215
東小倉遺跡の自然科学分析（放射性炭素年代測定）	227
第5章 まとめ	233

挿図目次

第1図	柱状図調査地点	6	第31図	第14号住居址出土土器拓影 (その1)	49
第2・3図	東小倉遺跡南部の柱状図	7	第32図	第14号住居址出土土器拓影 (その2)	50
第4図	三郷村埋蔵文化財 遺構包蔵 地図	11・12	第33図	第26・27号住居址	53
第5図	調査位置図①	13	第34図	第26号住居址遺物出土図	54
第6図	調査位置図②	14	第35図	第28号住居址	57
第7図	Ⅲ次調査 遺構配置図	15・16	第36図	第29号住居址	59
第8図	Ⅴ次調査 遺構配置図	17・18	第37図	埋甕1～4	61
第9図	第5号住居址	20	第38図	第30号住居址	63
第10図	第7号住居址	22	第39図	第31号住居址	65
第11図	第8号住居址	23	第40図	第32号住居址	67
第12図	第9号住居址	24	第41図	第33号住居址	70
第13図	第10号住居址	26	第42図	第34号住居址	73
第14図	第11号住居址	28	第43図	第34号住居址遺物出土図	74
第15図	第12号住居址	29	第44図	第35号住居址	75
第16図	第13号住居址	30	第45図	第36号住居址	77
第17図	第14号住居址	32	第46図	第37号住居址	80
第18図	第15号住居址	33	第47図	第38号住居址	83
第19図	土坑11～22・25・26	36	第48図	第38号住居址遺物出土図	84
第20図	土坑23・24・27～38・43	37	第49図	第39号住居址	86
第21図	土坑39～42・44～50・56・57	38	第50図	第40号住居址	89
第22図	土坑51～54・58～61・65	39	第51図	第40号住居址遺物出土図	90
第23図	土坑62～64、溝2～3	40	第52図	第41号住居址	92
第24図	溝1	42	第53図	第42号住居址	94
第25図	第5・7・10号住居址出土土 器拓影	43	第54図	第43号住居址	96
第26図	第10号住居址出土土器拓影	44	第55図	第44号住居址	98
第27図	第11・12・15・溝状遺構出土 土器拓影	45	第56図	第45号住居址	100
第28図	第10・11号住居址出土土器	46	第57図	第46号住居址	101
第29図	第7・10・11号住居址出土石 器及び石製品	47	第58図	第47号住居址	104
第30図	第11・14・15号住居址及び遺 構外出土石器	48	第59図	第48号住居址	106
			第60図	第49号住居址	108
			第61図	第50号住居址	111
			第62図	第51・52号住居址	113

第63図	第52号住居址遺物出土図 ……115	第89図	第33号住居址出土土器拓影 (その1) ……154
第64図	第53号住居址 ……117	第90図	第33号住居址出土土器拓影 (その2) ……155
第65図	土坑 ……121	第91図	第33号住居址出土土器 ……156
第66図	土坑 ……122	第92図	第33・34号住居址出土土器 ……157
第67図	土坑 ……123	第93図	第34号住居址出土土器 ……158
第68図	土坑 ……124	第94図	第34・36・37号住居址出土土 器 ……159
第69図	土坑 ……125	第95図	第34号住居址出土土器拓影 (その1) ……160
第70図	土坑 ……126	第96図	第34号住居址出土土器拓影 (その2) ……161
第71図	土坑 ……127	第97図	第36号住居址出土土器拓影 ……162
第72図	土坑 ……128	第98図	第37号住居址出土土器拓影 (その1) ……163
第73図	土坑 ……129	第99図	第37号住居址出土土器拓影 (その2) ……164
第74図	土坑 ……130	第100図	第37・38号住居址出土土器 ……165
第75図	第26号住居址出土土器拓影 (その1) ……140	第101図	第38・39号住居址出土土器拓 影 ……166
第76図	第26号住居址出土土器拓影 (その2) ……141	第102図	第38・39・40・42号住居址出 土土器 ……167
第77図	第26号住居址出土土器拓影 (その3) ……142	第103図	第40号住居址出土土器拓影 (その1) ……168
第78図	第26号住居址出土土器拓影 (その4) ……143	第104図	第40号住居址出土土器拓影 (その2) ……169
第79図	第26号住居址及び遺構外出土 土器 ……144	第105図	第41号住居址出土土器拓影 ……170
第80図	第26・27・30号住居址出土土 器 ……145	第106図	第42号住居址出土土器拓影 ……171
第81図	第27号住居址出土土器拓影 ……146	第107図	第43号住居址出土土器拓影 (その1) ……172
第82図	第28号住居址出土土器拓影 (その1) ……147	第108図	第43号住居址出土土器拓影 (その2) ……173
第83図	第28号住居址出土土器拓影 (その2) ……148	第109図	第43号(その3)・44号住居 址出土土器拓影 ……174
第84図	第28号住居址出土土器(その 3)・第29号住居址出土土器拓 影 ……149	第110図	第43・44・51・52号住居址出 土土器 ……175
第85図	第28・31号住居址出土土器 ……150		
第86図	第26・28・29・30号住居址出 土土器 ……151		
第87図	第30号住居址出土土器拓影 ……152		
第88図	第32号住居址出土土器 ……153		

第111図	第45号住居址出土土器……………176	175・176・186・189出土土器
第112図	第45号住居址出土土器拓影……………177	拓影……………194
第113図	第33・36・37・40・44・45・ 47・52号住居址出土土器……………178	第130図 土坑200・212・214・226出土 土器拓影……………195
第114図	第46・47号住居址出土土器拓 影（その1）……………179	第131図 土坑227・228・229・231出土 土器拓影……………196
第115図	第47号住居址出土土器拓影 （その2）……………180	第132図 土坑232・233・234出土土器 拓影……………197
第116図	第47・50号住居址出土土器……………181	第133図 土坑236出土土器拓影……………198
第117図	第48号住居址出土土器拓影 （その1）……………182	第134図 土坑238出土土器拓影……………199
第118図	第48号（その2）・49号住居 址出土土器拓影……………183	第135図 第49号住居址・土坑240出土土器 拓影……………200
第119図	第50号住居址出土土器拓影……………184	第136図 第51号住居址・土坑244・集石1・ 竪穴1出土土器拓影……………201
第120図	第50号住居址出土土器及び埋 甕1……………185	第137図 土偶……………202
第121図	第52号住居址出土土器拓影 （その1）……………186	第138図 土偶・耳飾り・土製円盤……………203
第122図	第52号住居（その2）・53号 住居（その1）土器出土土器 拓影……………187	第139図 土坑・埋甕3覆土内・遺構外 出土石器……………204
第123図	第53号住居址出土土器拓影 （その2）……………188	第140図 遺構外出土ミニチュア土器・ 注口土器・釣手土器片実測図 ……………205
第124図	第51・52・53号住居址出土石 器……………189	第141図 遺構外（アルプス学園前附近） 出土土器拓影……………206
第125図	埋甕2・土坑及び遺構外出土 土器……………190	第142図 遺構外出土土器拓影……………207
第126図	埋甕3拓影・埋甕4……………191	第143図 遺構外出土土器拓影……………208
第127図	土坑145・149・151・152・153 出土土器拓影……………192	第144図 遺構外出土土器拓影及び土器 底面拓影……………209
第128図	土坑154・155・158・159・160 出土土器拓影……………193	第145図 遺構外出土石器……………210
第129図	土坑161・165・166・168・172・ 175・176・186・189出土土器	第146図 遺構外出土石器……………211
		第147図 遺構外出土石器……………212
		第148図 遺構外出土石器……………213
		第149図 遺構外出土土器……………214
		第150図 集落の範囲と動向……………231・232

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査にいたるまで

三郷村の黒沢川橋左岸一帯に広がる地域は、縄文時代中期の住居址を中心に、土器や石器の密度の高い遺跡として知られていた。本地域一帯の遺跡の中では、南松原遺跡が年代的に古く、勝坂式土器の集落である。これに対し、東小倉遺跡においては、平成5年の第Ⅰ次調査における堀内國利氏宅北側に隣接する畑地、および平成9年の第Ⅱ次調査における県道小倉梓橋停車場線からは、加曾利E式土器が出土し、縄文時代中期後半の遺跡であることが確認されている。この東小倉遺跡一帯は南安曇郡下でも最大級の縄文遺跡であり学術的価値の高い地域である。

今回の発掘は、東小倉遺跡内の県道・村道について、村の下水道工事ならびに村道拡幅工事が行われることに伴う埋蔵文化財保護調査である。

三郷村教育委員会では、これまでの確認事項と各工事の規模とを勘案し、次の諸点に立って、県教育委員会と協議しながら、平成14年度に発掘調査を実施することにした。

- 1 調査団長を、前回までの黒沢川右岸調査並びに東小倉遺跡において統括をお願いした山田瑞穂先生に依頼し、長期にわたる発掘に備える調査団を組織した。
- 2 第Ⅲ次調査の県道小倉梓橋停車場線は、第2次調査において道路北側の水路改修工事に沿って調査しているので、今回は道路南側の下水道工事ラインに沿って堀内宅前から上方へ向かって調査し、前回出土している住居址とのつながりを大事に調査していくことにした。
- 3 第Ⅳ次調査の村道514号は、流域下水道工事ラインに沿って、堀内宅側から北へ向かって調査し、第1次調査における堀内氏の畑地での調査内容とを照合しながら、東小倉遺跡の東端及び北端を明らかにしたい（第Ⅳ次調査分については「東小倉遺跡Ⅲ」として2003年3月に報告書作成済みである）。
- 4 第Ⅴ次調査の東小倉12号線は、これまで調査があまり入っていない個所であるので、成果が期待される。道路拡幅工事という発掘にとっての好条件を生かし、道路幅全面の調査を実施して、東小倉遺跡の範囲の決め出しにつなげたい。また、これまでアルプス学園前古墳と語り継がれている古墳の存在についてもその片鱗がつかめることを期待したい。

第2節 調査体制

調査団長	山田 瑞穂 (日本考古学協会員)
調査主任	今村 克 (長野県考古学協会員)
作業員	荒井留美子 有沢 芳明 飯田 三男 小穴 兆司 待井 敏夫 道浦久美子 山崎 照友
整理員	上兼 美香 河野 由子 田々井誉子 畑中智恵子
事務局	西澤 泰彦 (三郷村教育委員会・教育次長) 那須野雅好 () ・村誌編纂係長) 中田 育成 () ・村誌編纂係)

第3節 調査の経過 (第Ⅲ次・第Ⅴ次・五反田)

1. 発掘作業

(1) 第Ⅲ次調査 県道梓橋小倉線

期間 平成14年4月1日(月)～4月24日(水)

- 4月1日(月) 本日よりⅢ次調査開始。A区掘削。検出作業。
- 2日(火) 5・10・11住掘り下げ。
- 3日(水) 5・10・11住掘り下げ。
- 4日(木) 5・10・11住掘り下げ。
- 5日(金) B区掘削。検出作業。
- 6日(土) B区図面作成。
- 8日(月) C区掘削。検出作業。
- 9日(火) 7住掘り下げ。
- 10日(水) 7・13住掘り下げ。
- 11日(木) D区掘削。検出作業。
- 12日(金) 8・9住掘り下げ。
- 15日(月) D区終了。
- 16日(火) E区掘削。検出作業。
- 17日(水) 15住掘り下げ。
- 18日(木) E・F・G区終了。
- 19日(金) H・I・J区掘削。検出作業。
- 20日(土) H・I・J区終了。
- 22日(月) K区掘削。検出作業。

23日(火) L・M区掘削。検出作業。

24日(水) L・M区終了。Ⅲ次調査終了。

(2) 第Ⅴ次調査 集落道12号線

期間 平成14年 8月20日(火)～11月7日(木)

8月20日(火) Ⅴ次調査開始。A区掘削、検出作業。

21日(水) 26・27号住居址調査。

22日(木) 〃

23日(金) 〃

26日(月) 26号住居址調査。B区掘削、検出作業。

27日(火) 〃

28日(水) 〃

29日(木) 28号住居址検出、掘り下げ。

30日(金) 26・28号住居址調査。

9月2日(月) 〃

3日(火) 26・28・29・30号住居址調査。

4日(水) 30・31号住居址調査。

5日(木) A・B区調査終了。

9日(月) C区掘削、検出作業。

10日(火) 〃

11日(水) C区調査。

12日(木) 五反田遺跡で工事中に土器が出土したため、平行して調査を行なう。

13日(金) D区掘削、検出作業。32号住居址調査。五反田1号住居址調査。

14日(土) 32号住居址調査。

16日(月) 五反田1号住居址調査。

17日(火) 雨天休止。

18日(水) E区掘削、検出作業。五反田1号住居址調査。

19日(木) 五反田遺跡調査のため東小倉遺跡調査を一時中止。

20日(金) 〃

21日(土) 五反田遺跡調査終了。

24日(火) E・F区調査。33・34・35号住居址調査。

25日(水) 36号住居址調査。G区掘削、検出調査。

26日(木) 34・36・37号住居址調査。

27日(金) 34・36・37・38号住居址調査。

30日(月)・10月1日(火) 雨天休止。

- 2日(水) 33・34・36・37号住居址調査。市民タイムス取材。
- 3日(木) 〃 三郷小学校5年生見学。
- 4日(金) 〃
- 5日(土) 〃
- 7日(月) 37・38・39・40号住居址調査。H区・I区掘削、検出調査。
- 8日(火) 41・42・43号住居址調査。
- 9日(水) 43号住居址調査。
- 10日(木) 39・40・41・42・43号住居址調査。
- 11日(金) 〃 松商学園放送部見学。
- 12日(土) 〃 三郷村誌編纂委員歴史部会見学。
- 13日(日) 41・42・44号住居址調査。
- 14日(月) 休み
- 15日(火) I区埋め戻し。アルプス学園前工事立会い。
- 16日(水) 38号住居址調査。
- 17日(木) 〃 G区終了。
- 18日(金) アルプス学園から西側工事立会い。
- 19日(土) 〃
- 21日(月) 雨天休止。
- 22日(火) J区調査開始。
- 23日(水) J区・K区掘削、検出作業。
- 24日(木) 45・46号住居址調査。
- 25日(金) L区掘削、検出作業。
- 26日(土) 47・48号住居址調査。
- 28日(月) 〃
- 29日(火) 〃
- 10月30日(水) 47・48号住居址調査。あづみ野排水路試掘調査。
- 31日(木) 〃
- 11月1日(金) 〃
- 2日(土) M区松商学園放送部発掘体験。
- 3日(日) M区検出作業。49号住居址調査。
- 4日(月) 47・49・50号住居址調査。
- 5日(火)・6日(水) 雨天休止。
- 7日(木) 50号住居址調査。
- 8日(金) 51・52号住居址調査。

9日(土)

V次調査終了。

2. 遺物整理作業

平成14年7月1日(月)～平成16年6月25日

場所 三郷村民俗資料館

第4節 調査の方法

県道小倉梓橋停車場線における公共下水道工事(Ⅲ次調査)と、集落道12号線道路改良工事(V次調査)に伴う埋蔵文化財保護協議が、平成14年3月1日に三郷村公民館で行われた。原因事業によって工法が異なるため、それぞれに対応する調査方法を協議した。

まず、Ⅲ次調査となる県道小倉梓橋停車場線公共下水道工事については、巾1.5～2mで工事が行われることから、この巾で長さ10～20mを一回分とし、重機によるアスファルト剥ぎ、同じく重機による表土剥ぎ、手作業による検出作業、遺構の掘り下げ、図化、写真撮影、埋め戻し、という手順を繰り返して進めていくことにした。

次にV次調査となる集落道12号線改良工事は、現状道路より外側の拡張される部分も調査対象となった。巾は場所によってまちまちで、可能な限り調査を行うことにした。手順はⅢ次調査と同様の方法で行うこととした。

測量は、光波トランシットを用いて基準点から原則的に3mのメッシュを組んで行った。基準点はⅢ・(Ⅳ)・V次調査に共通した点を用いた。

遺物については、小片のものはその箇所を明記して分納し、型の大きなものについては全体像を残し、写真撮影・図書き・測量を実施した後に取り上げた。

最後に現場の安全管理は、調査中も一般の通行がある点を考慮して、工事業者から人員、機材の提供を受けて行った。

第2章 東小倉遺跡周辺の環境

第1節 地形・地質

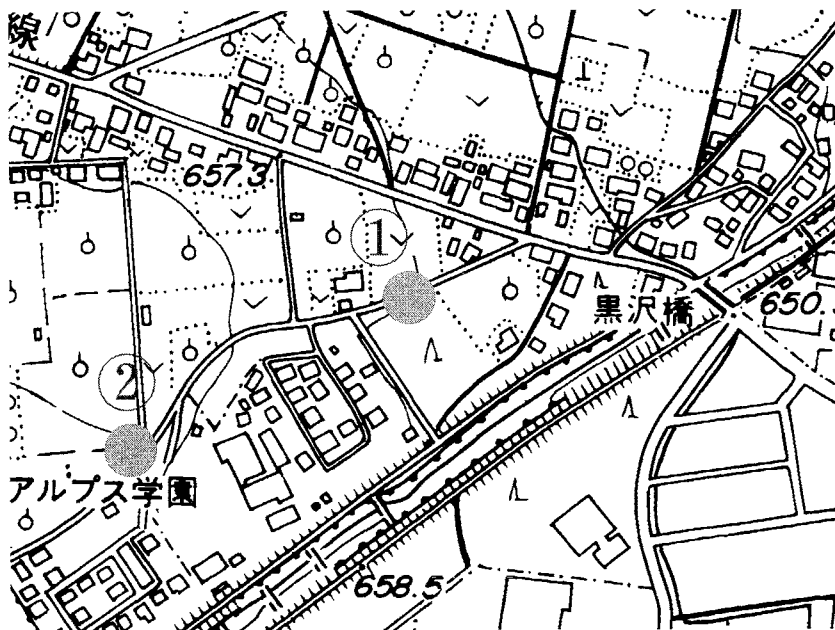
東小倉遺跡周辺の地形・地質については、既刊報告書「東小倉遺跡」Ⅱ～Ⅲまでに記してあるので、ここでは調査地点を中心に述べる。

三郷村での下水道工事が小倉地区で進められ、それに伴う東小倉遺跡南部の発掘調査が行なわれた。

この付近は黒沢川が造った扇状地の扇端に近く、昔から多くの遺跡が報告されていた。東小倉遺跡はその中の主要な一つである。この付近の黒沢川扇状地の堆積物は野沢地区の赤坂南の中でみることができるが、同じ扇状地内でも堆積物の構成は場所によって大分違いが見られる。

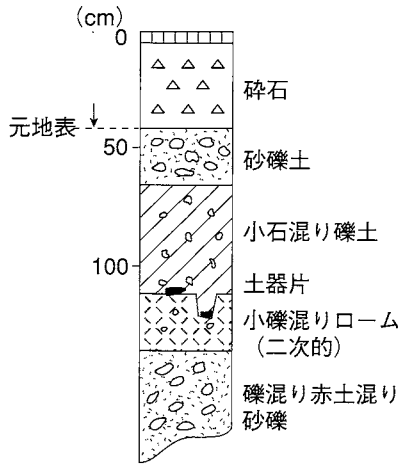
県道小倉梓橋停車場線と集落道12号線の十字路からアルプス学園前にかけて、多くの遺構が発掘された。また、この付近の柱状図を第2図・第3図に示す。この図に見られるように、北に位置する第2図では、当時の地表から遺物までの深さが70cm内外なのに、南に位置する第3図では、当時の地表から30cm内外であることから、この付近は縄文時代には南の方向から北の方向にかけて、遺構の場所が深くなっていることが分かる。

(木船 清)

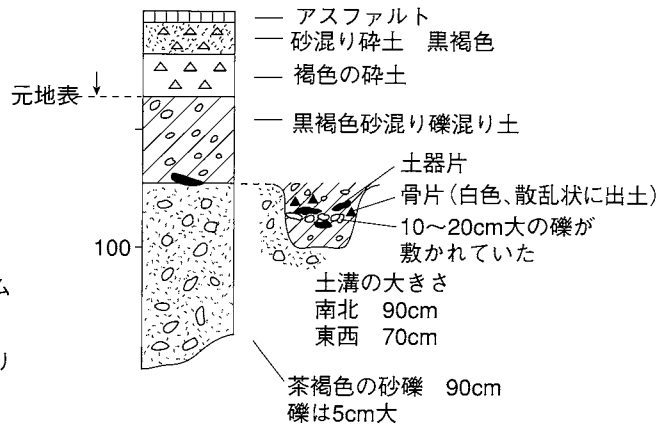


第1図 柱状図調査地点

アルプス学園前の道路 県道との
交差点より20m南



アルプス学園前の道路 県道との
交差点より50m南
丸山介一氏宅付近



第2・3図 東小倉遺跡南部の柱状図

第2節 歴史的環境と村内の遺跡

第4図でみるように、本村には現在までに、47箇所の遺跡が確認されている。そしてその分布は、山麓沿い、黒沢川沿い、鳴沢川沿い、段丘下の水田地帯の4地帯に濃厚にみられる。段丘下の水田地帯は、平安期の遺跡が多いが、他は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

今回、調査の実施された東小倉遺跡は、黒沢川沿い（黒沢川左岸）に所在し、広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで知られている遺跡の一つであった。黒沢川沿いの遺跡は、上流から左岸では、黒沢浄水場東、南松原、本遺跡、三角原の各遺跡が、右岸では、押入（梓川村中塔）、長者屋敷（梓川村境界）、稻荷西、調整池北、黒沢川右岸、チンクラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。黒沢川は現在は住吉神社西方で終わり、堰に接続するという珍しい川であるが、かつての氾濫原もしくは流路の延長である上長尾、楡、住吉の各地区に存在している各遺跡も黒沢川沿いの遺跡と呼んでもよいと思われる。昭和24年の楡道下遺跡（当寺は及木遺跡と呼ぶ）の発掘調査では、黒沢川の小自然流を示すかのような堆積物が観察されている。

この黒沢川周辺に人々の往来があったのは、先記遺跡の内容から考えて縄文時代早期楢円押型文土器を持った人々の稲荷西遺跡への訪れにまでさかのぼると考えられていたが、第1次の東小倉遺跡の調査で草創期にまでさかのぼることが判明した。次いで縄文前期には、本遺跡をはじめ、調整池北、黒沢浄水場東、黒沢川右岸（特別養護老人ホーム）に生活の場を残している。特に、本遺跡の対岸に当たる黒沢川右岸遺跡は、昭和58

年に発掘調査が実施され、住居址と小竪穴を検出している。出土土器は絡条体圧痕文土器や繊維を含む縄文土器、薄い器厚の条痕文土器等であることから、縄文早期末から前期初頭に比定される内容である。黒沢浄水場東遺跡は、縄文前期末の下島式土器を出土する小範囲の遺跡であったが、圃場整備事業で消滅してしまった。黒沢川沿い以外では、鳴沢川右岸に位置する北小倉の才の神遺跡が注目される。有尾式、北白川下層式の前期土器を出土する他に、後期、晩期までの内容をもつ遺跡として、三郷村はもとより南安曇郡下でも特筆される遺跡である。

縄文時代中期になると黒沢川沿いは最盛期を迎える。本格的な村づくりが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、そして本遺跡にみられる。南松原遺跡は、昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であったが、14軒の竪穴住居址の確認があった。広範囲からの遺物出土があるので規模の大きい集落が考えられる。勝坂式土器が中心を占めることから、本遺跡で今回調査されたものより先行する内容をもった遺跡といえる。黒沢川右岸遺跡からは本遺跡と同時期の竪穴住居址を検出している。鳴沢川沿いにも中期遺跡があり、三郷村で11箇所が数えられ、一番遺跡の多かった時代である。

縄文後期になると本遺跡の他に、才の神、鳴沢、地藏沖、楡小路の各遺跡が、そして晩期になるとさらに数が減って本遺跡と才の神遺跡が知られるだけである。全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示していることが遺跡数の上からも示されたといえよう。この現象は全県的な傾向であり、冷涼化する気候が大きく影響しているものと考えられる。三郷村の後・晩期は、上記遺跡からの散発的な土器片の出土があるだけで、その生活内容等を知る資料は今のところ得られていない。

次いで弥生時代を迎えると南安曇郡下では他地域に先がけて黒沢川右岸、堂原の両遺跡にその文化の伝来をみている。黒沢川右岸遺跡の昭和58年の発掘調査では、弥生中期の竪穴住居址を2軒検出しており、弥生文化の波及を考える上で貴重な遺跡となっている。しかし後続せず、短期間の住居で終わってしまっている。そしてこの黒沢川右岸遺跡を最後にして上流域では遺跡がみられなくなるが、古代に至って下流域の三角原、楡小路、楡中村、楡上手、楡道下、住吉丁田等に人々の住居がみられるようになる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流を利用しての生活であったものと考えられる。これらの遺跡は平安期の遺物を出す遺跡が多く、長尾・栗の木下遺跡や坂がいと遺跡等を含めて、住吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群となろう。

また本遺跡の範囲内であるアルプス学園前に古墳と呼んでもよいのか躊躇ちゅうちよするような小古墳があり、昭和25年に調査されている。石室は1 m程度のもので2個の石が残っていたのみで、出土遺物等は不明である。

以上、東小倉遺跡の所在する黒沢川沿いの遺跡を中心に列記したが、先記のように三

郷村では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったり、両側に展開する広大な扇状地は食料獲得の地としてきわめて重要であったりしたからであろう。特に採集生活を中心とする縄文時代にあっては、そのことが強くうかがわれる。しかし稲作りを中心とする弥生時代以降にあっては、多孔質の扇状地は水もちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地への進出となったのである。

(山田瑞穂)

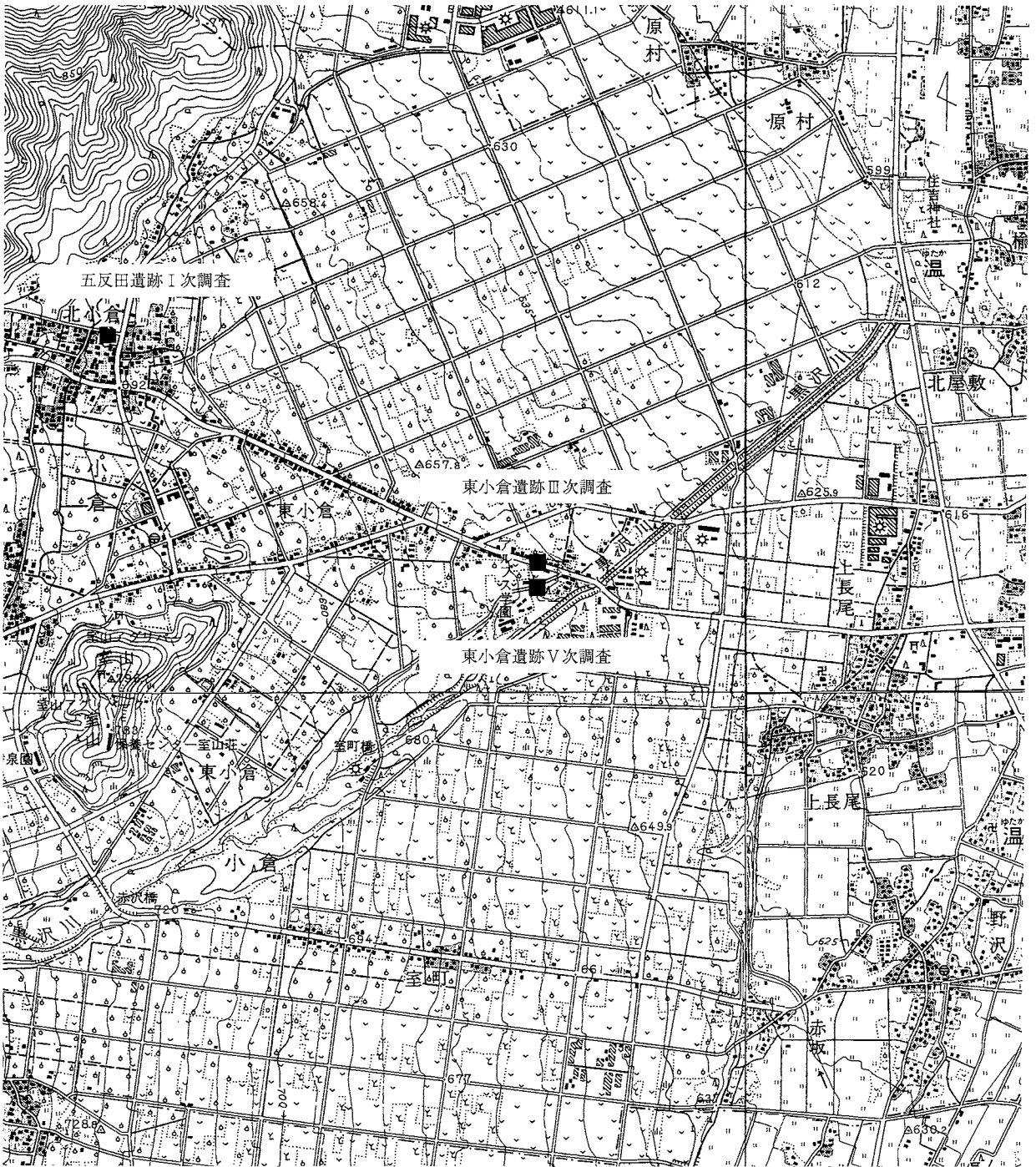
編集 平成3年12月
平成11年6月部分修正

番号	時代	名称
1	縄文	一本松遺跡
2	〃	鳴沢A遺跡
3	〃	塞の神遺跡
4	古墳時代以降	浄心寺南塚
5	縄文・歴史時代	浄心寺附近遺跡
6	縄文	東小倉
7	古墳	アルプス学園前古墳
8	縄文・弥生	黒沢右岸遺跡
9	縄文・弥生	チンクラ遺跡
10	縄文	南松原遺跡
11	〃	調整池北遺跡
12	〃	稲荷西遺跡
13	縄文・古墳	丁田遺跡
14	古墳	三角原遺跡
15	〃	中村遺跡
16	縄文	楡小路遺跡
17	土師	楡上手遺跡
18	土師	栗の木下遺跡
19	土師以降	三柱神社東遺跡
20	縄文	白山神社横遺跡
21	〃	一日市場郵便局南遺跡
22	土師	上総屋敷遺跡
23	弥生	川岸最氏宅地遺跡
24	弥生・古墳	堂原遺跡
25	土師	若宮遺跡
26	平安以降	道下遺跡
27	歴史時代	坂がいと遺跡
28	古墳	平福寺附近古墳
29	縄文	長尾城址北遺跡
30	歴史時代	長尾城址
31	縄文	赤坂西遺跡
32	〃	住吉竹原遺跡
33	〃	鳴沢尻遺跡
34	〃	西牧遺跡
35	〃	地藏沖遺跡
36	弥生	犬塚遺跡
37	〃	堀尻遺跡
38	歴史時代	小倉城址遺跡
39	古墳	北小倉1号、2号塚
40	弥生	堂屋敷遺跡
41	土師	山の腰遺跡
42	縄文	大日堂北遺跡
43	土師以降	中沢遺跡
44	縄文	ゆの久保遺跡
45	〃	黒沢浄水場東遺跡

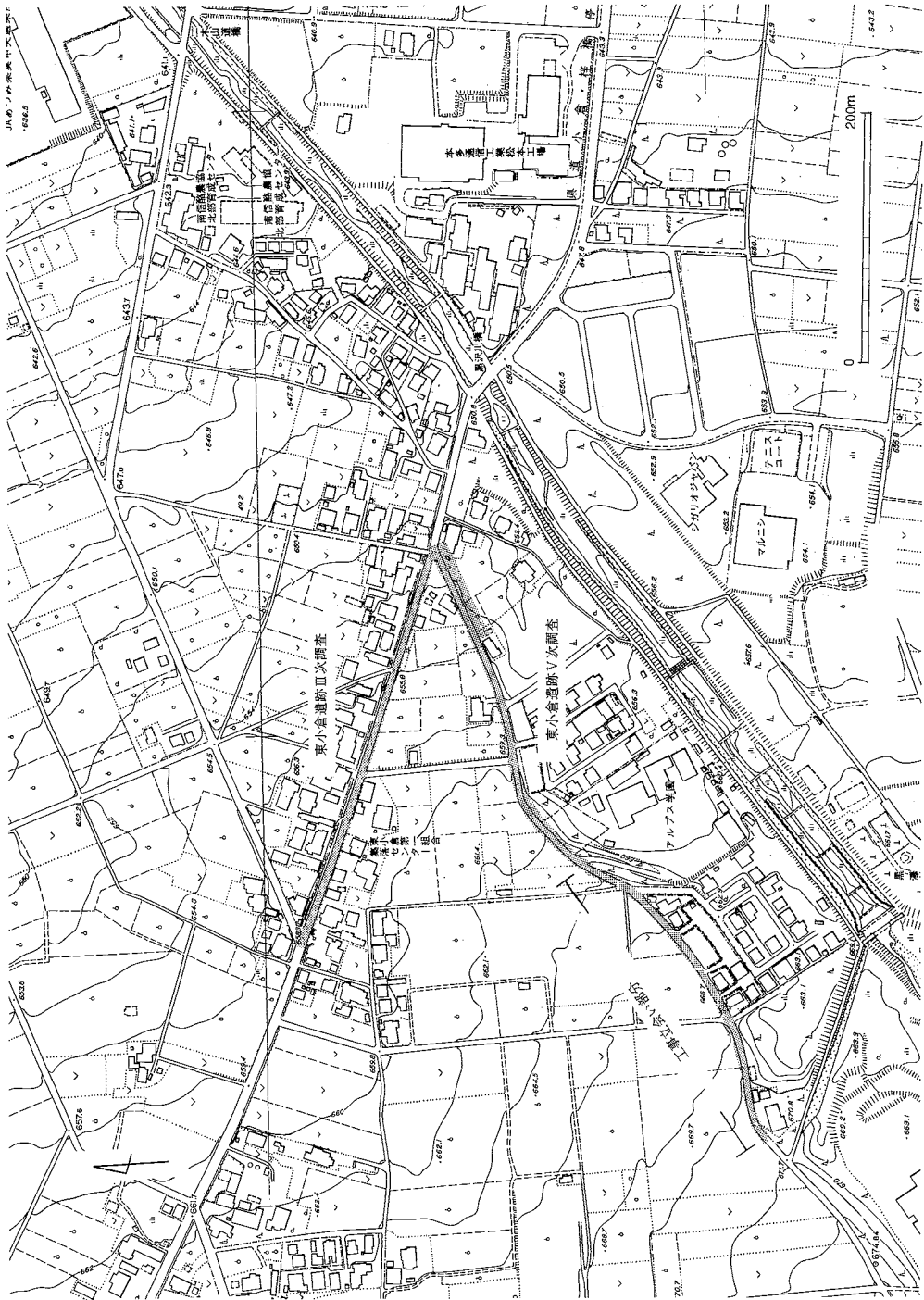
番号	時代	名称
46		富士塚
47	縄文	長者屋敷
48	縄文	千国橋北
49	縄文	大室遺跡
50	平安	及木西村遺跡
51	縄文	鳴沢B遺跡
52		龍峰寺跡



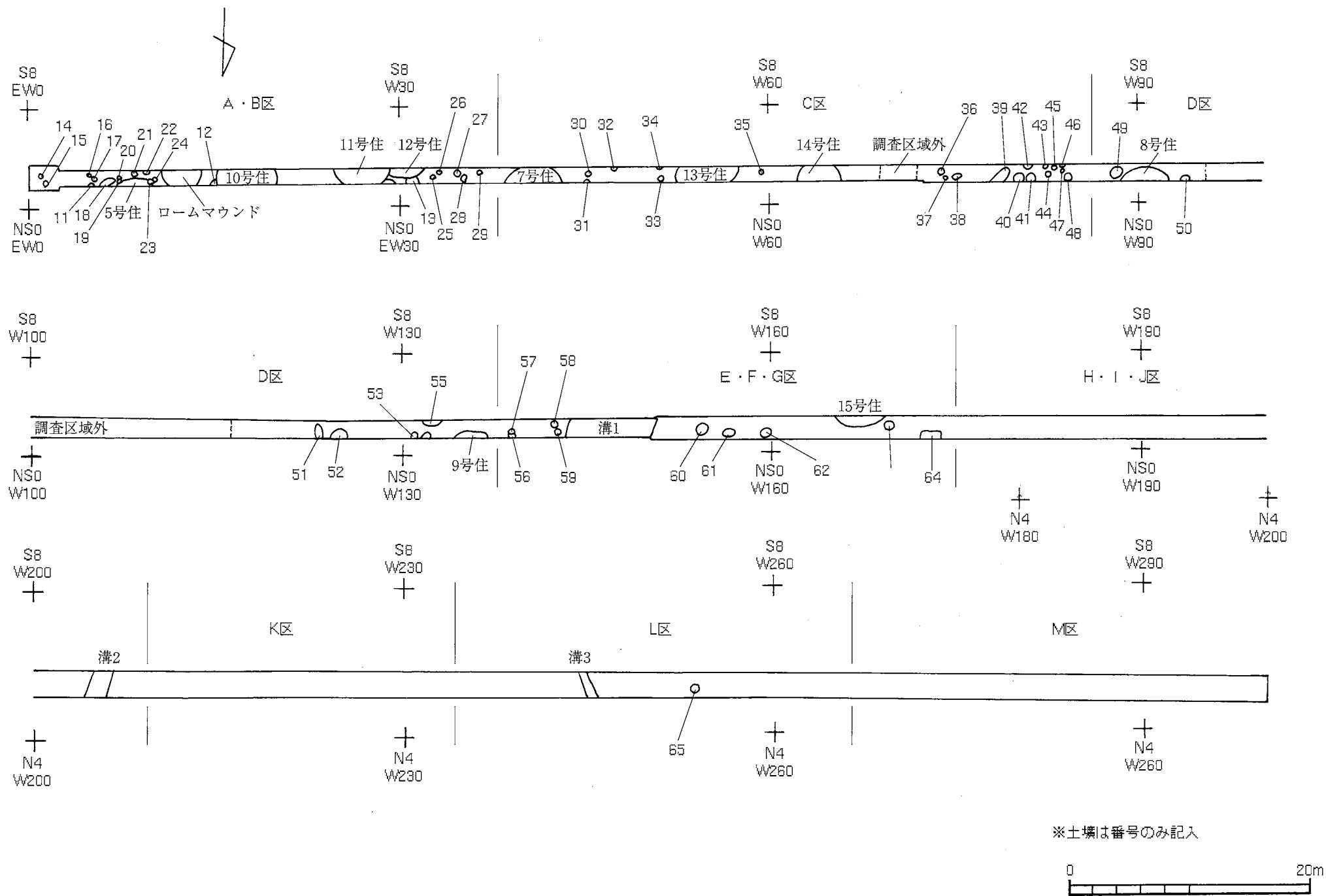
第4図 三郷村埋蔵文化財 遺構包蔵地図



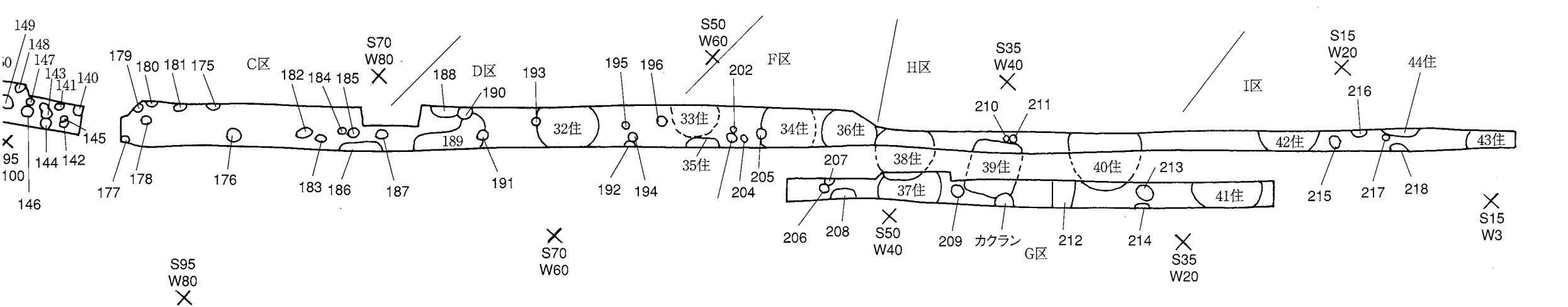
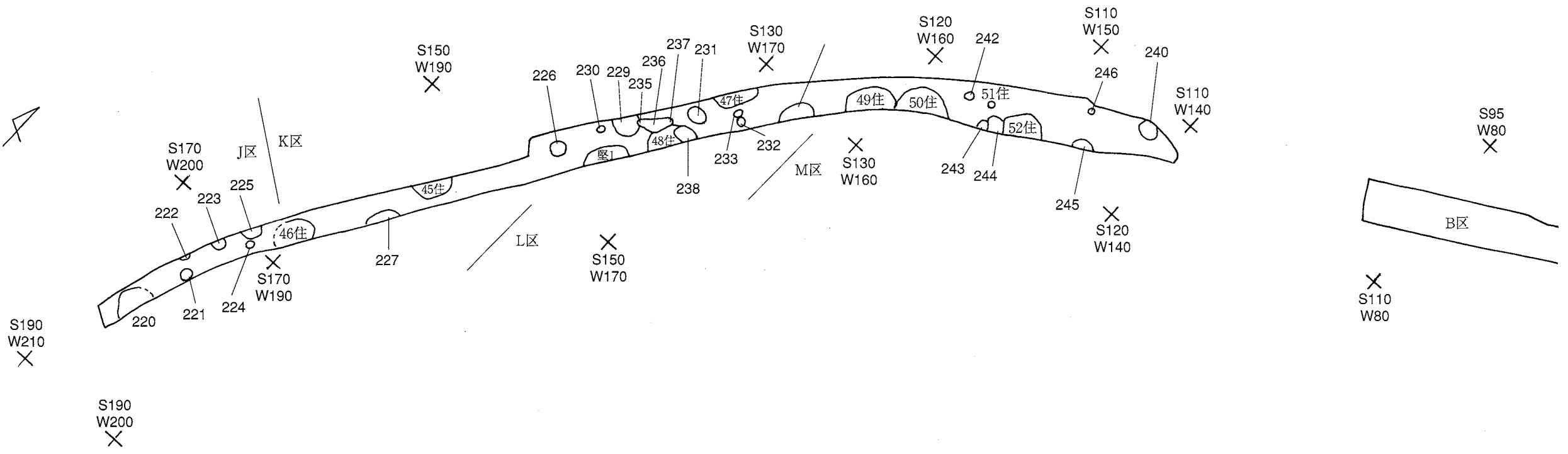
第5図 調査位置図①



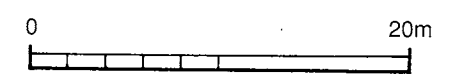
第6図 調査位置図②



第7図 Ⅲ次調査 遺構配置図



※土壌は番号のみ記入



第8図 V次調査 遺構配置図

第3章 III次調査の遺構と遺物

1. 住居

(1) 第5号住居址

① 遺構 (第9図)

位置 S1・W9付近に位置する。土19・23に切られる。

規模・形状 直径4m程の円形住居址と思われる。平成8年の調査では、遺構の断面が土層で確認されているが、平面形はとらえられていなかった。ただその位置などから今回発見されたのは同住居址南側にあたと判断した。壁は東21cm、西34cmを測る。

検出・調査状況 孤状の黒褐色土の落ち込みを検出し掘り下げた。覆土は単層で2～3cmの小礫を多く含む。自然埋没と考える。

柱穴 中央付近に深さ20cmのP₁があるが、一応柱穴としたい。

炉址 不明。

遺物出土状況 覆土中から土器片が若干得られている。

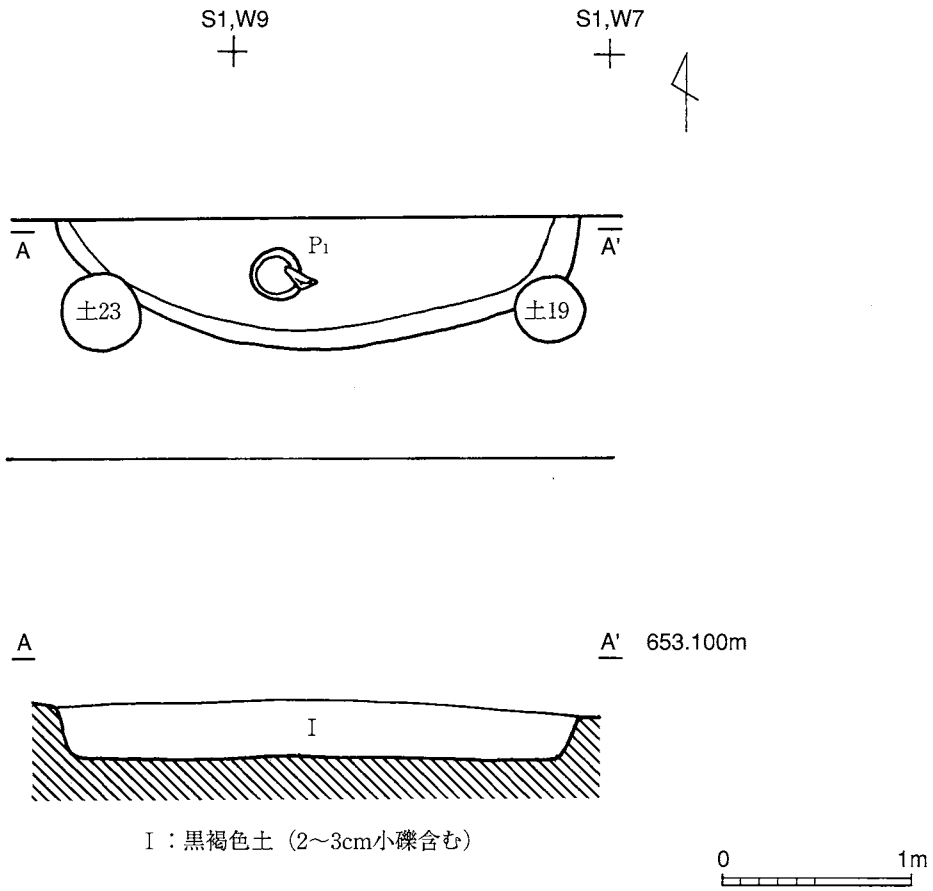
② 遺物 (第25図)

前回の水路工事の際には遺物は少量で図示できなかった。今回調査でも遺物出土量は少なく図示したものは土器片4点到過ぎない。土器片のみの出土で石器は得られていない。図示の4片はいずれも深鉢の胴部片であり、平行条線が施されていて2と3は同一個体とみられる。縄文中期後半に位置づくもので前回出土のものと時間差はみられない。

(2) 第6号住居址

① 遺構

前回発見された6住居址に該当する遺構は、今回調査区内に確認できなかった。



第9図 第5号住居址

(3) 第7号住居址

① 遺構 (第10図)

位置 S1・W42付近に位置する。

規模・形状 直径6m程の円形か。壁は東27cm、西30cmを測る。西壁際・東壁際の一部に周溝が巡る。深さは6～17cmあり均一ではない。

検出・調査状況 巾5mにわたる黒褐色土の大きな落ち込みを検出した。覆土は黒褐色土の単層で2～10cmの礫が混入し自然埋没と思われる。床面は黄色土ロームで固くしまっている。

柱穴 P₁は柱穴と思われる。直径40cmの円形、深さ25cmを測る。

炉址 確認できていない。

遺物出土状況 石器は全て床面直上からの出土。2の石皿は、床面上に伏せた状態で検出されている。その他図示してないが、29図3と同様の石柱がもう一点出土している、また台石が同様に床面上から出土している。

② 遺物 (第25、29図)

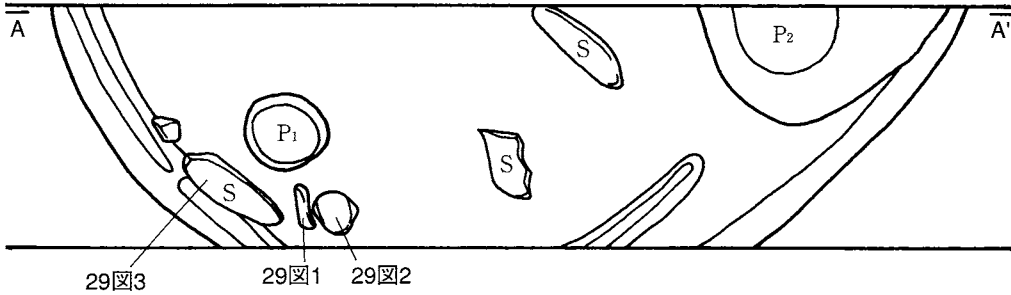
出土遺物に土器と石器、石製品がある、土器片は前回報告書のほうが多く、今回図示したものは5点だけである。胴部から底部の破片であり、5は垂下する隆線間に縄文が施されたものであり、6～8も同様である。前回も出土がみられて、縄文中期後半Ⅲ期の住居址と報じてあるが今回出土のものもそれと時期差はみられない。

石器は第29図1の敲打器と2の石皿である。2は輝石安山岩製で長さ28cmを計るやや小形の石皿である。3は石柱として使用されたものではないかと考えられる長さ53cmのものである。前回調査の際も硬砂岩製の53cmを計る石柱が出土していて注目される。

S4,W42

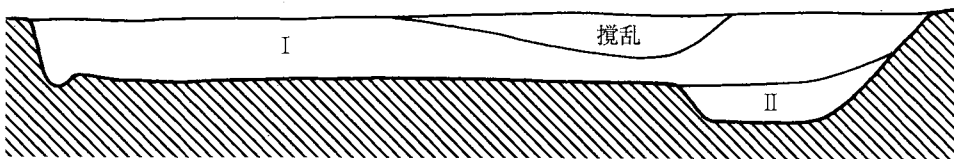


S4,W39

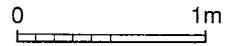


A

A' 653.900m



- I : 黒褐色土 (2~10cmの礫含む)
- II : 黒褐色土 (黄褐色土粒混)



第10図 第7号住居址

(4) 第8号住居址

① 遺構 (第11図)

位置 S1・W90付近に位置する。

規模・形状 直径6m程の円形住居址か。壁は東28cm、西39cmを測る。周溝は西壁際に観察される。深さは平均6cmある。

検出・調査状況 遺構の位置と前回調査所見から、8号住居址の南側部分にあたと判断した。覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と考える。

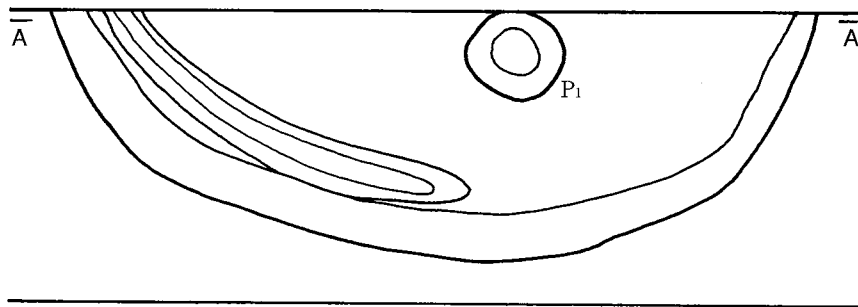
柱穴 P₁は深さ46cmあり、柱穴と思われる。

炉址 確認されていない。

遺物出土状況 遺物量は少なく、小片が多い。

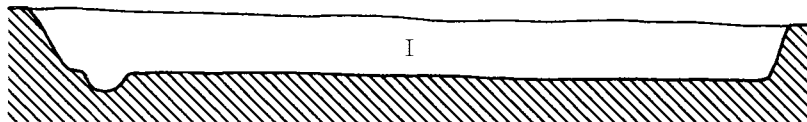
S1,W93
+

S1,W90
+

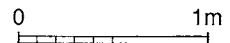


A

A' 655.500m



I : 黒褐色土 (2~3cmの小礫混)



第11図 第8号住居址

(5) 第9号住居址

① 遺構 (第12図)

位置 S1・W135付近に位置する。

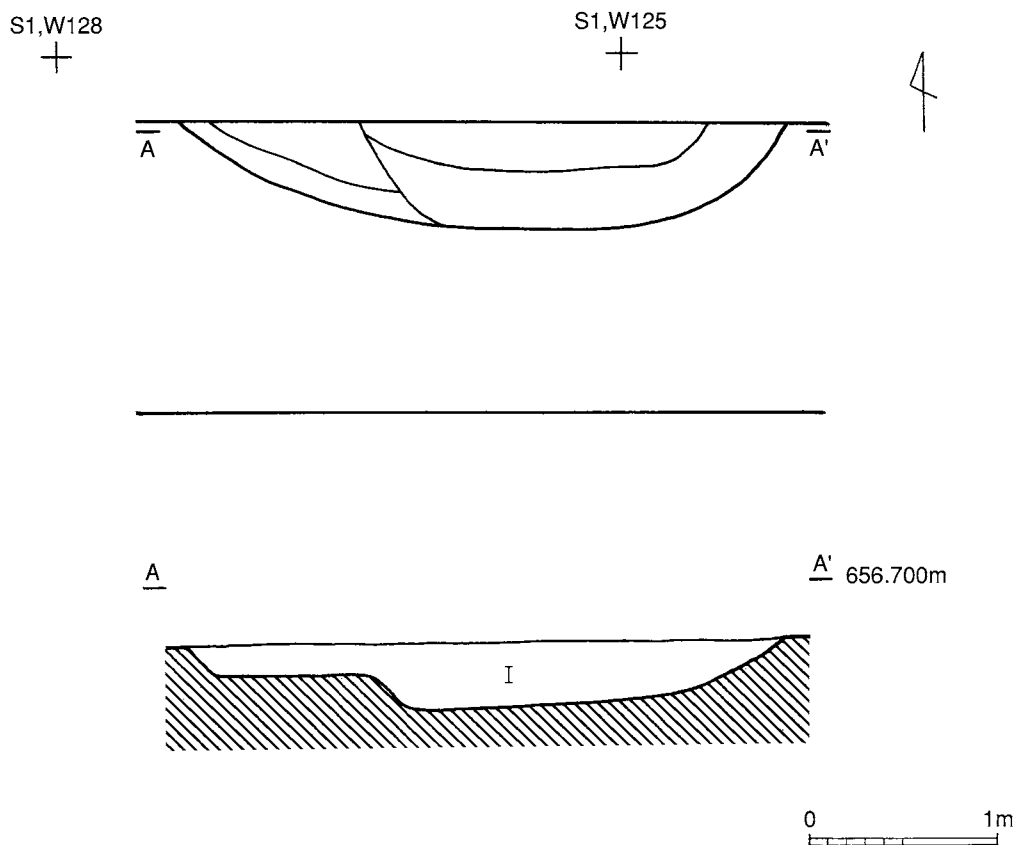
規模・形状 円形住居址の一部と思われる。

検出・調査状況 面積としては小さい円弧状の落ち込みだが、前回調査所見と合わせて9号住居址の一部とした。断面図から明らかなように、床面が2段になっている。土層との切り合いも考えられたが土層からは判別できず、住居址内の掘り込みと考えた。

柱穴 不明

炉址 不明

遺物出土状況 少量の土器片が出土している。



I : 黒褐色土

第12図 第9号住居址

(6) 第10号住居址

① 遺構 (第13図)

位置 S1・W18付近に位置する。土12を切る。

規模・形状 直径6 m程の円形住居址。壁は東22cm、西17cmが残る。東壁側に周溝が巡る。周溝の深さは平均9 cmである。

検出・調査状況 黒褐色の覆土を取り除くと、黄色土ロームの床面、及び炉址が検出でき住居址とした。覆土中にはこぶし大～30cmの礫が多量に含まれているが、人為的な廃棄と考える。

柱穴 P₁、P₂が柱穴と思われる。深さはP₁、40cm、P₂、36cmである。

炉址 石囲い炉を検出した。全体の半分が調査区外にあるため推定だが、100×80cmのいわゆる掘炬燵状石囲炉と思われる。住居址奥壁寄りに位置すると考える。最深部は30 cmあり、内部は赤褐色に焼けている。

遺物出土状況 覆土中の礫間から、かなり多くの破片が出土している。

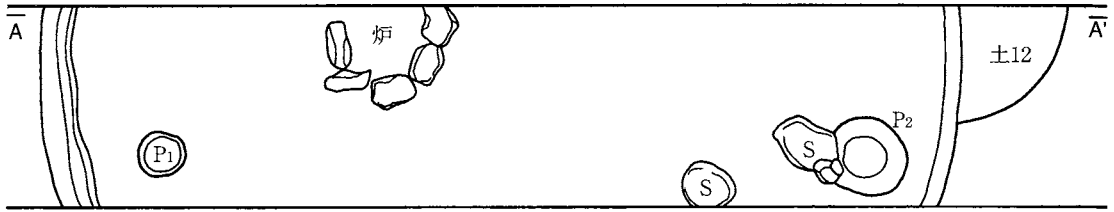
② 遺物 (第25、26、28、29図)

土器と石器の出土がある。土器は破片のみで器形の判明するものはない。25図10～15は縄文で飾られるもので10～13は同一個体である。外反する口縁部には口縁に沿って巾広い隆帯がまわり、そこから垂下する3条の沈線と波状沈線で区画され、内を縄文で満たしている。器外面は黒褐色、器内面は黄土色で焼成、胎土共によい。15は小形浅鉢とみられる破片で、内弯する口縁に3条の横走沈線が走り以下を縄文で飾っている。16～25は篋描き沈線が施されるものの一群で渦卷文、綾杉文、平行条線、波状文はこの期の文様特長といえる。26～30は無文口縁部を巾広くもつもので以下に文様帯がある。26と27は同一個体とみられ、器外面黒褐色、内面茶褐色を呈し器外面はザラついた面をもつ。28の器外面には黒色炭化物の付着があり器内面は黄土色をしている。31～33には細かい平行条線が施されている。これら土器は縄文中期後半Ⅲ期に位置づく内容のもので、本址の時期もそこにおけよう。28図1は底部片で文様はみられない。

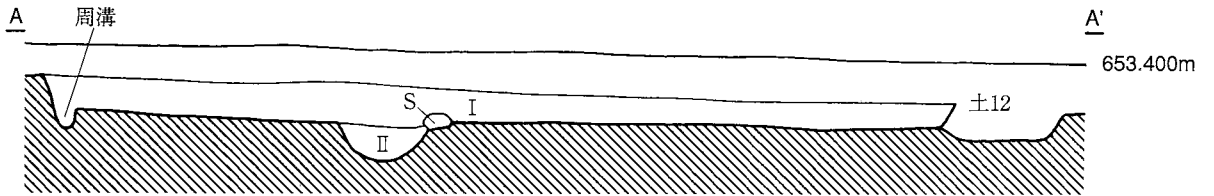
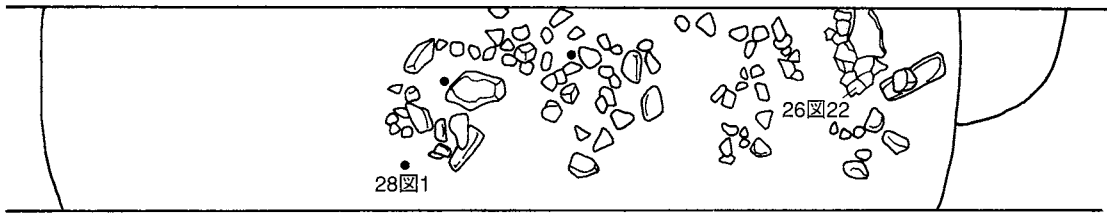
石器は第29図4～6の敲打器で、いずれにも片方に打痕がみられる。4は細粒泥岩製、5、6は泥質砂岩製である。

S1,W9
+

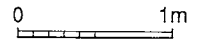
S1,W6
+



遺物・礫出土図



I : 黒褐色土 (こぶし大~30cmの礫を含む)
II : 暗褐色土 (炭化物・焼土混)



第13図 第10号住居址

(7) 第11号住居址

① 遺構 (第14図)

位置 S1・W27付近に位置する。12住居址を切る。

規模・形状 直径6mの円形住居址。東西の壁際に周溝が巡る。深さは平均6cmある。床面は12住居址より若干浅く、平らである。

検出・調査状況 覆土は黒褐色土の単層で小礫を含む。壁は東17cm西15cmを測る。

柱穴 P₁・P₂が柱穴か。深さはP₁、21cm、P₂、31cmを測る。

炉址 不明

遺物調査状況 床面から遺物が多く出土している。28図4は床面上に伏せて置かれていた。また住居址西側床面上には石皿、凹石、台石が出土している。

② 遺物 (第27、28、29、30図)

土器、石器、石製品がある。土器はいずれも底部を欠くが、ほぼ器形の判るものがあり28図2～6に図示した。拓本は第27図34～39である。いずれも深鉢形土器で、器形はやや内弯気味の口縁で最大径が口縁部近くにある2、3と胴部上半から口縁にかけて外反し最大径が口縁にある5、それに頸部から口縁にかけてくびれがみられ最大径が頸部にある4の三型態がみられる。文様は口縁に沿って横帯区画をもち以下に特長な渦巻状の文様をつけ、その間を篋描き沈線で満たすいわゆる唐草文土器である。5は横帯区画を持たずに口縁部から渦巻状文で区画され篋描き沈線で飾っている。6の底部片には垂下する平行条線がみられる。

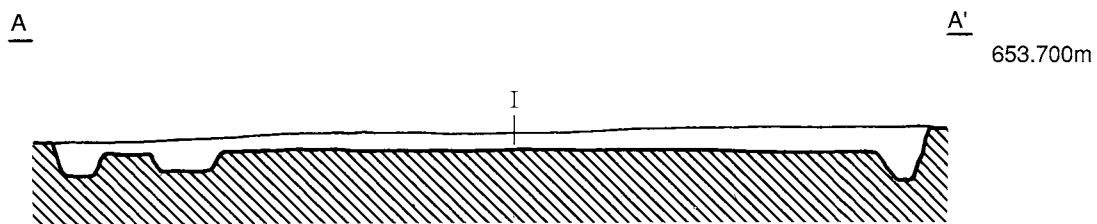
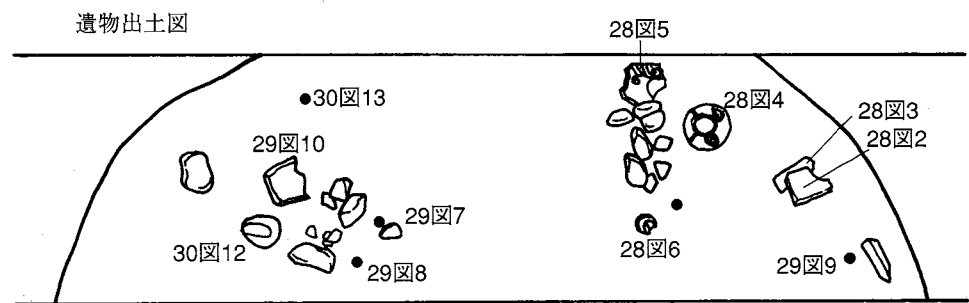
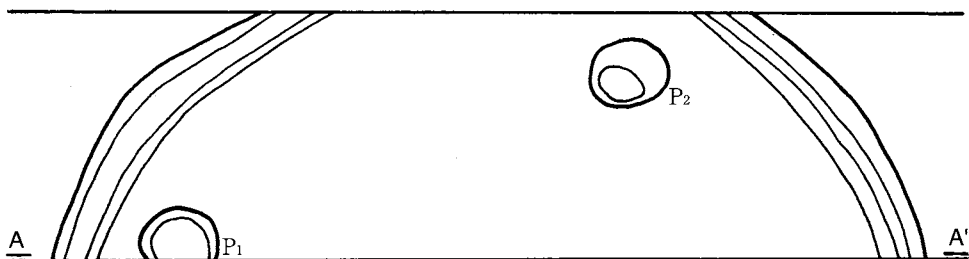
拓本図に示した34～38の土器片も同内容のものであり、39は底部片である。これらは縄文中期後半Ⅱ期に比定される土器である。

石器は第29図の10の石皿の半割(砂岩)、7の石匙(細粒硅質砂岩製)、8の磨製石斧(蛇紋岩製)、9の打製石斧(頁岩状泥岩)、がある。磨製石斧には使用による欠損が刃部等にみられる。第30図12の石皿は輝石安山岩製のもので21cmほどの小形品である。13の凹石は石皿と同様に輝石安山岩製で片側のみに凹みが残る磨石としての使用も考えられる。

S1,W29
+

S1,W27
+

4



I : 黒褐色土

0 1m

第14図 第11号住居址

(8) 第12号住居址

① 遺構 (第15図)

位置 S1・W30付近に位置する。11号住居址に切られる。

規模・形状 円形住居址の一部と思われるが、規模は不明である。

検出・調査状況 覆土は黒褐色で、11号住居址より若干小礫を多く含む。床面は平坦だが、固くしまっていない。

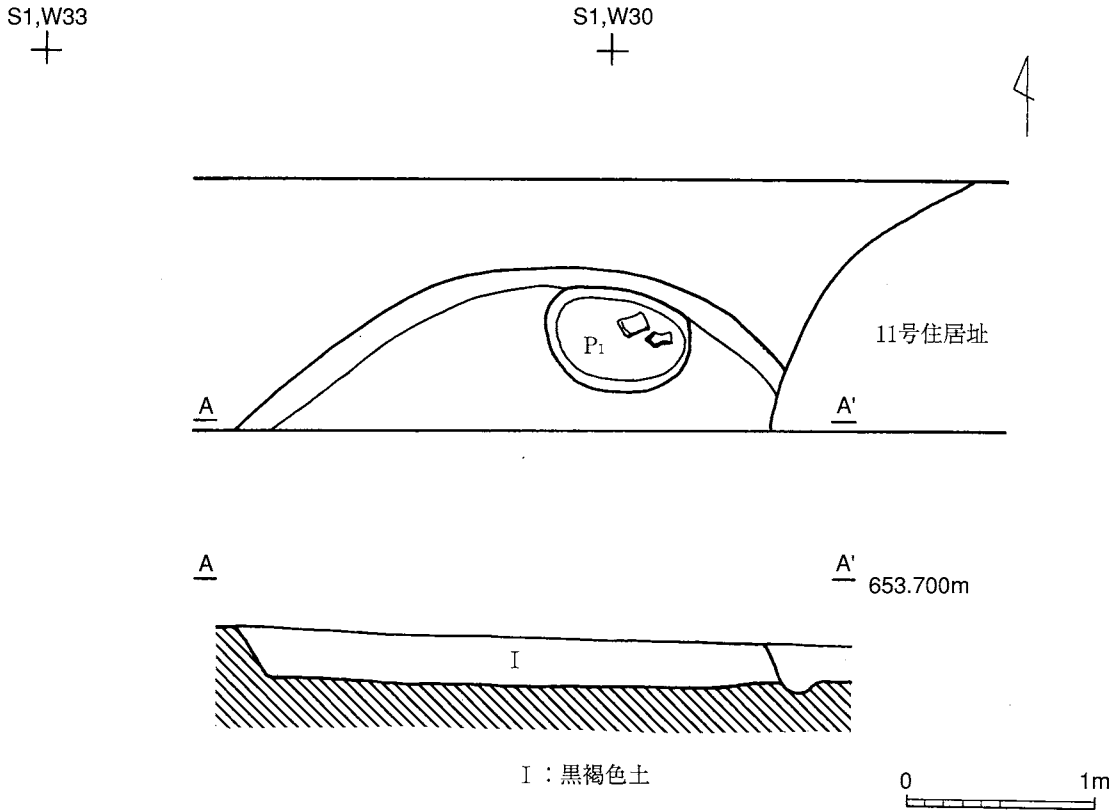
柱穴 P₁が深さ15cmと浅いが一応柱穴としたい。

炉址 不明

遺物出土状況 P₁から中型の破片が少し出土している。他は、量的に少ない。

② 遺物 (第27図)

土器片のみの出土で量的にも少なく、図示したものは第27図40の1点のみである。器外面がややザラついており縄文がみられる。少ない出土遺物で本址の所属時期を考えるのはむずかしい。



第15図 第12号住居址

(9) 第13号住居址

① 遺構 (第16図)

位置 S1・W54付近に位置する。

規模・形状 4.5m程の方形基調の住居址と思われる。

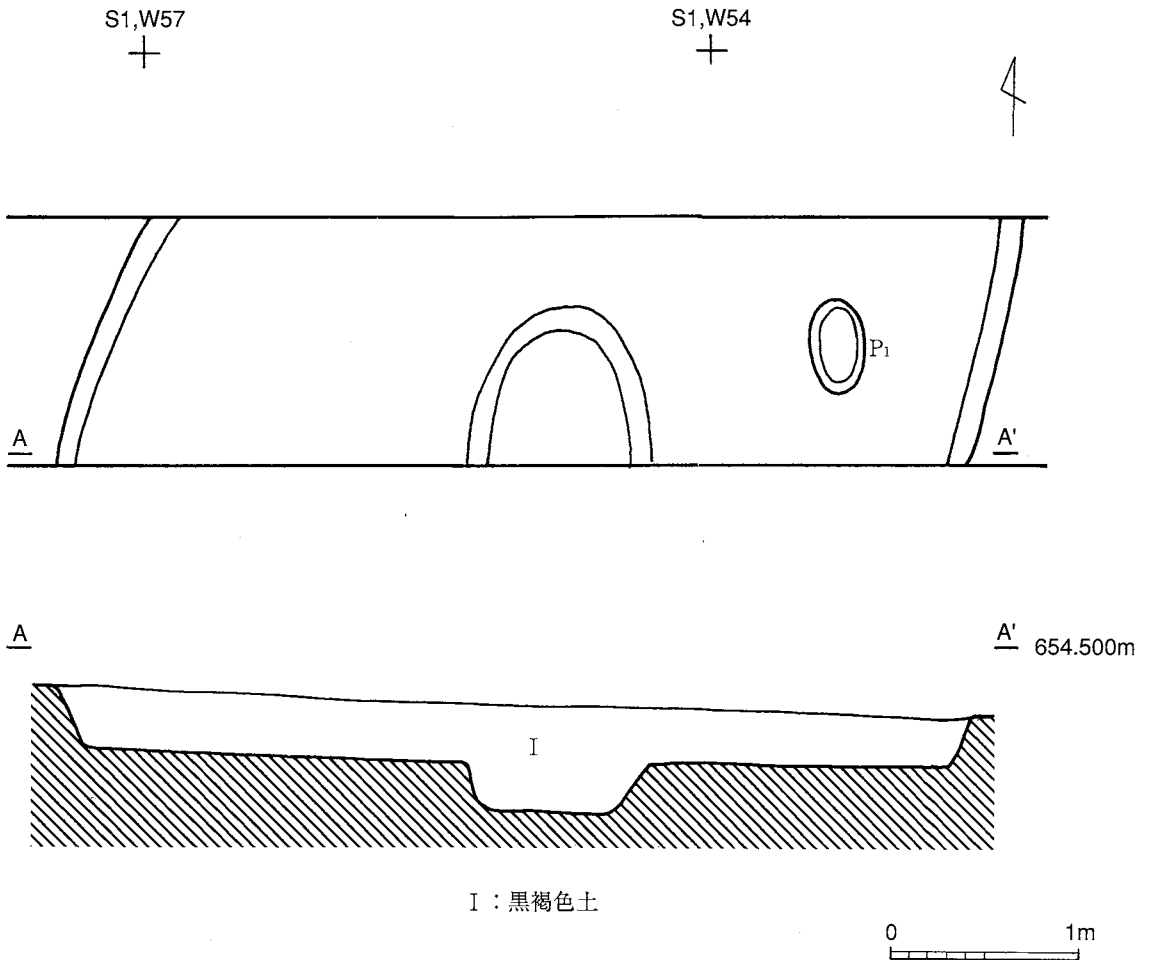
検出・調査状況 ほぼ平行する直線によって区切られた黒褐色土の落ち込みを検出した。

壁は東35cm、西33cmと深く、ほぼ垂直に立ち上がる。

柱穴 P₁は深さ24cmを測り、柱穴と思われる。

炉址 不明

遺物出土状況 少量の土器片が覆土中から出土している。



第16図 第13号住居址

(10) 第14号住居址

① 遺構 (第17図)

位置 S1・W63付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 長円形の住居址と思われる。床は平坦だが特に固くたたきしめられた様子は観察されない。壁は東32cm、西55cmを測る。

検出・調査状況 暗褐色土の覆土上層から中層にかけて、10～20cm大の礫が多量に混入している。住居址廃絶後の投棄と考えられる。

柱穴 不明

炉址 不明

遺物出土状況 遺物の大半は覆土上層～中層の礫間から出土している。礫と同時に廃棄されたものであろう。

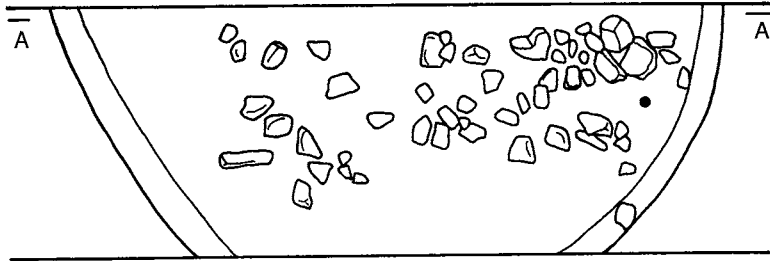
② 遺物 (第30、31、32図)

出土遺物は土器と石器である。土器は破片のみで器形の判るものはない。拓本の50～60は渦巻文、綾杉文に代表される唐草文土器で、篋描き沈線で隆線区画内を満たしている。50、51、52は同一個体である。器内外面とも黒褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。53、54、55、57は50等とは異なるが同一個体とみられ、器外面は赤褐色、内面は黒褐色で胎土、焼成共によい。56は器内外面とも黒く炭化物付着がある。61～72は縄文が施されたものを一括した。特長ある渦巻文間に縄文が満たされるもので、内弯傾向の口縁部をもつものが多い。73は垂下する5本の沈線が単位となっており、その間に縦方向に細かい平行条線が描かれている。74、75は底部片で底径9cmほどである。これらの土器はいずれも縄文中期後半Ⅱ期に考えられるもので本址の所属時期もそこに求められよう。

石器は30図の14、15の打製石斧がある。共に硅質泥岩製で丁寧に仕上げた感じがする。

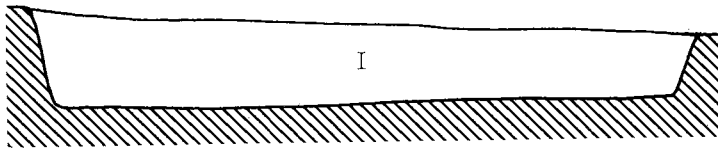
S1,W60
+

S1,W63
+



A

A' 654.700m



I : 暗褐色土 (10~20cmの礫を多く含む)



第17図 第14号住居址

(11) 第15号住居址

① 遺構 (第18図)

位置 W144～147に位置する。切り合いはない。

規模・形状 円形住居址の一部と思われるが、規模は不明である。

検出・調査状況 孤状の落ち込みを検出した。壁は浅く、東6cm、西11cmを測る。床面は特にたたきしめた様子はないが、住居址としてよいか迷うところである。

柱穴 浅いピットが2つある。深さP₁、17cm、P₂、11cmである。

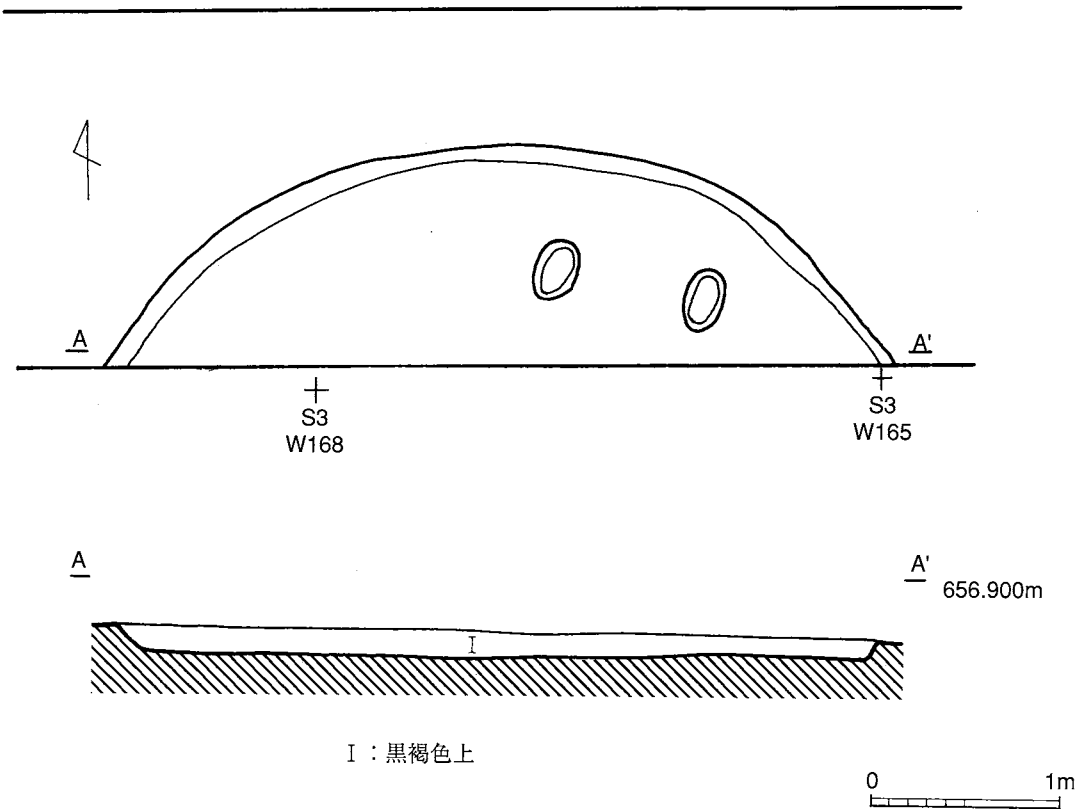
炉址 不明

遺物出土状況 少量の土器片が出土している。

② 遺物 (第27、30図)

土器と石器の出土があるが量的には少ない。土器は小破片のみで図示したものは41～45の5点のみである。口縁に横帯区画と突起をもつ44、横帯区画下の沈線区画内に縄文をもつ45からみて第14号住居址と同時期と考えられよう。

石器は第30図16の敲打器1点がある。細粒硅質砂岩製で打痕が残る。



第18図 第15号住居址

2. 土 坑

表1 土坑一覧

土坑No.	地 区	平面形	規模 (cm)	備 考
			長軸×短軸×深さ	
11	A・B	不明	(70)×70×15	区域外にかかる
12	A・B	不明		10号住居址に切られ、区域外にかかる
13	A・B	不明		12号住居址に切られ、区域外にかかる
14	A・B	円形	20×20×8	
15	A・B	円形	28×24×9	
16	A・B	円形	20×20×8	
17	A・B	円形	40×40×14	
18	A・B	不明	(180)×60×17	
19	A・B	円形	38×34×21	5号住居址・土20を切る
20	A・B	不明	28×(28)×15	土19に切られる
21	A・B	円形	40×40×23	
22	A・B	不明	46×(40)×28	
23	A・B	円形	42×40×17	5号住居址・土24を切る
24	A・B	長円形	48×(30)×15	土23に切られる
25	A・B	円形	38×36×17	
26	A・B	円形	37×36×22	
27	A・B	円形	50×50×20	
28	A・B	不整円形	68×36×13	
29	A・B	円形	42×38×20	
30	C	円形	40×40×16	
31	C	不明	28×(28)×12	区域外にかかる
32	C	不明	(40)×38×12	区域外にかかる
33	C	円形	42×40×26	
34	C	不明	(42)×40×20	区域外にかかる
35	C	円形	32×30×23	
36	C	円形	53×50×28	
37	C	円形	32×32×28	
38	C	長円形	62×54×40	
39	C	不明		区域外にかかる
40	C	円形か	88×(80)×23	区域外にかかる
41	C	円形か	78×(75)×30	区域外にかかる
42	C	不明	88×(76)×16	区域外にかかる
43	C	円形	40×40×17	
44	C	円形	66×62×35	
45	C	円形	40×35×14	
46	C	円形	46×38×18	
47	C	円形	34×34×18	

48	C	円形	56×50×19	
49	D	円形	100×98×40	
50	D	円形か	54×(52)×15	区域外にかかる
51	D	長円形か	(130)×54×21	区域外にかかる
52	D	不明		区域外にかかる
53	D	円形	52×(48)×28	区域外にかかる
54	D	方形か	(80)×54×20	区域外にかかる
55	D	不明		区域外にかかる
56	E・F・G	円形	30×28×17	
57	E・F・G	円形	24×24×12	
58	E・F・G	円形	28×26×21	
59	E・F・G	円形	52×52×31	
60	E・F・G	円形	94×84×53	
61	E・F・G	長円形	80×56×57	
62	E・F・G	円形	88×82×51	
63	E・F・G	円形	82×68×38	
64	E・F・G	不明	区域外にかかる	
65	L	円形	50×44×13	

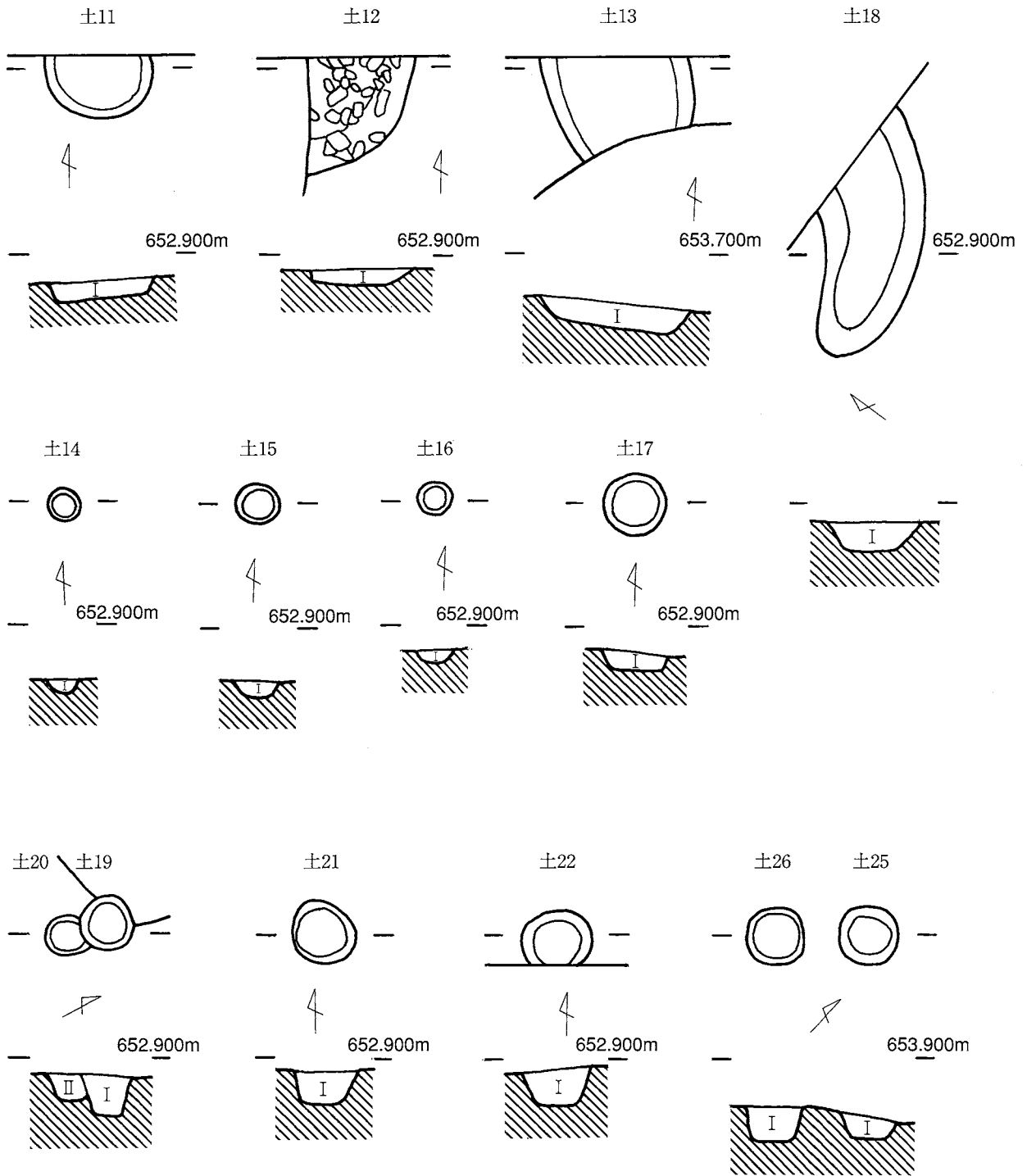
19図 土坑11～22・25・26

20図 土坑23・24・27～38・43

21図 土坑39～42・44～50・56・57

22図 土坑51～54・58～61・65

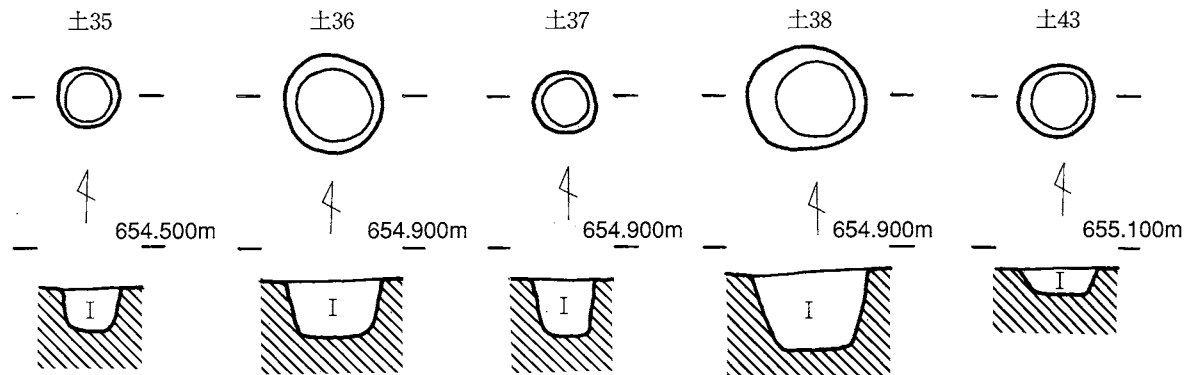
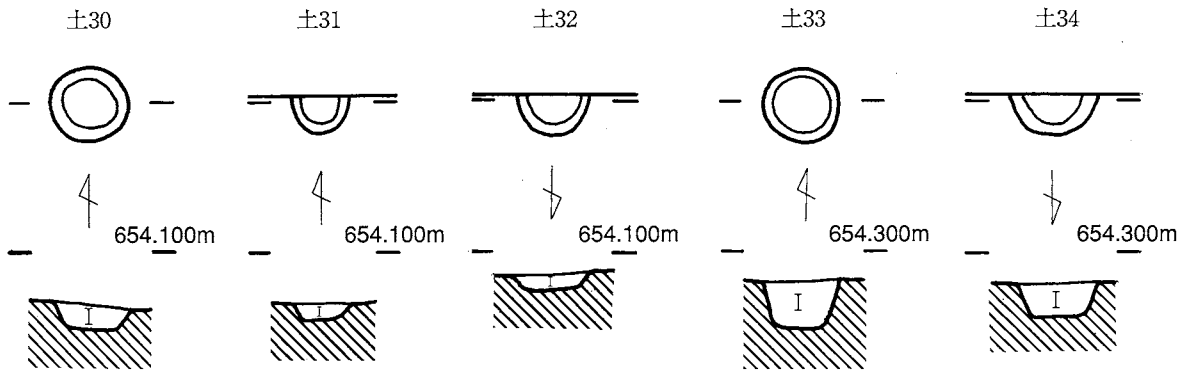
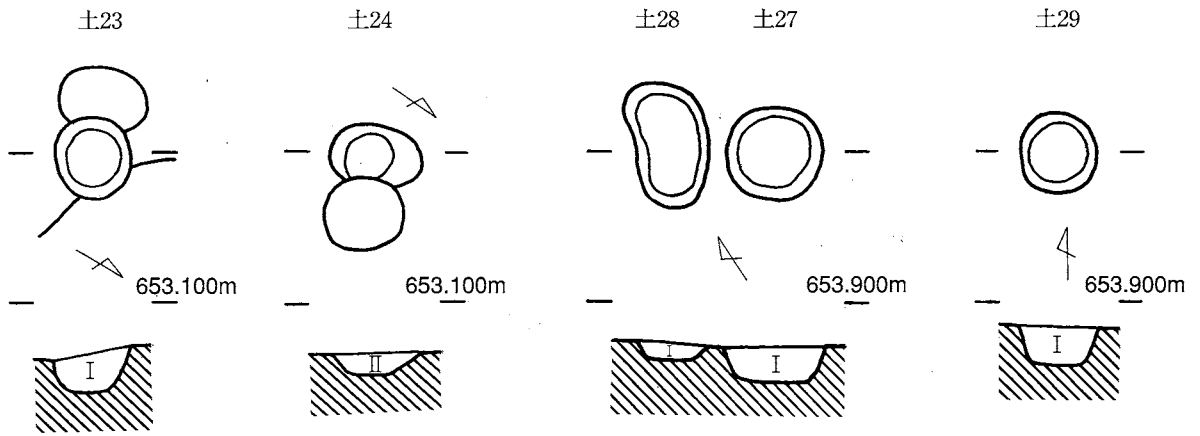
23図 土坑62～64・溝2・3



I : 黑褐色土 II : 暗褐色土

0 1m

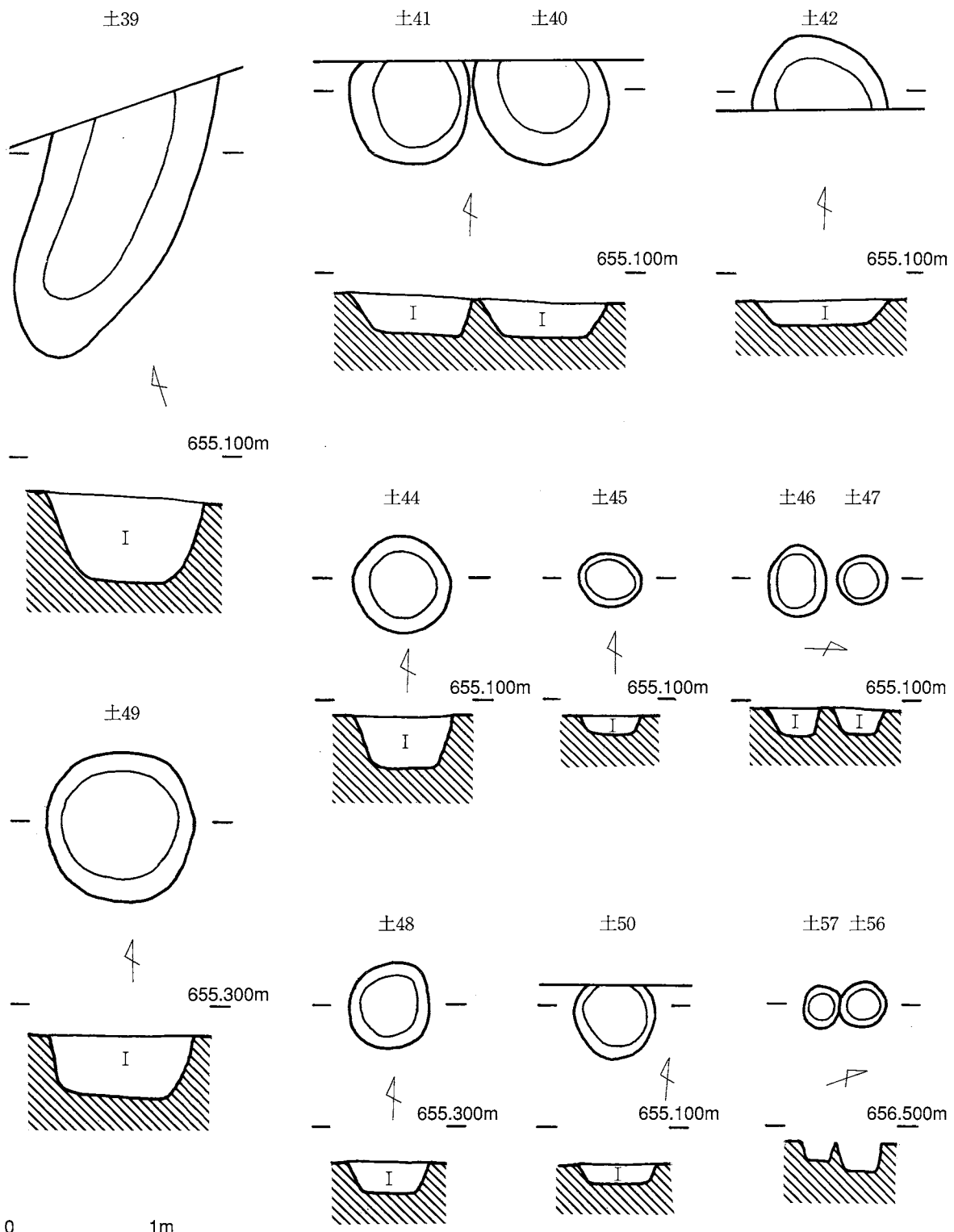
第19圖 土坑11~22・25・26



I : 黑褐色土 II : 暗褐色土

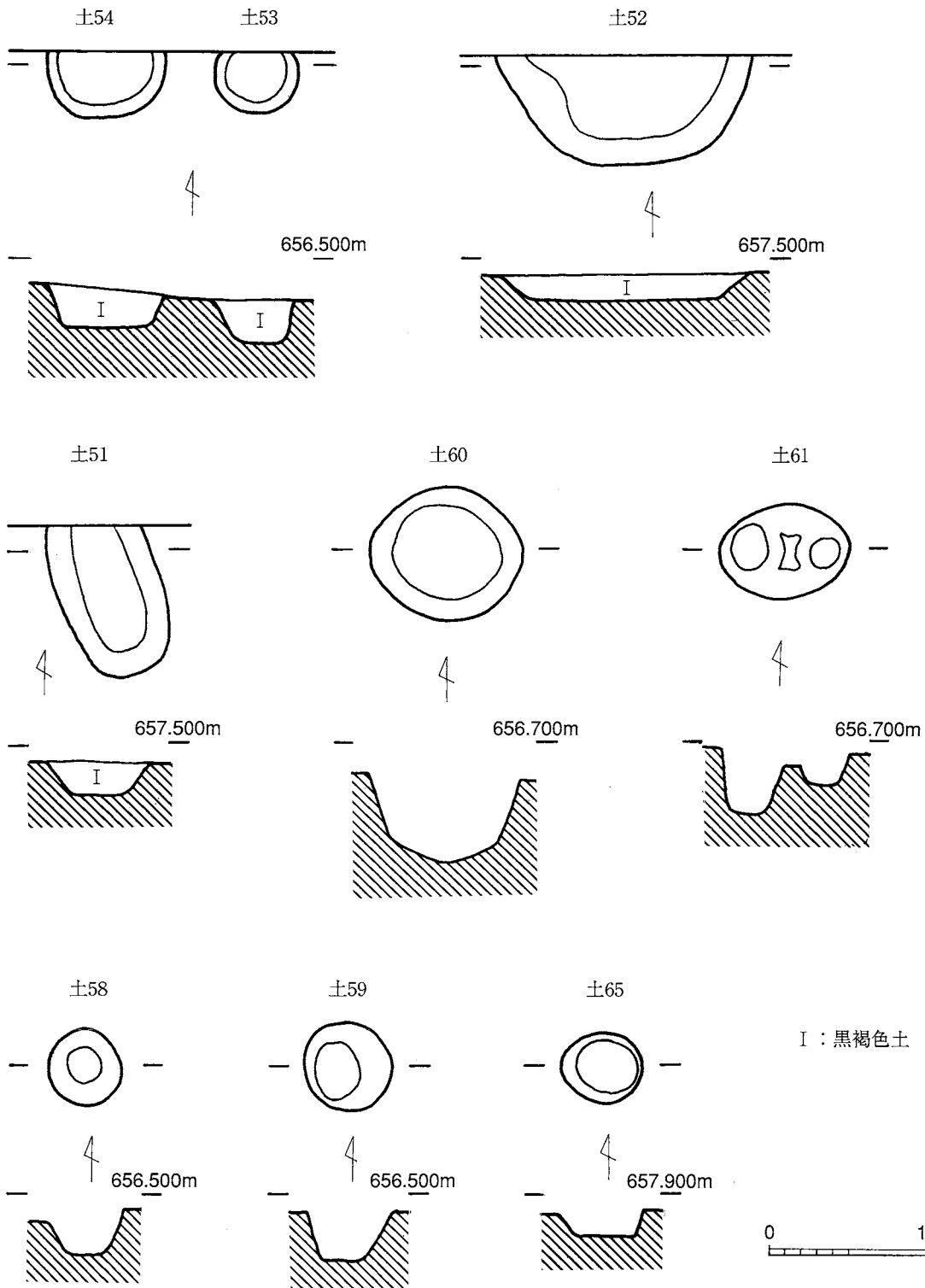


第20图 土坑23·24·27~38·43

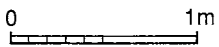
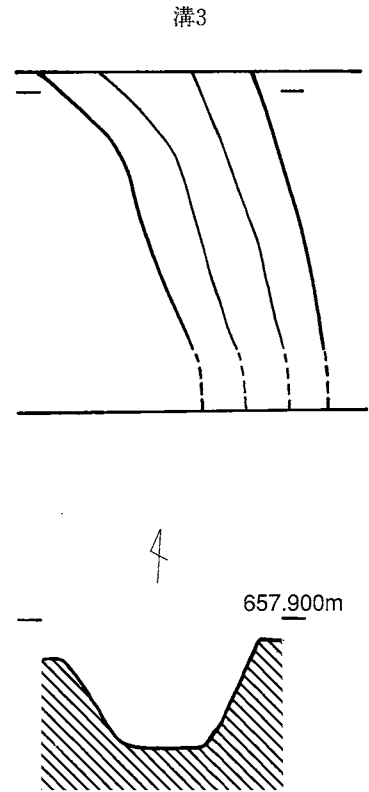
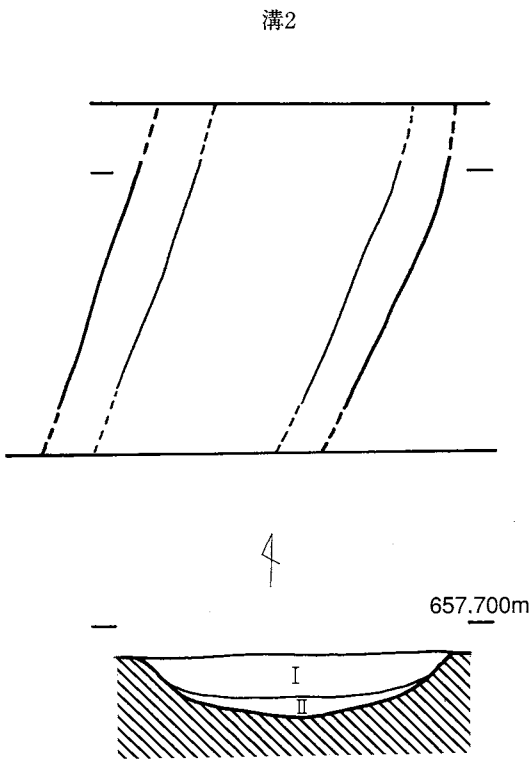
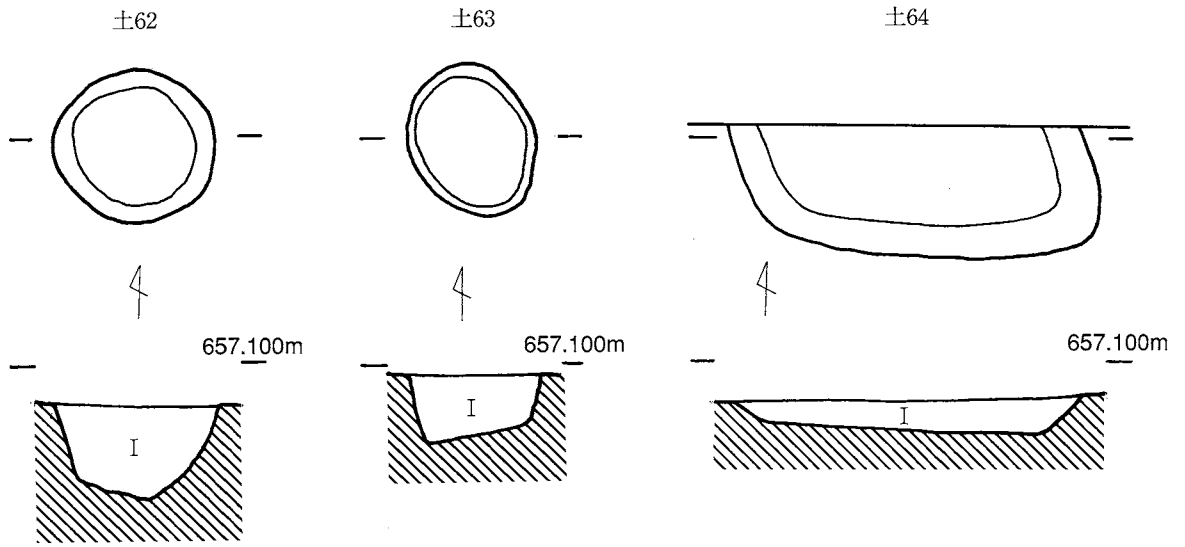


I : 黑褐色土

第21圖 土坑39~42・44~50・56・57



第22図 土坑51~54・58~61・65



I : 黒褐色土 II : 小礫、砂
 第23図 土坑62~64、溝2~3

3. 溝状遺構

(1) 第1号溝址

① 遺 構 (第24図)

位置 S1・W147付近に位置する。

規模・形状 幅7.2m、最深部1.4mの大きな溝である。断面形状は、東側は傾斜がゆるく、西側は急激に立ち上がる。底は比較的平らである。

検出・調査状況 本址は平成8年の調査では、道路の北側の側溝工事立会い調査において、不明落ち込みとして部分的に観察されていた。同調査では、この他、4箇所地点で凹地状地形を発見していて、南北方向に走る溝状、あるいは凹地状地形の存在が予測されていた。その後、平成14年のIV次調査では、調査区北端に近い所で、幅6.3mの溝址が発見された。今回調査では、断面観察を主として行い、覆土の堆積状況から、自然埋没であることが判明した。埋没時期は、地質担当の木船 清氏の所見から、縄文時代以降であって、当時は小川として機能していたことがうかがわれた。平成8・14年、IV次と今回調査を総合的に判断すると、東小倉集落の北部を南北に走る溝あるいは小川が当時あって、集落の北側の境となっていたことが判明した。これより北側には遺構がほとんど無いことがその根拠となるだろう。水源については、黒沢川の分流なのかは不明であるが、当時の人々にとって生活面、集落の境界等、いろいろな意味で重要であったと想像される。

② 遺 物 (第27図)

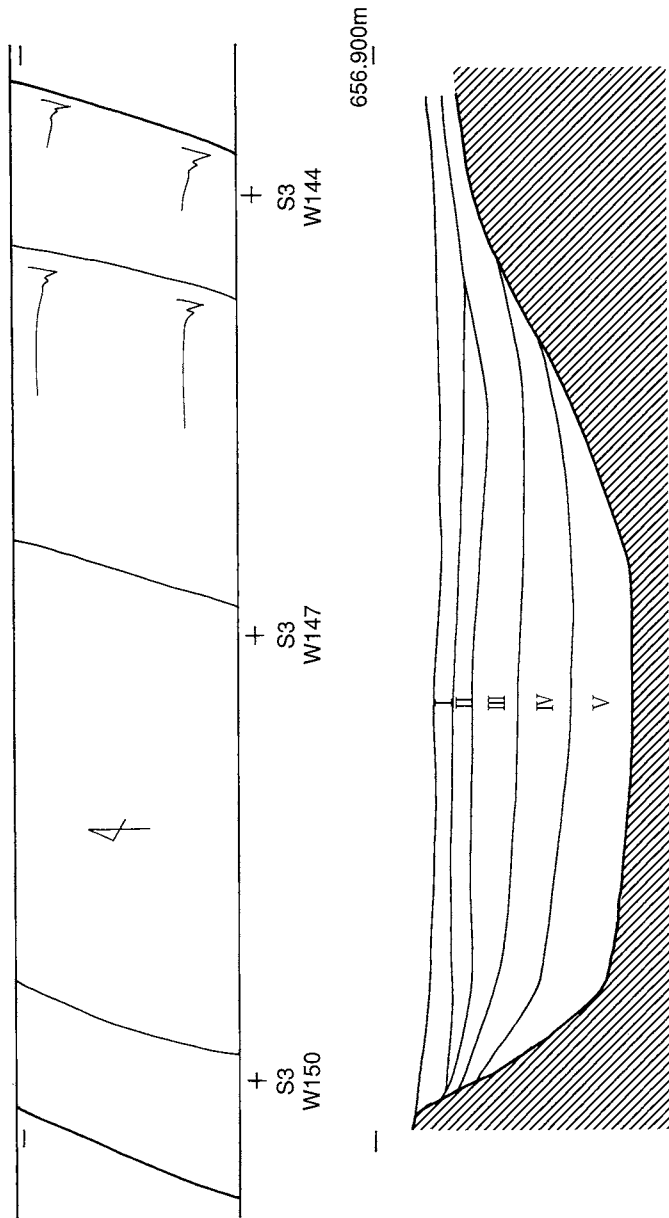
土器片が少量出土している。図示したものは46～48の3点である。46は口縁部片で篋描き凹線区画内に縄文が施されたもの、47は無文口縁部片で下に文様がつくらしいもの、48は篋描き沈線がみられるものである。まぎれ込みと推察される遺物で本溝の所属時期を考える資料となり得るか疑問である。

4. 遺構外出土遺物

② 遺 物 (第27、30図)

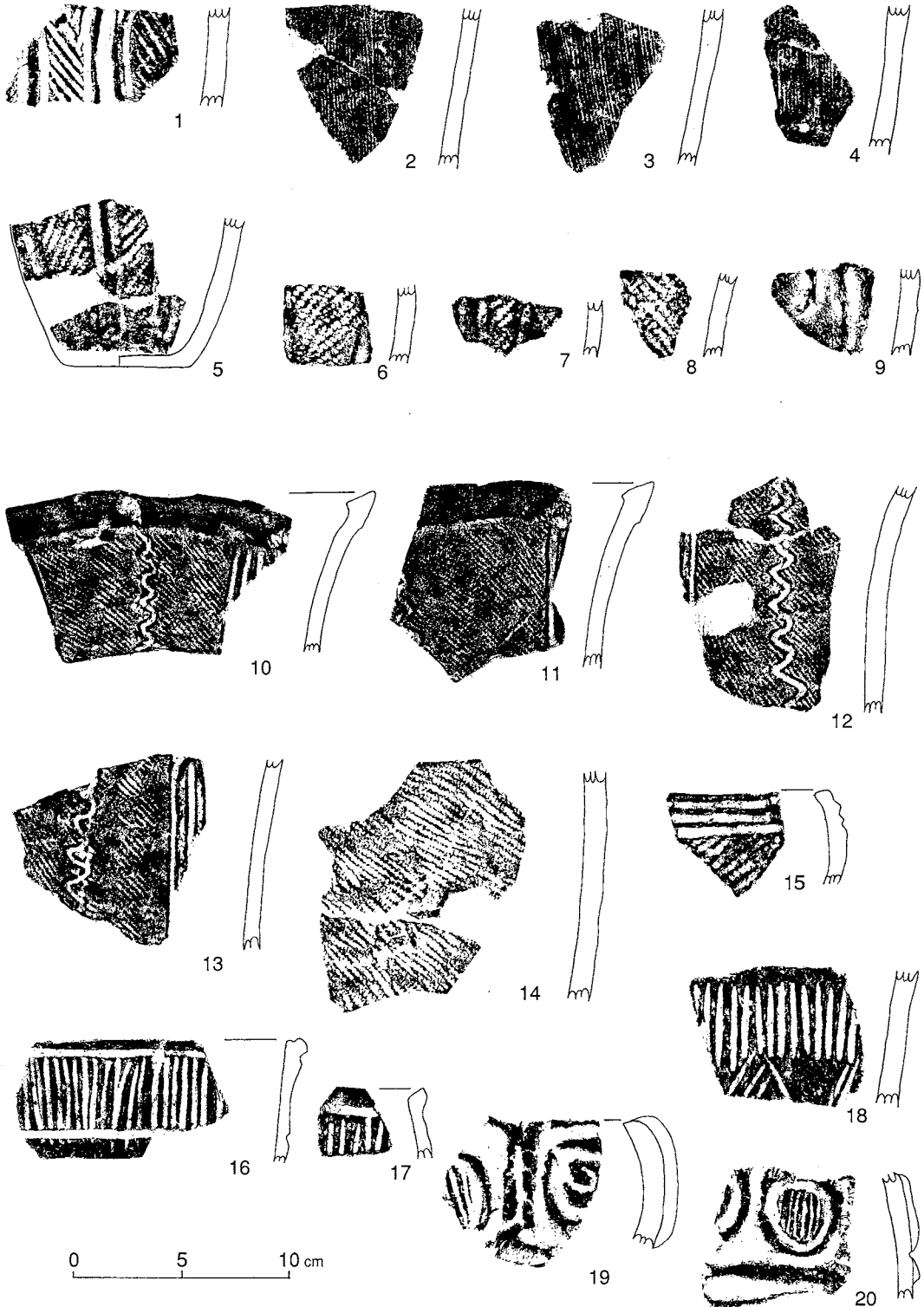
土器と石器があるが量的に多くない。図示したものは49の渦巻き文と綾杉文をもつ拓本1点と17の磨石1点のみである。

溝 1

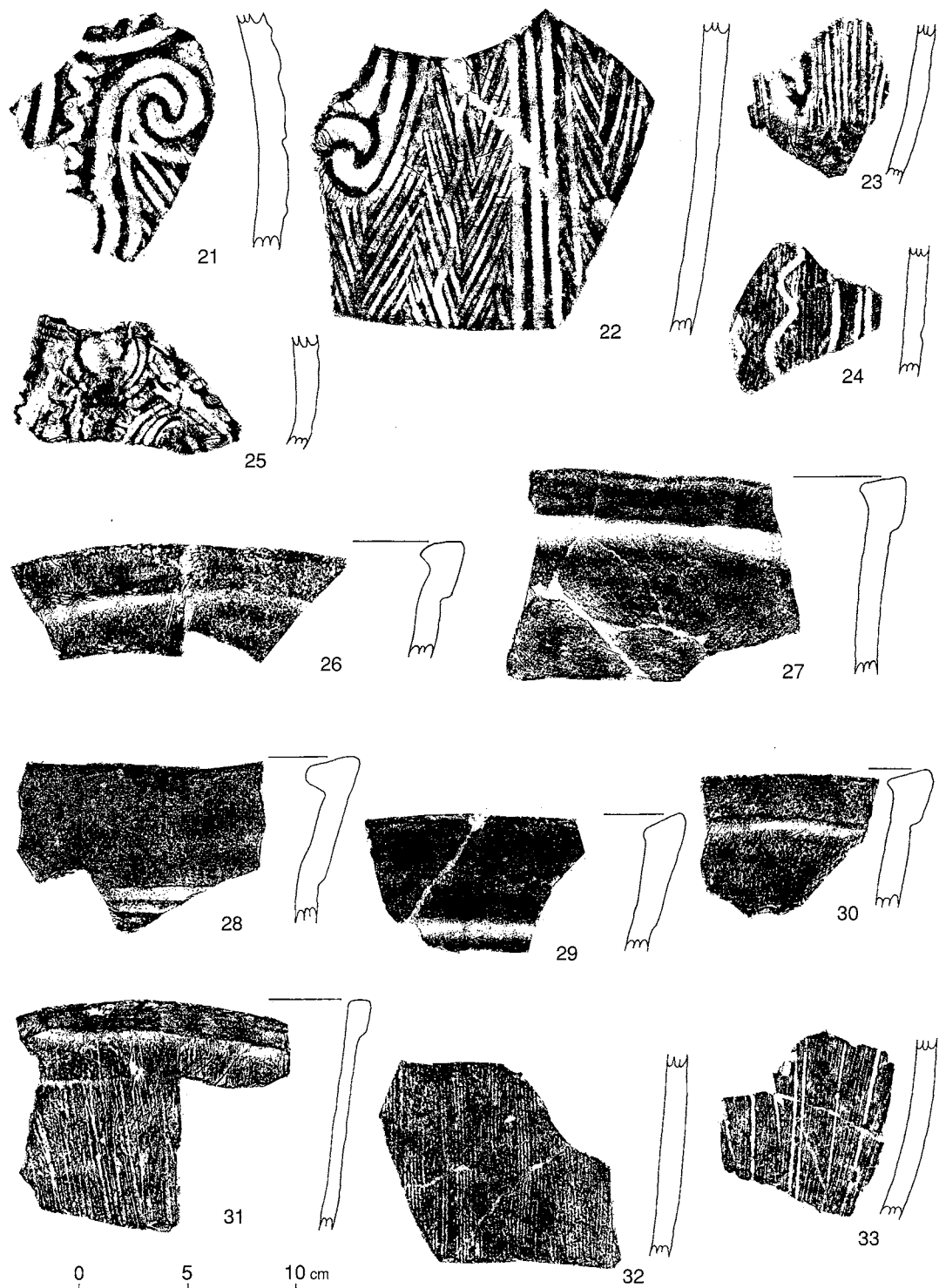


- I : 客土
- II : 暗灰色土 (小礫混)
- III : 灰褐~茶褐色土 (2~3cm亜角礫混)
- IV : 黑褐色土 (砂質有機物混)
- V : 茶褐色土 (ローム、有機物混)

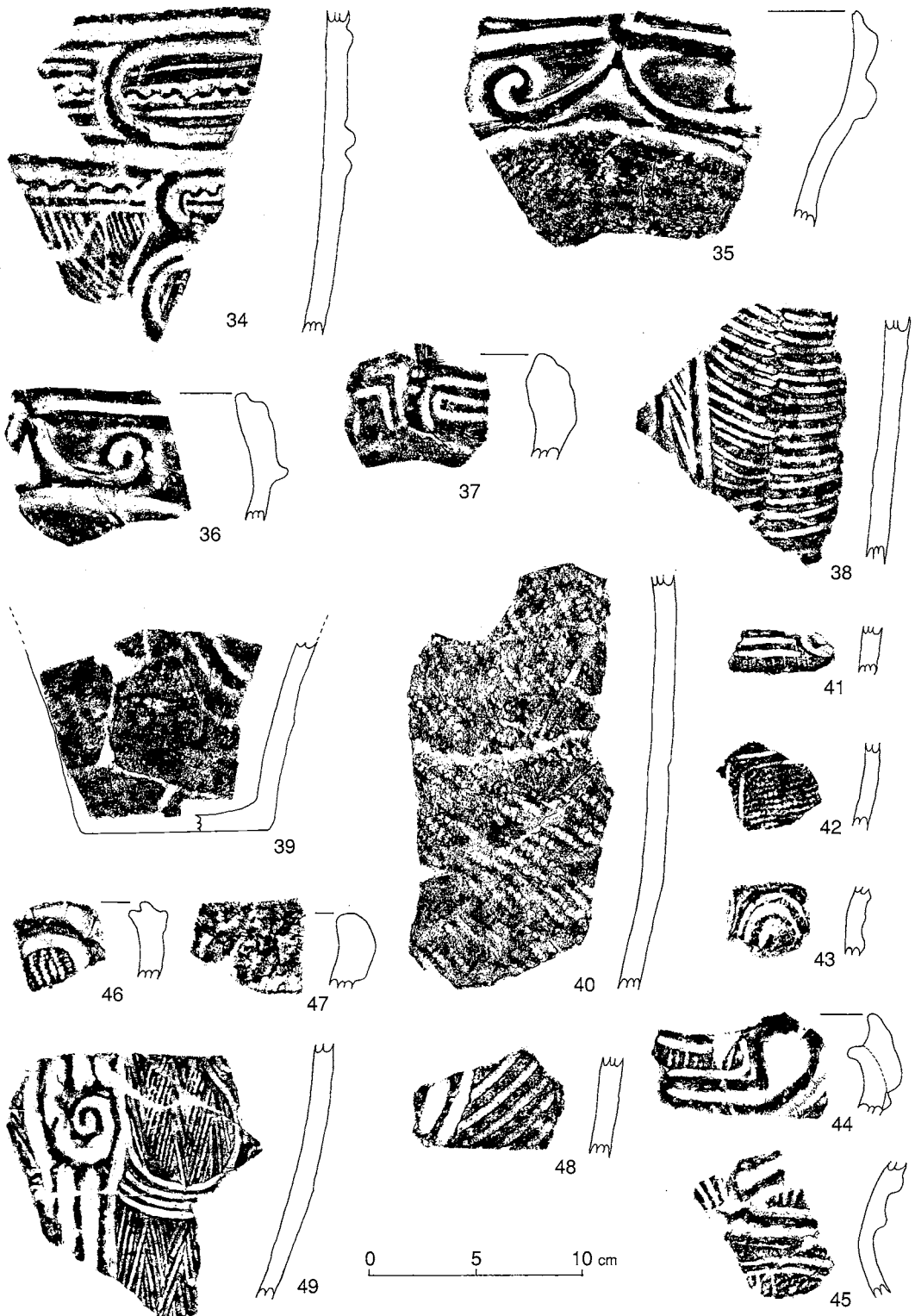
第24図 溝 1



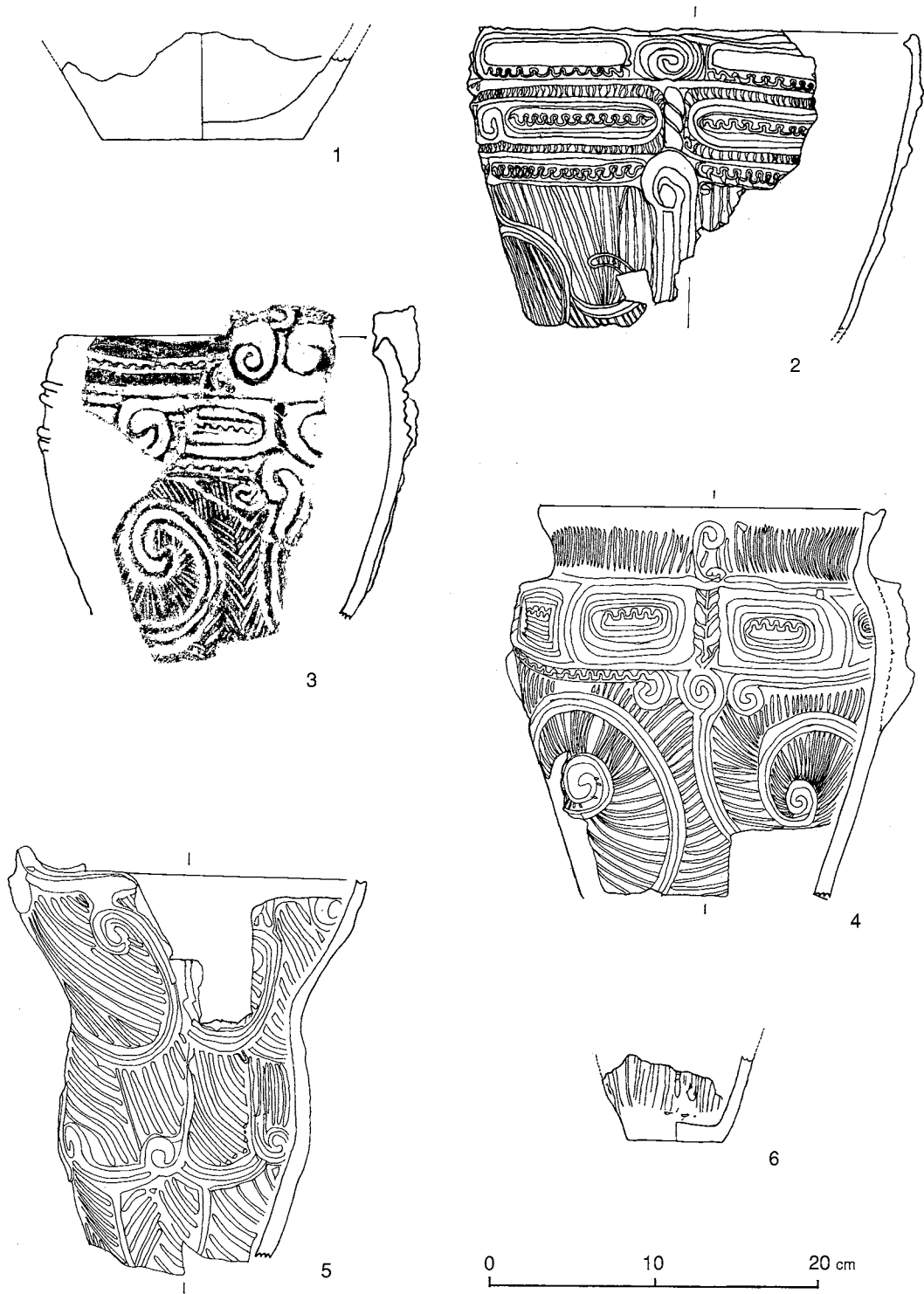
第25图 第5·7·10号住居址出土土器拓影 (1:3)
 (1~4-5住、5~9-7住、10~20-10住)



第26图 第10号住居址出土土器拓影 (1:3)



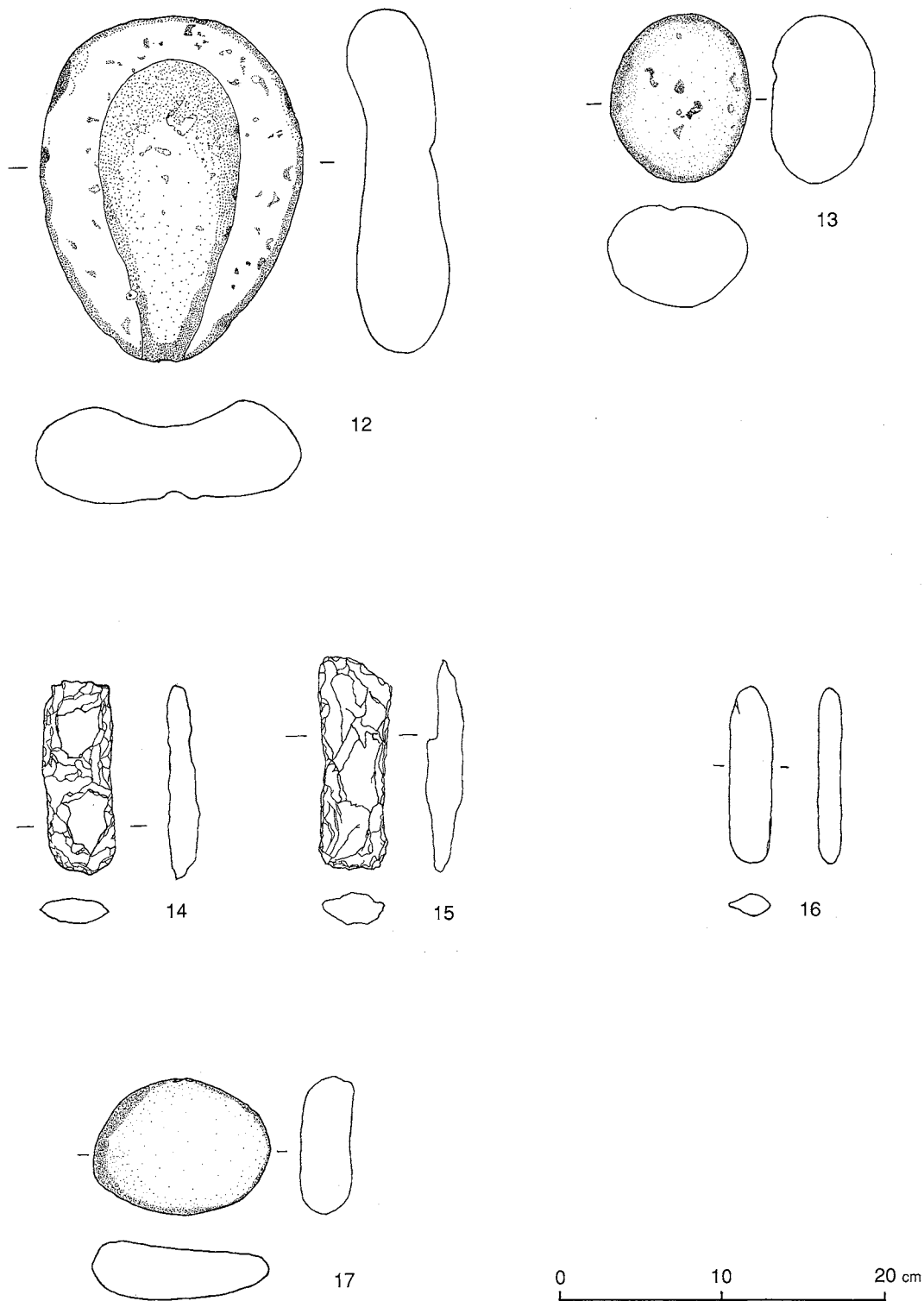
第27图 第11·12·15·沟状遺構出土土器拓影 (1:3)
 (34~39-11住、40-12住、41~45-15住、46~48-沟状、49-遺構外)



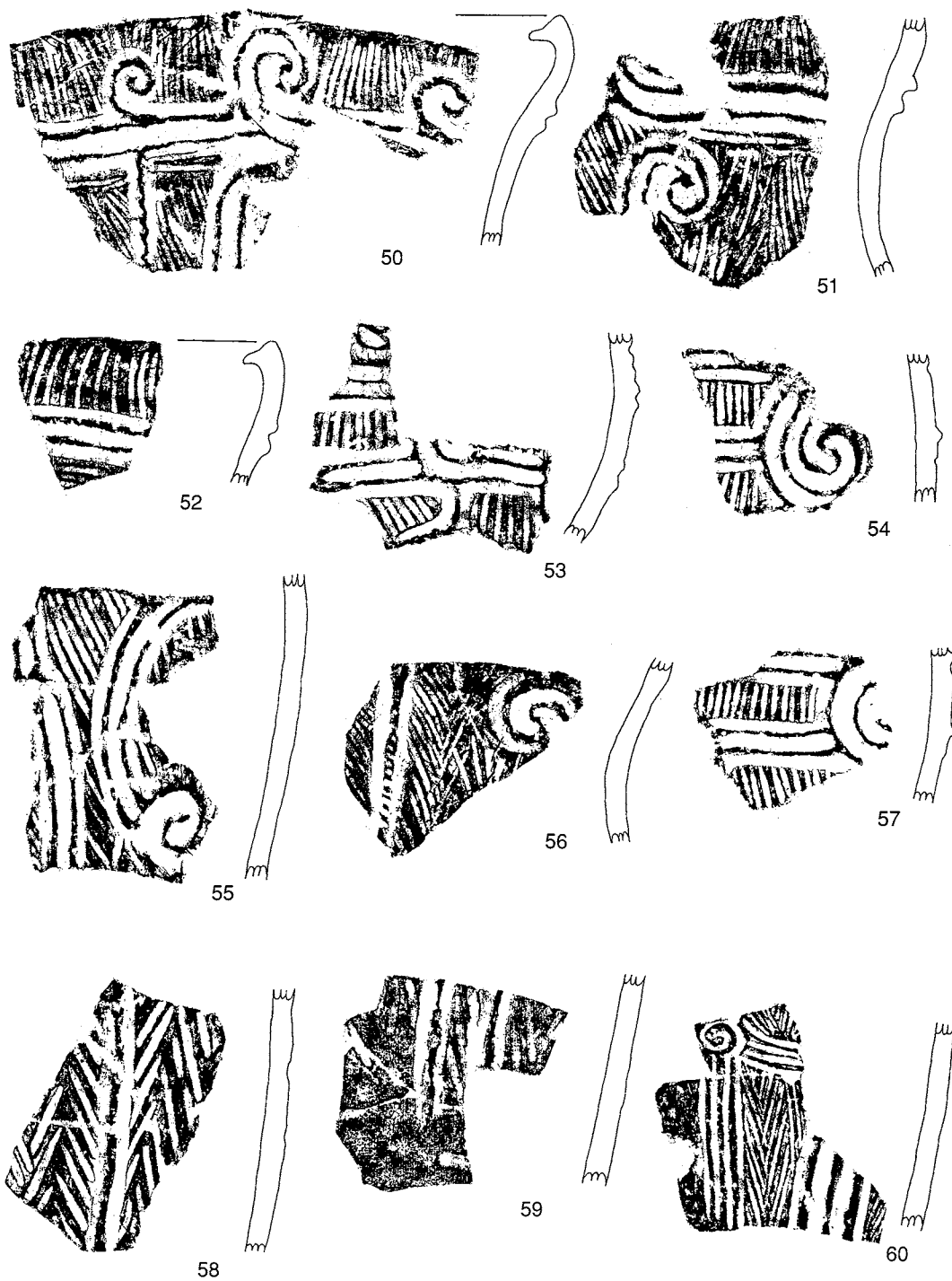
第28图 第10·11号住居址出土土器 (1:4)
(1-10住、2~6-11住)



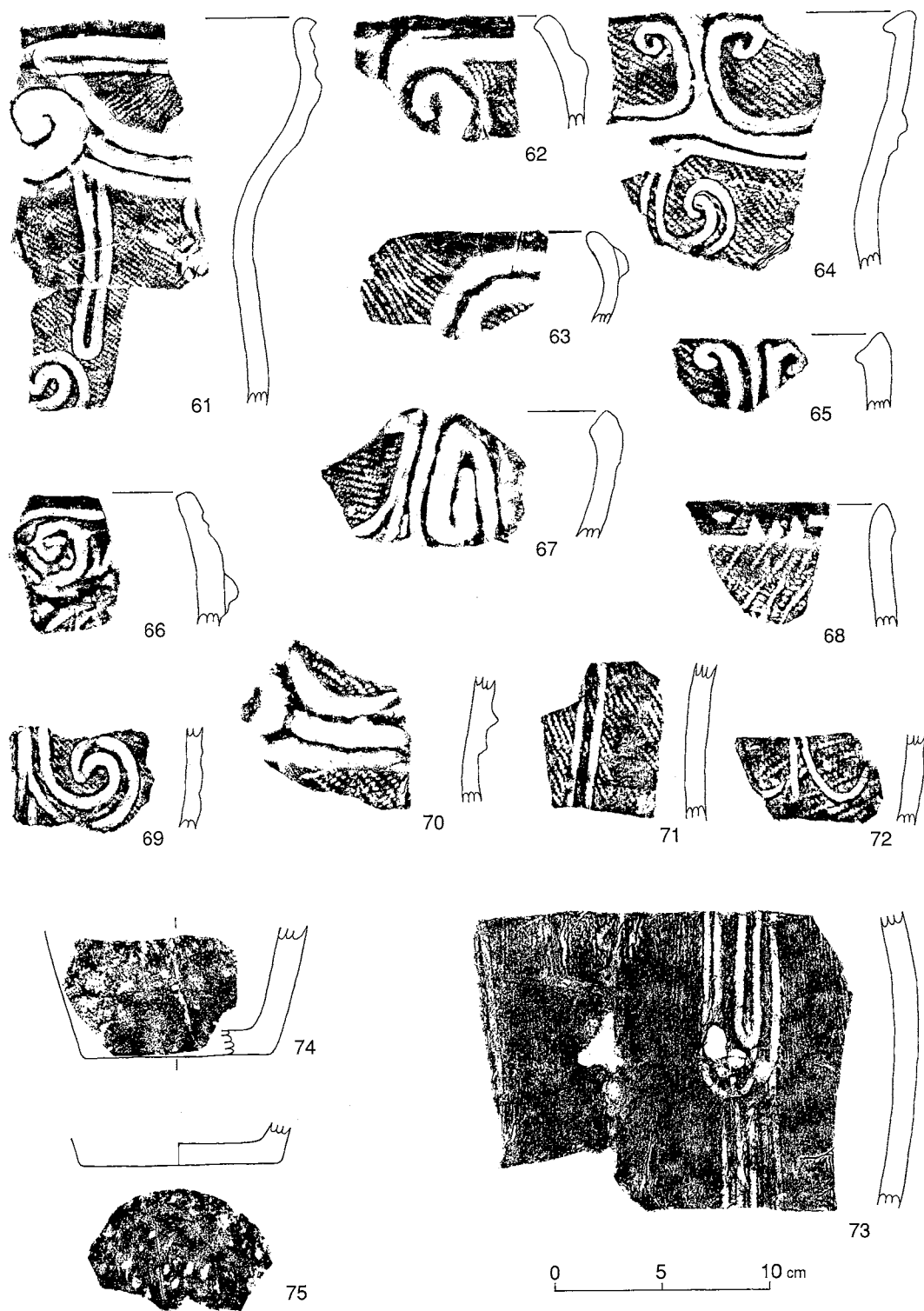
第29図 第7・10・11号住居址出土石器及び石製品 (2・3・10-1:8、他は1:4)
 (1~3-7住、4~6-10住、7~10-11住、11は欠番)



第30图 第11・14・15号住居址及び遺構外出土石器（1：4）
 (12~13-11住、14~15-14住、16-15住、17-遺構外)



第31図 第14号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）



第32図 第14号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

第4章 V次調査の遺構と遺物

1. 住居

(1) 第26号住居址

① 遺構 (第33図)

位置 S100・W110付近に位置する。27号住居址を切り31号住居址が床を張る。土154・土247に切られる。

規模・形状 直径5m程の円形か。壁は、東14cm、西22cm、南15cmを測る。

検出・調査状況 不整形な暗褐色土の落ち込みを検出した。2軒の住居址が切り合っていると考えたが時間的制約もあり、同時に掘り下げるとにした。調査区北壁の土層観察によって本址が27号住居址を切ることが判明した。

柱穴 P₁・P₂が主柱穴と考える。深さはP₁、35cm、P₂、46cmを測る。

炉 深鉢の底部を朽ち欠いて炉体として使用している。焼土が炉の南側に広がっている。

遺物出土状況 覆土上層から多数の土器片が出土している。原型をとどめるものは79図1以外無い。79図1は他の土器片と同じく床面から10cm程浮いて出土した。覆土中～上層からはこぶし大～人頭大の礫が土器片と共に、多く出土している。住居址廃絶後に投棄されたと考えられる。

② 遺物 (第75～80、86、137、138図)

土器と石器及び土製品の出土をみた。他の住居址に比べると出土量が多いが破片が多く器形の窺がえるものは少ない。住居址1軒を完掘しない部分的な調査では致し方ないことである。

器形のほぼ判るものは第79図1の深鉢と80図の4の浅鉢くらいである。79図1は口縁部が僅か欠損するが、頸部が大きくくびれる器形で最大径が口縁部と胴部にある安定感のある器形となっている。文様は特長的な「U」字状文を正・逆巧みに配して組み合わせ、区画を構成し渦巻文を付けて文様効果を高めている。くびれた頸部から垂下する逆「U」字で全体が4等分されている。

80図4の浅鉢は底部を欠くが、ほぼ底部近くから口縁部までが判るものである。底部から直斜状に外反して頸部に至り、頸部下から立ち上がって口縁部で「く」の字状に内弯する器形となっている。最大径は口縁部にあり径42cmほどとなる。無文であり、器内外茶褐色をしているが芯になる内部は黒色となっている。P₄出土である。

80図1～3、5は部分的に器形の判るもので、1は先記1と同内容の文様で飾られており、胴部がふくらむ器形となっている。2は胴部の復元図であるが、あと僅かで口縁となり、そこが最大径となる器形とみれる。縄文が頸部から胴部にかけて施されている。器内面は黒褐色で底部近くにはこびりつきがある。3と5は底部片で、3には垂下する

区画内に縄文が満たされている。摩滅がみられる。埋甕炉として使用されたものである。5は底径約10cmほどで垂下する細い「U」字状文で区画された中に綾杉文がある。これらは縄文中期後半Ⅱ期に比定されるものといえる。

拓本図は1～82まで図示した。発掘調査時の詳細な遺物取り上げに従ってより多くの資料を示したわけである。土器内容は先記したものと同内容をもつ、渦巻文、綾杉文、縄文に代表されるもので実測図と拓本図に時期差はみられない。また床面出土(1～17)、覆土出土(18～39)、ピット1～4出土(63～81)土器との間にも同様のことが言える。ただ82のピット1出土のものは先行するものとみられる。大部分は深鉢片であるが、22は台付底部片、38は浅鉢片と思われる。29、40、61は口縁部装飾の突起部であり、いずれにも渦巻文がみられる。

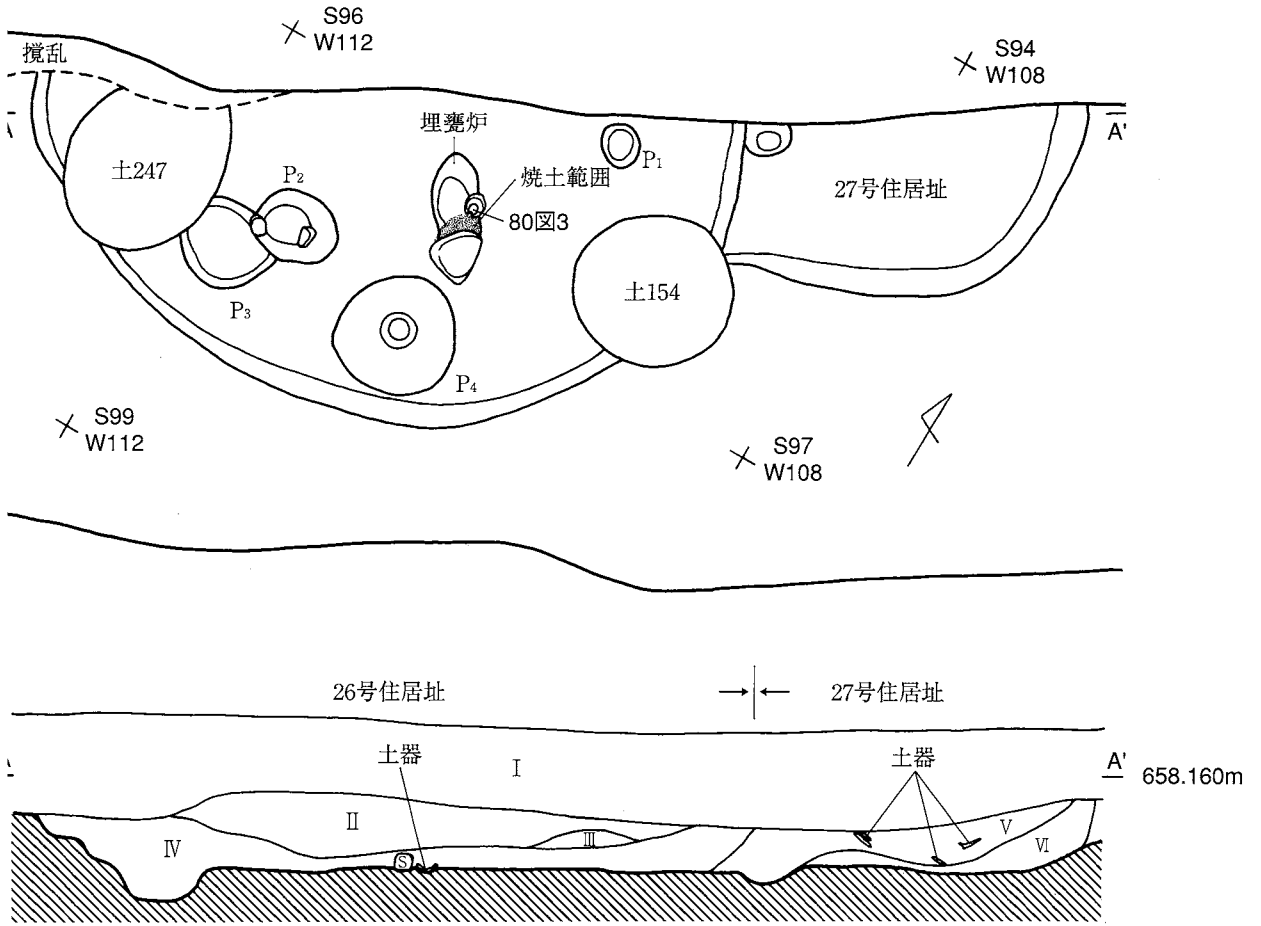
石器には第86図の石鎌、凹石、磨石等がある。1の石鎌は長さ3.2cmの完形品で黒曜石製である。凹石は3、4、5の3点で、3と4は輝石安山岩製、5は砂岩製であり、4には両面、3、5には片側に凹みがある。6の磨石は輝石安山岩製である。2はチャート製の長さ約5cmのものであるが、石錐の先の折れたものか剥片なのか判断に苦しむものである。

土製品は第137図1の土偶と第138図7の土製円板である。

1の土偶は顔と頭の部分だけである。目、眉、鼻、口が表現された顔には目の下の両頬に2条の沈線が縦に描かれている。入れ墨の表現であろうか。頭部は頭髪を結ってまとめたように表現されており注意したい頭部片といえる。

土製円板は無文土器片利用のもので、径4.5cmのほぼ円形に近いものである。

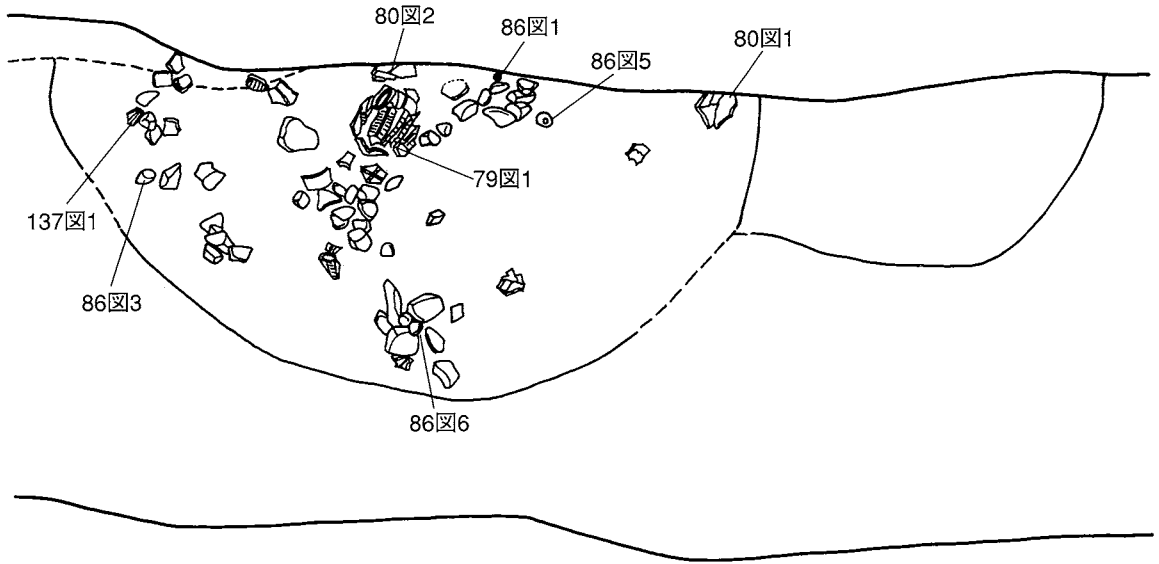
限られた部分の調査にもかかわらず多種の遺物出土がみられて注目すべき住居址といえる。



- | | | |
|-----------|--------------------|------------|
| I : 客土 | III : 黄色土ブロック混入褐色土 | V : 茶褐色土 |
| II : 黒褐色土 | IV : 暗褐色土 | VI : 暗茶褐色土 |

0 1m

第33図 第26・27号住居址



磔・遺物出土図

0 1m

第34図 第26号住居址遺物出土図

(2) 第27号住居址

① 遺構 (第33図)

位置 S96・W108付近に位置する。26号住居址・土152に切られる。31号住居址が床を張る。

規模・形状 規模は不明。方形基調の住居址と思われる。

検出・調査状況 26号住居址と同時に検出した。壁は東20cm、南10cmを測る。炉址がなく調査部分も全体の10～20%程度であったが、固くたたきしめられた黄色ロームを床面とし、住居址と判断した。

柱穴 P₁で深さ29cmを測る。

炉址 検出されていない。

遺物出土状況 覆土中から土器片が得られた。

② 遺物 (第80、81図)

出土遺物は土器だけである。器形の判るものは第80図6の1点のみで、他は第81図1～13の拓本で示したものである。1は口径20cm、器高25cm、底径10cmを計るコップ状の深鉢で肥厚した口縁部は無文帯となり以下に縄文が底部までつけられている。これと同様土器が本村南松原遺跡の2号、5号住居址からも出土している。

拓本1～4、6～7には口縁部の下に横帯区画がみられて特長的なキャタピラ状の文様で飾られている。藤内I式の特長をもつ土器である。1～3は同一個体であり、器内外面茶褐色を呈して胎土、焼成共によい。その他の土器も同様で胎土、焼成共によいものが多い。8、11は縦長に区画をもつもので区画内は平行条線が満たされる。8は器内外黒褐色で胎土に雲母を含み焼成のよいものである。10、12は平出3A式の土器で平行条線に特長がある。10の条線下は縄文になる。胎土に小石を含むが良好で焼成もよい。7は無文の底部近くの破片で、下は底面につながる。器外面茶褐色、内面黒褐色で胎土に小石を含み、やや荒い感じの器肌である。南松原遺跡と同時期の内容を示すもので縄文中期中葉Ⅲ期に比定されよう。

(3) 第28号住居址

① 遺構 (第35図)

位置 S100・W118付近に位置する。土165・土166に切られる。

規模・形状 長軸5.5m×短軸4.8m 円形基調だが東側が張り出す。

検出・形状 半円形の暗褐色土の落ち込みを検出し掘り下げた。調査区南壁際から石囲炉が表れ住居址とした。床面は炉の東側から北側にかけて固くしまる。

柱穴 P₁・P₂を主柱穴と考える。深さはそれぞれP₁、36cm P₂、33cmを測る。

炉址 長軸135cm×短軸78cm長方形の石囲炉。深さ14cmを測る。内部はあまり被熱していない。

遺物出土状況 覆土上面では東側に大型の破片がまとまって出土した。床面付近では、炉の周辺と北壁際にまとまって出土した。

② 遺物 (第82～86図)

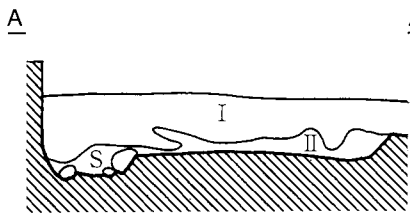
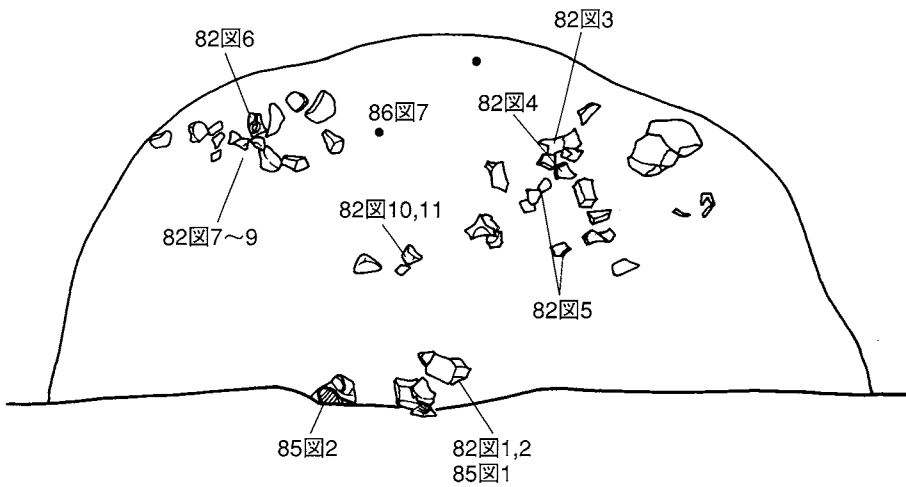
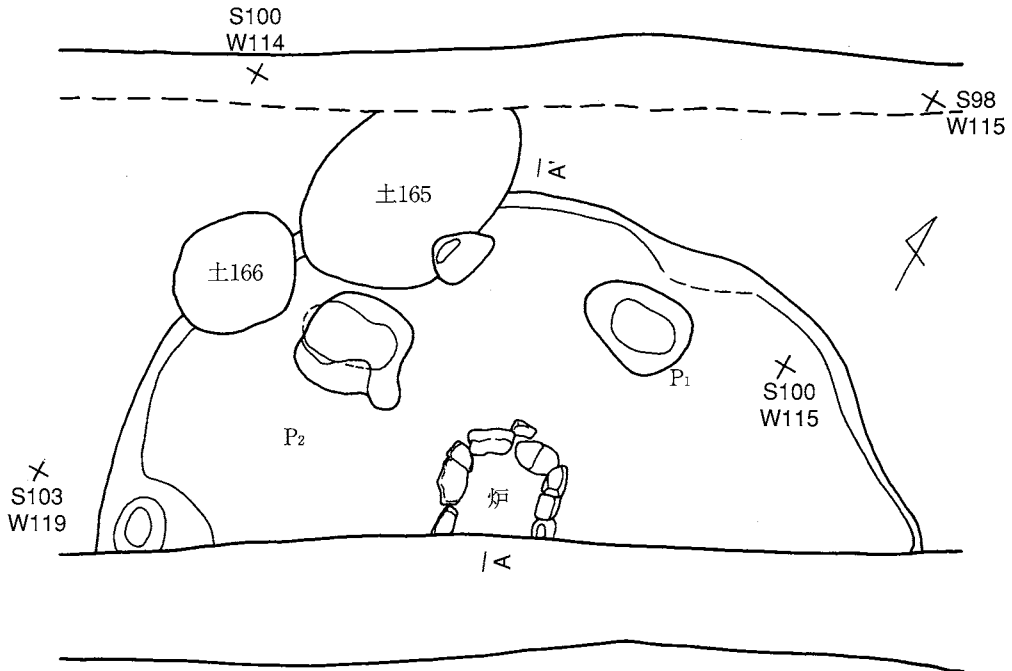
出土遺物は土器と石器である。土器は器形全体の判るものではなく、図上復元で部分的に判るものが第85図1、2の2点だけである。他は第82～84図の拓本1～57である。

1は直斜状に口縁部まで至り、最大径がそこにある器形をとる口縁部である。無文口縁の下に2条の隆帯が口縁に沿って平行に横走しており、その下に勾玉状文を並べている。そしてその下に簡略された渦巻というか唐草状の図案とでもいうかを描き、その間を篋描き沈線で「く」の字状にうめている。唐草文系土器の最終末に位置づけられている土器である。

2は口縁部から頸部にかけての部位であり、曲線で区画された内に平行条線が引かれたもので、1より若干先行する土器といえる。

拓本は取り上げ時の処理Noやピット、床面、覆土別に従って作成してある。結論的に言うと、覆土にまぎれ込みと思われる50～53の藤内式土器を除けば、No付き、ピット、床面、覆土の土器間に大差はみられず、ほとんどが先記2の土器と同時期と考えられる。唐草文系終末土器である1を考慮に入れ、中期後葉Ⅲ～Ⅳ期に位置づけておきたい。

石器は第86図7の小形磨製石斧1点のみである。よく研磨されており、長さ6.1cm、巾3.6cm、厚さ1.2cmを計り、ヒスイ製で注目される。



A' 658.560m

I : 暗褐色土 (礫2~5cm多)
 II : 黑色土 (炭化物含、焼土も若干含)

0 1m

第35图 第28号住居址

(4) 第29号住居址

① 遺構 (第36図)

位置 S102・W122付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 不明

検出・調査状況 土器片を多く含む黒色土層を掘り下げると、炉が検出された。しかし住居址の壁の立ち上がりを確認できないまま掘り下げたため、住居址の範囲は不明である。

炉址 石囲い炉と考えられるが、縁石の残りは悪い。規模は100cm×80cm深さ20cm。内部は焼けて焼土が堆積している。

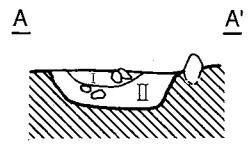
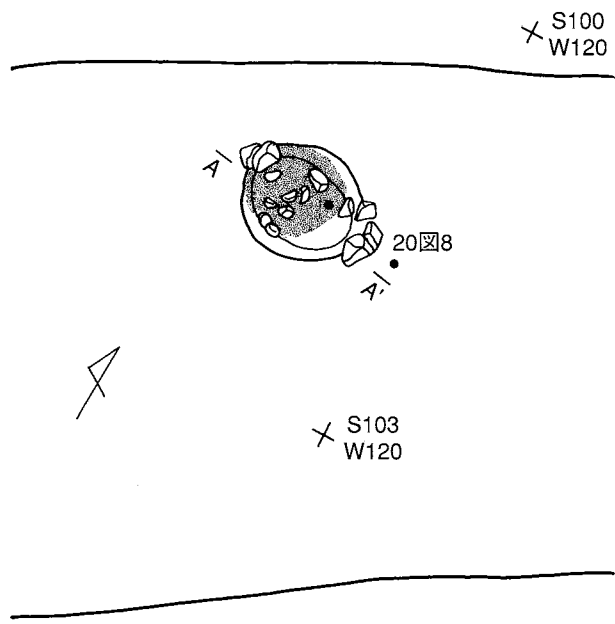
遺物出土状況 本址遺物としたものは炉付近出土の土器だけであるが、検出面出土として取り上げた遺物が相当量あり、時間があれば検討をしてみたい。

② 遺物 (第84、86図)

出土遺物は少なく、図示したものは第84図の拓本8点と第86図8の凹石1点だけである。

土器は58～62の5点が炉出土で、いずれも小片であり摩滅気味でザラつき、拓本もよくない。61は無文、62は推定底径10cmの底部片（炭化物が内面に付着）で、所属時期を考える資料に乏しい。強いて求めるならば60の平行条線の間には波線の施されたものくらいで中期中葉に位置づけられよう。覆土出土の65は同期とみられるが、63、64は共に勾玉状文をもつもので、中期後葉Ⅳ期となり、炉と覆土間に時間差がある。炉出土土器を本址のものともみれば、63、64はまぎれ込みとみざるを得ない。

石器の凹石は輝石安山岩製で片面に凹みがあり、磨石としての使用もみられる。



I : 黑褐色土
II : 烧土・炭化物



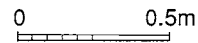
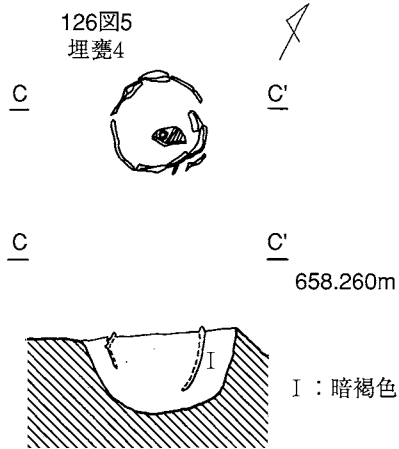
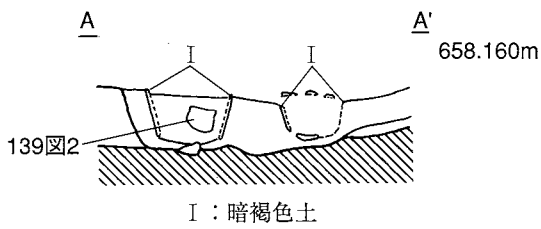
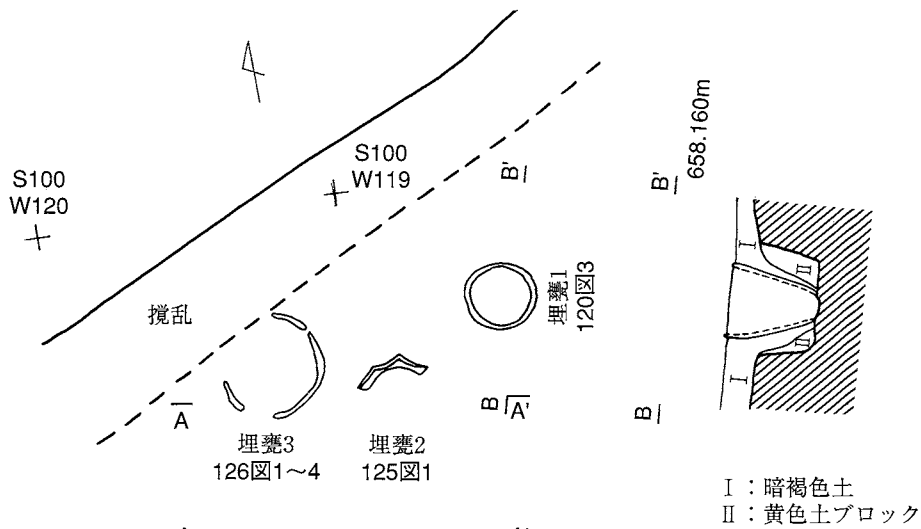
第36图 第29号住居址

第37図 埋甕1・2・3・4

埋甕1・2・3は29号住居址炉から北東へ2m、また28号住居址北西壁から40～60cm外側の地点に3個が近接する形で検出された。同じく埋甕4は29号住居址炉から南へ1m、また30号住居址東壁から60cm外側の位置に検出された。

各埋甕の上端のレベルを見ると1～3は、29号住居址と同じで4はそれより20cm程低い位置にある。

土器形式で見ると、1～3は中期後葉Ⅳ期、4は同Ⅱ期と考えられる。28・29・30号住居址の時期は、29号住居址が中期中葉～後葉Ⅳ期と不明確な部分が多い。28・30号住居址は後葉Ⅲ～Ⅳ期と考える。そこで28・29・30号住居址と埋甕1～4の関係を考えてみると、1～3は、29号住居址の屋内埋甕か28・30号住居址の屋外埋甕、両方の可能性があり、4は28・30号住居址の屋外埋甕も考えられるが、住居址覆土の遺物と時期差があり一考を要する。以上の点を考慮し、ここでは1～4の各位置と、実測図を掲載するにとどめ、遺構との関係は検討課題としたい。



第37図 埋葬1~4

(5) 第30号住居址

① 遺構 (第38図)

位置 S116・W124付近に位置する。土173に切られる。

規模・形状 円形の住居址と思われるが調査できた範囲は、全体の1/4程度なので全形は不明である。

検出・調査状況 円弧状の落ち込みを検出して掘り下げた。壁は東側で垂直に立ち上がり、北側はやや傾斜している。高さは東壁21cm、北壁25cmを測る。床は東壁付近は固くしまっている。床面中央部東よりに径40cmの範囲で焼土が広がっていた。

柱穴 P₁・P₂は柱穴と思われる。

炉址 検出できていない。

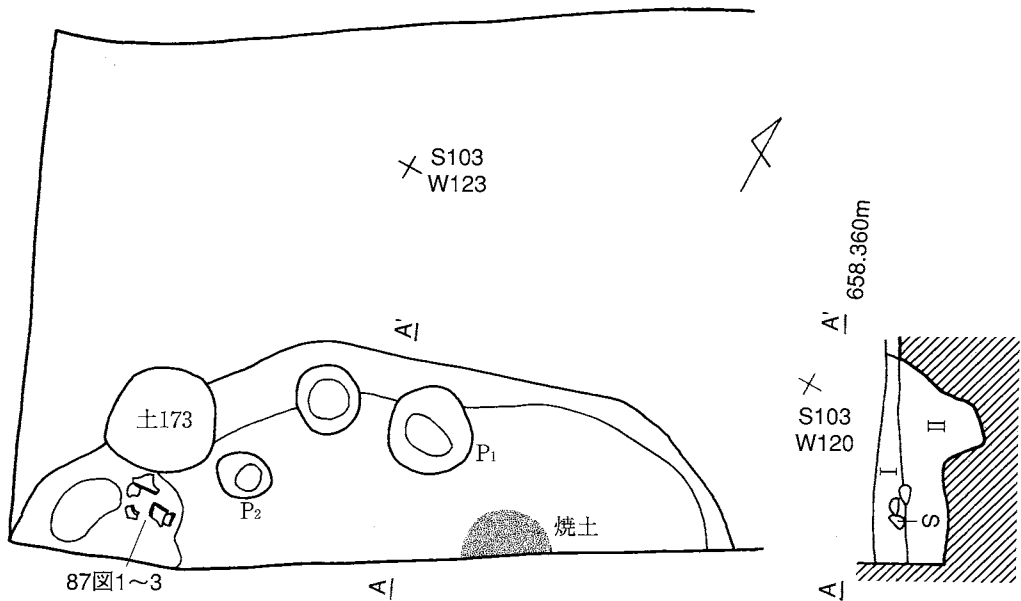
遺物出土状況 覆土中からは土器の小片は数多く出土しているが、まとまったものは少ない。床面付近では焼土が検出された付近で多少まとまって出土している。

② 遺物 (第80、86、87図)

土器と石器がある。土器は器形の判るものはない。第80図7は底径8cmほどで胴部に向かって直斜状に開く器形をとる深鉢の底部片である。黄褐色をして焼成はよいが粗雑な感じのするもので、文様も棒ないし篋状工具で無造作に描いたと思われる線が垂下している。器内面には炭化物の付着がある。

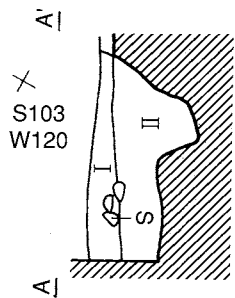
拓本は第87図1～22で、1～3、11の4片は同一個体である。器外面は赤褐色ないし茶褐色で、胎土、焼成共によい。文様は縦方向、横方向に平行沈線が引かれたり、弧状に引かれたりして文様効果を高めている。22は波状口縁をなすもので弧状の沈線が口縁に沿ってつけられている。線描されるものには、13、14、15のように短めの篋描きもある。9は逆「U」字状の区画内に縄文が施されるもので、16、17、18も同内容のものである。7、8は口縁部片であり、特長ある勾玉状文が口縁下に並んでいる。19～21は底部片で推定底径8～10cm程度であり、21の底面には網代痕がある。中期後葉Ⅲ～Ⅳ期に比定される土器といえる。

石器は第86図9～11の石鏃、打製石斧、凹石の各1点、計3点が出土している。石鏃は黒曜石製のもので基部片方が欠損している。打製石斧は両端に少し欠ける箇所があるが、ほぼ全貌の判る細粒砂岩製のもの、凹石は輝石安山岩製で両面に凹みのみられるものである。いずれも覆土出土となっている。

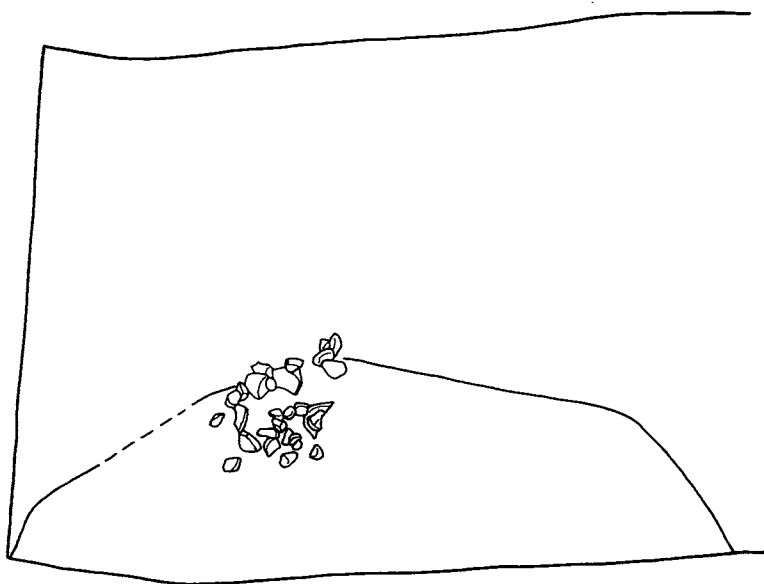


87図1~3

658.360m



I : 客土
II : 黒褐色土



遺物出土図

0 1m

第38図 第30号住居址

(6) 第31号住居址

① 遺構 (第39図)

位置 S96・W110付近に位置する。26・27号住居址に床を張る。

規模・形状 張り床の範囲は捉えられたが全形は不明である。

検出・調査状況 付近を検出中黒褐色土中に黄色土ロームを敷き詰めた部分が現れた。これを住居址の床面と考え壁の立ち上がりを探ったが黒褐色土中のため確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

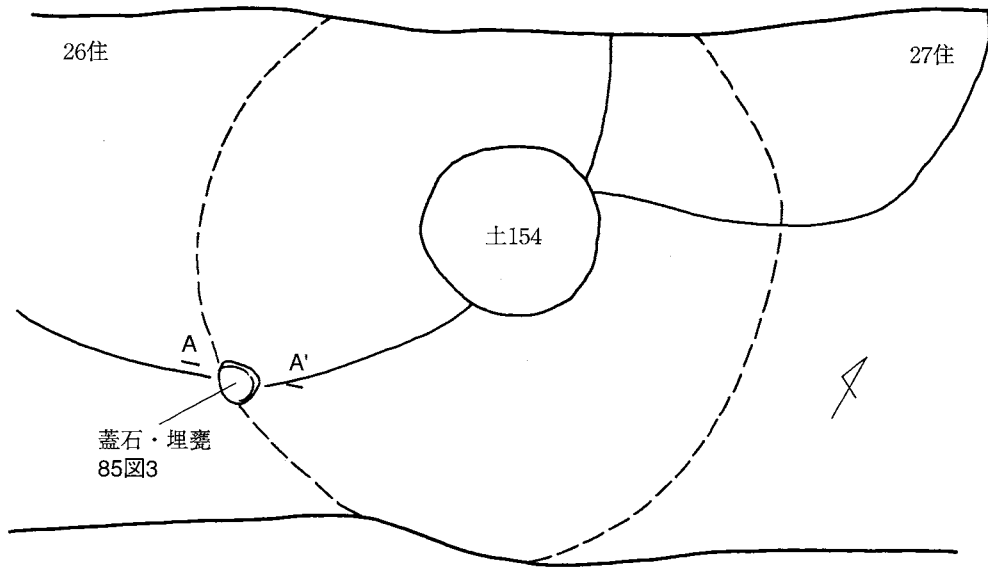
炉址 土154が炉址の可能性はあるが、炉縁石、焼土は伴わない。

遺物出土状況 張り床の南端に蓋石を伴う埋甕が出土している。その他原形をとどめる土器はない。

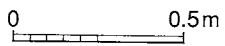
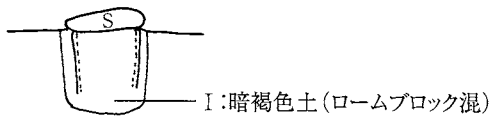
② 遺物 (第85図)

第85図の3のほぼ器形の判る深鉢1点のみで埋甕に使用されたものである。無文の口縁部が最大径となる筒状の器形をとるもので、黄褐色を呈し焼成のよい土器である。

文様は口縁部下に隆線がまわり、そこから垂下する隆線で区画された中に、無造作な綾杉文が引かれたものである。中期後葉Ⅳ期に位置づく土器である。



蓋石・埋甕セクション図



第39図 第31号住居址

(7) 第32号住居址

① 遺構(第40図)

位置 S62・W66付近に位置する。土193に切られる。

規模・形状 径4.92mの円形。東壁はほぼ垂直に、西壁はやや傾斜を持って立ち上がる。深さは東壁25～30cm、西壁36～55cmを測る。

検出・調査状況 単独で存在する住居址のため検出は容易であった。覆土は2層に分けられ上層の黒褐色土が中央に向かって、すり鉢状に堆積している様子が観察できた。自然堆積と思われる。床面は黄色土ロームの地山が固くたたきしめられている。

柱穴 P₁～P₄を主柱穴とする。位置関係から5本主柱と考えられるが、1つは調査区外にあると思われる。

炉址 住居址ほぼ中央に直径35cm高さ15cm程の深鉢口縁部～頸部が埋設してあった。埋甕炉と考える。内部には炭化物を少量含む茶褐色土が詰まっていた。

遺物出土状況 覆土Ⅰ・Ⅱ層中にほとんど遺物は含まれていない。床面付近からもほとんど遺物はなかった。東側壁寄りの床面上に長さ56cm巾14～15cmの棒状の石が倒れた状態で発見された、立石と思われる。

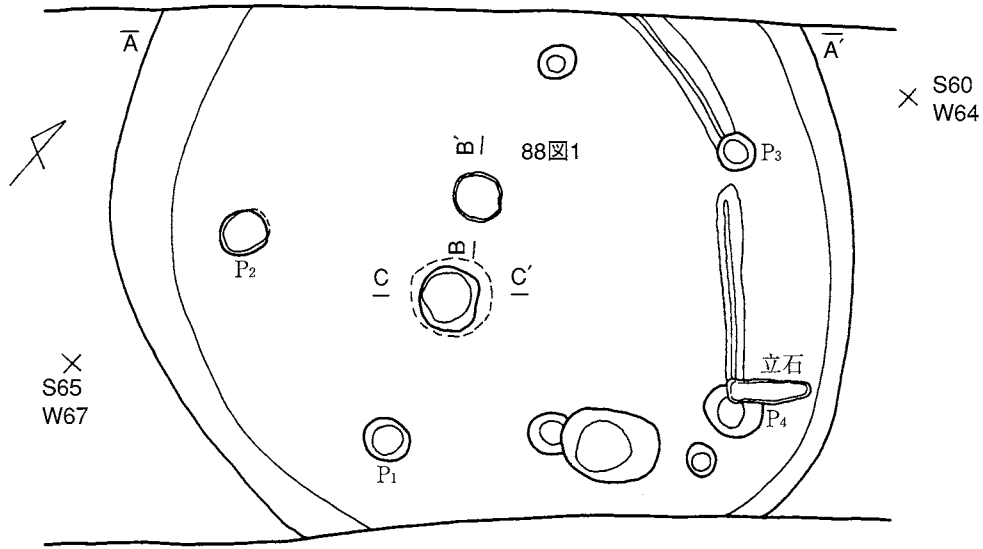
周溝 東壁から60cm内側に周溝が1条巡る。深さは8cm前後である。西側には周溝はない。

② 遺物(第88図)

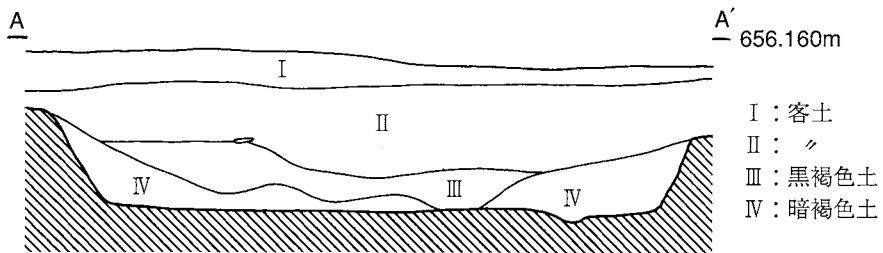
土器のみで出土量も多くない。

第88図に示した2～12の拓本と1の土器である。2は内弯、3は外反する口縁部で3には下に文様帯がみられる。4～8は同一個体と思われるもので、4をみると口縁部下に長円形の隆帯を作り、中に平行条線を満たした横帯区画を配している。そして以下は無文部が多いが隆線を縦、横に走らせ、縦の垂下するものには押圧を加えて変化を持たせている。そこから横走する3条の平行波線を引いて文様構成をしている。5、7には縦と横方向、6は縦、8は横方向となっている。内面には炭化物付着が黒くみられる。11は縄文のついたもの、12は底径16cmほどの底部片である。

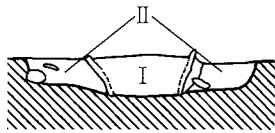
1は口縁部から頸部の判るもので胴部以下を欠く。細長い楕円を交互に積み上げてつないだ感じの構成が4段みられる。余り見かけない文様構成の土器である。中期後葉Ⅱ期くらいに比定される土器であろう。



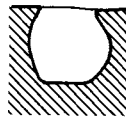
× S65
W64



B B' 655.660 C C' 655.660



埋竈断面図



I: 茶褐色土 (炭化物少量含む)
II: 黄色土ブロック、暗褐色土ブロック

I: 暗褐色土 (炭化物混多)

0 1m

第40図 第32号住居址

(8) 第33号住居址

① 遺構 (第41図)

位置 S54・W58付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 4.5m程の円形と思われる。

検出・調査状況 付近の黒色土中から大型の土器片が集中して発見された。復元可能な土器片が多く、記録をとりながら掘り下げたが黄色土ロームをわずかに掘りくぼめた遺構があった。明確な壁の立ち上がりは見つけられなかったが、一応住居址とした。黄色土ロームがところどころ固くしまっていて床面とした。

柱穴 P₁～P₃が柱穴と思われる。深さはP₁、39cm、P₂・P₃は浅く、それぞれ12cm、10cmを測る。

炉址 確認できていない。

遺物出土状況 大形の土器片とこぶし大～人頭大の礫がまとまって出土した。検出段階から大形の土器片が出土したが、床面直上まで一体となっていて住居址廃絶後の早い段階から捨てられたと考える。

② 遺物 (第89～92、113、137、138図)

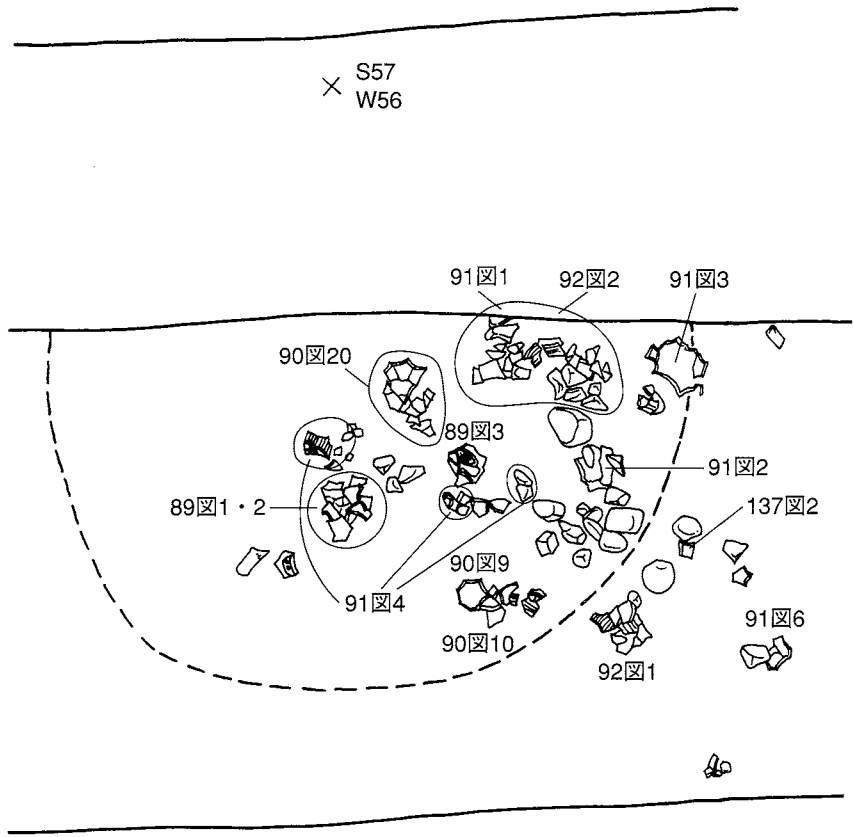
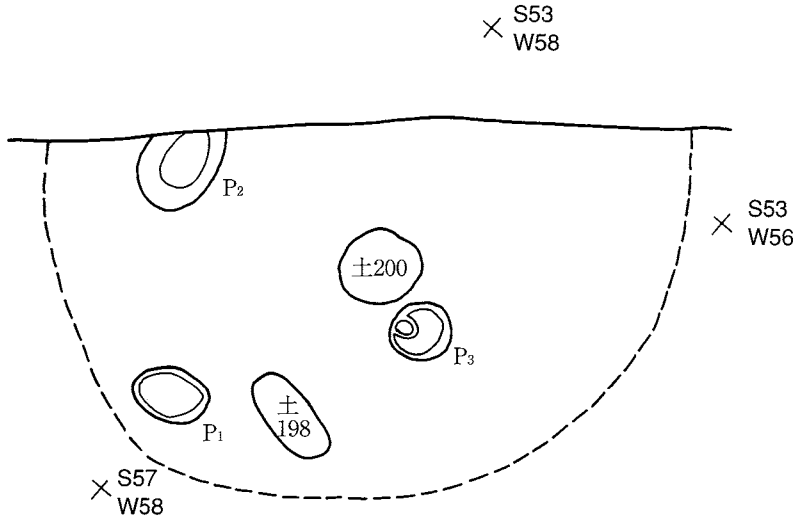
出土遺物は土器、石器、土製品である。土器は他の住居址に比べて器形のわかるものが多い。第91図1は丸みをもつ胴部が最大径をなして径29cmほどとなり、一旦頸部はしまつて口縁部は外反する平縁の器形となっている。くびれた頸部に波状文をめぐらせ、波の谷部へ押圧を加えて文様効果を高めている。頸部以下は縦方向に抽象的な篋描文がみられ、他は底部まで全面に縄文がみられる。2は曾利I式土器特有のコップ形というか筒状の器形をとるもので、4、5、6や第92図1、2も同様である。しかし口縁部に違いがみられ、2と第92図1は外反気味の口縁、92図2は内弯する口縁となっている。また口縁に装飾突起のつく2、4、92図1と平縁(92図2)の違いもみられる。2は口径24cm、92図1は口径27cm、同図2は口径14cm、器高30cm、底径8.5cmを計る。文様は共通点がみられ、頸部以下に「U」字状や垂下する隆線があり、その間を縦の平行条線が底部近くまで施されている。2、4には渦巻のような装飾突起を、92図1には刻目をつけた隆帯で口縁と胴部文様をつないでいる。3は底径12cm、器高20cm、口径40cmを計る浅鉢で、底部から直斜状に口縁部に至るもので頸部にくびれを作る器形となっている。文様はこのくびれ部に楕形状文を並べている。7も浅鉢の底部とみられる。

拓本は第89、90図の1～20である。1、2はやや大形深鉢の口縁部片で同一個体とみられ、器厚もある。器外面黒褐色、内面茶褐色で胎土に雲母を含みきらきら光る。胴部からくびれて口縁へ外反するもので、口縁の隆線と胴部上半の隆帯とを結ぶ「S」字状の装飾突起があり、ここが山形口縁となっている。14も同内容のものである。3は胴部のくびれ部で縄文の把手が付き、上部はいわゆるソーメン状の貼付文で飾られている。

5、6、9～13は平行条線をもつもので、5、6には特長のある三角形状の区画に縦に1本の隆線を入れた文様帯がみられる。15～17には棒ないし篋状工具で引かれた巾広い凹線が口縁部を飾っており、いずれも内弯気味の器形をとっている。18は浅鉢の口縁部片で「く」の字状に曲がる口縁に2本の沈線があるのみで無文が続いている。11、12、13、14、19には煮沸使用を物語る黑色炭化物付着が内面にみられる。中期後葉I期に比定される一群の土器である。

石器は第113図1の刃部が欠けた磨製石斧が1点出土している。石英斑岩製で現存長14.1cmである。

土製品は第137図2の土偶と第138図8の土製円板で各1点である。土偶は腹部から腰部にかけての破損品で、正面と両体側面に沈線と渦巻文がつけられている。土製円板は摩滅がみられるが平行条線のある土器片を利用したもので、最大径4.5cmである。



遺物出土図

0 1m

第41図 第33号住居址

(9) 第34号住居址

① 遺構 (第42図)

位置 S50・W50付近に位置する。土205に切られる。

規模・形状 4.7m×4.7m方形基調の住居址と思われる。壁の残りは悪く北隅で深さ9cmを測るが他は不明瞭である。

検出・調査状況 遺構の輪郭は不明瞭だった。サブトレンチを幾つか設定し壁の立ち上がりを確認することにつとめた。遺構は黄色土ロームをほとんど掘り込まずに作られているため、炉の位置、柱穴等から範囲を決めた。

柱穴 P₁～P₅が主柱穴と考える。深さはP₁、39cm、P₂、21cm、P₃、45cm、P₄、33cm、P₅、28cmを測る。6本主柱と思われるが1本は土205に切れ不明である。

炉址 規模は80cm×56cm深さ20cmを測る石囲い炉である。覆土は小礫と炭化物を含む。内面はあまり焼けていない。

遺物出土状況 本址は今回調査の中でも遺物出土量が多い住居址である。出土位置は住居址中央から北側にかけて集中している。床面より10cm程浮いて出土している。復元可能な個体も多く、縄文時代中期の住居址に時々見られる遺物出土状況である。

② 遺物 (第92～96図)

土器の出土があり量的にも多く、曾利I式土器のまとまった好資料を得ている。

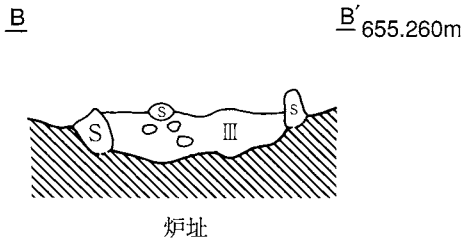
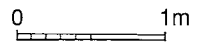
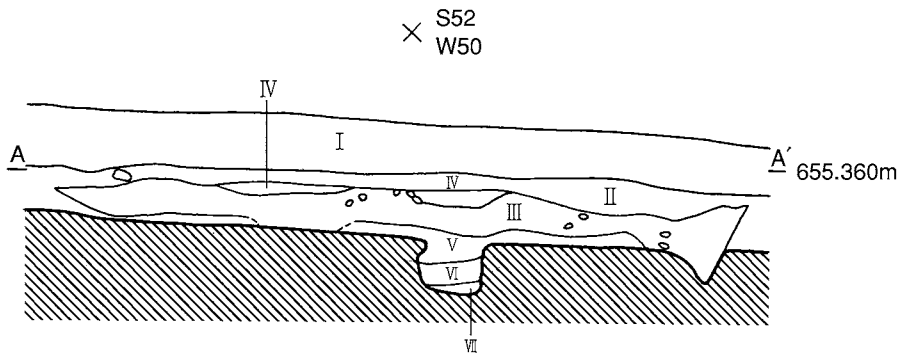
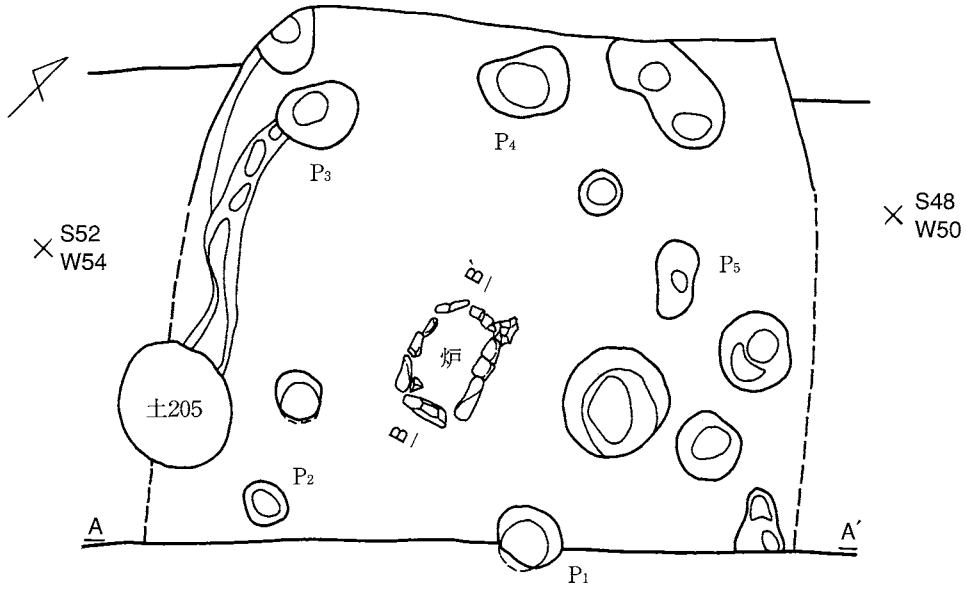
第92図3は口径15cm、器高25cm、底径7cmのコップ状の器形をとる深鉢で、口縁部は内弯気味で最大径となっている。無文口縁部の下に隆線による横帯区画があり、以下に刻目の入った弧状と片仮名の「キ」の字を立てた隆線が配され、間には細い平行条線が縦方向に施された簡素な文様の土器である。口縁外面に炭化物の付着がみられる。4は胴部に膨らみをもつ器形をとるもので、区画内に縦方向の平行条線がみられる胴部片である。5は底径9cm、器高41cm、口径約21cmの胴部にくびれをもつもので最大径は口縁部下で23cmを計る。口縁は四つの山形をなし、口縁下に不整区画があって平行条線で満たされている。胴部のくびれ部には櫛形状文が並んでいる。

第93図6はほぼ全体器形の判る大形土器である。四つの装飾突起があり、この突起を除けば胴部に最大径44cmがあって、ここからくびれてほぼ垂直に近く立ち上がって、やや内へ曲がる口縁に続いている。口縁径約36cm、残存器高62cm、突起を含めると72cmとなる。底部には第94図1がつくのではないかとみられるが、ざらざらしたもろい感じで内面一部に炭化物付着もあって問題点もある。ついた場合は器高約80cm、底径約13cmほどとなる。文様は口縁部、頸部、胴部と隆線内に刻目をもった横走隆帯によって三分されている。そして装飾突起と縄状の把手2個が3段に並んで重圧感を与える。上の口縁部はソーメン状貼付文が「U」字状につけられ、中には格子状文がみられる。突起部にも同様にみられる。中の2段目は縄状把手間が1単位となるもので、平行条線が縦方向

につけられ、上下に短い刻目のついた弧線がついてアクセントをつけている。3段目の胴部から下も縄状把手で四区分されており、把手より垂下する粘土を貼った隆線の中にもつ隆帯が1区画となっている。その間には渦巻文と十字状の文様帯が配され、平行条線で満たしている。均整のとれた姿の文様構成である。

第94図2は筒状の器形をとる胴部で口縁部と底部を欠く。頸部下から底部近くまで垂下する縄状の隆帯で四区分され、渦巻文が2つ縦方向につながって「S」字状をなしている。間は平行条線で満たされている。3は口縁部を欠くがほぼ全体器形が窺える。底部から直斜状に立ち上がった胴部は、ゆるいカーブでくびれ口縁に続く器形である。底径11cm、残存器形27cmを計り、くびれる頸部には縄状の把手がついて、それから垂下する隆帯で四分されている。間は平行条線が縦方向に引かれる中央に斜方向の区画が作られて変化をもたせている。4は胴部片で区画内に横方向の平行条線がみられる。

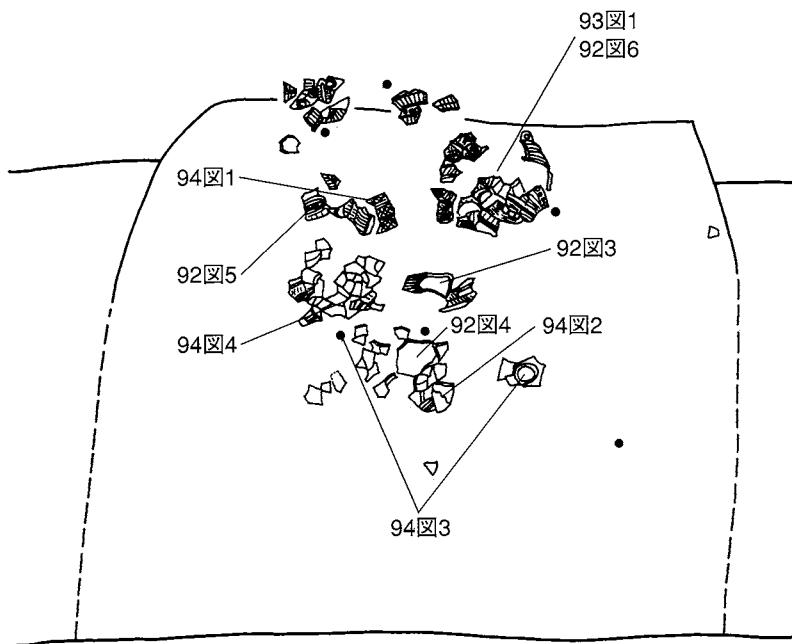
拓本は第95、96図の1～15であり、P₁、No付取り上げ土器を中心に図示した。先記した土器と同内容のもので加筆の必要はないと思われる。なお、3、14、15の器内面には炭化物の付着がある。曾利I式土器の好資料といえる。中期後葉I期に位置づく住居址である。



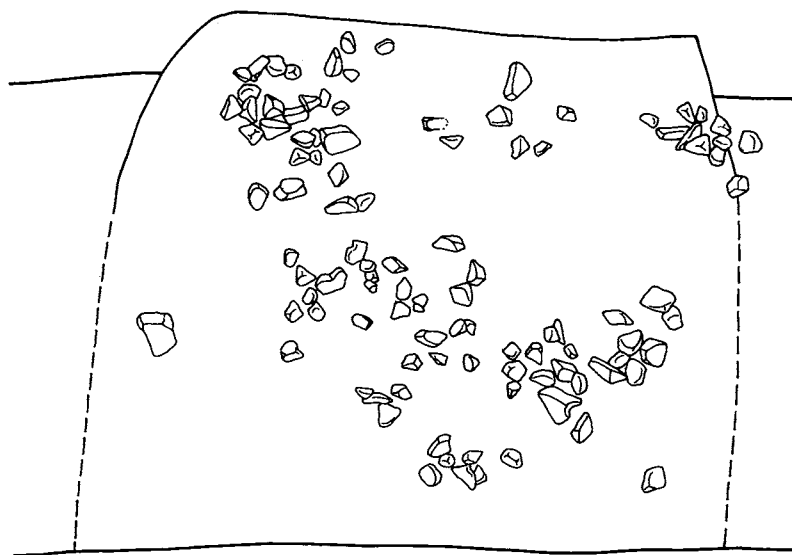
- I : 客土
- II : 黒褐色土
- III : 黒褐色土 (炭化物含む)
- IV : 褐色土
- V : ローム層
- VI : 礫層
- VII : 褐色土



第42図 第34号住居址



遺物出土図



礫出土図

0 1m

第43図 第34号住居址遺物出土図

(10) 第35号住居址

① 遺構 (第44図)

位置 S56・W56付近に位置する。

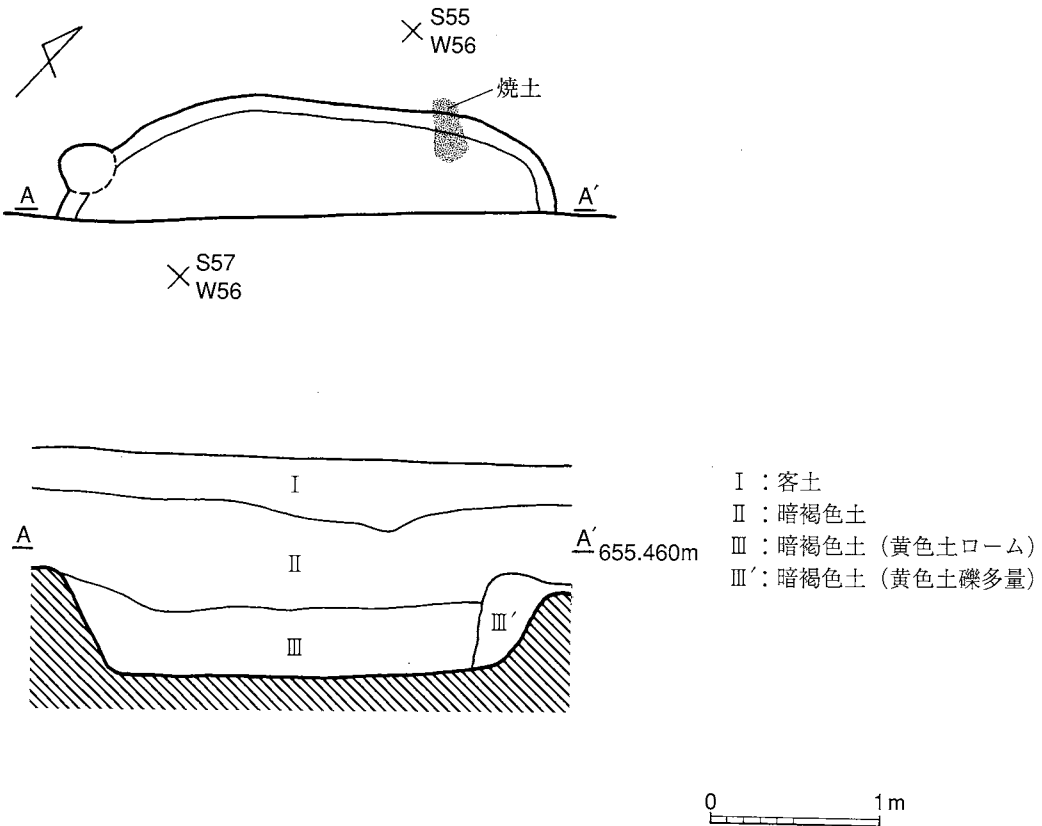
規模・形状 円形基調の住居址と思われる。規模は不明。壁は北壁のみで深さ50cmを測る。

検出・調査状況 孤状の落ち込みを検出。壁は垂直に近く立ち上げる。北側で50cmを測る。底は平らで固い、大形の土坑とも考えられるが底面の形状や壁の立ち上がり方から、一応住居址として扱った。

柱穴 不明

炉址 不明

遺物出土状況 小片が出土している。



第44図 第35号住居址

(11) 第36号住居址

① 遺構(第45図)

位置 S46・W48付近に位置する。38号住居址に切られる。

規模・形状 直径5mの円形。

検出・調査状況 住居址西側のラインは明瞭に検出できた。東側は別の遺構があるため南側にサブトレンチを入れた。土層観察の結果38号住居址が本址を切ることが判明した。壁は東8cm、西13cmと浅い、床面は黄色土ロームを固くたたきしめてある。

柱穴 P₁～P₅が支柱穴と思われる。深さはP₁、24cm、P₂、25cm、P₃、20cm、P₄、53cm、P₅、25cmを測る。

炉址 中央に直径50cmのすり鉢状ピットがある。内面に焼土はないが位置から炉址と考える。

遺物出土状況 土器の出土量は多くない。床面付近では中央西寄りですら2・3点大型破片が出土している。

周溝 西壁から1m内側に1条巡る。P₃・P₄・P₅を結ぶように続いている点と、東側に周溝はみられない点の特徴と言える。住居址の拡張に伴うものかもしれない。

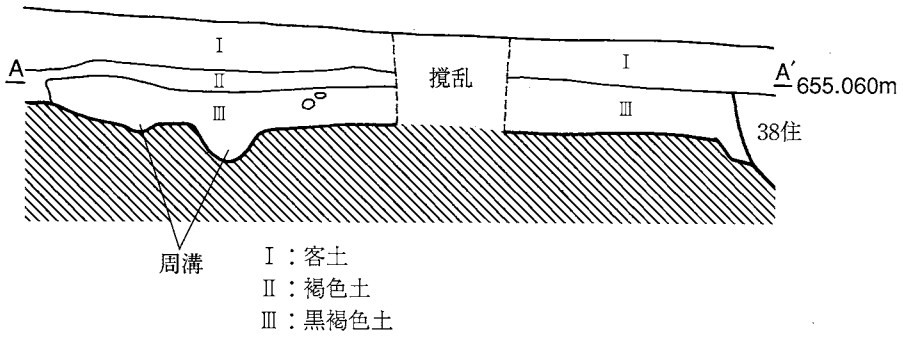
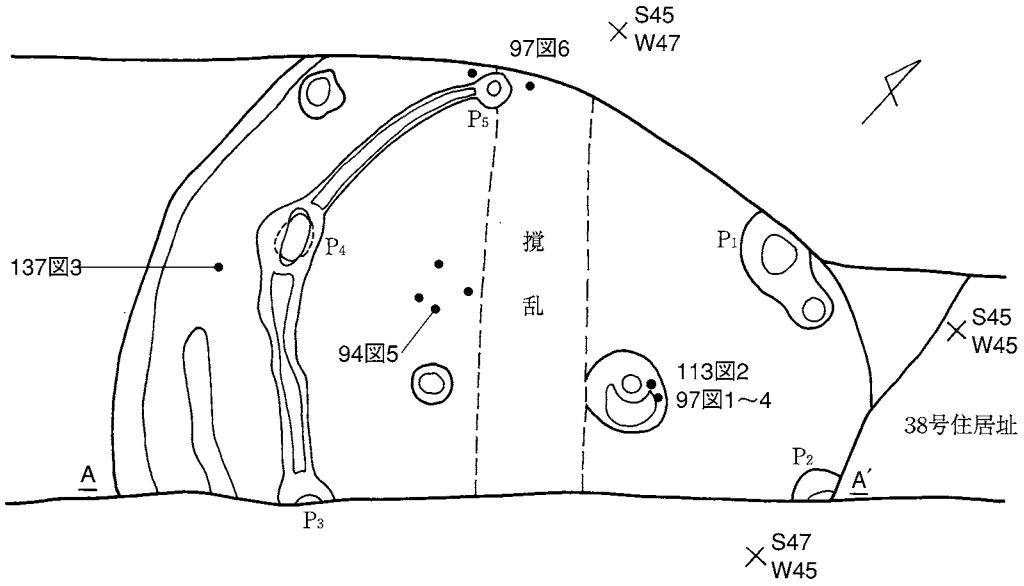
② 遺物(第94、97、113、137図)

土器と石器及び土製品がある。土器は第94図5が胴部から上半の器形が判るものがあるが、他は破片である。5は平縁の無文口縁部の下にくびれをもつもので、最大径は口縁にあり30cmを計る。くびれ部に波状隆線が横位につけられ、その下には弧状文と平行条線が施されている。

拓本は第97図の1～23で、No付、P₁、床面、覆土出土を考慮して図示したが、平行条線文を主体とした内容で、上記5の土器と同内容のものが多く時期差はみられない。23は器外面灰黒色、内面赤彩があつて胎土、焼成よく固く焼きしまった無文片で浅鉢の器形をなすものと思われる。22は磨滅がみられるが縄文が施されており、胎土に雲母の混入がある。中期後葉I期に位置づくものである。

石器は第113図2の不定形石器1点のみ。ブラックチャート製で4.3cmほどの小形であり、片側が刃とみられる。

土製品は、第137図3の土偶である。頭部、右手、右足を欠くもので残存の長さ21.2cmを計る大形で均整のとれた土偶である。首から足にかけて沈線が体側に沿って引かれ、また正中線を思わせる沈線が首から両乳房の間を下がり、腹から腰部で渦巻となっている。背面にも体側に沿って同様に沈線が引かれ、張り出した臀部は3条に丸味をもつつけられ尻部を表現している。背中には横長の楕円が両手に向かって引かれている。体側には「S」の字状文と渦巻文がみられ、全体としては胴長の姿になっている。



第45图 第36号住居址

(12) 第37号住居址

① 遺構 (第46図)

位置 S48・W40付近に位置する。38号住居址が床を張る。

規模・形状 直径5.5mの円形。壁はゆるやかに立ち上がり、東壁45cm、西壁60cmを測る。

検出・調査状況 東西のプランはそれぞれ明瞭であった。黄色土ロームを深く掘り込んで作られている。黄色土ロームの面を床面としている。炉の周辺は固くたたきしめられている。

柱穴 不明

炉址 100cm×70cmの環状の石囲い炉。緑石の残りは悪く北側に少し残っている。炉の掘り込みは浅く15cmを測る。内部は炭化物を多量に含む暗褐色土がつまる。炉の南側には径1mの範囲で赤く焼けた床面が広がる。

遺物出土状況 覆土IV層はこぶし大～30cmの礫を多量に含む。土器はこの礫とともに出土している。量はさほど多くない。

② 遺物 (第94、98～100、113、138図)

土器、石器、土製品の出土をみた。土器は第94図6の筒状の器形をとる口縁部欠損のもの、第100図1、2の口縁部と胴部であり、他は拓本図である。

6は底径10cm、残存器高24cm、胴部上半の径16cmほどを計るもので、胴部に四角の区画が構成され、その中に縦、横、斜方向の三様の線がみられて文様構成がおもしろい。

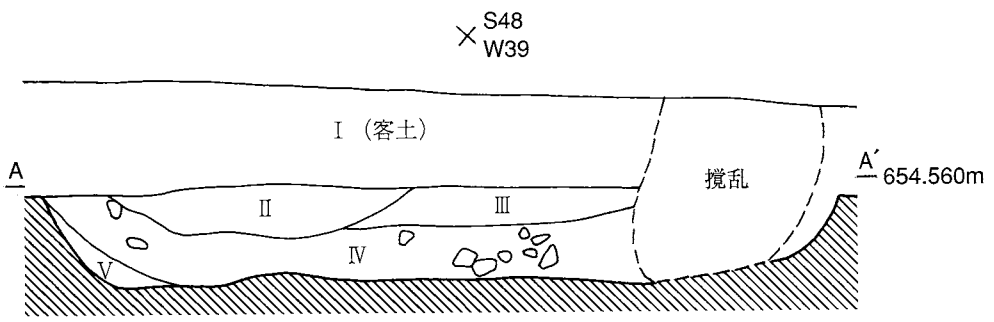
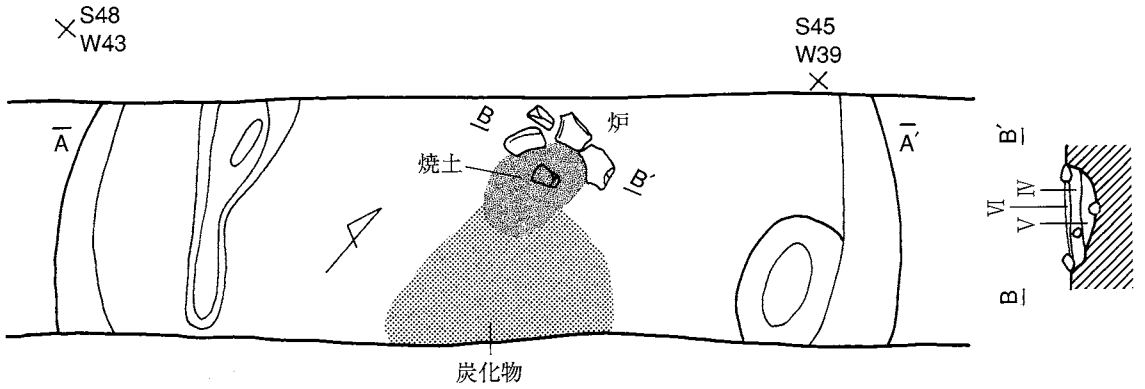
1は口縁部の¼ほどを図上復元したものである。頸部がくびれる器形で最大径は口縁にあり推定口径40cmとなる。胴部は丸味をもった感じで、くびれた頸部からつながっている。文様はくびれ部の下に部分的であるが2段の縦方向に引かれた平行条線区画と斜方向及び渦巻文がわずかにみられる。2は筒状の器形をとる胴部片¾ほどを復元図にしたもので垂下する刻目をもつ隆線間に条線がみられる。

拓本図は取り上げNo付土器、覆土出土土器別に図示したが時期差はみられない。1は口縁部片で大きな装飾突起のつくものであるが磨滅がみられ、ややざらついた器肌である。2～7、9、19～22は平行条線が飾られるもの、10、11、30、31は縄文が施されたもの、23～25、28～29はソーメン状貼付文のつく一群である。26、27は浅鉢片で、26は口唇部に文様帯をもつもの、27は頸部下に楕形状文が並ぶものである。いずれも中期後葉I期に比定される土器である。2、3、8は器面がざらついた破片であり、8には胎土に雲母の混入がみられるが、焼成は余りよくない。

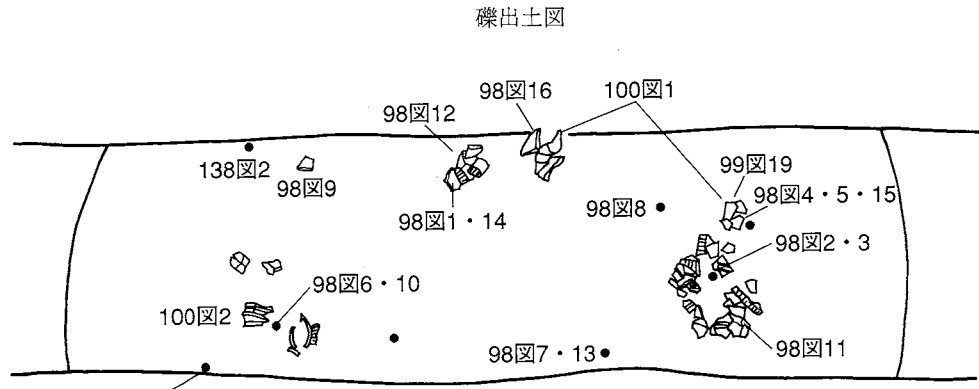
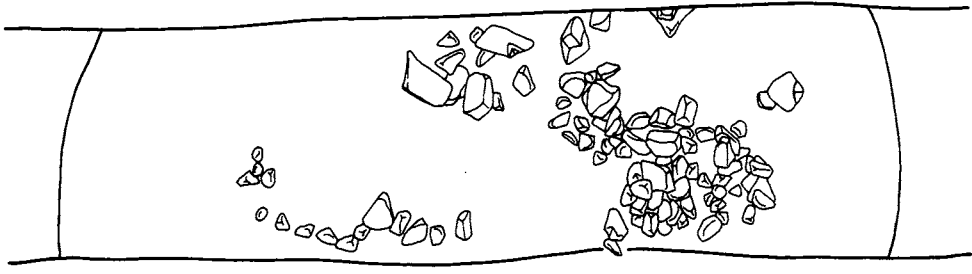
石器は第113図3の打製石斧1点がある。硅質泥岩製の欠損品であり、残存長さ9.8cmを計る。

土製品は土偶である。第138図1は腰部片である。体側に沿って沈線がめぐり、腹部

に臍を表すのか渦巻文が描かれ、陰部へ沈線でつながっている。臀部には刻目を入れた線で尻を丸く表わしている。側面にも沈線が引かれ渦巻文もみられる。第138図2は足部片で爪先の欠けたものである。



II：灰褐色土 IV：暗褐色土（こぶし大礫・炭化物多量） VI：炭化物
 III：褐色土 V：褐色土（小礫混り）



0 1m

第46図 第37号住居址

(13) 第38号住居址

① 遺構 (第47図)

位置 S44・W42付近に位置する。36号住居址を切り、37号住居址に床を張る。

規模・形状 直径5.1mの円形。壁は垂直に近く立ち上がる。東壁は25cm、西壁31cmを測る。

検出・調査状況 黄色土ロームをしっかりと掘り込んでいるため、検出は容易であった。調査区南壁の土層観察から36号住居址を切ると判断した。また37号住居址の覆土IV層上面に本址の張り床が観察された。覆土は4層に大別できる。I～IIIは自然堆積と考えられる。III層は小規模な河川の氾濫で運ばれたと思われる小礫混じりの層で、他の住居址でも所々観察される。IV層は炭化物を多く含んでいる。炉址北側では厚さ5cm～10cmあり細かい炭化物が多い。床面は全体に赤く被熱していて、いわゆる焼失住居と考えられる。炭化材と言えるような大きな破片は、数点で南端で検出されている。IV層中からは土器片は含まれない点や後で述べる南側の完形土器の出土状況などから、生活中ないしは廃棄直後に焼失したと考えられる。

遺物出土状況 特徴的なのは本址南側から出土した完形土器の一群であろう。小型の壺型土器は床面に置かれた平らな石の横に立った状態で発見された。また、60cm程西側に浅鉢と中型の深鉢が並んで置かれていた。浅鉢は床面を数センチ掘り込んで正位で据えられていた。横の深鉢も正位で立った状態で出土していることから、焼失時点の状態を保っていると思われる。また壺形土器の横にある平らな石は、埋甕の蓋石によく見られるもので図化後取り上げた所、下に小ピットがあった。埋甕は存在しなかったものの住居入り口に位置する施設と考える。

② 遺物 (第100～102図)

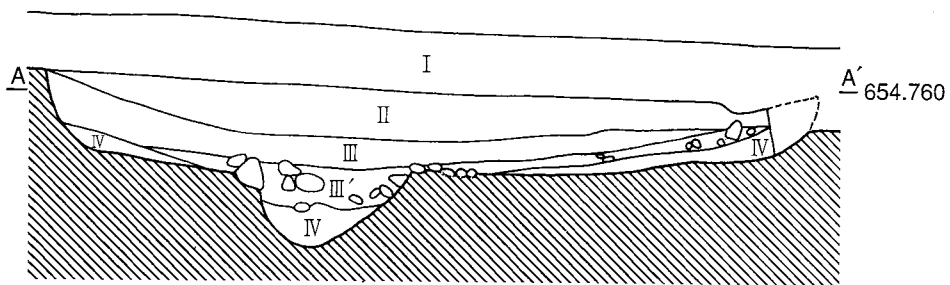
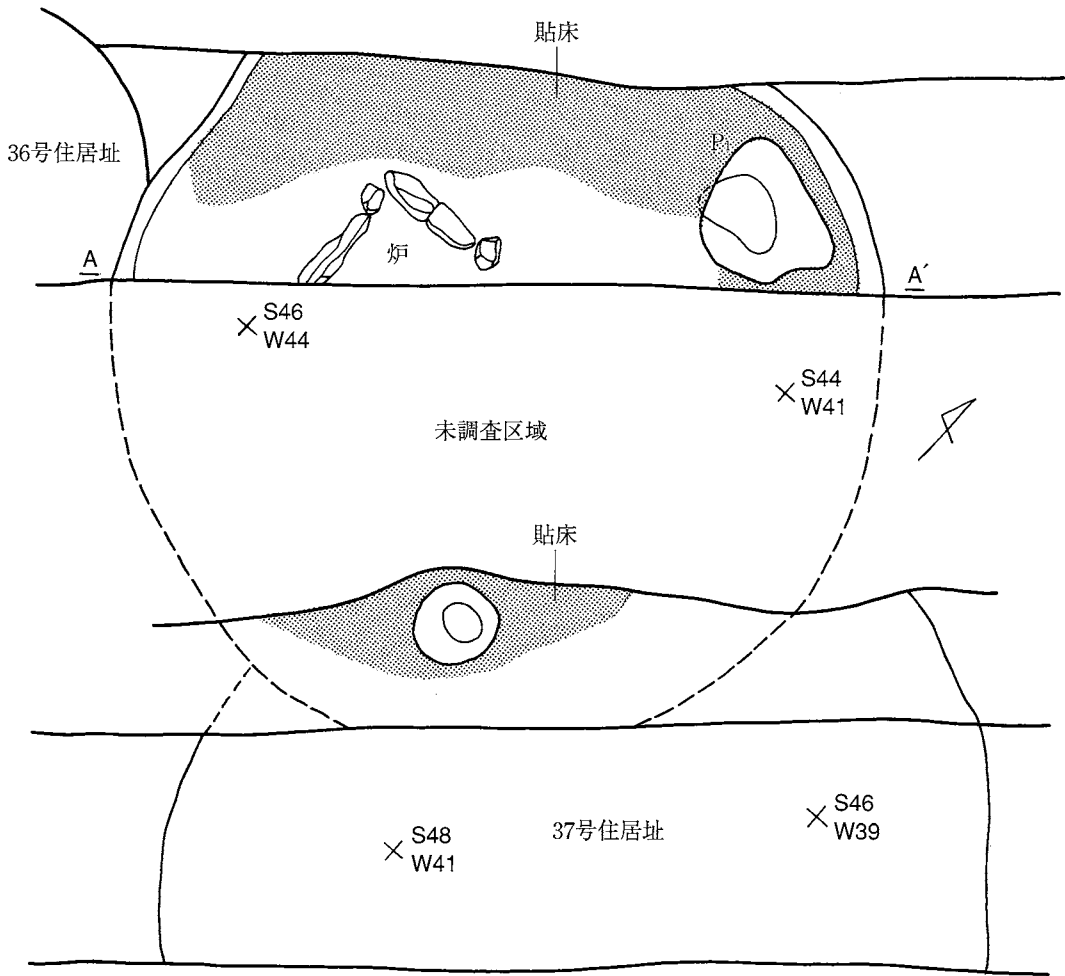
土器の出土だけである。器形のほぼ窺がえるものは第100図3の深鉢の口縁部、4の両耳壺、5の浅鉢、そして第102図1の無文浅鉢の4個で、他は破片である。

3は推定口径37cmほどのもので、口縁下に細長い横帯区画を作り、沈線内やその間に刺突がみられる。以下は隆線と渦巻文で区画され、その間に篋描き沈線を斜め方向に満たすものらしい。4は、口径11cm、器高19cm、底径8.5cmを計る小形の壺で、頸部下から胴部にかけて相対して把手のつく両耳壺と呼ぶべきものであるが、片方の把手を欠いている。無文の口縁部下に沈線がめぐり、そこから下に文様が描かれていて、上の渦巻文から垂下する3つの渦巻があり、左右のものは対称的になっている。把手の付根にも渦巻文がみられる特異な文様構成をとる両耳壺である。5は、相対する突起が口縁につく浅鉢で、突起を含めると器高約18cmで底径7cmを計る。口縁部が欠損しているが推定口径15cmほどで、丸味をもった均整のとれた浅鉢といえる。文様は渦巻文が象徴的に描かれており、そこから続く波状間にも「S」字状に渦巻がつけられ、間は縄文が施され

ている。器形と文様共に整った内容の浅鉢といえる。

第102図1の浅鉢は、口径37cm、器高16cm、底径11.5cmを計る播鉢形の器形である。無文土器であり、器肌は荒れてざらつき、口縁は磨り減って丸くなっている。

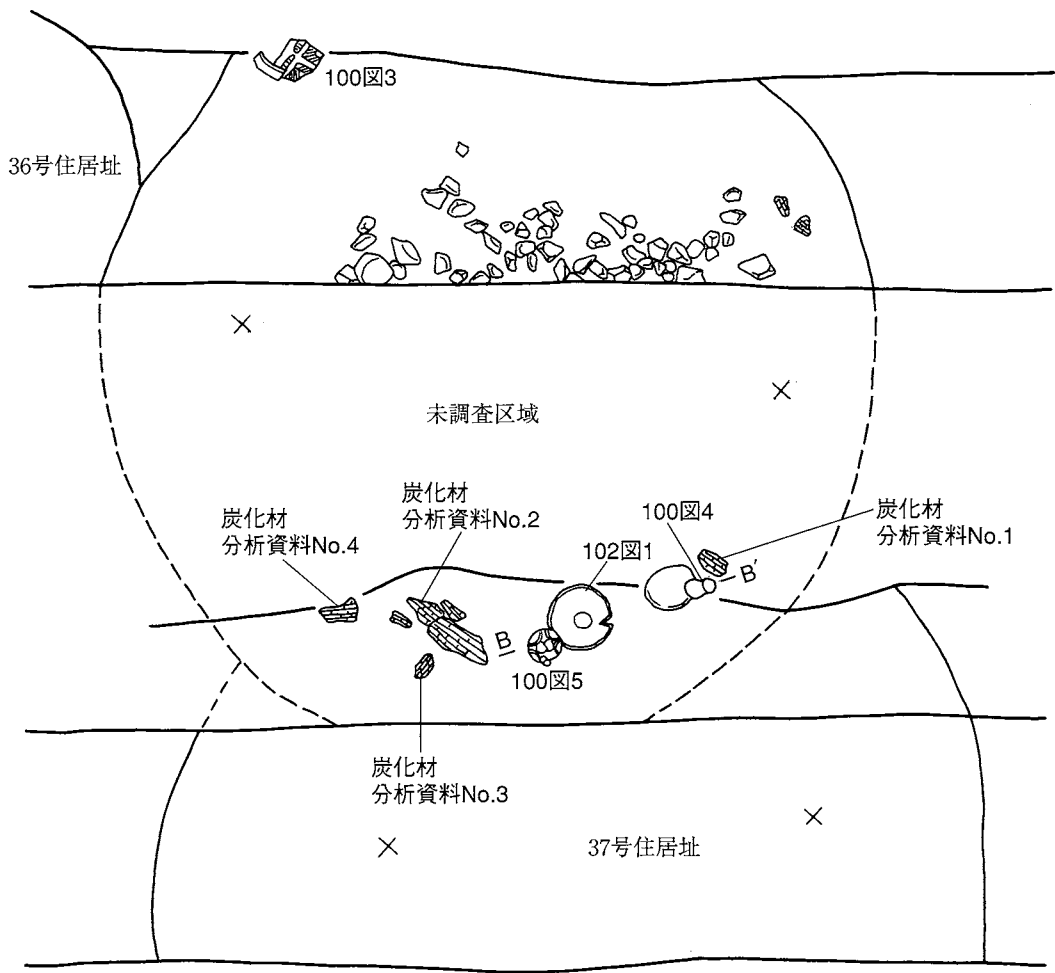
拓本は第101図1～15で、2は炉内、3～4はP₁、5～7は床面、8～15は覆土の出土となっている。棒ないし篋状工具で描かれた1～4、10、13～15が主体で先記3の土器と同内容で時期的にも同じく、また出土地点による時期差もみられない。中期後葉Ⅱ期におかれるものであるが、特異な両耳壺や2個の浅鉢から特殊な住居址が頭に浮ぶ。両耳壺は祭祀的な使用が考えられる。



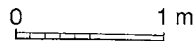
- | | |
|------------|----------------------|
| I : 客土 | Ⅲ' : 暗褐色土 (小礫~中礫多量) |
| II : 黒褐色土 | IV : 暗灰褐色土 (炭化物多量に含) |
| III : 暗褐色土 | |

0 1m

第47図 第38号住居址

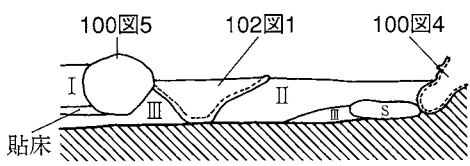


礫・遺物出土図

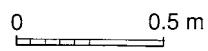


B

B' 654.660m



- I : 暗褐色土
- II : 黑色土 (炭化物多)
- III : 褐色土



第48図 第38号住居址遺物出土図

(14) 第39号住居址

① 遺構 (第49図)

位置 S40・W36に位置する。切り合いはない。

規模・形状 4.8m×4.7m方形の住居址。壁は南壁19cm北壁29cmを測る。壁際に周溝が巡る。10cm程の深さがある。床は黄色土ロームをたたきしめてある。

検出・調査状況 現状道路の両側を調査しているため、それぞれ検出された遺構を位置・柱穴・埋甕などから判断して一軒の住居址と考えた。

柱穴 P₁～P₃を支柱穴とする。深さはP₁、54cm、P₂、45cm、P₃、36cmを測る。4本主柱と思われる。

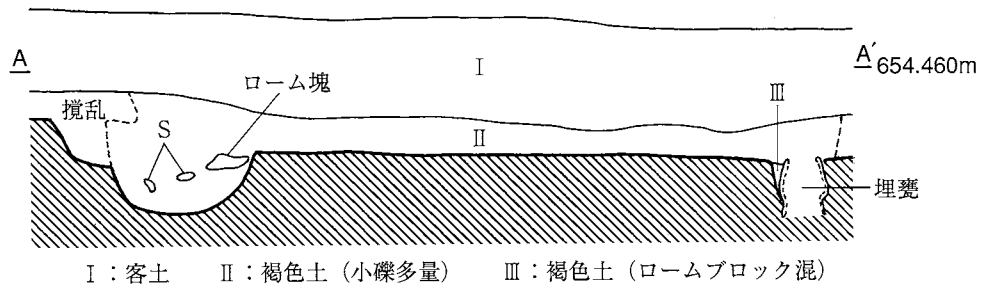
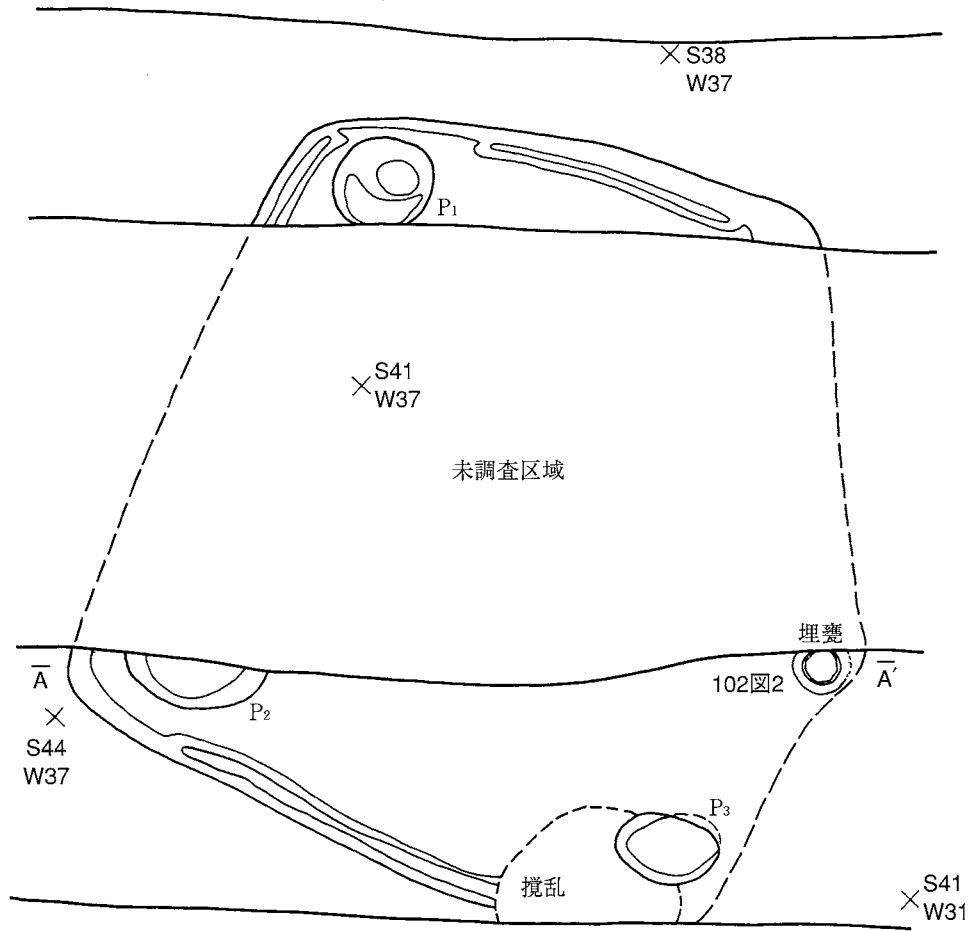
炉址 検出されていない。

遺物出土状況 東側で埋甕が発見されている。蓋石は無く逆位で埋設されていた。

② 遺物 (第101、102図)

第102図2は埋甕使用のもので、口縁部と底部を欠く。頸部下にくびれをもって胴部が脹らむ器形であり、全面に縄文が施されている。この縄文に垂下する2本の平行沈線が引かれて区画をなしており、2本の沈線は胴部の脹らんだところで弧を描く箇所があって変化をつけている。

拓本は第101図16～23である。16～18は同一個体とみられるものでP₁出土であり、器内外面とも黒褐色を呈し炭化物付着がある。立ち上がり気味の口縁部でやや肥厚しており、横帯区画内に縄文がある。頸部から胴部には垂下する2本の沈線が引かれ、縄文が施される。19は内弯する口縁部片であり、篋描きの平行線が縦方向にみられる。20は綾杉文がつけられている。21～23は覆土出土のもので、内弯する口縁部には横帯区画がみられ渦巻文もみられる。いずれも中期後葉Ⅱ期におかれる土器であろう。



I : 客土 II : 褐色土 (小礫多量) III : 褐色土 (ロームブロック混)



第49図 第39号住居址

(15) 第40号住居址

① 遺構 (第50図)

位置 S34・W30付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 直径6.4mの円形。壁は東壁15cm、西壁47cmを測る。東西の壁際から40cm～50cm内側に周溝が巡る。深さは9cm～20cmを測る。

検出・調査状況 覆土は暗褐色土の単層で自然埋没であろう。住居内施設として特徴的なのは2つある。1つは中央東寄りに黄色土ロームで固めた土壇が検出されたことである。床面からの高さ30cmでやや不整形であるが上面は平らな台状のものである。一般的に住居址奥壁寄りに作られた祭壇と言われるようなものとは考えにくく、用途は不明である。この土壇を半割したところ土坑状の落ち込みが現れ、内面底部には焼土や炭化物が残っていた。建て替え以前に炉として使われたものを埋めて、その上に土壇を築いたと思われる。もう1つは住居址西側で炉と奥壁の間から検出された土坑である。床面まで掘り下げたところ炉址西側に10cm～25cm大の礫がまとまって廃棄されていた。図化後に取り除くと、炭化物が詰まった土坑が検出された。直径80cmの内径で内面には、こぶし大～20cm大の礫が敷き詰めてあった。炉と奥壁の間に位置することから、石壇の定義からは外れるかもしれないが、それと同じ祭壇的性格を持つ施設の可能性を考えたい。

柱穴 P₁とP₂がある。P₁、36cm、P₂、33cmを測る。

炉址 住居址やや奥壁寄りにある円形の石囲い炉で直径90cm、深さ15cmを測る。内面はほとんど焼けていない。

遺物出土状況 調査区北壁付近にまとまって出土している。他は破片が多い。

② 遺物 (第102～104、113、138図)

土器、石器、土製品の出土がある。土器は器形の凡そが判るものが第102図3、4の2個だけで、他は破片である。

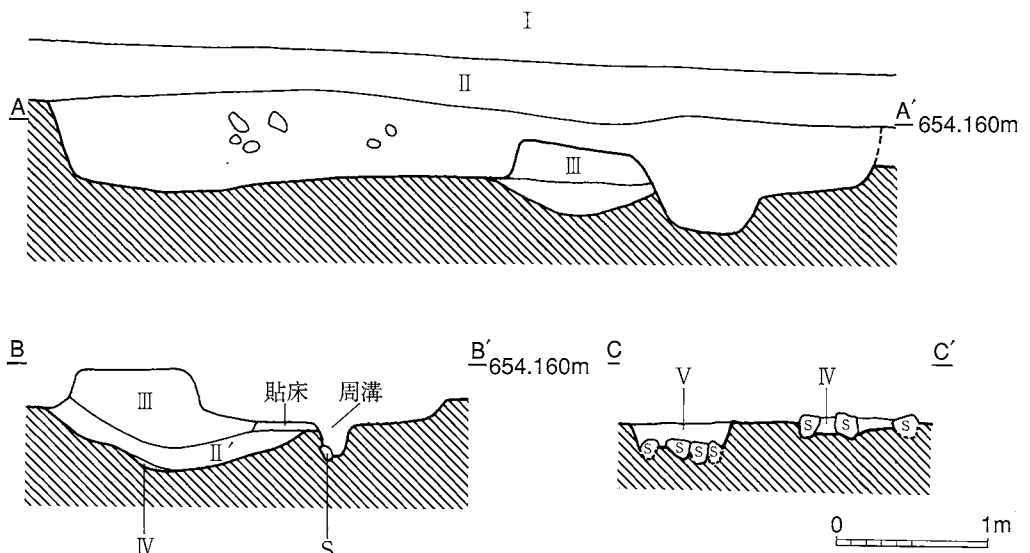
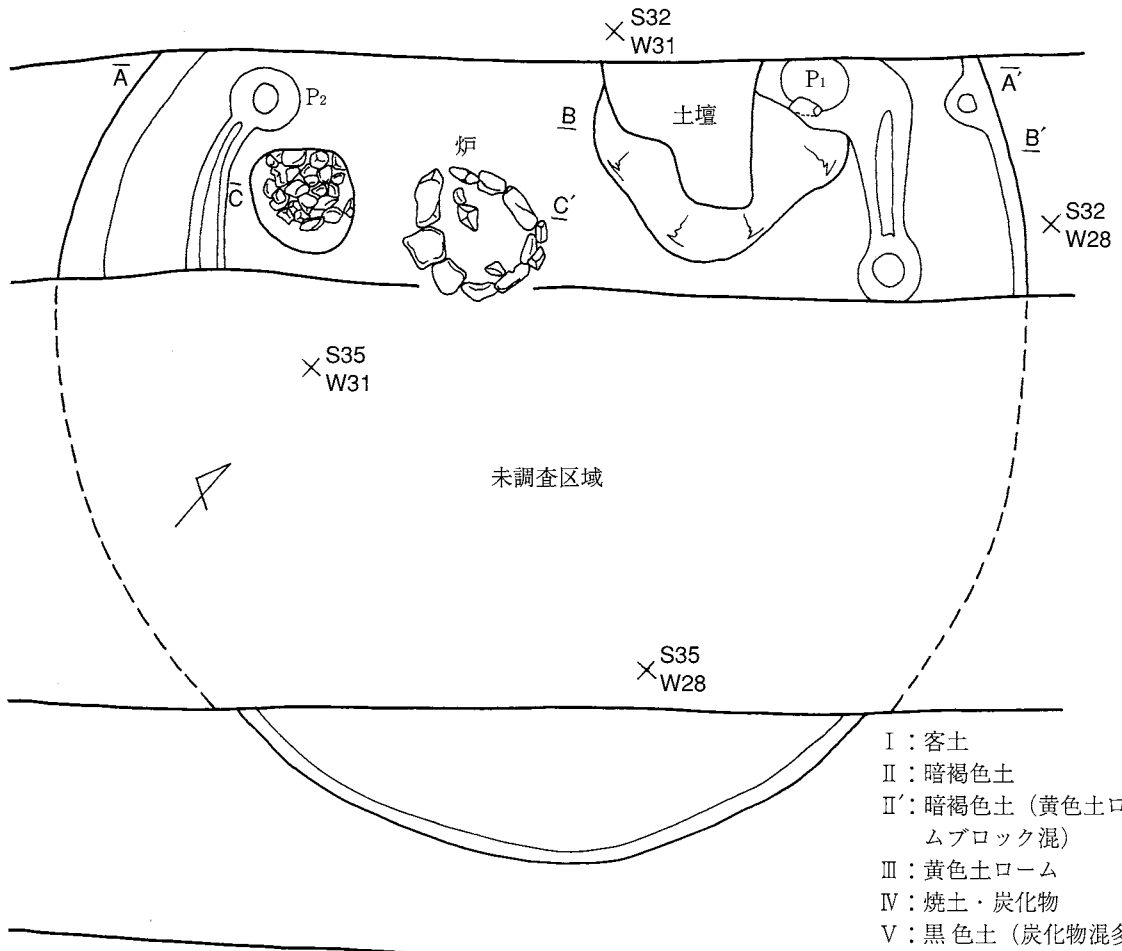
3は4つの波状口縁をもつもので北壁からの出土であり、頸部下から胴部にかけてゆるくくびれるこの種土器特有の器形である。波状口縁下に不整円区画をもち、中に縦方向の条線が引かれている。くびれ部下には櫛形状文がつけられている。4は、山状口縁を4つもち、底部から直斜状に開く器形で、口縁が最大径25cmとなっている。底部を欠くもので残存器高24cmほどである。器全面に縄文がつけられ、隆線が頸部には横方向に、胴部には垂下する平行線と波状のものがつけられて変化をもたせている。

拓本は第103、104図の1～36である。1～7、17はソーメン貼付文土器にみられる特有の文様構成である。5は口縁に付く装飾突起である。8は底径約30cmほどの底部片で浅鉢と思われる。9は無文片であり、器外面茶褐色であるが内面は黒く炭化物付着がある。10、11は区画内に縦の平行条線がある。13はソーメン貼付文土器につく特有の網状の文様をもつ口縁部片である。14は黄褐色をし、表面がざらついて縄文がつくが拓本に

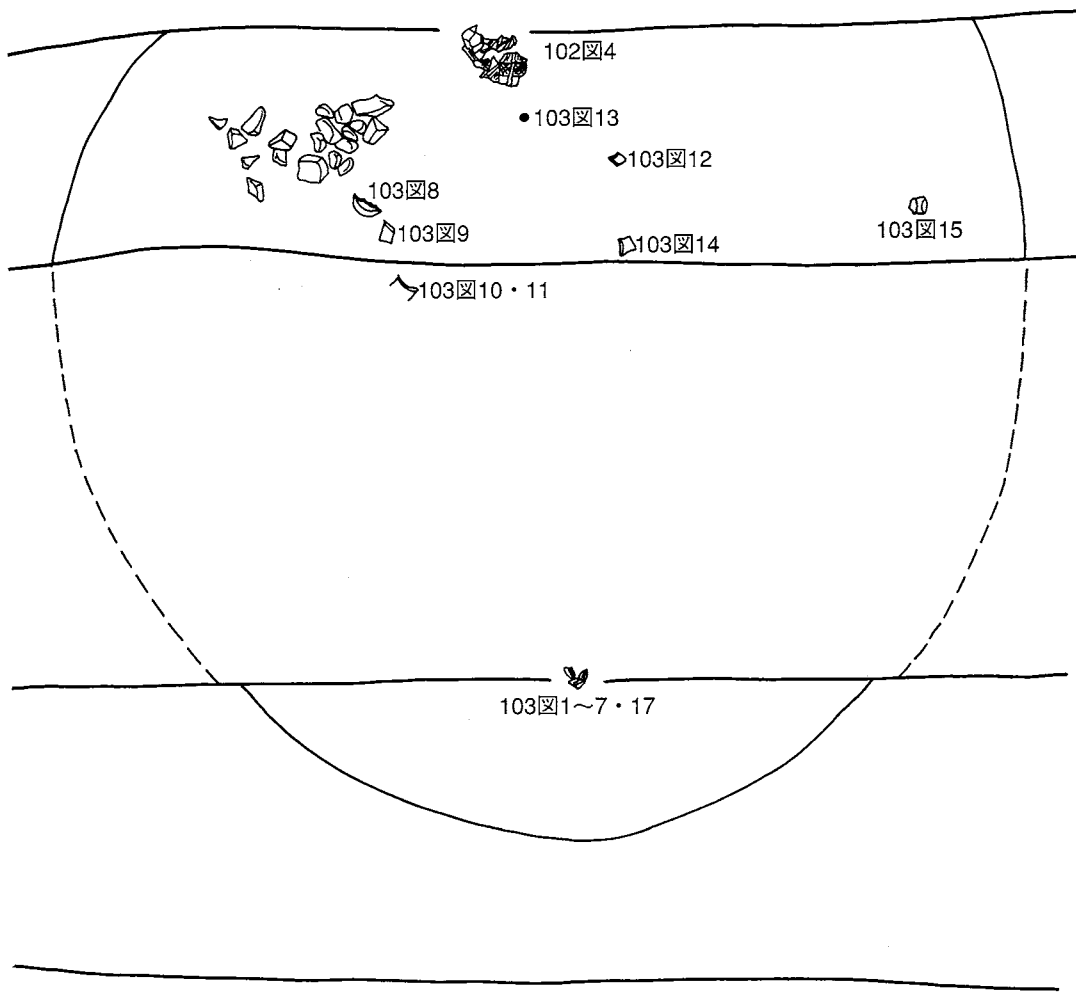
はうまくでていない。15は高台付土器の高台部片、16はP₁出土器で内面に炭化物付着がある。18～36は北壁出土と覆土出土のもので、ソーマン貼付状文、平行条線文が主体となっている。25、26には器内面に炭化物付着が、30、35の底部片には器内に黒変がある。中期後葉I期に比定される一群の土器であり、本址の所属もそこにおけよう。

石器は第113図4の打製石斧1点だけである。ほぼ完形で12.5cmの長さで硅質泥岩製である。

土製品は第138図9の土製円板1点である。無文の土器片を利用したもので、長径4.5cmを計る。北壁からの出土である。



第50図 第40号住居址



0 1m

第51图 第40号住居址遺物出土图

(16) 第41号住居址

① 遺構 (第52図)

位置 S30・W20付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 5.8mの円形。壁は東壁42cm西壁37cmを測る。

検出・調査状況 東西方向のラインは明瞭に検出できた。覆土は2層に大別され上層の黒褐色土中には10cm～30cmの礫が多く含まれる。出土状況から住居址埋没過程での人為的な投げ込みと思われる。下層の褐色土中には礫・土器片が少量含まれている。床面は黄色土ロームを床面としているが、一部にふるわれた黄色土ロームをたたきしめて整地した部分がある。この床面北端に直径30cmの範囲で赤く焼けた場所がみられた。

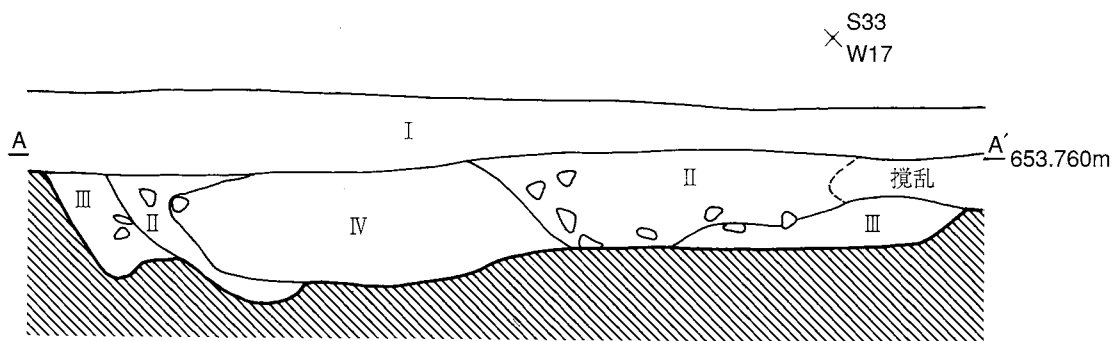
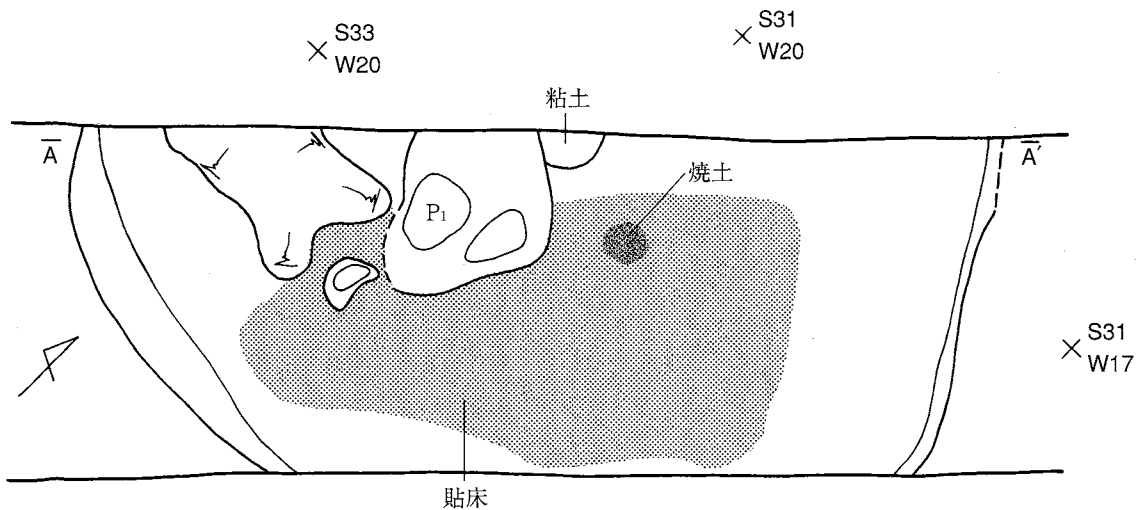
柱穴 P₁で深さ25cmがある。

炉址 焼土は確認できたが縁石は不明。

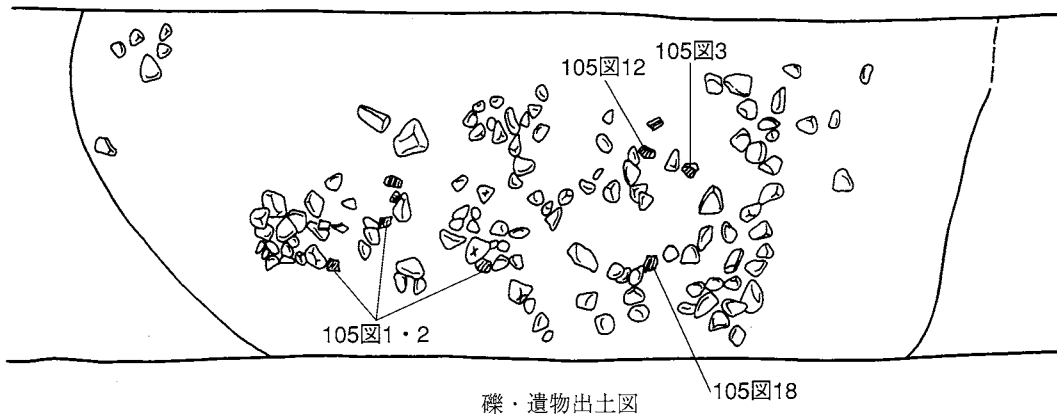
遺物出土状況 I層中から土器の小片が少量得られた。

② 遺物 (第105図)

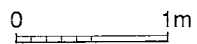
土器の出土だけで器形の判るものはなく、全て破片で第105図の拓本に示した。1、2は同一個体であり、無文口縁部片であるが下に横走する凹線があることから以下は文様帯をもつものといえる。3は表面がざらざらしており、区画内に平行線が横に引かれている。12は高台部片で表面がざらついて拓本もうまくでない。18は底部片で推定底径35cmほどになる大形のものである。底面に圧痕が残っている。他は全て覆土出土土器であり、4～8は「U」字状や波状を組み合わせたソーメン貼付文土器にみられる内容の特有な文様構成のものである。9～11には篋描き平行線や綾杉文がある。13は内湾する口縁部片で浅鉢の器形をとるものだろう。15には器内外に漆を塗ったのではないかと思われる黒さがみられるし、16には内面に研磨と赤彩を思わせる痕跡がある。器形の判る土器がないので問題点はあるが、文様から考え中期後葉I期に比定される内容の土器であろう。



- I : 客土
- II : 黒褐色土
- III : 褐色土
- IV : ローム層 (こぶしの礫~小礫多量)



礫・遺物出土図



第52図 第41号住居址

(17) 第42号住居址

① 遺構 (第53図)

位置 S22・W20付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 直径5mの円形。壁は東壁17cm西壁19cmを測る。

検出・調査状況 黄色土ロームの地山を掘り込んで作られている。覆土は2層に大別できる。西側から東側へ向かう傾斜に沿った堆積を示していて自然埋没と考える。壁際に三角堆積が観察できる。Ⅱ層は小礫を多く含む。床面付近にはこぶし大～人頭大の礫が多量に廃棄されていた。住居址廃絶直後の投棄と考える。

柱穴 P₁・P₂が主柱穴である。深さはP₁、59cm、P₂、38cmを測る。

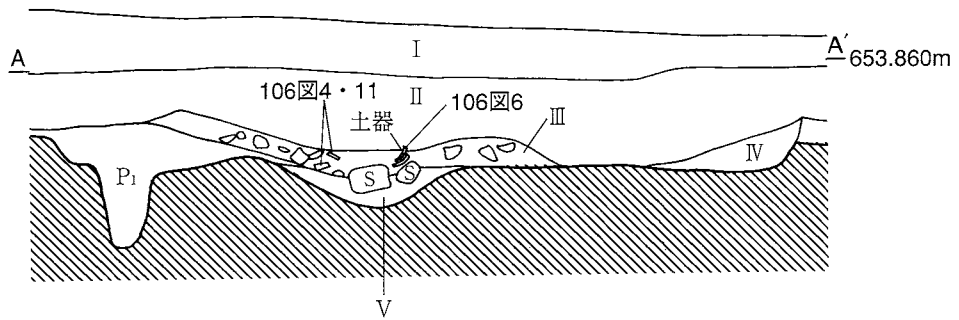
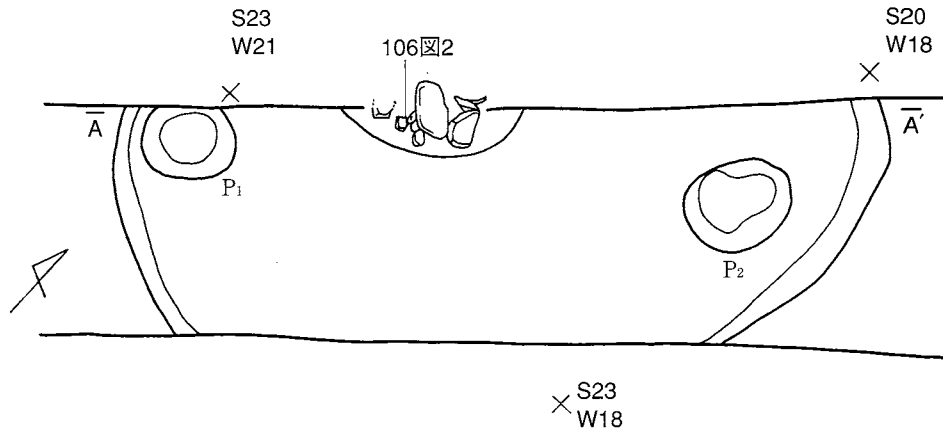
炉址 中央北壁寄りにすり鉢状にくぼむ土坑があり、内面に炭化物・焼土が少量残る。被熱した礫が中に落ち込んでいたので石囲い炉と考える。

遺物出土状況 床面付近の多量の礫の間に土器片が10数点発見されている。

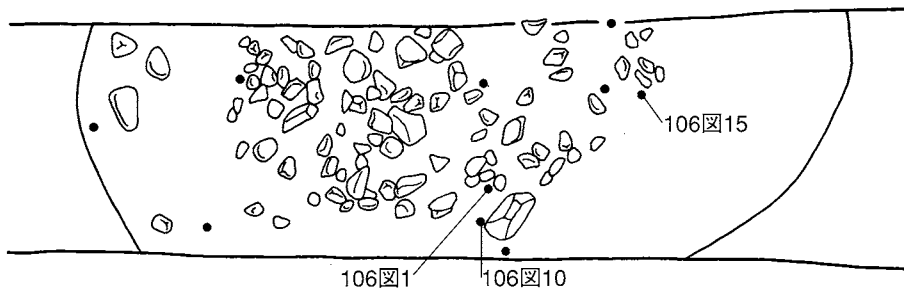
② 遺物 (第102、106図)

土器のみで器形の判るものは第102図6の1点のみである。同図5は口縁部片1/3ほどを図上復元した小形のもので口径11cmほどとなる。篋描き沈線が口縁に沿って縦方向に何本かみられる。覆土出土である。6はキャリパー形の器形で、口径21cm、器高29cm、底径8cmを計る。垂下する隆帯と波状文の間には篋描き沈線が全面に引かれている。

拓本は第106図1～15で、1～10にみられるように渦巻文、篋描き平行線、綾杉文、平行条線文が主文様となっている曾利Ⅱ式土器である。3は黒褐色で胎土、焼成よく器内外共に研磨がみられる。12は口縁に付く装飾突起であり、渦巻文もみられる。11は浅鉢の口縁部とみられ、口縁下に縦の平行条線がつけられている。口唇には3本の平行する線が引かれ、線内には拓本に出ないが刺突文が並んでいる。13～15は底部片で15には圧痕が残っている。中期後葉Ⅱ期の住居址であろう。



- I : 客土 III : 暗褐色土 (10~15cmの礫多量)
- II : 黒褐色土 IV : 茶褐色土
- V : 暗褐色土 (炭化物混)



礫・遺物出土図

0 1m

第53図 第42号住居址

(18) 第43号住居址

① 遺 構 (第54図)

位置 S10・W6付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 東側が調査区外にのびると思われるので不明である。

検出・調査状況 調査区東端で検出された住居址西壁の一部は、明瞭に確認できた。掘り進めると黄色土ロームの地山を88cmも掘り込んであり、今回調査した中で最も深く掘り込まれた住居址となった。壁は床面から急な角度で立ちあがっている。床面は黄色土ロームをたたきしめてあった。

柱穴 西壁寄りにP₁があり、深さ34cmを測る。

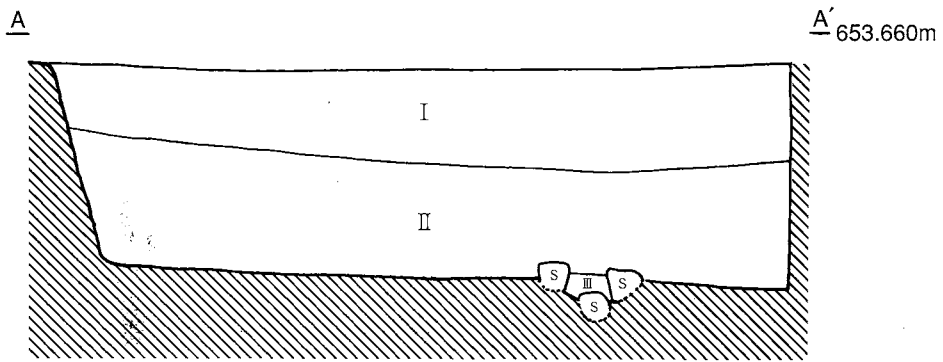
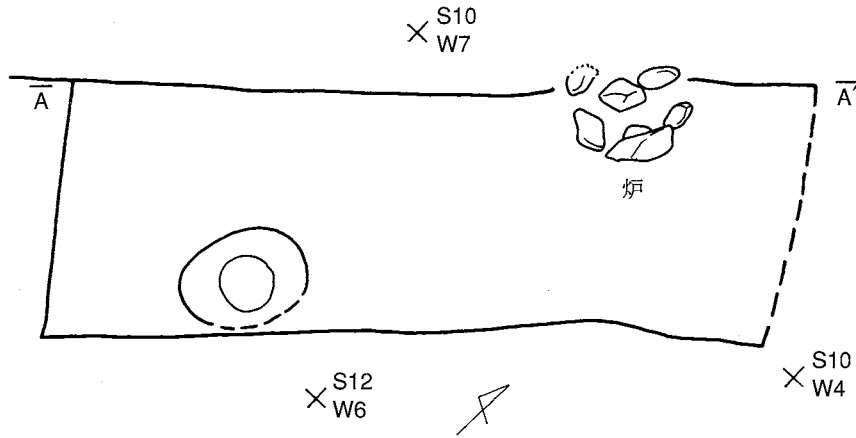
炉址 西壁から3.1m内側に石囲い炉が検出された。炉址の北側が調査区外にかかるため推定だが直径70cm程の環状の石囲い炉と思われる。

遺物出土状況 住居址覆土上層は土器小片が含まれる程度だった。上面から40cm掘り下げた付近から大型の土器片や、まとまった個体が出土し始め床面付近まで多量の遺物が得られた。

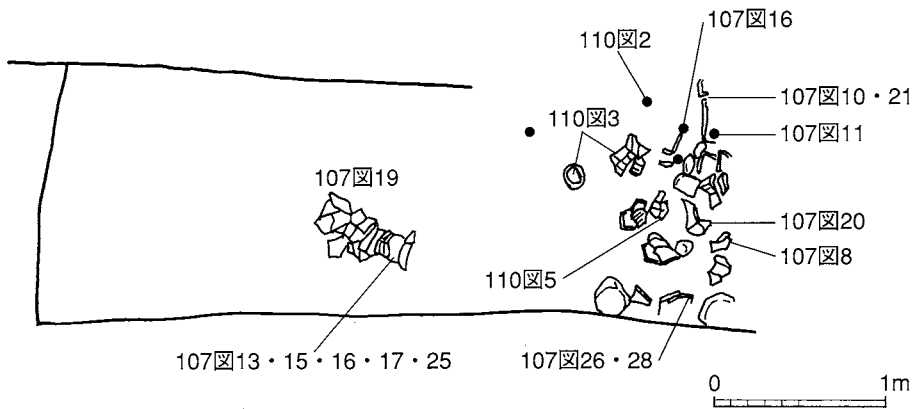
② 遺 物 (第107～110図)

土器の出土をみたが、器形は部分的に判るもののみで第110図1～5に復元図で示した。1(覆土出土)は、頸部に最大径があり把手をもつもので、隆帯で区画された中に綾杉文が丁寧につけられている。2は頸部にくびれをもち胴部が脹らむもので、くびれ部下に垂下する隆帯と平行条線が細かにつけられている。3、4は直斜状に開く底部片で、3には縄文、4(覆土出土)には垂下する沈線がみられる。5は高台部片で、高台底径9cmを計る。台と底部とのくびれ部に波状文がまわっている。

拓本は第107、108、109図に図示した1～28である。1～25は篋状工具によって引かれた線が中心になっており、三角形の隆線区画内に縦方向に引かれた1、2、8や横方向の2、3、4がある他、櫛形状文をなす10、12、19など違いがみられる。また同工具で引かれる線も23、24、25は曲線的で渦巻もみられ、細い平行条線が24にはつけられている。口縁部も内弯する1、6、13～16や外反する2～5があったり、波状口縁をなす4、5及び装飾突起や把手をもつ5、13、18、19等があつて変化に富んだ器形、文様構成となっている。20、21は浅鉢片と思われ、口縁部にのみ文様帯がある。20は口縁部が「く」の字状に曲がるもので三重弧文が、21には横帯区画内に平行条線がそれぞれみられる。26～28は縄文が施された胴部片である。10、19の器内面には炭化物付着がある。いずれも中期後葉I期の土器で本址の時期もそこにおけよう。



I : 黒褐色土
 II : 暗褐色土
 III : 暗褐色土 (炭化物・焼土混入)



遺物出土図

第54図 第43号住居址

(19) 第44号住居址

① 遺構 (第55図)

位置 S16・W12付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 円形の住居址と思われるが大半は調査区北側にのびるため、規模は不明である。

検出・調査状況 円弧状の落ち込みを検出し掘り下げたところ、周溝と床面の一部を確認できたので住居址とした。壁はほぼ垂直に立ち上がり西端39cm、東端23cmを測る。周溝は壁際に設けられ、深さは平均10cmである。

柱穴 P₁は柱穴と思われる。深さ40cmを測る。

炉址 確認できていない。

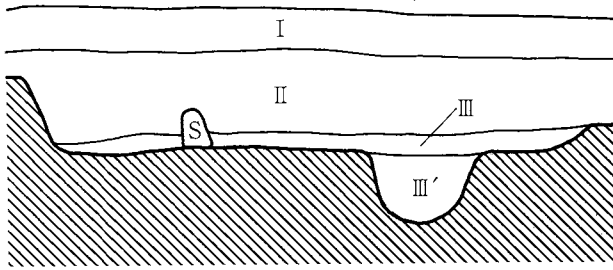
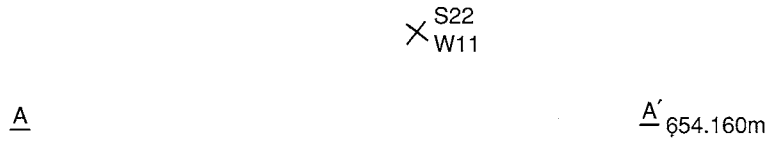
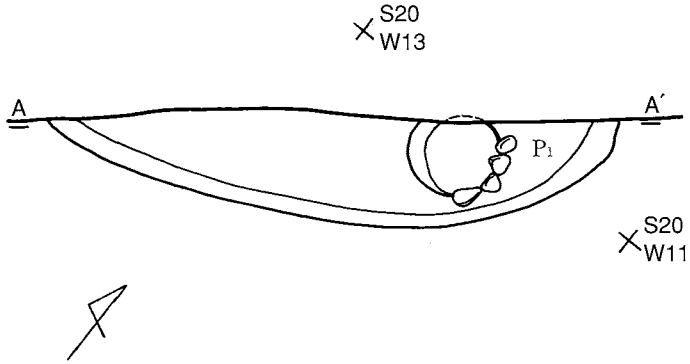
遺物出土状況 P₁の南側に110図6の深鉢が出土している。底部は失われているが、口縁部から胴部下半までをほぼ残して正位で立てた状態で検出された。

② 遺物 (第109、110、113図)

土器と石器がある。土器は部分的に器形の判るものを第110図6、7に図示した。6は口縁部から胴部にかけてが判るもので最大径が口縁にあり23cmを計る。渦巻文が区画を形成する姿となり、その間を斜線で埋めている。7は覆土出土の底部片で底径8cmほどであり、垂下する沈線がみられる。

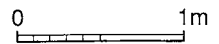
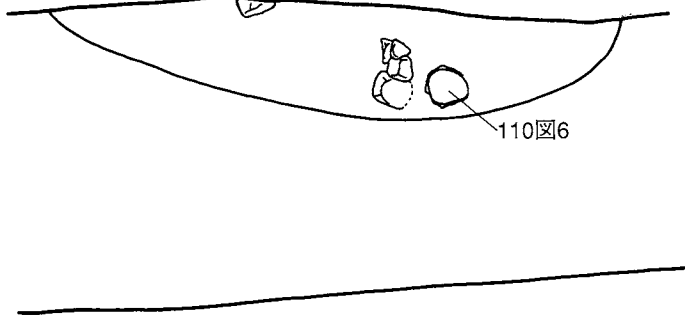
拓本は第109図の29～35で量的に多くない。いずれも覆土出土となっている。29は無文口縁部で以下に文様帯をもつ土器である。30はソーメン貼付状文のつく口縁部片、31、33、34は区画内に斜線が引かれたものである。34には綾杉文がみられる。中期後葉I期の内容も一部みられるが全体からみてII期の土器としてまとめたい。

石器は第113図5の磨石である。扁平な丸石で径9.5cmほどあり、輝石安山岩製である。



- I : 客土
- II : 茶褐色土
- III : 黑色土 (炭化物多量)
- III' : 黑色土 (炭化物・黄色土ローム混)

遺物出土図



第55図 第44号住居址

(20) 第45号住居址

① 遺構 (第56図)

位置 S 158・W184付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 規模は不明であるが方形基調の住居址か。

検出・調査状況 遺構のラインは明瞭に検出できた。掘り下げると黄色土ロームの床面が確認できた。壁はやや傾斜をして立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層でこぶし大の礫が含まれる。

柱穴 不明である。

炉址 不明である。

遺物出土状況 住居址東壁寄りから大型の破片がまとまって出土している。

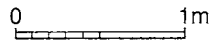
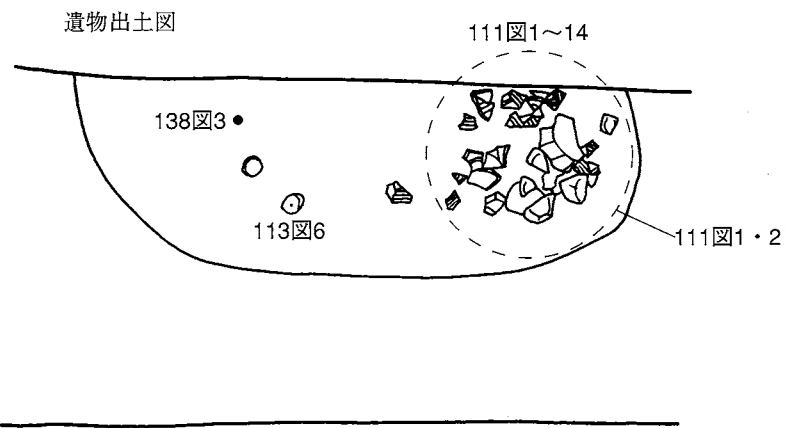
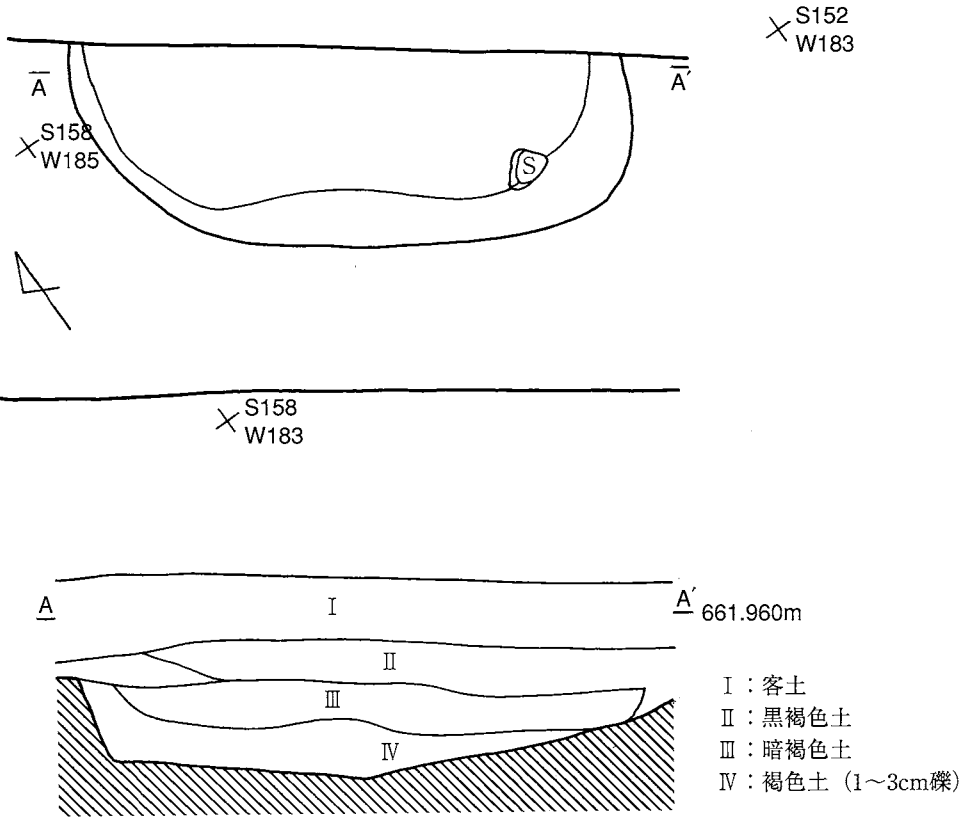
② 遺物 (第111～113、138図)

土器、石器、土製品の出土をみた。土器は第111図に示した1がほぼ全器形で判るもので、2は底部のみである。1は胴部上半から頸部に最大径をもつ甕形の器形をとっている。底部を欠くが、残存器高56cm、口径37cm、最大径45cmを計る大き目の土器である。口縁直下から文様が全面に付けられており、円弧状文が上から下へ連なって付けられ、ある部分は「S」字状になっている。一番下の円弧からは2本の隆線が直線で垂下している。この円弧の連なりと垂下線で縦長の区画が形成され、その間に綾杉状に引かれた線が満されて全体としてまとまりのある文様を構成している。口縁にみられる横帯区画の消失した土器で中期後葉Ⅲ期に比定されよう。2は底径12cmほどの底部片である。垂下する線で区画された間に篋描き線が引かれる土器である。器内面に炭化物付着がある。

拓本は第112図1～20である。口縁部器形を窺うと、平縁をなす3、9、波状をなすとみられる1、2、4、5、6、12があったり、6、11のような装飾突起の付くものもある。2にも波状をなす上部が欠けていることから突起が考えられる。文様は口縁に沿って横長の円形区画ないし渦巻を付け、内に縄文がみられる1、3、5と区画内を縦線で満たす4がある。胴部文様は縄文の7、8、綾杉状に引かれた13～16がある。17、18は同一個体であり、篋で描いた短線がみられるだけである。19は浅鉢の口縁部片と思われ、口縁に沿った文様帯の下に短い弧線が並び、その上は縄文となっている。20は底径12cmの底部片で、底面に粘土紐をまるめて製作した痕跡が丸く残っている。8には器内面に炭化物付着が、15、16には黒変がみられる。中期後葉Ⅲ期とみたい土器である。

石器は第113図6の凹石と7の磨石の2点がある。凹石は両面に凹みがあるもので長径13.5cmの砂岩製である。磨石は長径10.4cmの安山岩製で覆土出土である。

土製品は第138図3の土偶の腕部片である。右手と思われ、上下に沈線が、手先に三本の刻み目がみられる小片である。



第56図 第45号住居址

(21) 第46号住居址

① 遺構 (第57図)

位置 S168・W190付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 直径3.2mの円形。

検出・調査状況 本址は細かくふるわれた黄色土ロームの地山をわずかに掘り込んで作られていたため、検出は難しかった。暗褐色土を丁寧に取り除くと固くしまった床面に炭化物・焼土が点在し、中央部に深鉢底部を埋め込んだ炉が検出されたので住居址とした。

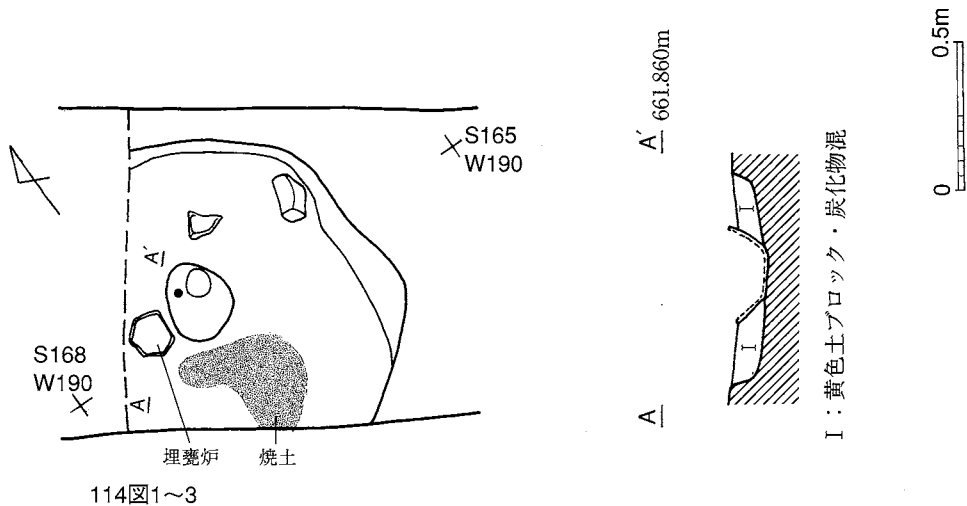
柱穴 不明である。

炉址 埋甕炉

遺物出土状況 覆土がわずかしかなかった残っていないので遺物は少ない。

② 遺物 (第114図)

第114図1～3に示した拓本のみで、出土遺物が極めて少ない。1～3は本址埋甕炉に使用されたもので、器内外面に部分的に炭化物の付着がみられる。いずれにも縄文が施され、2には弧状に沈線が2本入っている。所属時期を決めるのに器形も不明でむずかしい。



第57図 第46号住居址

(2) 第47号住居址

① 遺構 (第58図)

位置 S136・W170付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 規模は不明である。方形基調の住居址である。

検出・調査状況 遺構のプランは明瞭に検出できた。覆土は浅く10cm程の掘り下げると床面が確認できた。さらに精査すると南壁寄りに埋甕が発見された。

柱穴 P₁・P₂は主柱穴と思われる。深さはP₁、31cm、P₂、44cmを測る。

炉址 不明である。

遺物出土状況 覆土が浅いため埋甕以外は小片が多い。他に土偶が1点出土している。

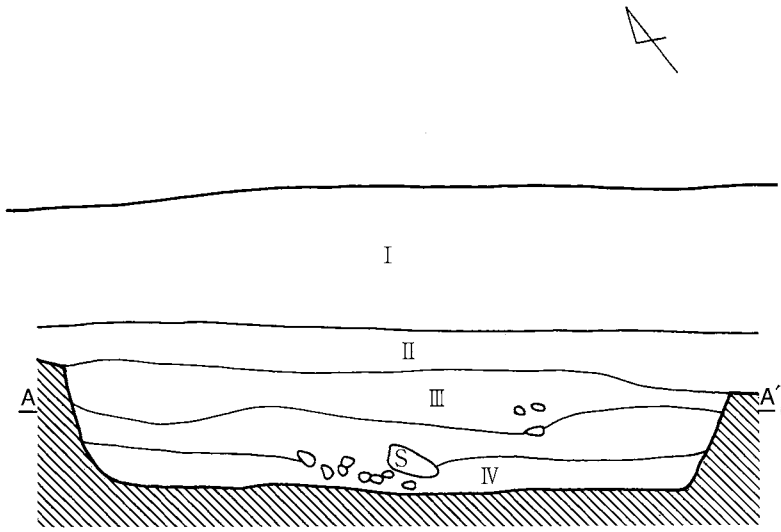
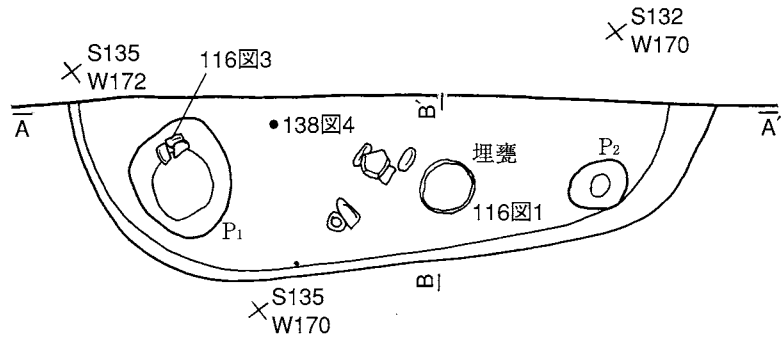
② 遺物 (第113～116、138図)

土器、石器、土製品の出土がある。土器は器形の判るものは第116図1のみで、2～3は部分的に判るものである。1は底部を欠いて本址埋甕に使ったもので器形が判る。最大径が口縁にあり口径36cmを計る。残存器高45cm、底部径10cmと底部の小さい不安定な深鉢である。文様は口縁部直下から器全面につけられている。口縁下には波状文の間に刺突を加えた横長の文様帯が2段に構成され、上段は渦巻文と縄目状もので8区画に別れている。全体としては4区画であり、横帯区画の下は渦巻文と斜線及び綾杉文が組み合って構成され、唐草文土器の典型といえる土器である。2は胴部約半分を図上復元したもので、沈線を2本並べて引き、全体としては長方形区画を描きだしているもので、余り多く見かけない文様構成である。似た感じのものは東信の大深山遺跡や山梨県八ヶ岳南麓の遺跡でも出土している。3は口縁部の判るもので4つの波状をなし、最大径が口縁にある。頸部に無文帯が波状につき、その上下には縦方向の平行線が引かれたもので、口縁下には押圧を加えた2本の平行線がめぐるといふ文様構成である。本遺跡をはじめ周辺遺跡でも見慣れない土器の一つである。

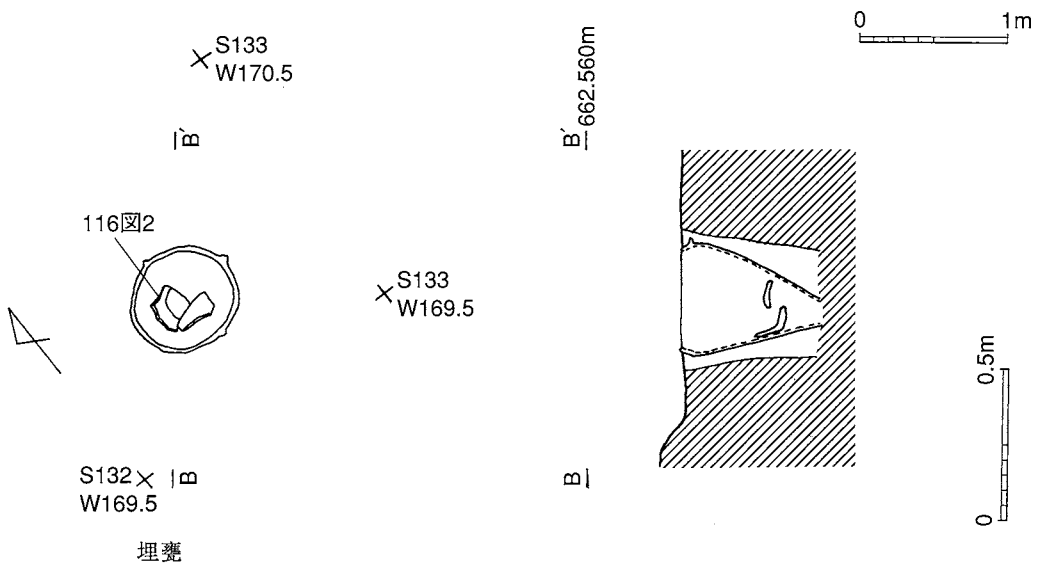
拓本は第114、115図の4～41である。4～28は覆土出土であり、4、5、7～10、12、13等は先記1土器と同内容の唐草文土器の破片である。6、14～16、19、20は細かい平行条線と篋描き沈線が目立つものである。これらのものが本址の主体を占める土器であるが、22～26の中期中葉土器の混入がみられる。29～35はP₁出土、36～39、41は北壁出土となっているが、ここでも混入があつて同様のことが言える。先行の中葉住居址の存在を示す資料といえる。40は底径8cmを計り、底面に圧痕が残っている。41は浅鉢片で、36の底部と共に中期中葉の土器である。埋甕を中心に中期後葉Ⅱ期に比定される土器の一群であることから本址の所属時期もそこにおけよう。また、13、21、27の器内面に使用を物語る炭化物の付着があり、特に13には多量にみられた。

石器は第113図8の打製石斧1点である。一部欠落があるがほぼ全体が残るもので18.1cmを計る。

土製品は第138図4の土偶片である。胸部から腹部にかけての体部で半分に割れている。右乳がみられるもので、体側に沿って沈線が引かれている。



- I : 客土
- II : 黒褐色土 (中礫含)
- III : 褐色土 (小中礫含)
- IV : 褐色土 (小礫多量含)



第58图 第47号住居址

(23) 第48号住居址

① 遺構 (第59図)

位置 S140・W172付近に位置する。土236・土237・土238に切られる。

規模・形状 不明である。

検出・調査状況 暗褐色土上面から多くの土器片が表れたため図化しながら掘り下げていった。黄色土ロームの表面に赤く焼けた部分と焼土が点在していたので住居址とした。本址は暗褐色土中に築かれて黄色土ローム上面が床面であったと思われる。そのため掘り込みがほとんど見られず、住居址のラインは部分的にしか捉えられなかった。

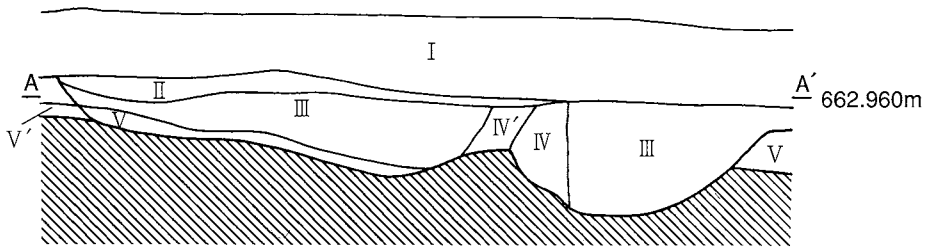
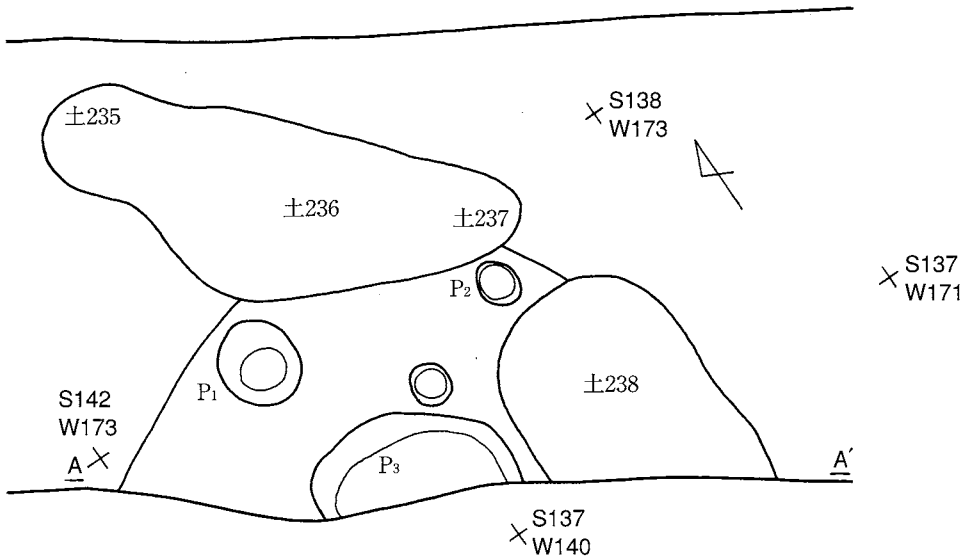
柱穴 P₁は柱穴と考える。深さ42cmを測る。

炉址 P₃は炉址と思われるが、規模・形状は不明である。内面はわずかに被熱していた。

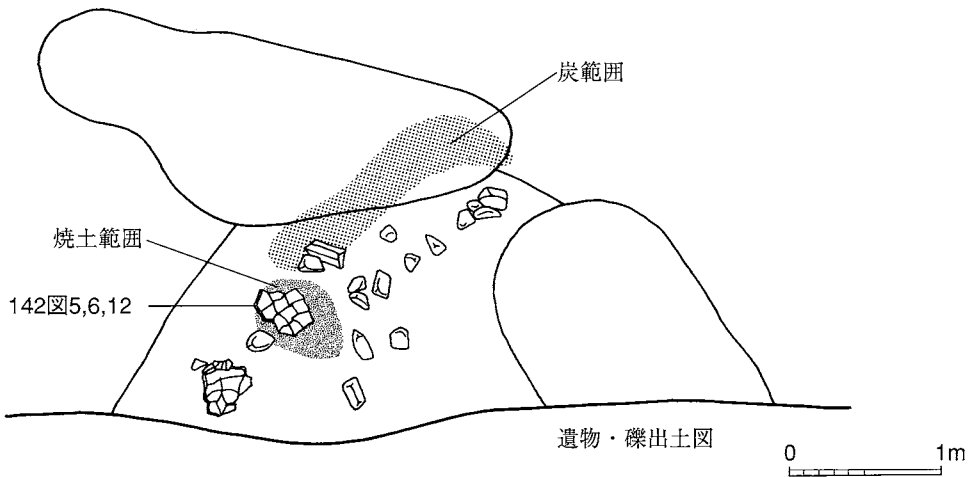
遺物出土状況 暗褐色土中からまとまった個体が幾つか出土している。

② 遺物 (第117、118図)

第117、118図1～27の覆土出土の土器片を図示した。1、2、4は同一個体とみられるもので、垂下する沈線と波状線が引かれ、波状線の間が縄文となっている。器内外面に部分的に炭化物の付着がある。3、5、6は口縁部片で、3は波状口縁をなし、丸の中に縄文がみられる。5、6、26は無文口縁部の下に平行線が引かれていることから、以下に文様帯をもつ土器といえる。7～18は棒ないし筥状工具による沈線が引かれるもので、7～10は同一個体であり、粗雑な感じに綾杉文がつけられている。器内面は使用によるものか黒変がある。11は外反気味の口縁部片で、口縁に沿って横帯区画がみられ、内に縦線が引かれるものであり、13も同じ手法である。12は内弯する口縁部で渦巻状に描かれた文様が目を引く。以上中期後葉Ⅲ期とみられる一群の土器であるが、19～25の本址への混入土器がある。19は前期末の下島式土器片であり、本遺跡では数少ない遺物の一つである。20～25は中期中葉の土器片であり、共に本址に先行するものである。



- | | |
|----------------------|------------------------|
| I : 客土 | IV' : 黄色土ローム (2~5cm礫多) |
| II : 黒褐色土 | V : 褐色土 (礫含む) |
| III : 暗褐色土 (1~5cm礫多) | V : 褐色土 (礫含まない) |
| IV : 黄色土ローム | |



第59図 第48号住居址

(24) 第49号住居址

① 遺構(第60図)

位置 S126・W162付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 直径3.8mの円形

検出・調査状況 円形のプランは明瞭に検出できた。壁は浅く東壁10cm、西壁12cmが残る。床は黄色土ロームを固くたたきしめてある。周溝は断続的に壁際を巡る。深さは7～9cmである。

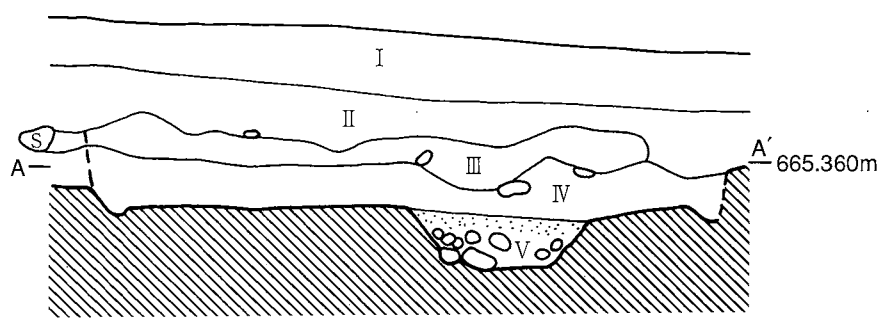
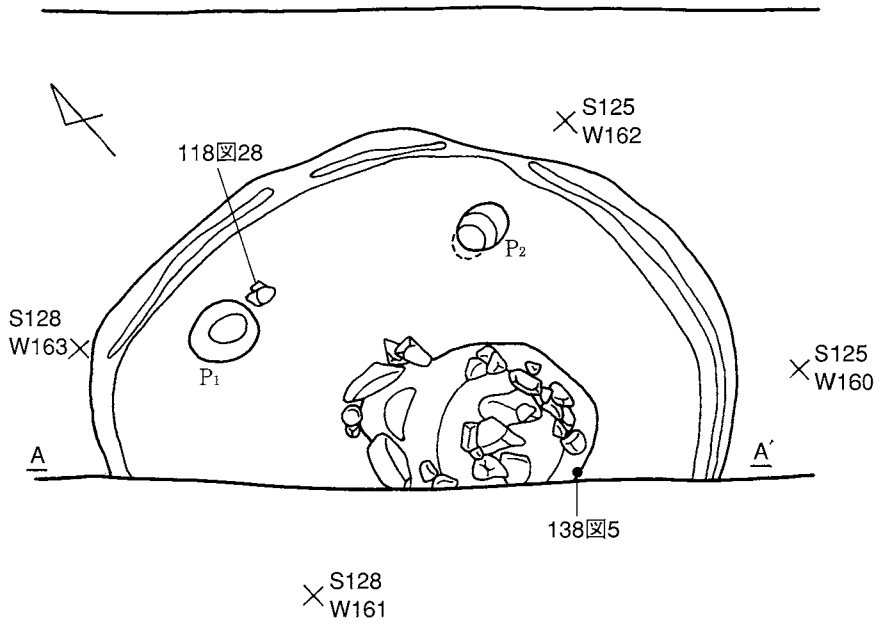
柱穴 P₁・P₂が柱穴と考える。深さはP₁、30cm、P₂、40cmを測る。

炉址 住居址中央やや東寄りに位置する。長径130cm×100cm、深さ40cmと大型の石囲い炉である。炉縁石は大半が壊され一部は炉内部に落ち込んでいた。

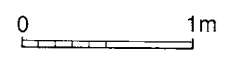
遺物出土状況 土偶が1点出土している。土器は小片が多く量も少ない。

② 遺物(第118、135、138図)

土器の出土は量的にも多くない。器形の判るものはなく、第118図28～39に示した拓本である。28は区画内に縦方向に平行線が引かれるもの、29は欠損しているが把手のつくもの、31は渦巻文のみられるもので、いずれも唐草文土器の特長をもった土器片である。32、35、36は細い平行条線が引かれる一群である。33と34は無文部分の多い土器の口縁部片であり、33には口縁に沿って並ぶ押圧が、34には肥厚した口縁下をめぐる隆帯がそれぞれ見られるだけである。37～39の底部片には底面に圧痕はない。28以外は全て覆土出土であり、36、39には炭化物付着がある。第135図1～6も同内容をもつもので、器形等不明であるが、文様からみて中期後葉Ⅲ期の土器とみたい。第138図5の土偶は、腹部から腰部にかけての破片である。沈線が円形状や綾杉状に施されており、土器との間に時期差はないと思われる。



- I : 客土
- II : 暗茶褐色土 (1~10 礫多)
- III : 褐色土
- IV : 茶褐色土 (2~10 礫多)
- V : 黒褐色土 (焼土・炭化物・礫混)



第60图 第49号住居址

(25) 第50号住居址

① 遺構 (第61図)

位置 S126・W158付近に位置する。切り合いはない。

規模・形状 直径4.5mの円形。

検出・調査状況 黄色土ロームを掘り込んだ円形のプランは明瞭であった。壁は東壁31cm、北壁33cm、西壁39cmを測る。床面は地山を固くたたきしめてある。柱穴間を直線的に結ぶ周溝が特徴的である。覆土は3層に大別できる。床面直上の第3層は炭化物・焼土を多量に含んでいる点が特徴である。

柱穴 P₁・P₂は主柱穴と考える。P₁、60cm、P₂、47cmを測る。

炉址 P₁・P₂の中間に土坑があり、東側上辺部は被熱し赤く硬化している。住居址奥壁寄りに位置する堀炬燵型石囲い炉で縁石は取り除かれたものと思われる。深さは60cmを測る。

遺物出土状況 覆土Ⅱ層中からまとまった大型の破片が出土している。

② 遺物 (第116、119、120図)

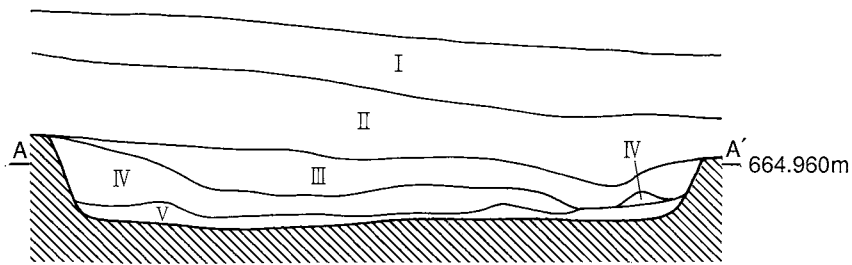
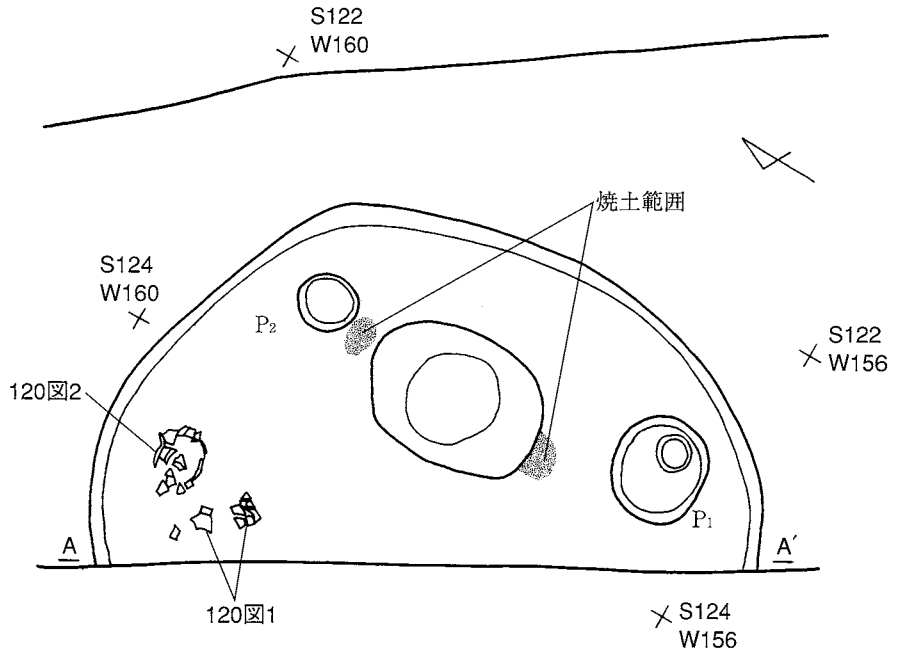
土器の出土だけである。器形全体が判るものはないが部分的に判るものを第116図4、5と第120図1、2に図示した。

4は覆土出土のもので、口縁から胴部器形の判るものである。口縁はゆるい波状をなし、頸部へかけてくびれ、更に胴部にかけてくびれるという2段に曲がる器形で、最大径は頸部にあって約34cmを計る。口径33cmで脹らんだ胴部もほぼ同じ大きさで以下底部に至るものである。文様は口縁下と頸部に沈線がまわり、下に弧状の隆帯をつけて中に縦の平行線を入れるいわゆる櫛形文がある。そして胴部くびれにも沈線がめぐり、下に不整円形や三角形の区画が作られて、中に同手法による平行線が縦、横、斜めに引かれて文様効果を高めている。余り見慣れない文様構成の土器である。5は覆土出土の底部片で底径8.5cmほどのものである。

1は口縁と底部を欠いて不明であるが、立ち上がった胴部上半から頸部にひろがる器形である。文様は頸部に横長の区画内に縦の平行線が引かれ、その下のくびれ部から胴部には縦に長い区画があって内に斜め方向や綾杉状に平行線が引かれている。2は口縁と底部を欠くがほぼ全体形を想定できる。胴部上半で大きくくびれ最大径が口縁と胴部下にある器形となっている。文様は頸部のくびれ部が丸い突起で4区分され、その間を刺突のある3本の平行線でつないでいる。突起下には隆帯が下がつて全体を4分し、縦に長い長方形区画を構成している。そして内部は更に3段になっていて、各段とも互生する葉を想像させる文様が中心にある。4区画とも同内容の文構成であり、全体としてみても互生する葉のように丁寧な斜線を引いて手の混んだ施文といわねばならない。26号住出土土器に似た感じをもつ土器である。このように4、1、2の土器は本遺跡では

数少ない文様構成をもつもので特記される土器といえる。

拓本は第119図1～17である。1～6は篋描き線が顕著なもので、1は先記した1の土器と同施文である。8、9、11、13は太い沈線と縄文をもつもの、10、12は口縁部片で口縁に沿って隆線がつくものである。10は波状口縁となるもの、16は渦巻状の小突起をもつもので以下無文帯が続いている。3、7、8、14、15は炉出土、17はP₁出土であり、他は覆土出土である。14、15、16は磨滅したもろい感じのするものであり、14、15には器内面に黒変がみられる。中期後葉Ⅱ期の土器としてまとめたい。



- | | |
|--------------------|-------------------|
| I : 客土 | IV : 褐色土 (1~2cm礫) |
| II : 黒褐色土 (1~10礫多) | V : 炭・焼土多量 |
| III : 暗褐色土 (3~5礫多) | |



第61図 第50号住居址

(26) 第51号住居址

① 遺構 (第62図)

位置 S 120・W154付近に位置する。

規模・形状 不明である。

検出・調査状況 検出中に暗褐色土中から石囲い炉を発見した。住居址としたが周辺をすでに掘り下げてしまっていたので、範囲は不明である。

柱穴 不明

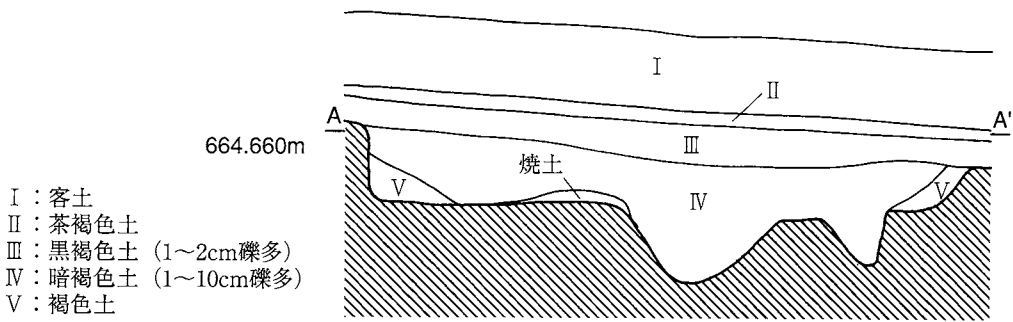
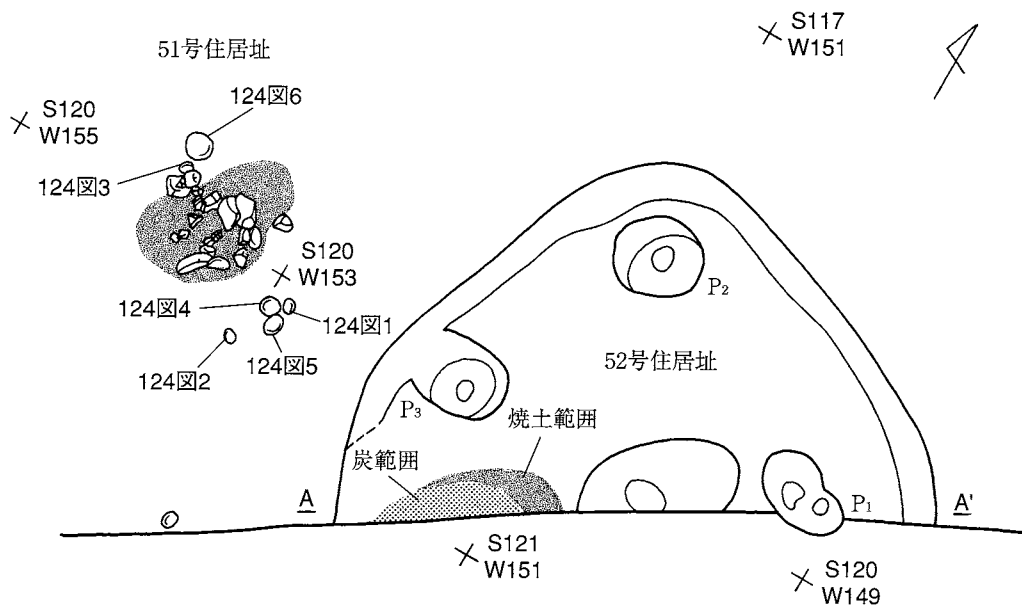
炉址 100cm×70cmの石囲い炉である。炉縁石は東辺の一部を残し、失われている。内面はよく焼け赤く硬化している。

遺物出土状況 炉址内部から小片が出土している。特記すべきは、炉の周辺から磨石が6点まとまって出土している。

② 遺物 (第110図・第124図・第136図)

110図8の土器は口縁部と底部を欠くがほぼ全体形が想定できる土器である。膨らんだ胴部から頸部にくびれをもって口縁に至る器形で、胴部径17.5cmを計る大きさである。文様は、胴部の膨らんだところに、円印を持った隆帯がまわり、それに交わる縦の隆帯で長方形区画ができ、内部に縄文を施すという構成である。中期後葉Ⅱ期とみたい土器である。136図1～9の拓本で示した土器は、中期後葉Ⅳ期の内容をもつもので、1・2には波状口縁部に装飾突起と橋状の把手がついている。

石器は124図1～6の磨石が6個で、その数の多さが注目される。3以外の5点は全て輝石安山岩製である。3は敲打器としての使用痕も見られる。6は19.3cmを計る大型品で磨石と呼んでよいか迷うが平滑面をもっている。



- I : 客土
- II : 茶褐色土
- III : 黑褐色土 (1~2cm礫多)
- IV : 暗褐色土 (1~10cm礫多)
- V : 褐色土

第62图 第51・52号住居址

(27) 第52号住居址

① 遺構 (第62図)

位置 S108・W150付近に位置する。土244を切る。

規模・形状 3.6m×3.6m方形の住居址

検出・調査状況 土244との切り合いは調査区南壁の土層観察から判断した。覆土は大きく2層に大別できる。IV層は3～20cmの礫を多く含む、V層は堆積後の凹地が一気に埋まった様子がうかがえる。床面西側際には黒色炭化物の広がりがみられる。中央にある深さ52cmを測る土坑が炉址とすれば、この中からかき出した炭化物と思われる。

柱穴 P₁・P₂・P₃がある。P₁、27cm、P₂、37cm、P₃、49cmを測る。

炉址 中央にある土坑が炉址を破壊した跡と考える。掘り炬燵状の石囲い炉であった可能性が高い。

遺物出土状況 覆土中からの遺物がほとんどであり、破片が多い。

② 遺物 (第110、113、121、122、124図)

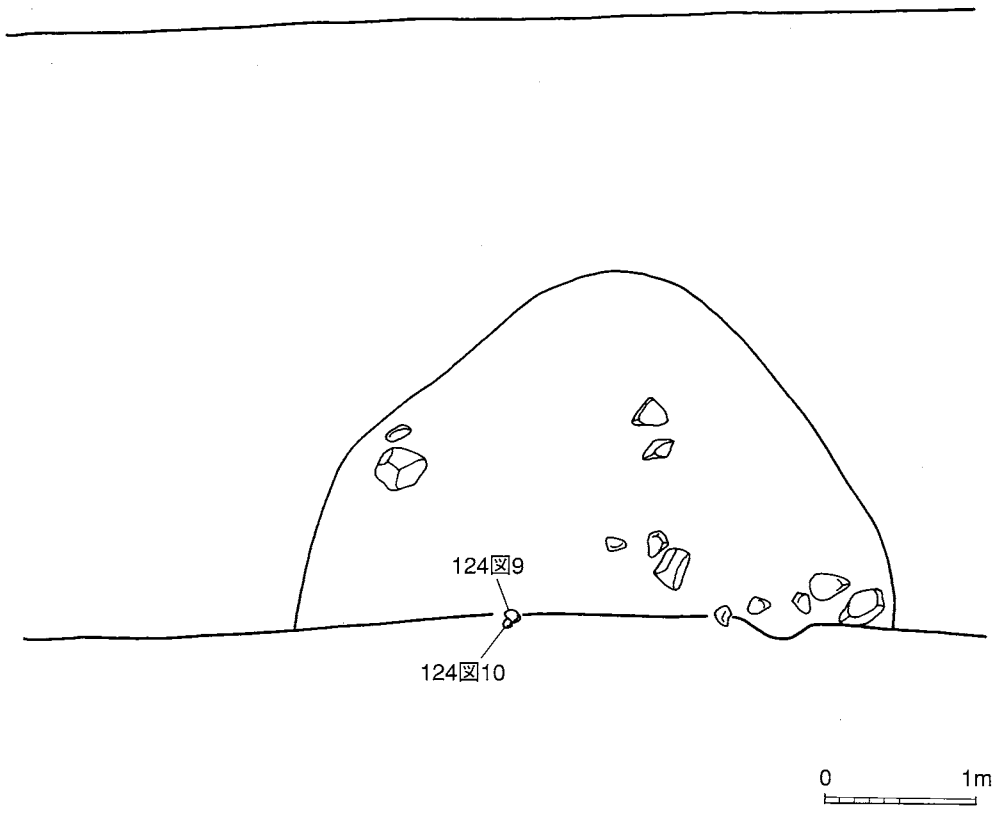
土器と石器がある。土器は器形の判るものはなく全ては破片である。第110図9は底径11.5cmの底部片である。垂下する2本の沈線が平行にみられるのみで無文部の多い底部である。

拓本は第121図、122図に示した1～25である。1～7は縄文をもつ一群で、1は低い波状口縁をなし、そこに渦巻をつけている。2は口縁下に横方向の隆帯があるもので、7も同手法のもの、4は垂下する隆帯、5、6は太い沈線で区画されるものである。

8は口縁下に2本の隆帯が平行にまわり、その下に勾玉状文がつけられている。16は波状口縁をなすが同様な勾玉状文と平行条線がみられる。9は口縁部につく装飾突起で貫通した穴もある。10～14、16～19は篋描き沈線をもつ一群で粗雑な感じに引かれている。21～25は底部片で、21、22は底径約14cm、23、25は底径8cmほどの大きさに、21、22、25には底面に圧痕が残っている。24は高台の付く土器底部であるが高台部を欠いている。底径8cmほどで垂下する沈線がみられる。

16～19、21、22が炉出土で、他は覆土出土となっており、1、5、16、18、21、22には使用を物語る炭化物の付着がみられる。中期後葉Ⅲ～Ⅳの土器とみたい。

石器は打製石斧が多く、第113図の9～15と第124図7、8の計9点で、今回調査では1番多い住居址となった。一部には欠落はあるが、ほぼ全体形の判るものである。石質や大きさは一覧表を参照されたい。磨石は第124図9、10で、共に砂岩製であるが大きさには違いがある。



第63图 第52号住居址遺物出土图

(28) 第53号住居址

① 遺構 (第64図)

位置 アルプス学園入り口付近に位置する。切り合いはない。今回調査した中で最も東側で発見された住居跡である。

規模・形状 円形の住居址と思われるが、規模は不明である。

検出・調査状況 下水道工事立会い中、遺物がまとまって出土したため付近を精査することにした。東西の壁のラインは明瞭に検出でき、掘り下げると平らな床面が現れた。壁はやや斜めに立ち上がり、東側17cm、西側10cmが残る。

柱穴 P₁・P₂がある。深さはP₁、15cm、P₂、11cmを測る。

炉 不明だが、中央付近の床面が広く焼け、焼土が薄く堆積している。

遺物出土状況 覆土上面からは大型の土器片がかなり大量に出土したが、Ⅲ層からはあまり出土量が多くない。

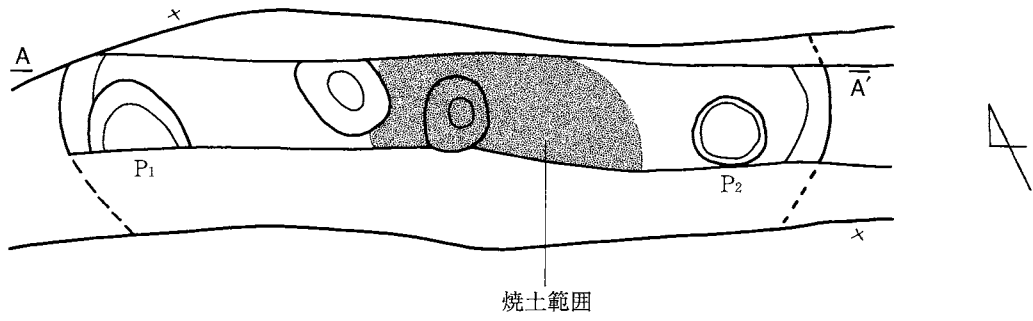
② 遺物 (第122～124図)

土器と石器がある。土器は器形の判るものはなく、拓本を第122、124図の26～46に示した。26、27、28は同一個体であり、断面から器形が想定される大きな破片である。口縁が内弯し、頸部に最大径をもつ甕形の器形をとるものである。口縁下にわずかな横帯区画を沈線で描き。以下に唐草文土器特有の渦巻を大きくつけて、間を沈線で飾っている。

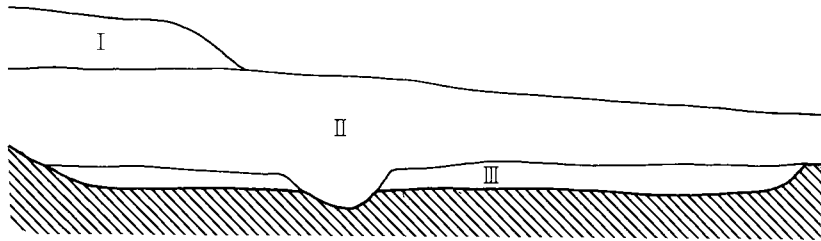
29～33は沈線で描かれる一群、34～36は細い平行条線が引かれるもの、37、38は口縁部片で、37に突起がつく。口縁下には共に勾玉状文が並ぶらしい。41は装飾突起部であり、40、42、44～46は縄文のつく一群である。40、42には太い垂下沈線間に縄文が、45、46には口縁部近くらしく横長区画内に縄文がそれぞれつけられている。44は口縁部片で、器外面に縄文が、内面に平行する沈線がみられるもので数少ない出土である。

29、32、33、45、46には磨滅があって拓本写りも余りよくない。また30、31の器内面と41の器外面には炭化物の付着がある。中期後葉Ⅲ～Ⅳ期の内容をもつ土器といえよう。

石器は第124図11の打製石斧1点である。砂岩製で長さ10.6cmの完形品である。



A A'



I : 客土 III : 褐色土
 II : 黒褐色土 (礫土器多)

0 1m

第64図 第53号住居址

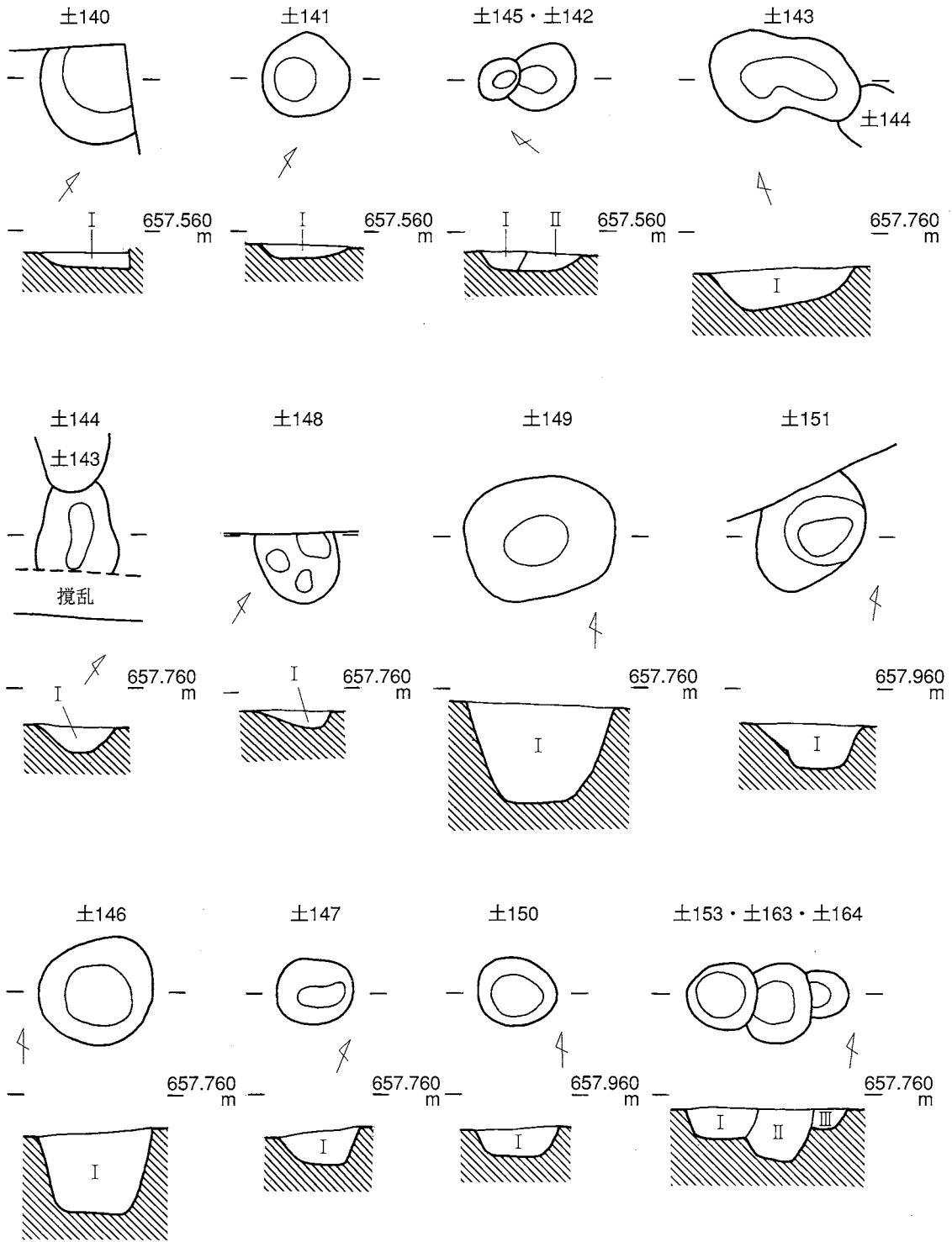
2. 土 坑

表2 土坑一覧

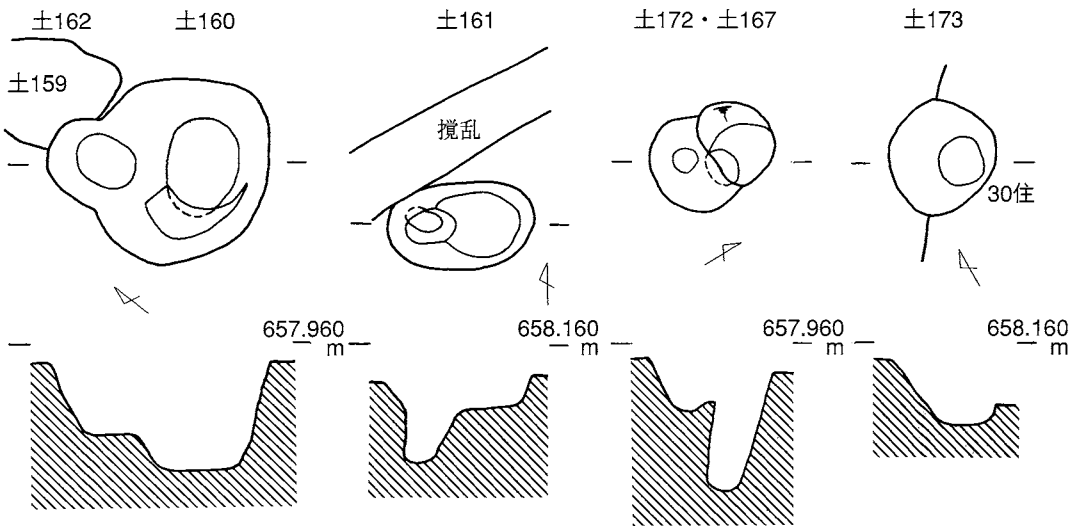
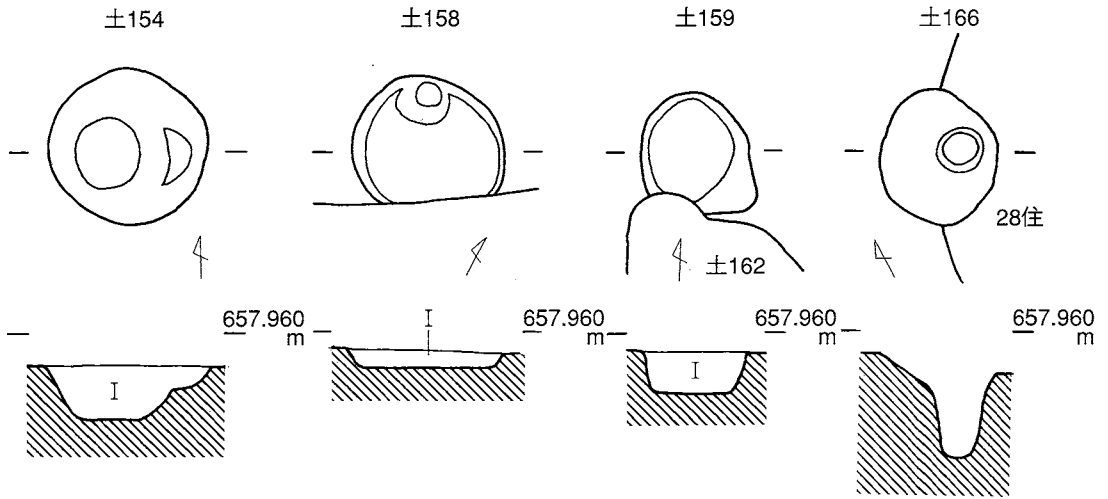
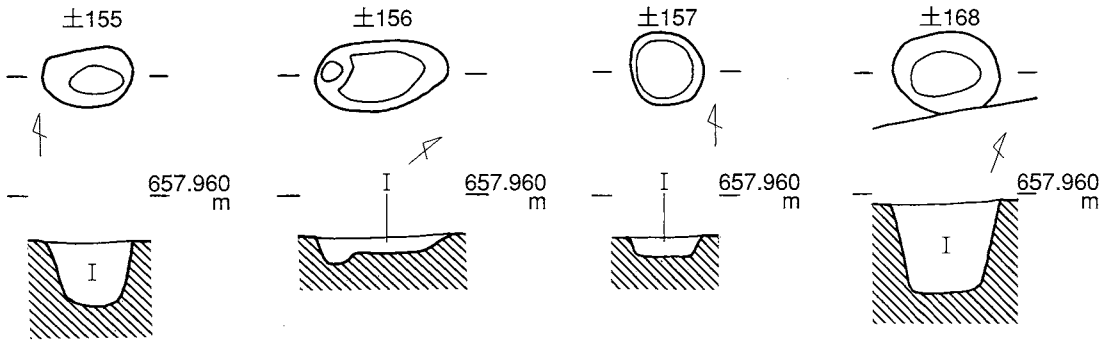
土坑No.	地区	平面形	規模 (cm)	備 考
			長軸×短軸×深さ	
140	A	不明	(98)×(92)×12	区域外にかかる。
141	A	円形	68×60×10	
142	A	長円形か	(60)×52×16	土145に切られる
143	A	不整長円形	122×58×38	土144を切る
144	A	不明	(86)×66×22	土143とカクランに切られる
145	A	円形	34×34×14	土142を切る
146	A	隅丸方形	86×84×67	
147	A	隅丸長方形	64×48×33	
148	A	不明	(76)×62×24	区域外にかかる。
149	A	長円形	120×96×80	
150	A	円形	60×56×22	土155と接する。
151	A	不明	(102)×92×34	区域外にかかる。
152		欠番		
153	A	円形	56×56×28	土163を切る。
154	A	円形	108×102×38	26号・31号住居址を切る。
155	A	長円形	60×36×43	土150と接する。
156	A	長円形	88×28×18	
157	A	円形	30×28×14	
158	B	不明	102×(92)×22	区域外にかかる。
159	B	不明	92×(72)×29	土162に切られる。
160	B	不明	134×(120)×71	土162との切り合いは不明。
161	B	長円形	96×60×57	カクランに切られる。
162	B	不明	(80)×(58)×49	土159を切る。土160との切り合いは不明。
163	A	不明	63×(52)×43	土153に切られ、土164を切る。
164	A	不明	42×(37)×16	土163を切られる。
165	B	不明	(142)×(110)×52	28号住居址を切る、カクランに切られる。
166	B	円形	86×80×83	28号住居址を切る。
167	B	楕円形	55×46×79	土172を切る。
168	B	不明	70×(52)×61	区域外にかかる。
169	B	円形	34×31×17	
170	B	円形	48×46×56	土171を切る。
171	B	不明	(82)×54×31	土170に切られる。
172	B	不明	(68)×66×40	土167に切られる。
173	B	円形	74×70×43	30号住居址を切る。
174	B	長円形	70×34×40	
175	C	不明	(74)×73×75	区域外にかかる。
176	C	長円形	92×72×43	

177	C	不明	(60)×28×21	区域外にかかる。
178	C	円形	60×52×22	
179	C	楕円形	52×40×19	
180	C	不明	58×(38)×9	区域外にかかる。
181	C	楕円形	48×41×50	
182	C	隅丸長円形	90×48×17	
183	C	隅丸長円形	75×50×14	
184	C	円形	61×56×24	
185	C	円形	62×56×18	
186	D	不明	332×(120)×(36)	区域外にかかる。
187	D	円形	84×75×47	
188	D	不明	300×(190)×(71)	区域外にかかる。±190に切られる。
189	D	不明	600×(260)×(54)	区域外にかかる。±190・±191に切られる。
190	D	長円形	100×90×39	±188・±189を切る。
191	D	円形	66×61×19	±189を切る。
192	D	不明	(74)×74×39	区域外にかかる。±194を切る。
193	D	楕円形	80×64×61	32号住居址を切る。
194	D	円形	(64)×56×17	±192に切られる。
195	D	円形	29×27×10	
196	F	楕円形	75×65×27	
197		欠番		
198	F	長円形	65×21×14	33号住居址内にある。
199		欠番		
200	F	円形	54×50×18	33号住居址内にある。
201		欠番		
202	F	円形	45×40×40	
203	F	円形	88×70×39	
204	F	不整円形	42×35×12	
205	F	隅丸長円形	86×68×23	
206	G	長円形	82×52×44	
207	G	不明	95×(55)×22	区域外にかかる。
208	G	不明	180×(168)×68	カクランに切られる。
209	G	長円形	109×86×34	
210	H	円形	26×25×13	
211	H	円形	50×48×24	
212	G	不明	()×106×(25)	区域外にかかる。
213	G	円形	142×136×123	
214	G	不明	108×(54)×15	区域外にかかる。
215	I	隅丸方形	95×86×24	
216	I	長円形	136×90×64	区域外にかかる。
217	I	楕円形	70×54×24	
218	I	不明	160×(60)×(11)	区域外にかかる。

219	H	不明	68×(24)×44	区域外にかかる。
220	J	不明	(300)×(260)×19	区域外にかかる。
221	J	円形	110×100×28	
222	J	円形	60×(58)×11	区域外にかかる。
223	J	円形	98×(90)×24	区域外にかかる。
224	J	円形	66×52×11	
225	J	不明	(176)×170×36	区域外にかかる。
226	K	円形	132×128×71	
227	K	不明	(286)×(140)×18	区域外にかかる。
228		欠番		
229	K	不明	272×(260)×52	区域外にかかる。土235に切られる。
230	K	円形	56×50×18	
231	L	長円形	168×114×41	
232	L	円形	70×64×37	
233	L	円形	75×68×22	
234	L	不明	286×(120)×40	区域外にかかる。
235	L	不明	(80)×(70)×59	土235・土236・土237の切り合いは不明。
236	L	不明	(168)×(120)×79	土235・土236・土237の切り合いは不明。
237	L	不明	(70)×(60)×48	土235・土236・土237の切り合いは不明。
238	L	不明	(200)×132×50	区域外にかかる。
239		欠番		
240	M	不明	(172)×140×8	区域外にかかる。
241		欠番		
242	M	長円形	76×52×18	
243	M	長円形	(120)×100×73	区域外にかかる。土244を切る。
244	M	不明	(160)×(150)×75	区域外にかかる。52号住居址・土243に切られる。
245	M	長円形か	140×(90)×35	区域外にかかる。
246	M	長円形	52×44×47	



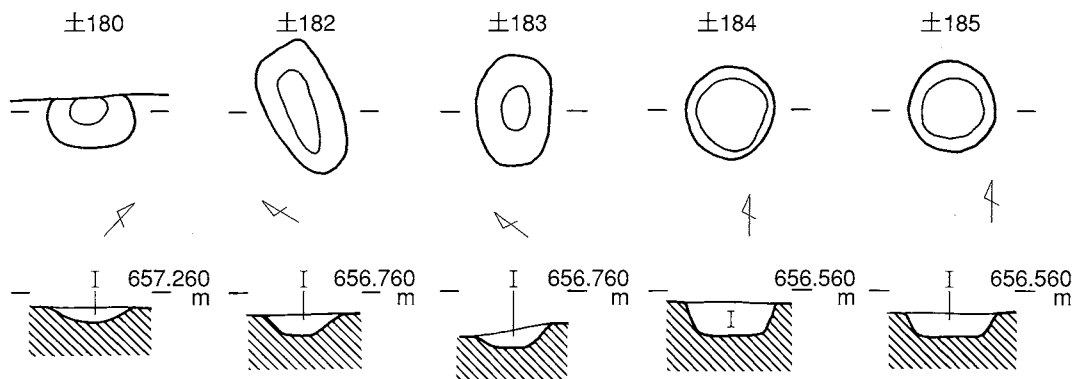
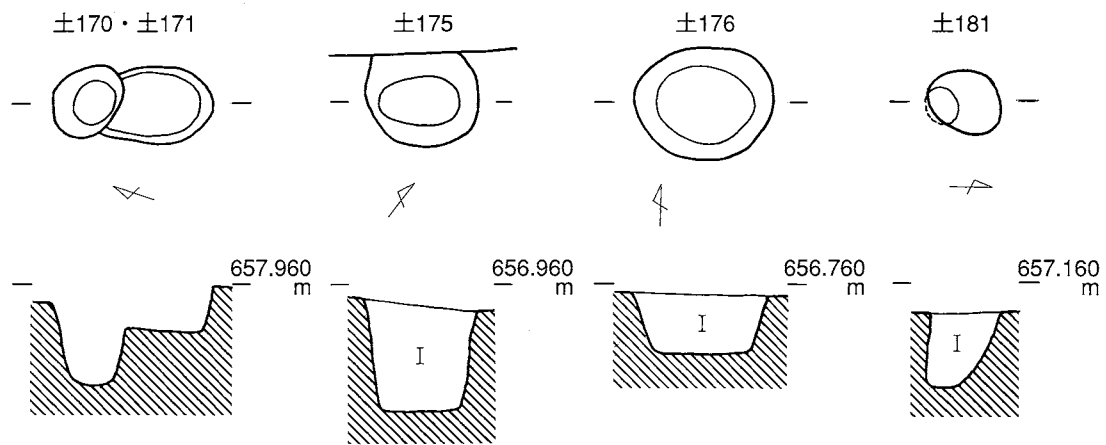
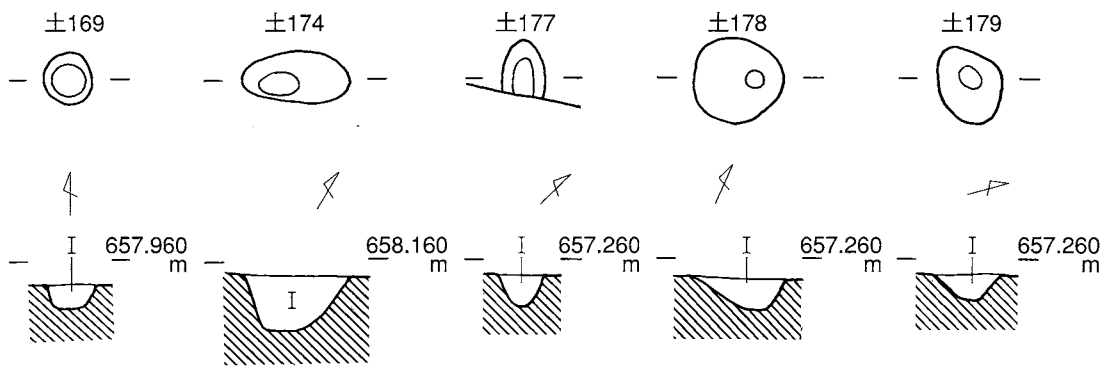
第65圖 土坑



I : 黑褐色土



第66圖 土坑

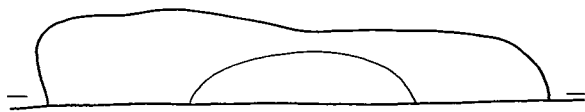


I : 黑褐色土

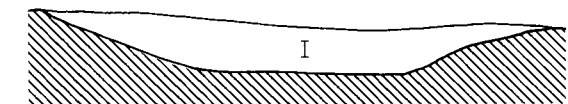


第67圖 土坑

±186

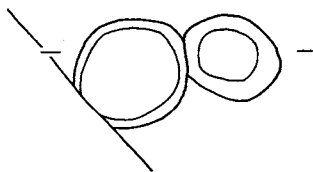


656.660m

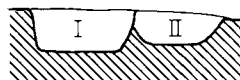


I : 暗褐色土 (小礫混入)

±192 · ±196



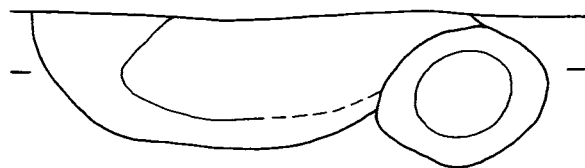
656.860m



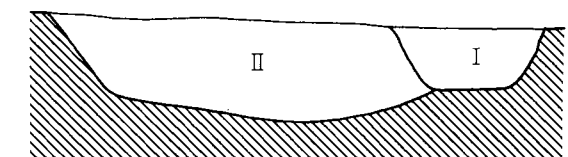
I : 黒褐色土
II : 暗褐色土

±188

±190



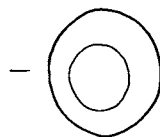
656.650m



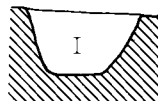
I : 暗褐色土 II : 暗褐色土 (礫多)

±187

±195



656.360m



655.760m



I : 黒褐色土

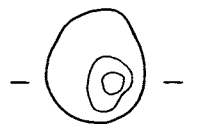
±196

±197

±198

±199

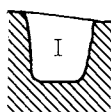
±191



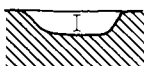
655.660m



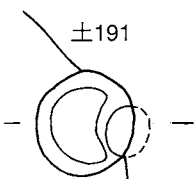
655.660m



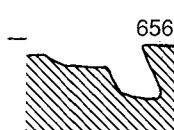
655.660m



655.660m



656.160m

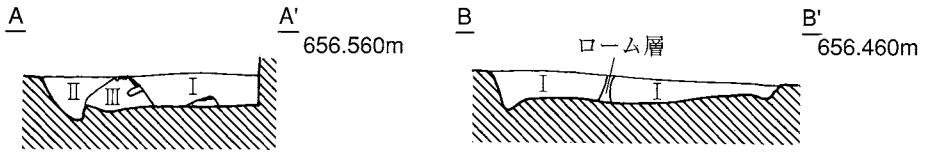
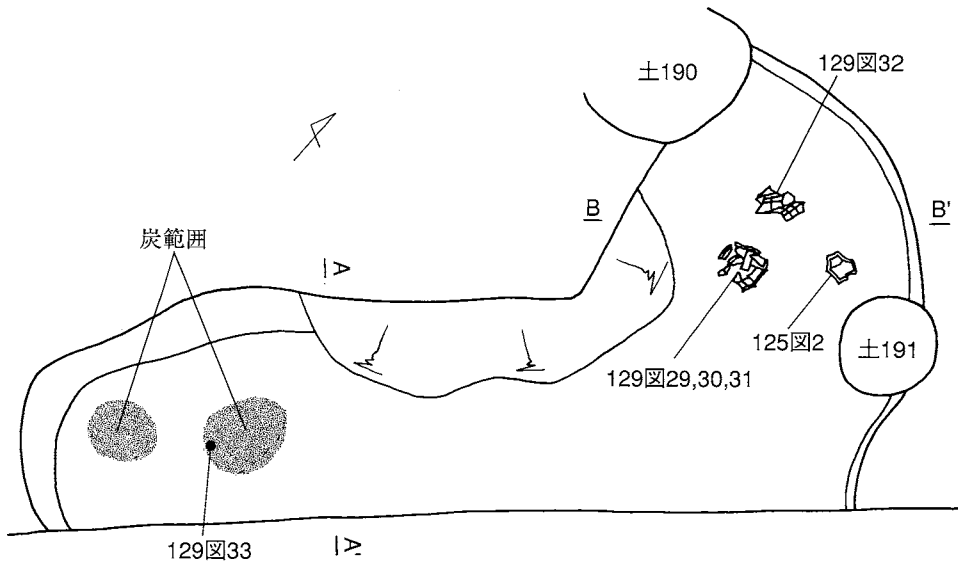


0 1m

I : 黒褐色土

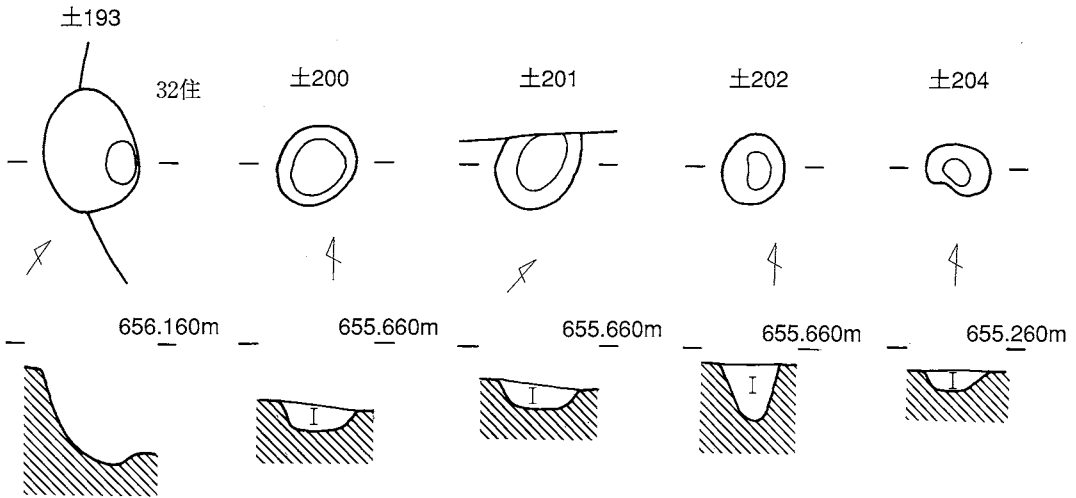
第68図 土坑

±189



I : 暗褐色土 (小礫炭化物混入)
 II : 暗褐色土 (小礫炭化物混入)
 III : 黄色土 (礫混入)

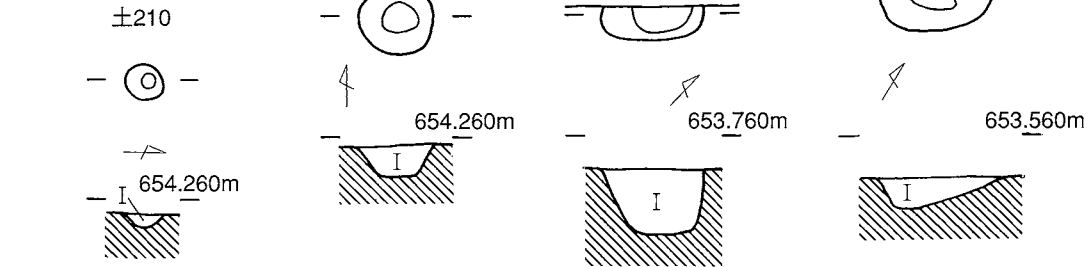
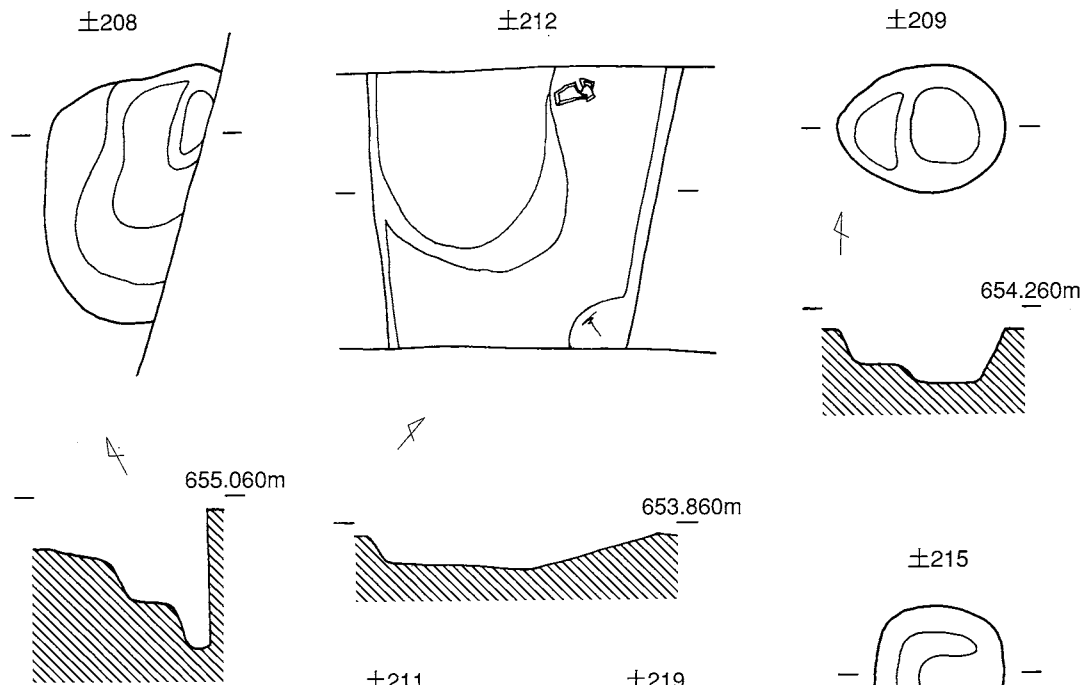
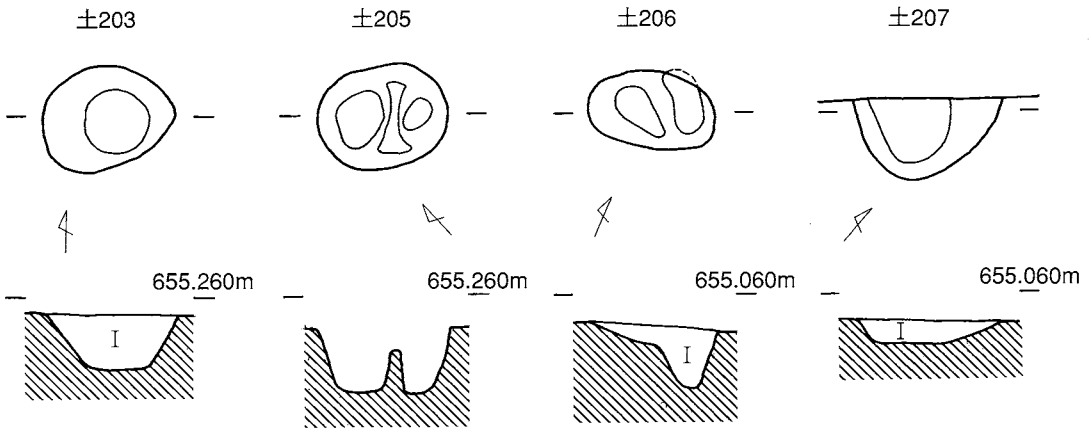
I : 暗褐色土



I : 黒褐色土



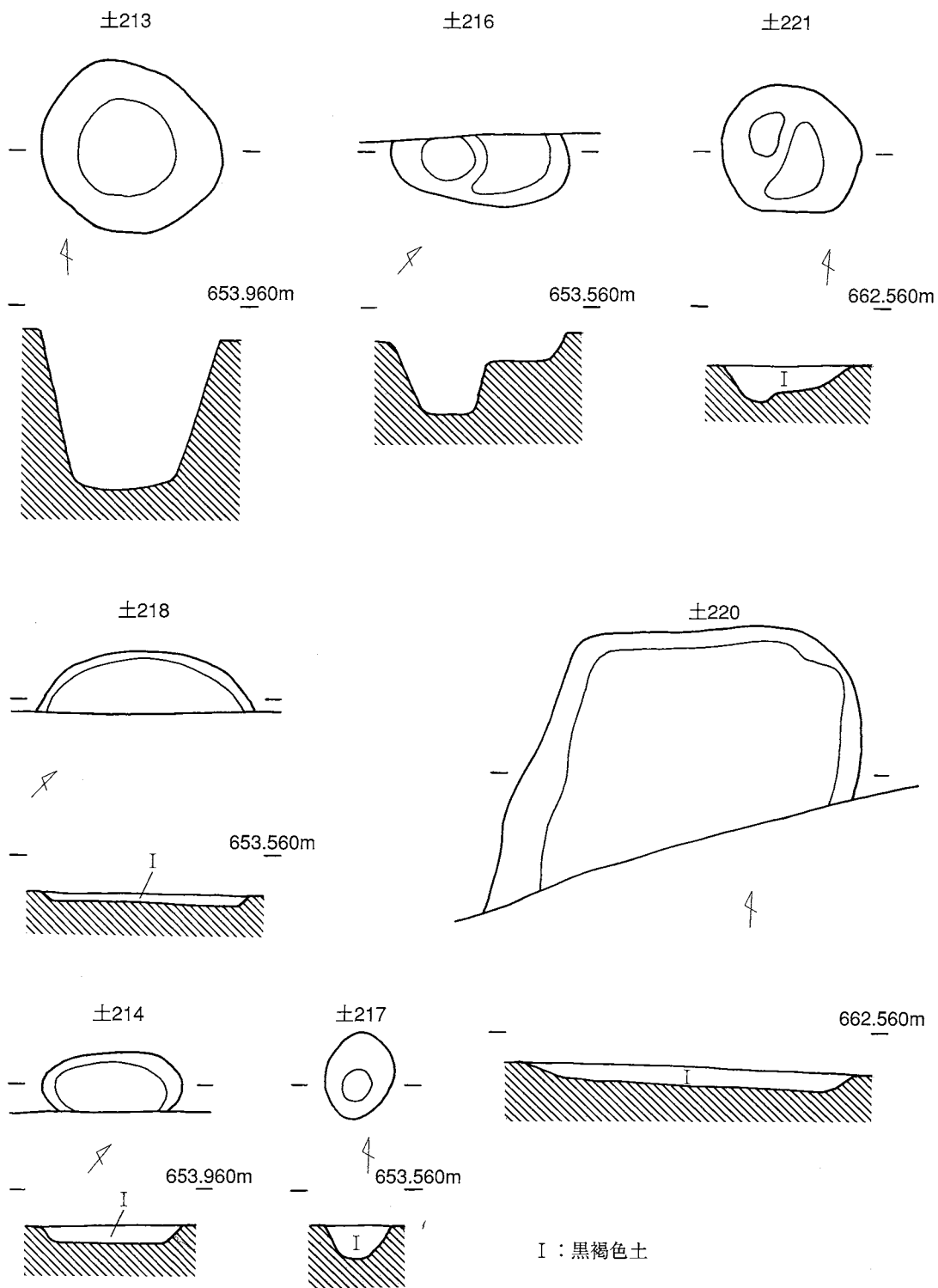
第69図 土坑



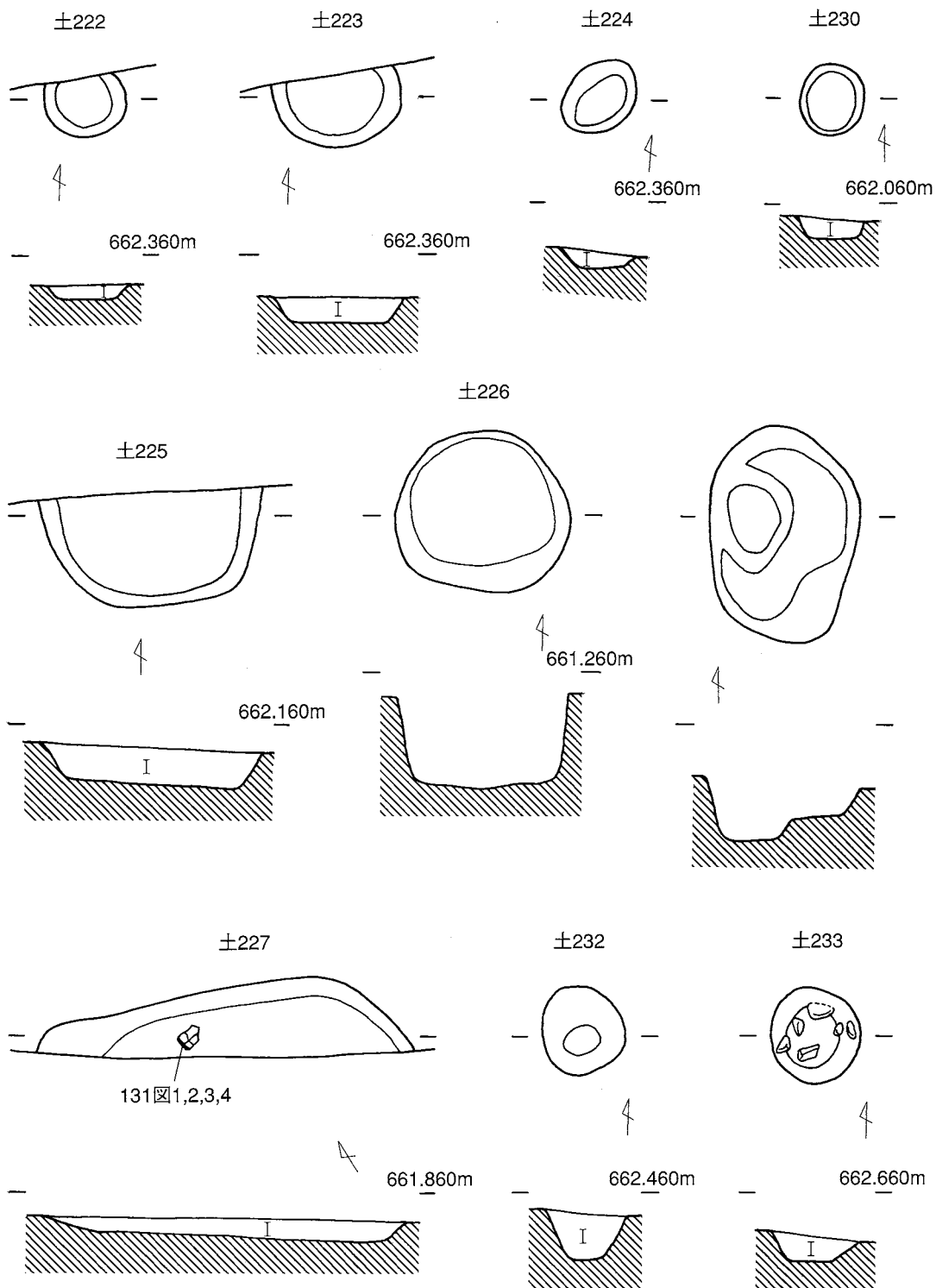
I : 黑褐色土

第70圖 土坑





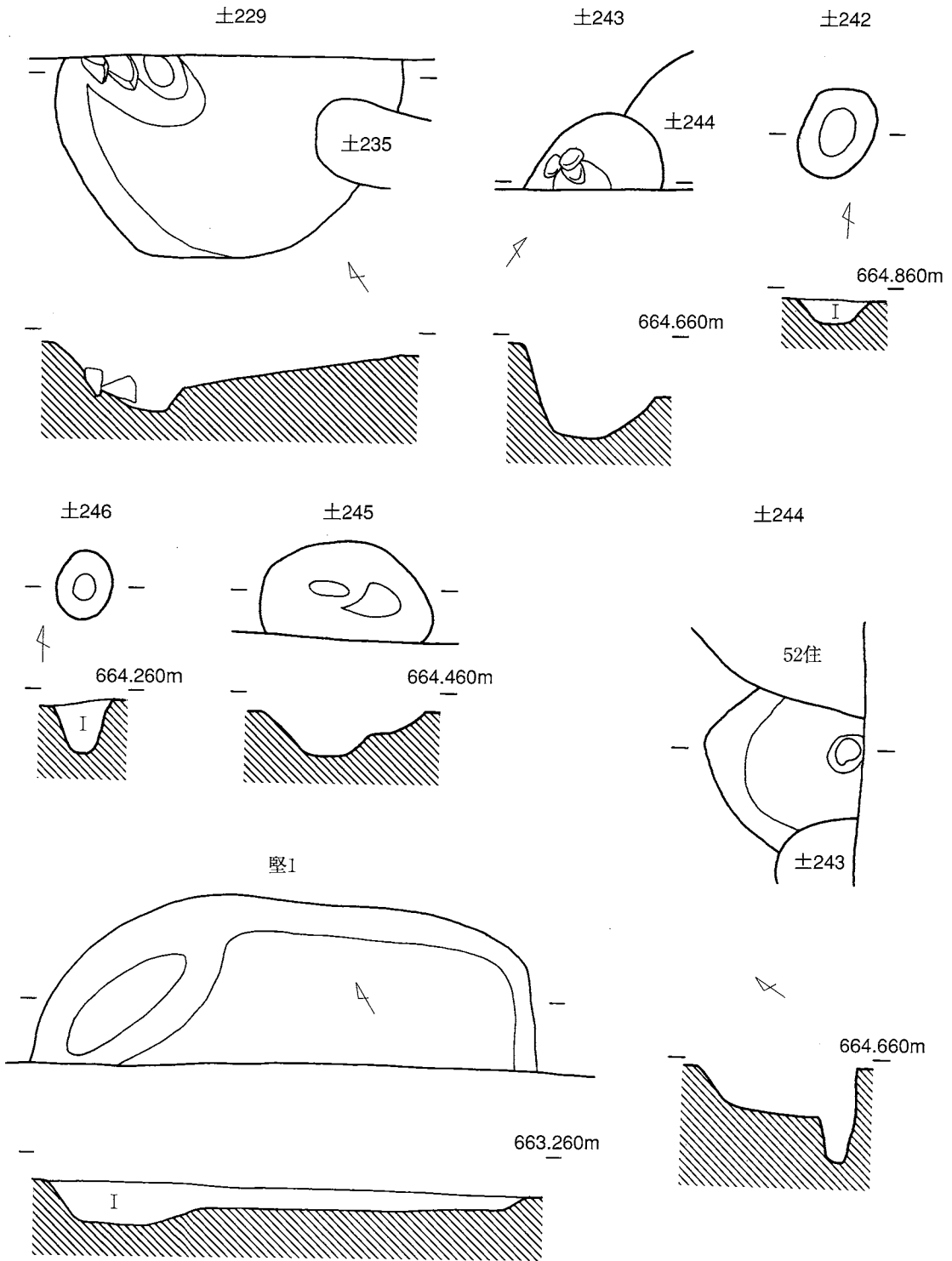
第71圖 土坑



I : 黑褐色土

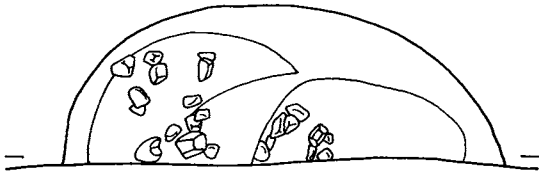
0 1m

第72图 土坑

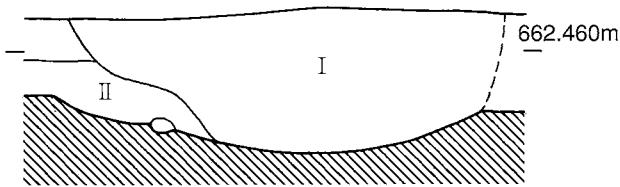


第73図 土坑

±234

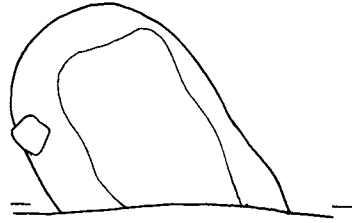


4

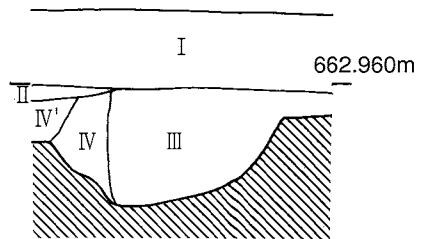


I : 褐色土 (1~10cm礫多)
II : ローム層

±238



4

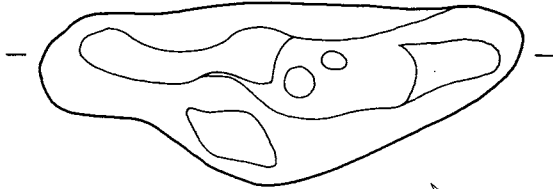


I : 客土 III : 暗褐色土
II : 黒褐色土 IV : 黄色土ローム
 IV' : 黄色土ローム
 (礫多)

±235

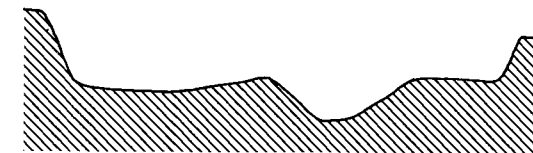
±236

±237

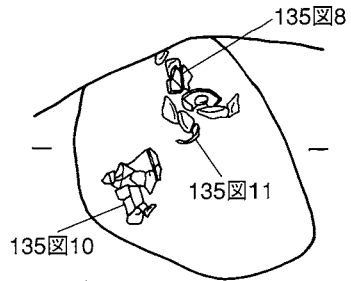


4

663.060m

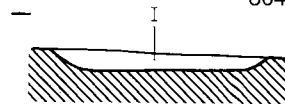


±240



4

664.260m



I : 黒褐色土

0 1m

第74図 土坑

(1) 土坑出土遺物

多くの土坑から遺物の出土があるので以下記していくが、土器片1点のみという内容のものもあって、土坑に伴うものなのかまぎれ込みなのか区別は困難であると同時に、少ない遺物での所属時期決定は問題がある。ここでは出土記録を重視する意味から、できるだけ多くの資料提示に努めた。

① 土坑145 (第127図1)

中期中葉とみられる口縁部片が1点ある。

② 土坑149 (第127図2～4)

中期中葉とみられる土器片3点がある。

③ 土坑151 (第127図5～8)

中期中葉とみられる土器片4点を示した。6は口縁近くの破片で三角形の区画内に爪形文がみられ、南松原遺跡や27号住居址と同時期のものである。

④ 土坑152 (第125図5、第127図9～17)

他に比べて出土量も多く、本土坑に伴うものと考えられる。5は浅鉢の底部片で無文であり、底径14cmを計る。拓本図の9～17は中期中葉Ⅲ期に比定されるもので、27号住居址や南松原遺跡と同期のものである。

⑤ 土坑153 (第127図18～23)

6片を図示したがいずれも中期後葉Ⅱ期とみられるもので、本土坑に伴う遺物と考えたい。

⑥ 土坑154 (第128図1～8)

篋描き線が平行に引かれる2や綾杉状に引かれる3に代表されるもので、中期後葉Ⅱ～Ⅲに位置づけられよう。また本土坑に伴うものとみたい。

⑦ 土坑155 (第128図9～14)

9は大型土器の無文口縁部なのか、浅鉢の口縁から胴部にかけてか迷う大破片であるが口唇からして前者と考えた。10は半月状の中に縄文をもつもの、11は垂下する沈線で区画された中に縄文をもつもので中期後葉Ⅲ期ごろに比定されよう。9～12は同時期と考えたいが、13、14は先行する内容で混入とみたい。

⑧ 土坑158 (第128図15～22)

中期後葉Ⅲ期とみられる土器である。本土坑に伴うものとみたい。

⑨ 土坑159 (第128図23～24)

2片の図示でしかも小片であるが中期後葉Ⅰ～Ⅱ期のものとみれる。

⑩ 土坑160 (第139図1、第128図25～28)

土器は4片の図示であり、中期後葉Ⅱ～Ⅲ期のものとみれる。27の無文片の内面には炭化物付着がある。1の磨石は長径11.5cmの花崗岩製である。

⑪ 土坑161 (第129図1～3)

縄文が施された3点がある。同一固体であり磨滅がみられる。

⑫ 土坑165 (第129図4～5)

縄文と沈線のついた小片2点である。

⑬ 土坑166 (第129図6～12)

小破片7点の図示であり、中期後葉Ⅱ～Ⅲ期に比定されよう。6の器内面には炭化物の付着がある。

⑭ 土坑168 (第129図13～16)

いずれも小破片であり、沈線から判断して中期後葉Ⅲ期ごろとみたい。

⑮ 土坑172 (第129図17～18)

小破片2点。17は表面が磨滅しているが縄文がついたものと思える。器内面に炭化物付着がある。18には沈線があり、中期後葉Ⅱ～Ⅲ期とみたい。

⑯ 土坑175 (第129図19～20)

19は無文片、20は無文底部片である。推定底径15cmになるもので底部が外に膨らみをもっている。

⑰ 土坑176 (第129図21～26)

半截竹菅工具によると思われる施文がみられたり26の張り出す底部片から後葉の土器ではなく中期中葉のものともみた。23、24の器内面には炭化物付着がある。

⑱ 土坑186 (第129図27～28)

2片だけであるが27の横帯区画内の斜線から中期後葉Ⅰ期かⅡ期とみたい。

⑲ 土坑189 (第139図3、第125図2、第129図29～33)

土器と石器がある。2は口縁と底部を欠くが器形の想定できるものである。膨らんだ胴部径15cm、残存器高15cmを計る。頸部から胴部にかけて格子状と波状文がつき、その下は縦の平行条線が引かれた中にトンボが羽をひろげたような文様をつけている。中期後葉Ⅰ期の土器である。

拓本は29、30、31は同一個体の無紋浅鉢である。

石器は3の打製石斧1点である。長さ11cmの細粒砂岩製のものである。

⑳ 土坑200 (第130図1)

中期後葉Ⅰ期の大きな破片1点だけである。器内面に炭化物付着がみられる。

㉑ 土坑212 (第130図2)

中期後葉Ⅱ期の口縁部片1点である。

㉒ 土坑214 (第130図3～9)

中期後葉Ⅱ期とみられる7片がある。

㉓ 土坑226 (第130図10～23)

10～14は中葉土器であり、15～23は中期後葉Ⅳ期の内容とをもつ一群である。本土坑に伴うものが後者で、中葉土器は混入と考えられる。

㉔ 土坑227 (第131図1～4)

縄文をもつ破片で、3、4は磨滅してざらついた器面をもつ。4にも縄文が施されている。中期後葉Ⅱ期かⅢ期の土器であろうか。

㉕ 土坑228 (第131図5～11)

5は中期後葉Ⅳ期とみれる口縁部片、他は中期中葉土器とみれる。5はまぎれ込みで、本土坑に伴うのは中葉とみたい。

㉖ 土坑229 (第131図12～20)

17、18の中葉土器片がみられるが、他の中期後葉Ⅱ期かⅢ期の土器が本土坑に伴うものとみたい。19、20の器内面に炭化物付着がある。

㉗ 土坑231 (第131図21～26)

中期中葉土器が主となり、本土坑に伴うものである。

㉘ 土坑232 (第132図1)

中期後葉Ⅱ期の土器片1点である。

㉙ 土坑233 (第132図2～4)

中期後葉Ⅱ期とみれるもの3点である。

㉚ 土坑234 (第125図3、第132図5～16)

出土土器は土坑では多い方である。3は浅鉢底部片で底径7.5cmを計り、太い沈線で描かれた中期後葉Ⅳ期の土器である。拓本は5～11の中葉土器と12～16の後葉Ⅳ期土器とがあるが本土坑に伴うのは、3の土器と共に後者とみたい。

㉛ 土坑236 (第133図1～16)

出土量が多く、本土坑も2時期の土器内容を示している。中期中葉とみられる3～6、11～15と後葉Ⅲ期とみれる1、2、7～10、16である。2と9は同一個体である。

㉜ 土坑238 (第139図4、5、第138図10、第134図1～19)

出土遺物に土器、石器、土製円板があって注目したい土坑である。土器は14、15、17の3片がまぎれ込みとみられる中葉土器であるが他は後葉Ⅲ期と思われるものが主体をなしている。石器は第139図4、5の撥形の打製石斧で共に泥岩製である。土製円板は不整形のもので長径4.5cmほどである。土器片利用のものである。

㉝ 土坑240 (第125図4、第135図7～12)

中期中葉Ⅲ期の大きい破片が多い。第125図4は胴部下から底部の判るものである。底径6.5cm、残存器高10cmと小さいもので楕形文がついている。土器を埋納するという性格の窺える土坑といえよう。

㉞ 土坑244 (第136図10～12)

中期後葉Ⅳ期とみられる土器片が3点ある。

① 集石1 (第136図13~19)

出土土器7点を拓本で示した。中期後葉Ⅲ期とみられる内容のもので、やや粗雑な感じの沈線がつけられている。

② 竪穴状遺構1 (第136図20~21)

中期後葉Ⅲ期~Ⅳ期と思われる内容の土器片が2点だけある。

① 埋甕1 (第120図3)

口径24cm、器高27cm、底径9cmを計る大きさのコップ状の器形をなすもので、沈線で区画された中に縄文をもつ。中期後葉Ⅳ期の内容をもつ土器である。

② 埋甕2 (第125図1)

残存器高29cm、底径9cmの大きさで口縁部を欠く。口縁部が開いて最大径をもつ。この期特有の器形で、2段になった長円区画内に縄文がつけられている。中期後葉Ⅳ期の土器である。

③ 埋甕3 (第126図1~4、第139図2)

復元不能で拓本に示した1~4の同一個体である。底径10cmで底部にまで垂下する隆線と篋描き線がみられる。胴部には波状に下がる隆線や渦巻がみられ、粗雑な感じのする土器である。中期後葉Ⅳ期の土器である。2の磨石は割られている安山岩製のもので、埋甕3内覆土内に入れられていた。

④ 埋甕4 (第126図5)

5は胴部上半から頸部にかけて最大径となり、内弯する口縁は平縁となる器形である。他の例から、胴部から下はゆるいカーブを持って直斜状に底部に至るものである。文様は口縁下に波状文を真中に描いた帯状の横区画がみられ、それを2連の渦巻文でつないでいる。頸部以下には縦方向に二つの渦巻文を結ぶ隆帯と三つの渦巻を結ぶ文様が主体となって構成され、その間を縦方向の細い平行条線で飾っている。中期後葉Ⅱ期に位置づく土器である。

⑤ M区埋甕 (第125図7)

口縁部に最大径をもつ甕形の器形をとる土器で胴部以下を欠いている。口径38cm、残存器高21cmほどを計る。口縁下に横帯区画があり垂下する縄目状の隆帯によって区分され、縄目の上には渦巻がついている。横帯には中に波状をもつ同心円状のものが2個並んでおり、その下は渦巻から垂下する隆帯で2分され、それぞれに波紋を思わせる弧線が引かれている。中期後葉Ⅱ期の土器に比定されよう。

3. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物中、アルプス学園前と記されたものがあるので、それを先にまとめておく。

土器は第79図2、第140図3、4、6、9と第141図1～13の拓本である。第79図2は底部を欠くが口縁から胴部の判るもので、波状口縁をなし、沈線で囲まれた区画内に縄文が施された中期後葉Ⅳ期の土器である。第140図3は注口土器の注口付根からの破片で、2.5cmほどの短い注口部であることが判る。4は注口部で径2.6cmほどの注ぎ口をもつ。6と9は釣手土器の釣手部片で、6には縄目状を思わせる太い斜線が掘り込まれているが、9は無文である。拓本は1、2が先行する土器であるが、他は中期後葉Ⅲ期～Ⅳ期の土器であり、住居址の存在が推察される。

石器と石製品が各1点ずつある。第139図6の打製石斧と第148図10の石棒片である。打製石斧は泥岩製で一部に欠落はあるが全形の判る撥形のもので長さ13.9cmである。石棒片としたものは砂岩製の径10.4cm、長さ8.1cmほどの円柱で、石棒の一部と見られる。如何なる理由で割ったのか不明であるが、上下両面にわずかな凹みがある。

次に遺構外出土遺物全般についてであるが、土器、土製品、石器があり、土器片は量的にも多い。

土器（第79図3、第125図6、140、142～144図、149図）

第79図3はF区出土の無文底部で底径7cm、残存器高13cmのものである。第125図6はB区Aトレンチ出土遺物で、底部を欠くが口縁から胴部の判るものである。波状口縁をなし、口径17cm、残存器高11cmを計る。口縁下に長円形状の区画が沈線で描かれた中期後葉Ⅳ期の土器である。第140図1、2はミニチュア土器で共にM区出土である。1は底径4.8cmほどで垂下する沈線と斜線の引かれた底部片、2は高台の付く底部片で高台径3.5cmを計る。5～12は釣手土器の釣手部片をまとめた。B区Bトレンチ（5、7、11、12）とM区検出面グリッド11（8、10）に出土がみられる。割れ易い部位であるのか、割られる性格があるのかかわからないが全て破片であり、文様にも特異性がみられる。丸印を並べる5、8、10、全面につける7、縄目をつける11、線描きする12と多様である。

142～144図に拓本をまとめた。図示したものと同一内容のものが多量にあり、そのいわば代表という意味とその土器を伴う住居址の存在が予想されることを念頭においたものである。

第142図1～10には中期中葉のものを示した。今次調査で該期住居址の確認もあったが、1～10の出土地点が8区に及ぶことから更に住居址等この期の遺構存在が確実視される。他は後葉Ⅰ～Ⅳ期の土器で、多くの住居址が該期であることから当然のことであり、特にB区、M区に多いことに注目したい。

第144図7～14は中期後葉土器の底部圧痕を並べた。同様の編み方をした網代でも圧痕に若干の違いがみられる。

149図3は、口径約48cm、残存器高約39cmを計るやや大き目の土器である。垂下する波状文と綾杉状文で飾られており中期後葉Ⅲ期～Ⅳ期とみられる土器である。第149図1の胴部から底部にかけての図上復元したものは、底径約11.5cm、残存器高約19cmのすらっとした姿であり、沈線が胴部辺と垂下するものが底部にまでみられるだけで所属時期のつかめないものである。

土製品は第138図6の滑車形耳飾りの破片でM区出土である。図上復元すれば径6cmほどの大きさになるうか。厚みは2cmほどで無文である。本遺跡では数少ない出土である。

石器には、第148図7、8、9の石鏃、第139図7～11と第148図6の磨石、第145～147図と第148図1～3の打製石斧、第148図4、5の敲打器がある。

石鏃3点は完形品であり、3点共に黒曜石製である。7はK区No.1遺物として取り上げられている。

磨石は6個の図示であるが、安山岩製4個、砂岩製2個となっている。また8～10は凹みともみれるものがあるが凹石としての使用も考えられよう。

打製石斧は合計50個を図示した。形の上では短冊形が多く、撥形がそれに次ぎ、分銅形は少ない。第145図13のように抉り入りのものもある。砂岩・泥岩製が多い。

敲打器は2点図示した。4はやや大き目で握り具合が悪いようにも思えるが打痕が残っている。2点とも泥岩製である。

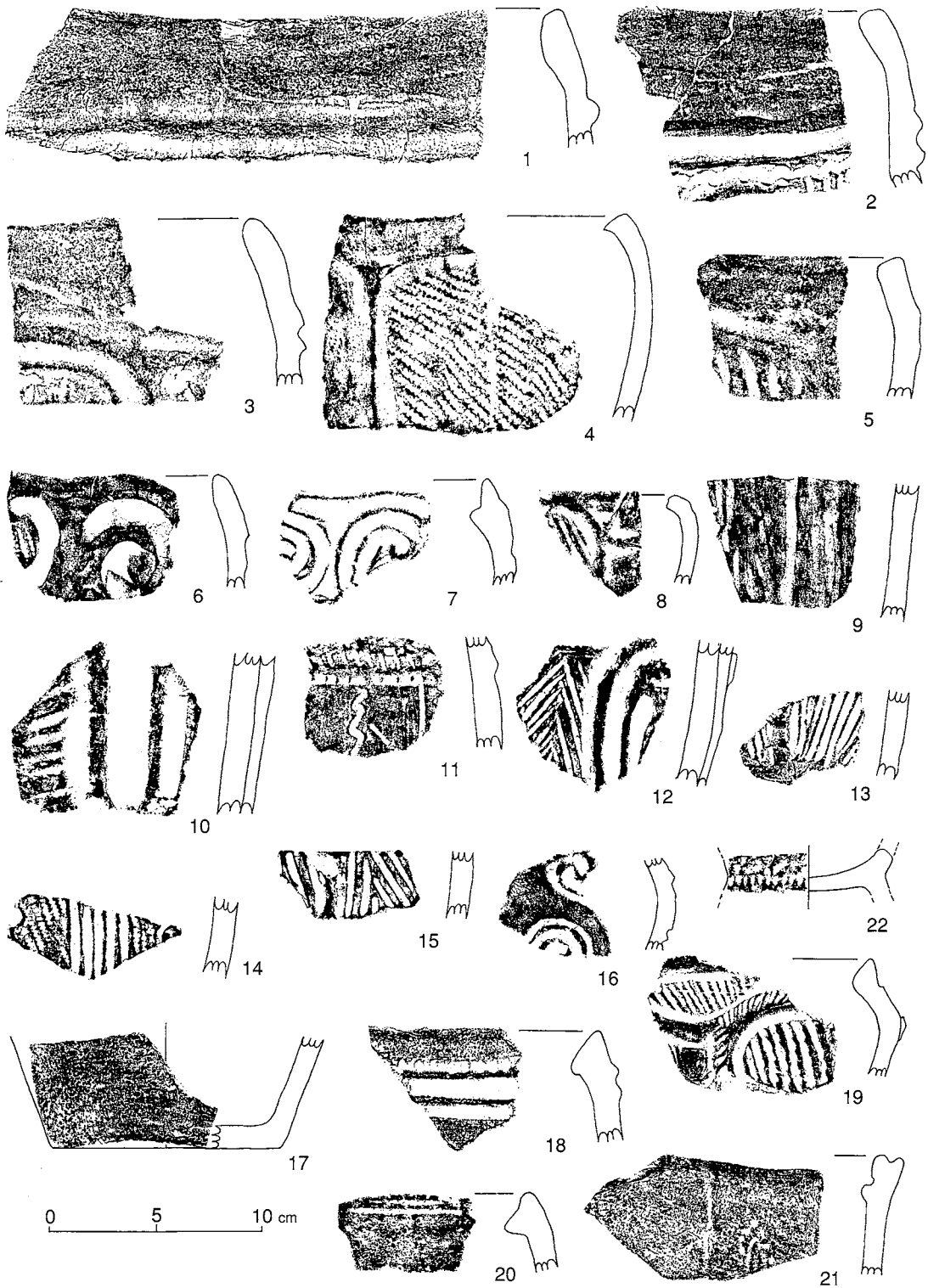
なお石器については計測一覧表を参照されたい。

表3 石器計測一覧

番号	住居 番号	No. 他	機 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	図No.	写真 撮影	備考
Ⅲ 1	7	フ	敲打器	17.6	6.0	4.1	536	泥岩	29-1		
2	7		石皿	28.2	23.4	11.5	8600	輝石安山岩 (乗鞍)	29-2		
3	7		石皿	18.8	20.4	6.7	3200	砂岩	29-3		
4	7	ユ	石柱	53.1	18.3	11.9		安山岩	29-4	×	
5	10	フ	敲打器	11.0	4.4	1.6	94	細粒泥岩	29-5		
6	10	フ	敲打器	14.4	3.8	1.7	128	泥質砂岩	29-6		
7	10	フ	敲打器	20.9	5.8	4.0	682	泥質砂岩	29-7		
8	11		石匙	5.2	5.8	1.2	36	細粒硅質砂岩	29-8		
9	11		磨製石斧	14.7	6.9	2.7	490	蛇紋岩 (小谷?)	29-9		
10	11		打製石斧	10.4	5.8	2.0	132	頁岩状泥岩	29-10		
11	11			23.6	6.9	4.0	1000	安山岩	29-11		
12	11		石皿	21.2	16.2	5.9		輝石安山岩 (乗鞍)	30-12		
13	11		凹石	8.5	10.3	6.2	674	輝石安山岩 (焼岳)	30-13		
14	14	フ	打製石斧	11.8	4.6	1.9	126	硅質砂質泥岩	30-14		
15	14	フ	打製石斧	13.0	4.6	2.2	146	硅質泥岩	30-15		
16	15	フ	敲打器	10.8	2.7	1.5	65	細粒硅質砂岩	30-16		
17	-		磨石	8.3	10.8	3.5	404	砂岩	30-17		
V 18	26		凹石	10.6	8.6	6.8	728	輝石安山岩 (焼岳)	86-4		
19	26		石鏃	2.4	1.8	0.5	1	黒曜石	86-1		
20	26		凹石	9.0	7.5	7.1	540	砂岩	86-5		
21	26		磨石	7.0	6.4	5.1	274	輝石安山岩	86-6		
22	26		凹石	9.3	7.6	6.0	458	輝石安山岩	86-3		
23	26	フ		4.9	2.3	0.8	7	チャート	86-2	×	
24	28	ベルト	磨製石斧	6.1	3.6	1.2	46	ヒスイ	86-7		
25	29		磨石	9.9	9.2	4.7	622	輝石安山岩 (焼岳)	86-8		
26	30	フ	凹石	9.2	8.0	5.1	480	輝石安山岩	86-11		
27	30	フ	石鏃	2.5	1.6	0.4	1	黒曜石	86-9		
28	30	フ	打製石斧	14.0	4.7	1.8	106	細粒片状砂岩	86-10		
29	33		磨製石斧	14.1	5.7	3.2	430	石英斑岩 (梓川)	113-1		
30	34	フ	剥片	5.9	4.0	0.6	16	硅質砂岩	欠番	×	
31	36		不定形石器	4.3	2.3	0.8	11	黒色チャート	113-2		
32	37	フ	打製石斧	9.8	5.2	1.4	77	硅質泥岩	113-3		
33	40	フ	打製石斧	12.5	3.4	1.8	85	硅質泥岩	113-4		
34	44	フ	磨石	9.5	9.0	4.0	423	輝石安山岩	113-5		
35	45		凹石	13.5	8.4	4.3	510	砂岩	113-6		
36	45	フ	磨石	10.4	7.7	5.3	508	安山岩	113-7		
37	47	フ	打製石斧	18.1	6.5	3.2	393	輝石安山岩 (焼岳)	113-8		
38	51		磨石	11.6	9.8	8.8	748	輝石安山岩	124-4		
39	51			9.7	6.4	4.6	126	輝石安山岩 (乗鞍)	124-1		
40	51		磨石	12.9	10.1	4.9	653	輝石安山岩 (乗鞍)	125-5		
41	51		磨石	10.9	8.7	5.0	570	輝石安山岩 (焼岳)	124-2		

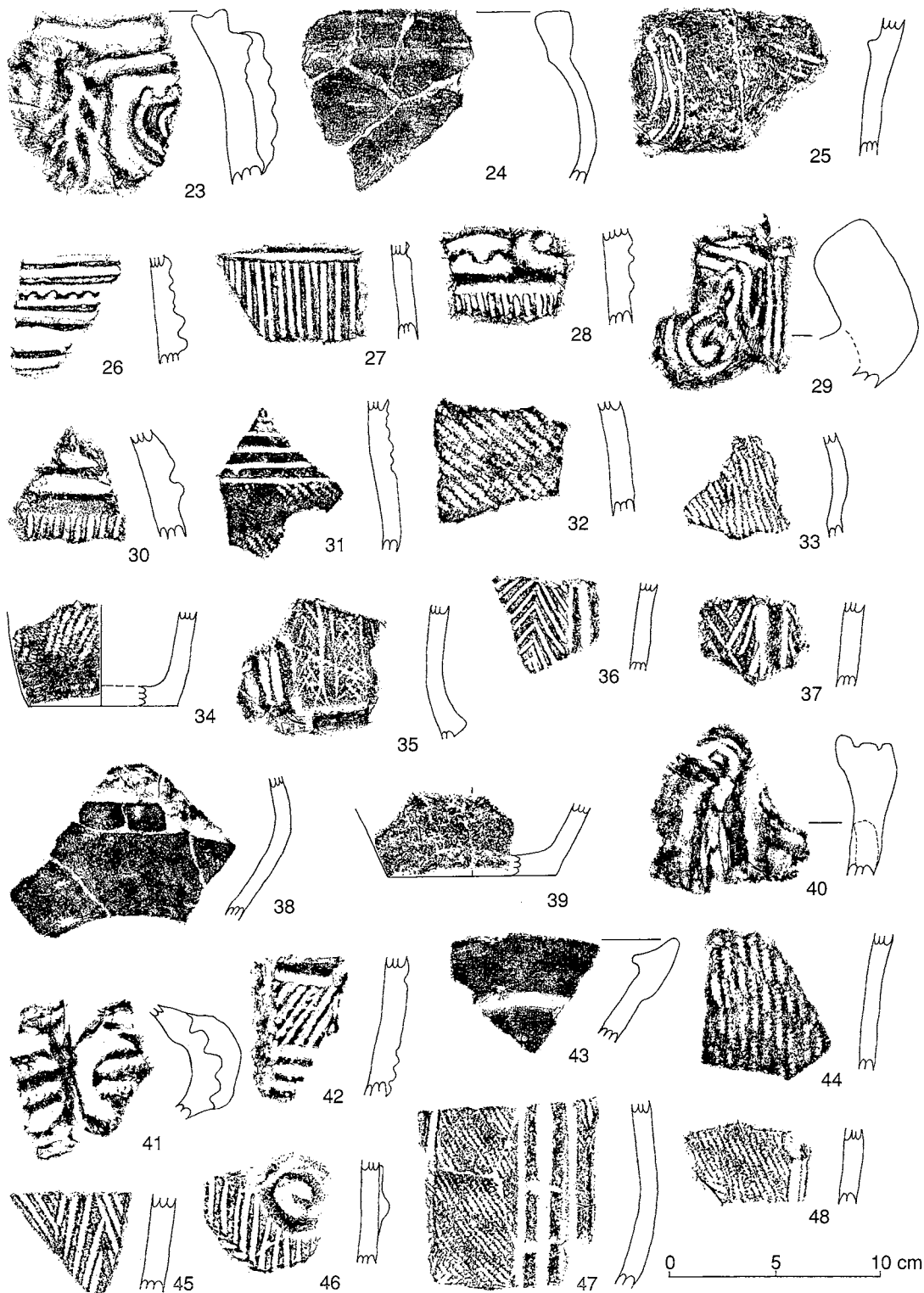
42	51		磨石	11.4	8.2	6.0	746	緑色珩岩 (横尾登山口)	124-3		兼敲打 器
43	51			18.0	19.3	4.3	1950	輝石安山岩 (乗鞍)	124-6		
44	52		打製石斧	16.2	6.3	3.7	380	硅質シルト岩	113-9		
45	52		磨石	11.4	10.5	5.1	862	砂岩	124-9		
46	52		磨石	6.7	5.6	4.0	178	砂岩	124-10		
47	52	フ	打製石斧	12.6	4.2	2.4	132	硅質泥岩	113-15		
48	52	フ	打製石斧	10.7	6.0	1.7	122	変質砂質泥岩	113-13		
49	52	フ	打製石斧	15.7	4.7	1.4	101	硅質シルト岩	113-11		
50	52	フ	打製石斧	12.7	5.7	2.0	170	細粒硅質シルト岩	124-7		
51	52	フ	打製石斧	13.9	5.8	2.6	191	頁岩状泥岩	113-10		
52	52	フ	打製石斧	9.7	4.6	2.0	87	細粒砂岩 (シルト)	113-14	×	
53	52	フ	打製石斧	9.9	4.0	1.1	48	頁岩状泥岩	113-12	×	
54	52	フ	打製石斧	11.2	5.1	2.3	125	細粒硅質シルト岩	124-8		
55	53		打製石斧	10.6	4.6	1.5	8.6	細粒硅質シルト岩	124-11		
56	アルプス学園		打製石斧	13.9	6.4	3.1	262	硅質泥岩	139-6		
57	アルプス学園		石棒片	8.1	10.4	8.1	1450	砂岩	148-10		
58	土坑 160		磨石	8.7	11.5	6.6	712	花崗岩	139-1		
59	189		打製石斧	11.0	3.5	0.7	34	細粒砂岩	139-3	×	
60	238		打製石斧	15.3	6.1	1.9	177	細粒硅質泥岩	139-4		
61	238		打製石斧	11.3	4.7	1.4	81	細粒硅質泥岩	139-5		
62	A	埋甕 3 内部	磨石	9.3	9.0	7.7	940	輝石安山岩	139-2		
63	B		打製石斧	11.4	5.3	1.9	103	安山岩	145-1	×	
64	B		打製石斧	11.5	5.5	1.5	106	頁岩状砂質泥岩	145-2		
65	B		打製石斧	11.4	5.5	1.9	139	砂質泥岩	145-3	×	
66	B		打製石斧	11.2	4.7	1.5	107	細粒砂岩	145-4	×	
67	B		打製石斧	12.5	3.8	1.5	94	頁岩状砂質泥岩	145-5		
68	B		打製石斧	12.5	6.2	1.4	149	頁岩状砂質泥岩	145-6		
69	B		打製石斧	10.2	4.3	1.1	67	頁岩状泥岩 (流紋岩侵入)	145-7	×	
70	B		打製石斧	14.2	4.9	2.0	156	頁岩状砂質泥岩	145-8		
71	B		打製石斧	11.0	5.0	1.8	149	頁岩状硅質シルト岩	145-9		
72	B		打製石斧	10.6	5.7	1.5	114	シルト岩	145-10	×	
73	B		打製石斧	12.0	7.2	2.5	218	細粒硅質泥岩	145-11	×	
74	B		打製石斧	12.0	5.5	2.0	139	細粒硅質泥岩	145-12	×	
75	B		打製石斧	10.6	5.5	1.5	85	頁岩状泥岩	145-13		
76	B		打製石斧	13.2	6.7	1.8	192	細粒硅質泥岩	145-14	×	
77	B		打製石斧	9.8	5.2	1.7	94		145-15		現物行 方不明
78	B		打製石斧	11.5	4.8	2.3	156	頁岩状硅質シルト岩	145-16		
79	B		打製石斧	11.2	5.5	2.6	183	細粒硅質泥岩	146-1	×	
80	B		打製石斧	8.5	4.5	1.3	43	頁岩状砂質泥岩	146-2		
81	B		打製石斧	13.3	6.5	1.3	114	シルト岩	146-3	×	
82	B		打製石斧	12.6	4.9	2.5	198	頁岩状硅質シルト岩	146-4	×	

83	B		打製石斧	10.5	5.3	1.7	109	細粒硅質泥岩	146-5	×	
84	B		打製石斧	12.5	4.4	1.6	103	頁岩状硅質泥岩	146-6	×	
85	B		打製石斧	10.5	5.0	1.9	100	頁岩状砂質泥岩	146-7		
86	B		打製石斧	13.8	5.6	2.4	191	頁岩状泥岩	146-8		
87	B		磨石	10.9	8.0	6.0	520	輝石安山岩 (乗鞍)	139-11		
88	B	検	打製石斧	8.3	5.7	1.9	120	頁岩状硅質シルト岩	146-9	×	
89	B	検	打製石斧	11.7	5.0	2.4	139	細粒砂質泥岩	146-10	×	
90	B	検	打製石斧	7.3	5.1	1.4	72	硅質シルト岩	146-11	×	
91	B	検	打製石斧	11.2	6.2	1.8	144	硅質シルト岩	146-12		
92	B		磨石・凹石	11.2	6.7	5.3	548	輝石安山岩	139-9		
93	B区M区間		打製石斧	11.2	4.7	1.6	90	細粒硅質泥岩	146-13		
94	K		石鏃	1.9	1.2	0.3	1	黒曜石	148-7		
95	K	検出面	石鏃	1.4	1.3	0.3	1	黒曜石	148-8		
96	K		磨石	9.0	7.3	6.1	494	砂岩	139-8		
97	K		磨石	6.6	5.9	4.5	222	安山岩 (乗鞍)	139-7		
98	L		磨石	10.7	8.6	6.4	604	輝石安山岩 (乗鞍)	139-10		
99	L		打製石斧	11.1	3.6	1.2	51	チャート	146-14		
100	L		打製石斧	10.1	4.6	2.4	94	細粒片状硅質シルト	146-15	×	
101	M		打製石斧	10.4	4.8	1.3	79	硅質泥岩	146-16	×	
102	M		打製石斧	13.6	6.1	2.4	235	変質白色泥岩	147-1	×	
103	M		打製石斧	12.8	7.0	1.9	172	頁岩状泥岩	147-2		
104	M		打製石斧	10.1	4.1	2.5	116	片状硅質シルト	147-3	×	
105	M		打製石斧	13.4	4.8	1.3	81	砂質泥岩	147-4		
106	M		打製石斧	14.4	3.7	1.5	106	片状硅質シルト	147-5	×	
107	M		打製石斧	13.5	5.8	1.3	112	変質頁岩状泥岩	147-6	×	
108	M		打製石斧	13.4	4.8	2.0	137	細粒硅質砂岩	147-7	×	
109	M		打製石斧	9.6	6.3	2.2	139	泥質砂岩	147-8		
110	M		打製石斧	10.8	5.0	2.1	128	砂質泥岩	147-9		
111	M		打製石斧	9.5	4.6	2.7	174	硅質砂質泥岩	147-10		
112	M	検	磨石	10.7	9.1	4.8	636	砂岩	148-6		
113	M		打製石斧	13.1	5.3	2.5	179	細粒泥質砂岩	147-11	×	
114	M		打製石斧	12.4	6.2	2.0	170	泥質砂岩	147-12		
115	M		打製石斧	11.5	5.1	2.0	116	硅質泥岩	147-13		
116	M		打製石斧	11.0	4.3	2.0	83	硅質砂岩	147-14		
117	M		打製石斧	6.5	5.0	1.1	54	細粒硅質砂岩	147-15	×	
118	M		石鏃	1.9	1.6	0.7	2	黒曜石	148-9		
119	M		敲打器	12.1	5.8	2.1	175	泥岩	148-5		
120	M		打製石斧	11.6	4.6	2.0	154	硅質泥岩	148-1	×	
121	M		敲打器	20.9	9.0	3.7	1220	泥岩	148-4		
122	M		打製石斧	7.4	6.5	2.4	119	細粒硅質泥岩状砂岩	148-2	×	
123	M		打製石斧	14.3	4.8	2.2	144	硅質泥岩	148-3	×	

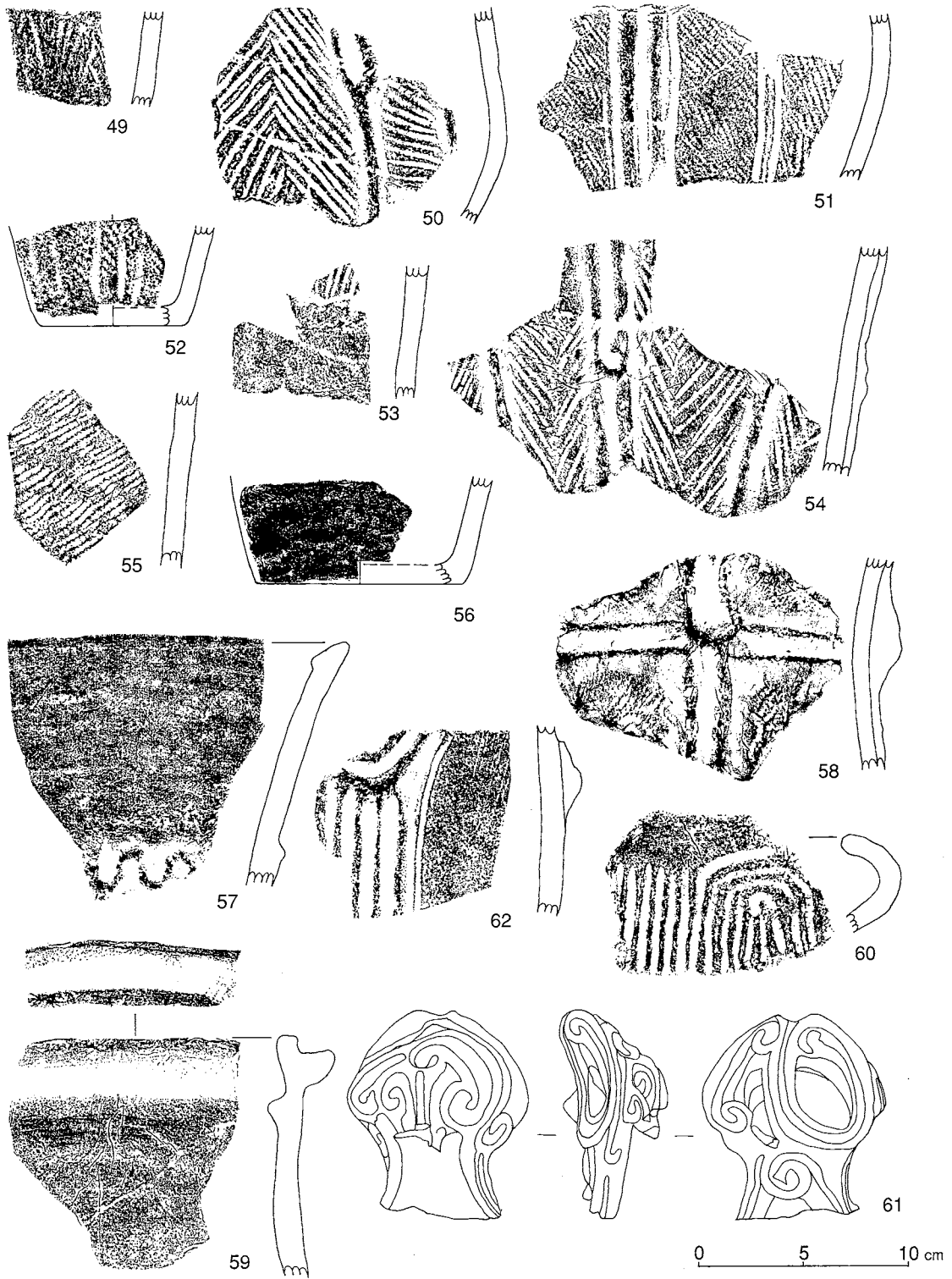


第75図 第26号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）

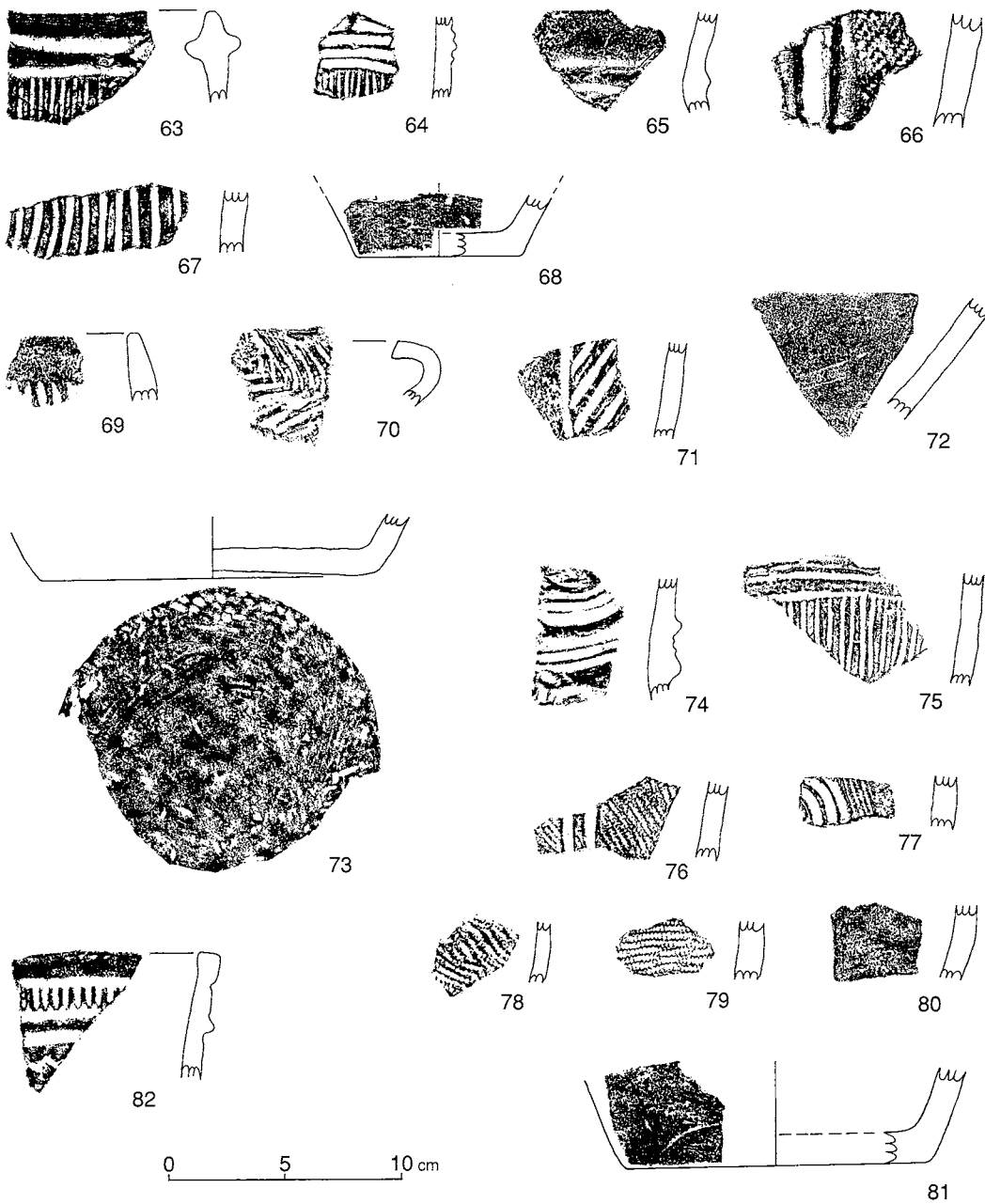
（1～17-床面、18～22-覆土）



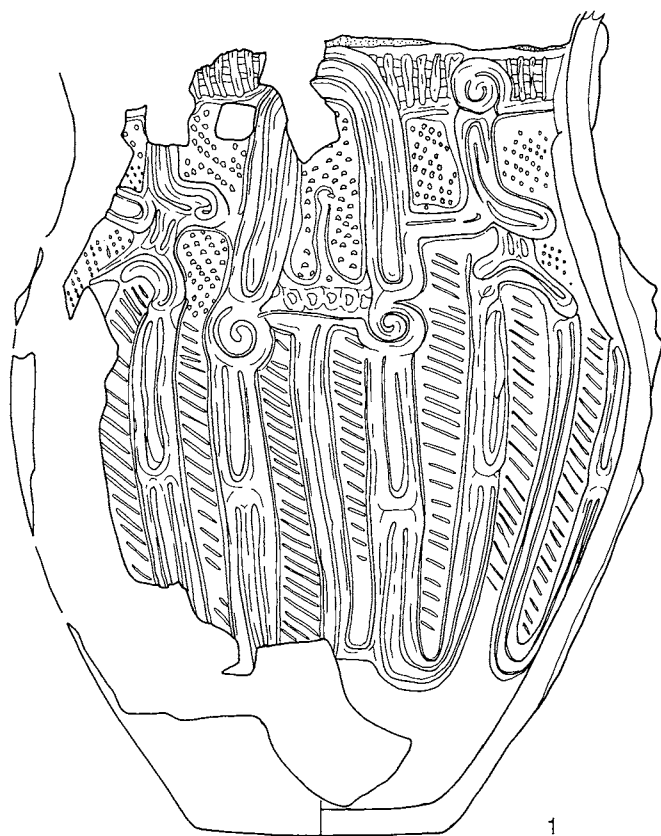
第76図 第26号住居址出土土器拓影(その2)(1:3)



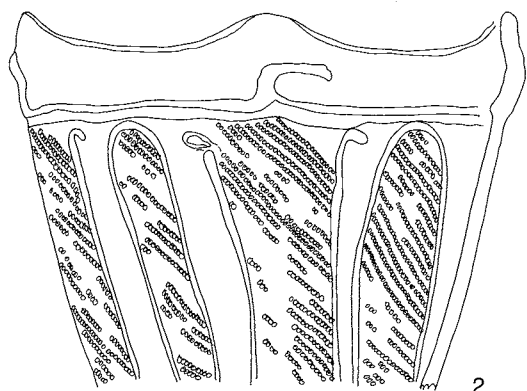
第77図 第26号住居址出土土器拓影（その3）（1：3）



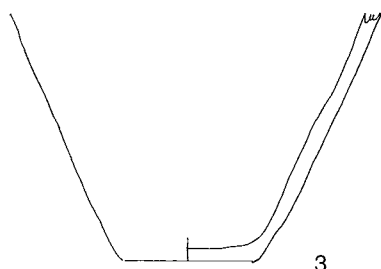
第78図 第26号住居址出土土器拓影（その4）（1：3）
 (63~68 - P₁、69~72 - P₂、73 - P₃、74~81 - P₄、82 - P₅)



1



2

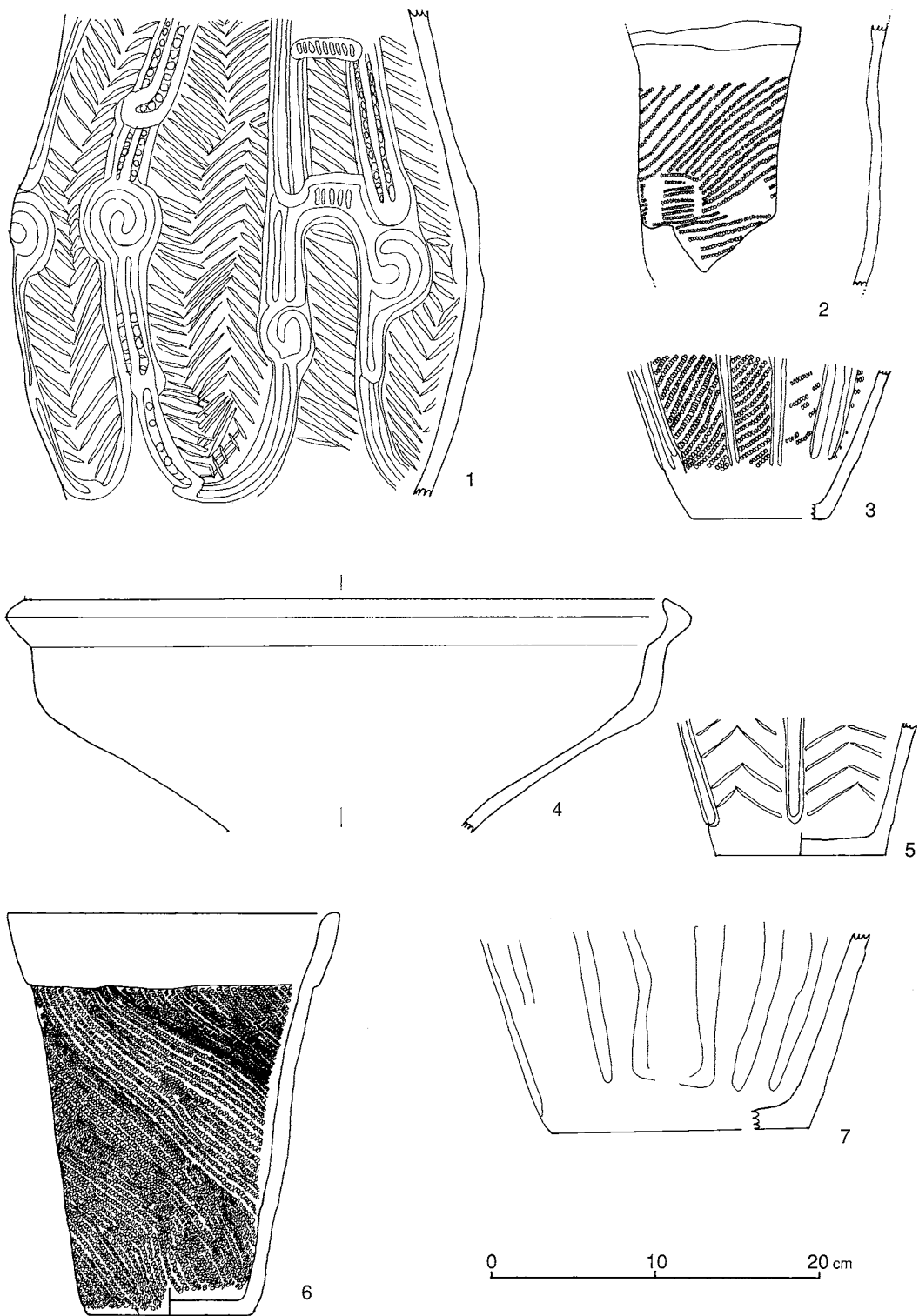


3

0 10 20cm

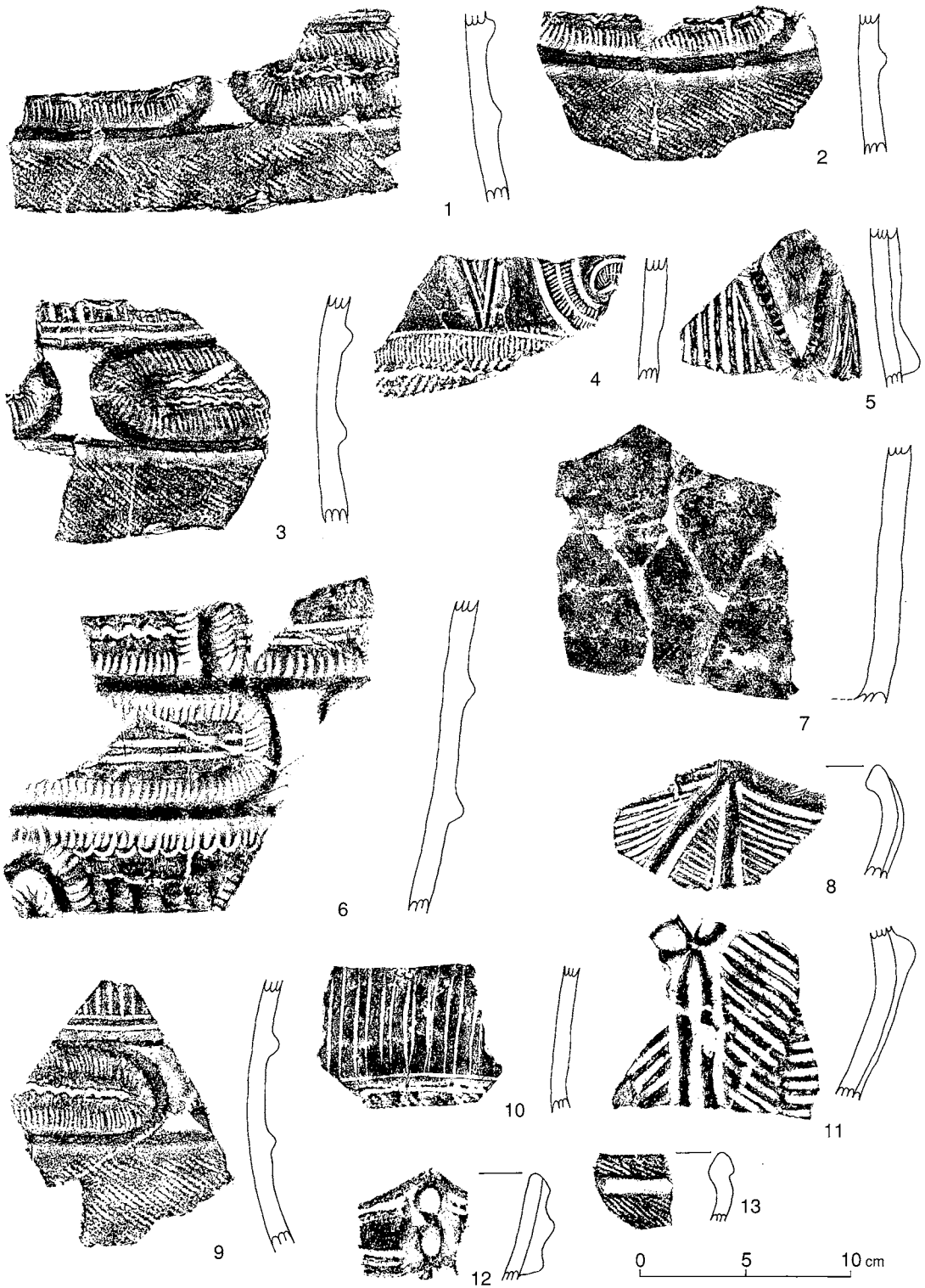
第79図 第26号住居址及び遺構外出土土器 (1:4)

(1-26住、2-アルプス学園前、3-F区)

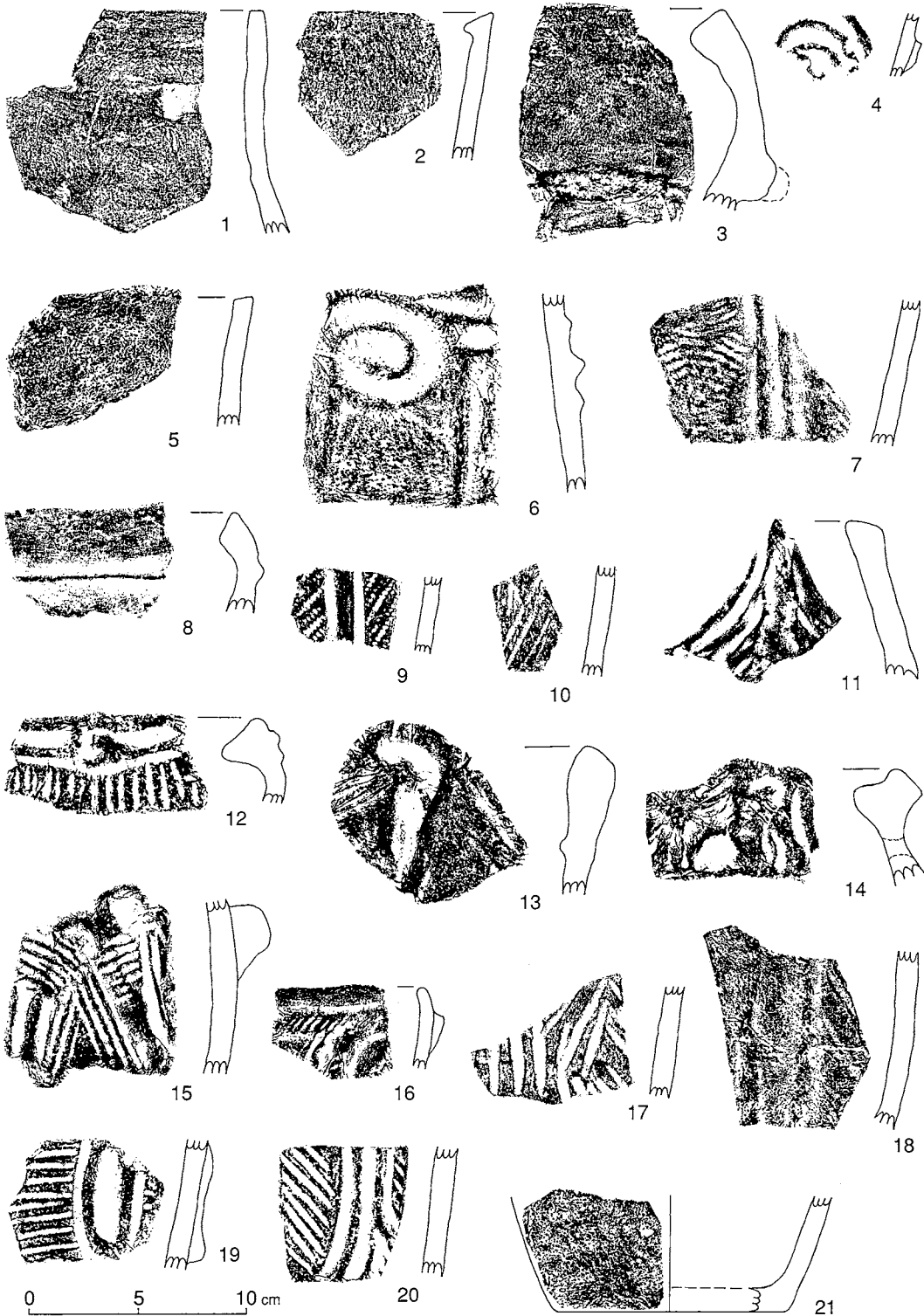


第80图 第26·27·30号住居址出土土器 (1:4)

(1~5-26住、6-27住、7-30住)



第81图 第27号住居址出土土器拓影 (1:3)

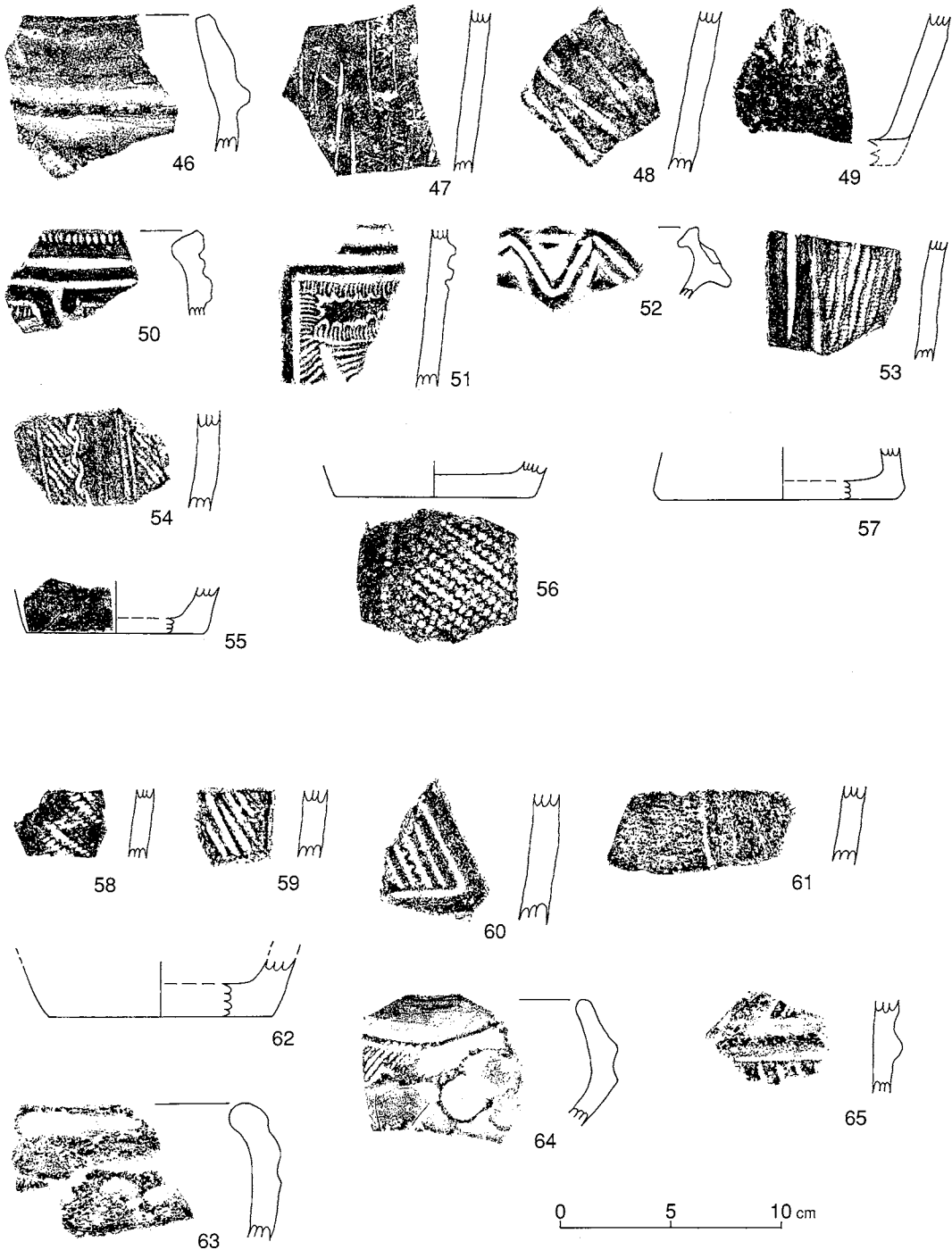


第82図 第28号住居址出土土器拓影(その1) (1:3)



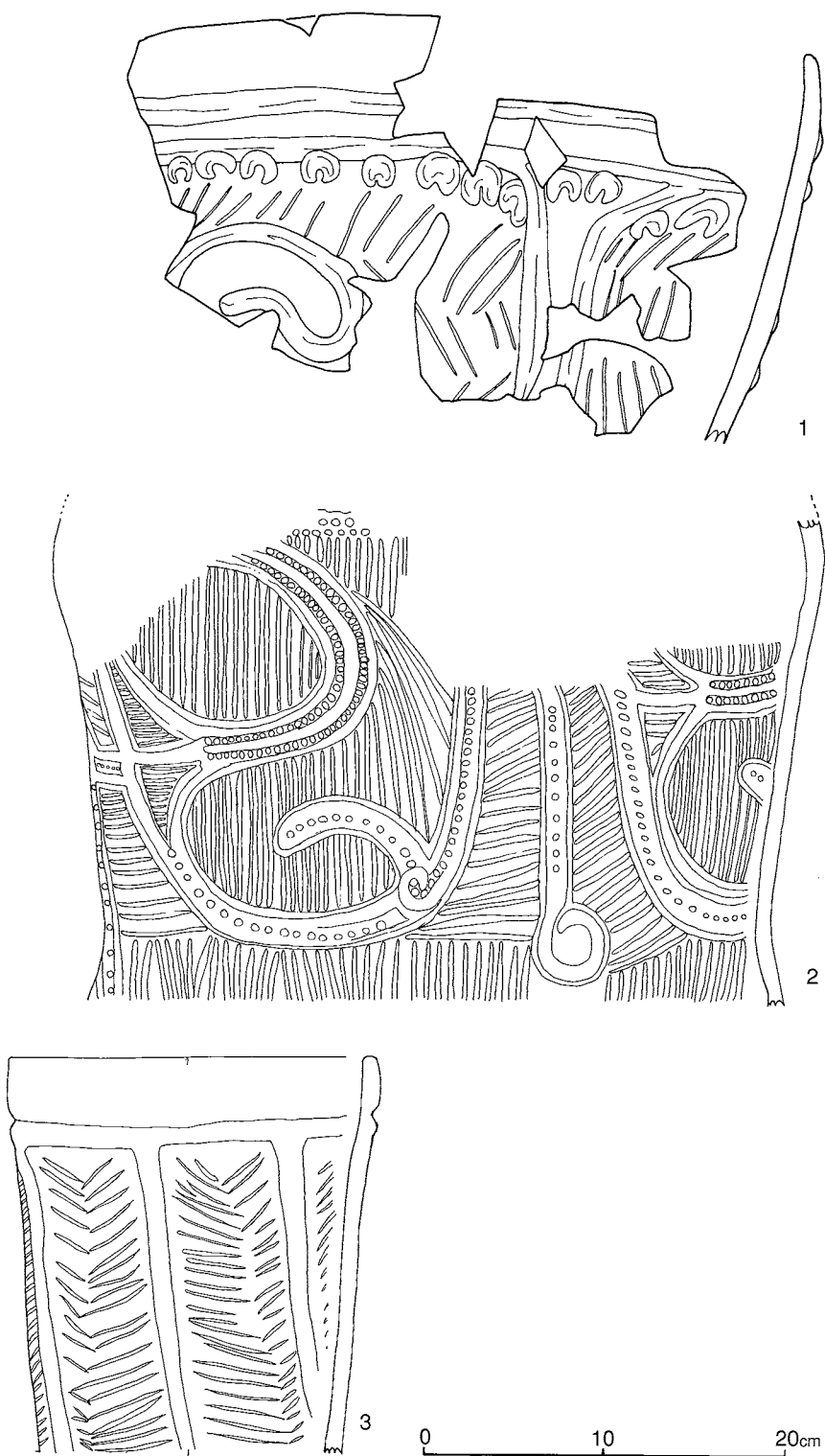
第83図 第28号住居址出土土器拓影(その2)(1:3)

(22~28 - P4、29~33 - 床面、34~45 - 覆土)



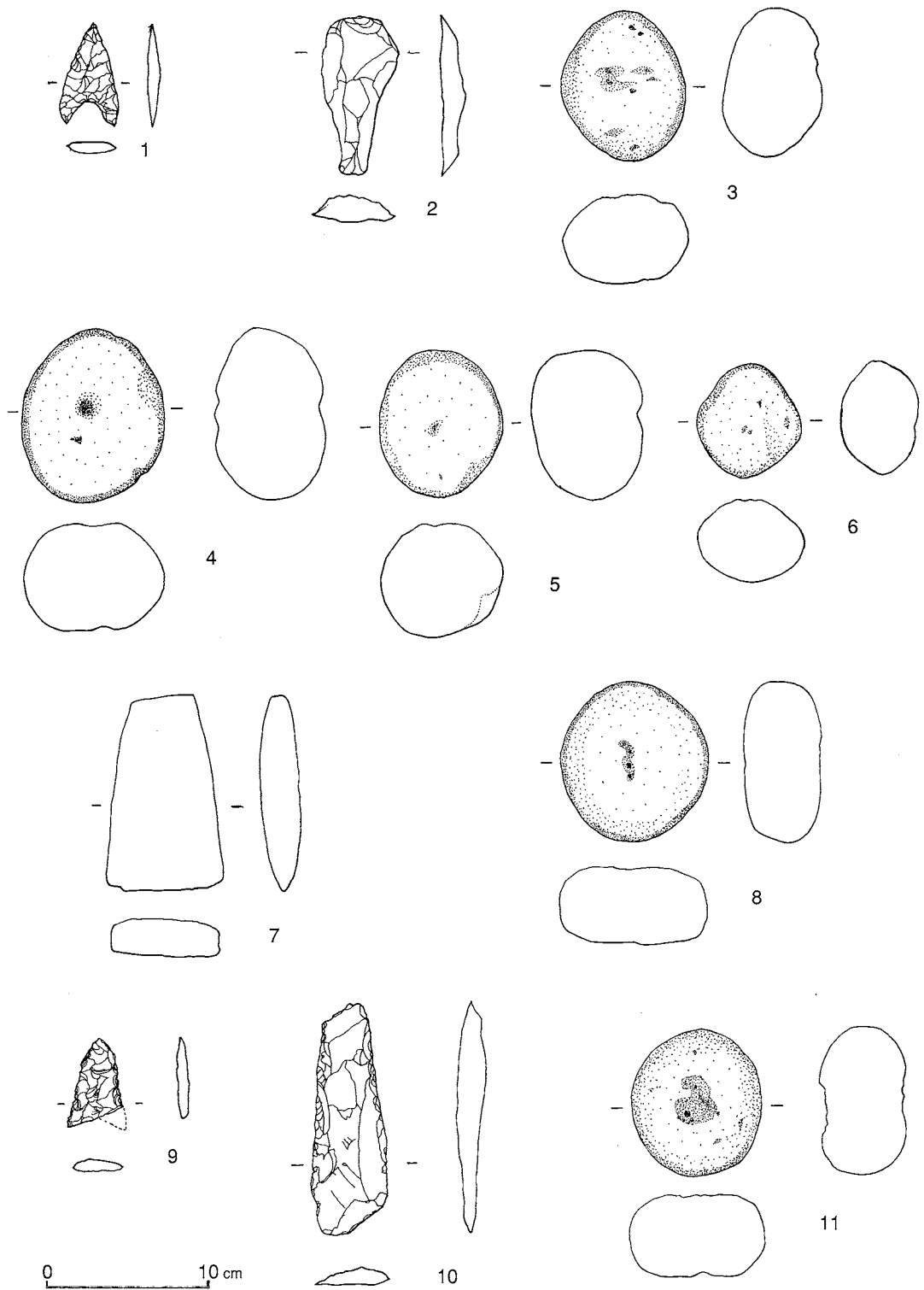
第84図 第28号住居址出土土器(その3)・第29号住居址出土土器拓影(1:3)

(46~57-28住覆土、58~62-29住炉、63~65-29住覆土)

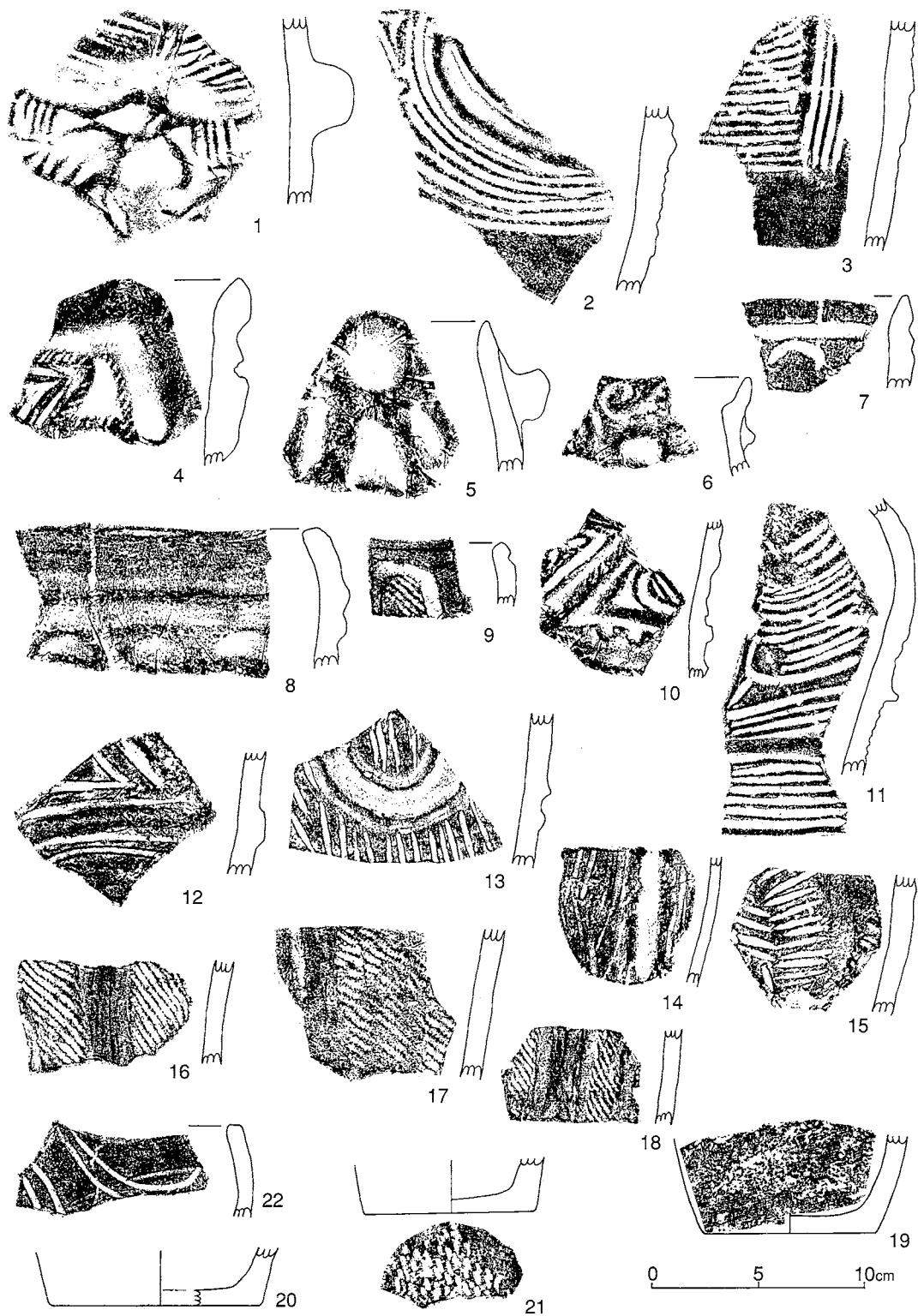


第85图 第28·31号住居址出土土器 (1:4)

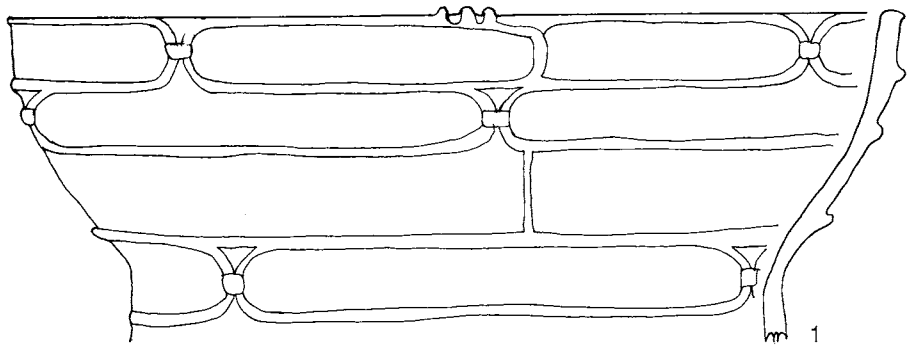
(1~2-28住、3-31住)



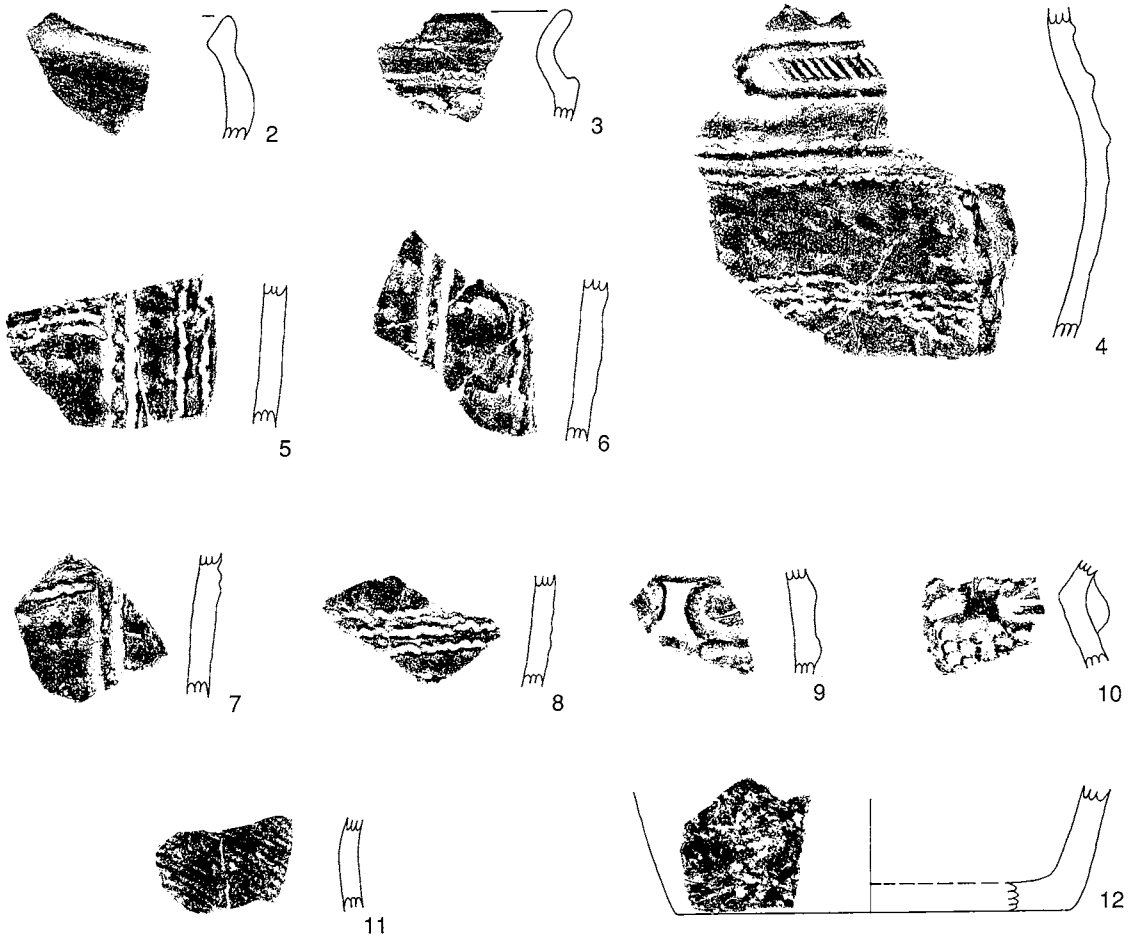
第86図 第26・28・29・30号住居址出土石器 (1・4、1・2・7・9は1:2)
 (1~6-26住、7-28住、8-29住、9~11-30住)



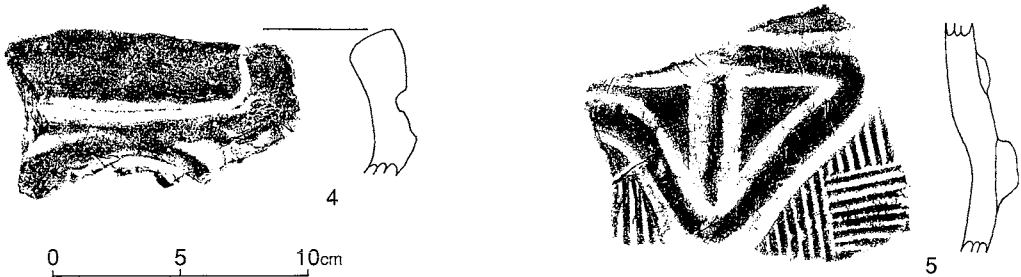
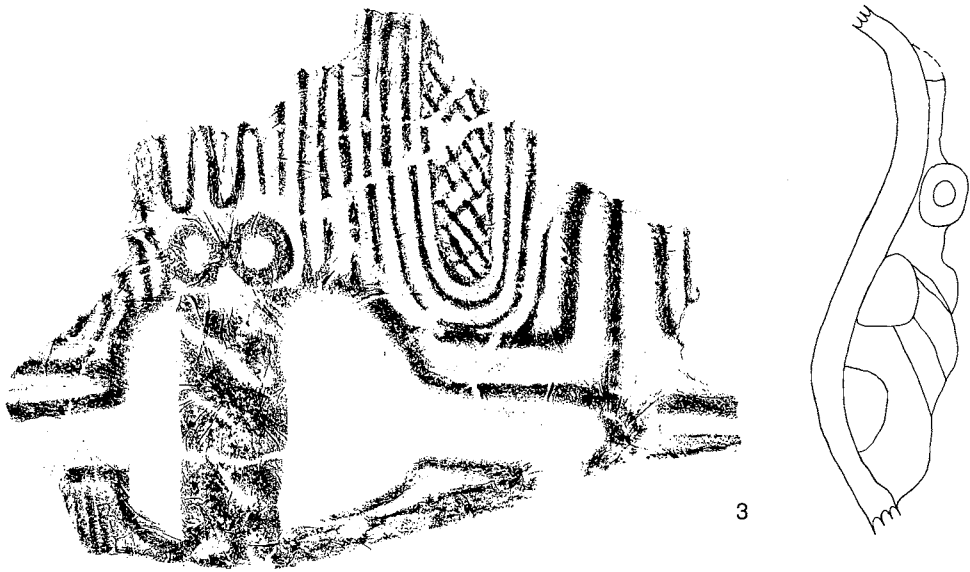
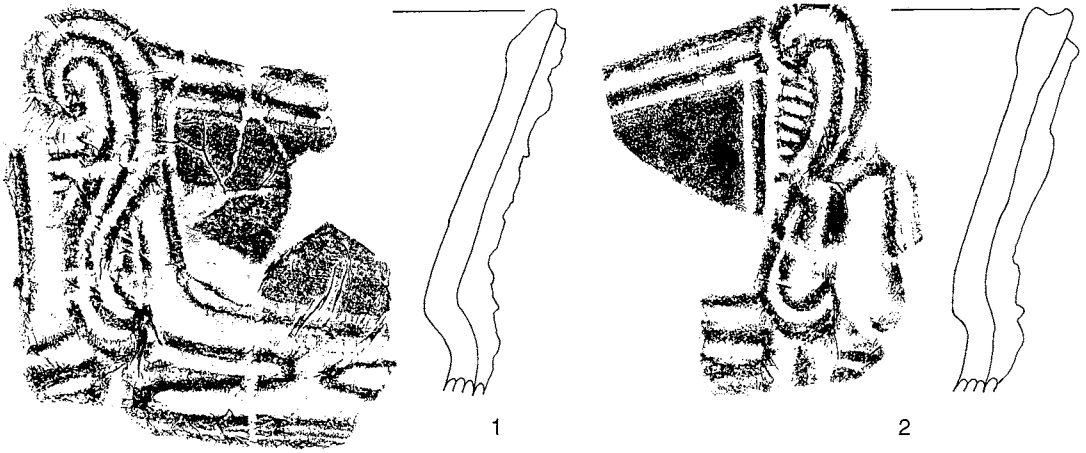
第87图 第30号住居址出土土器拓影 (1:3)
(4~21-覆土)



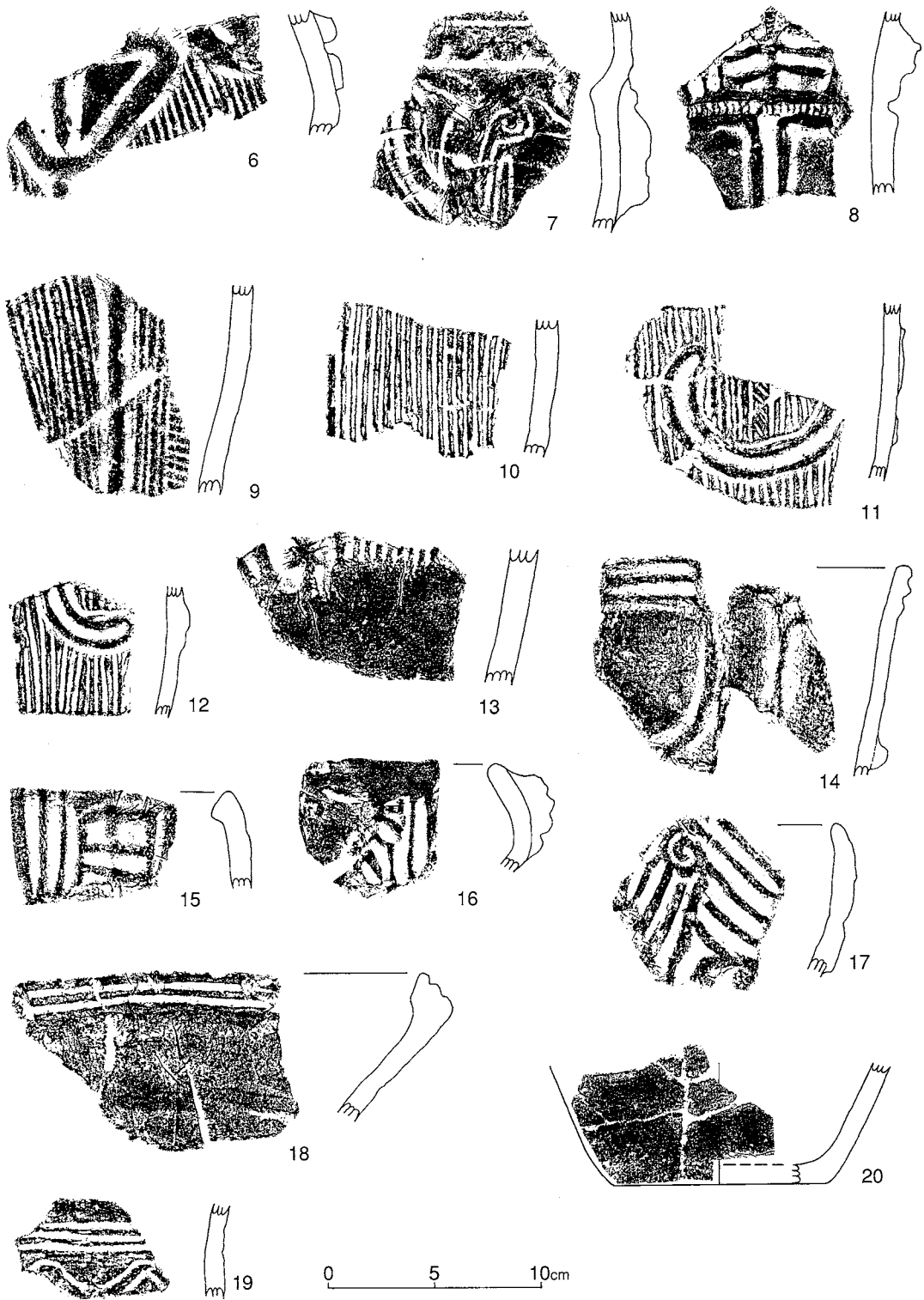
0 5 10cm



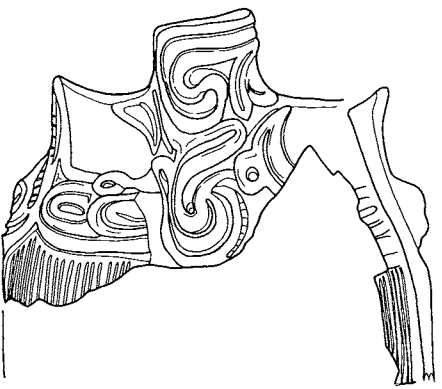
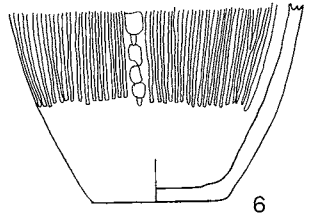
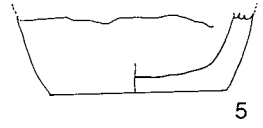
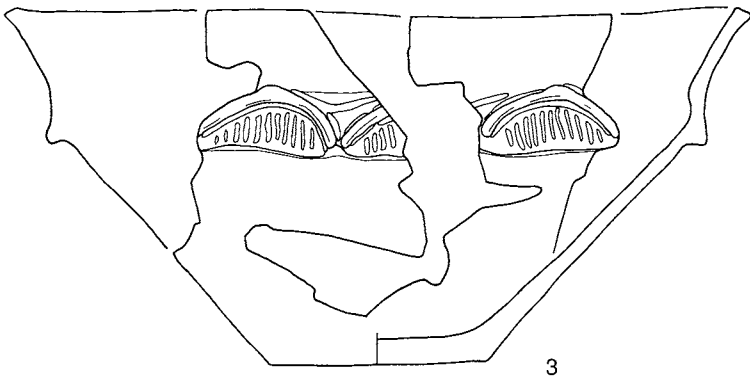
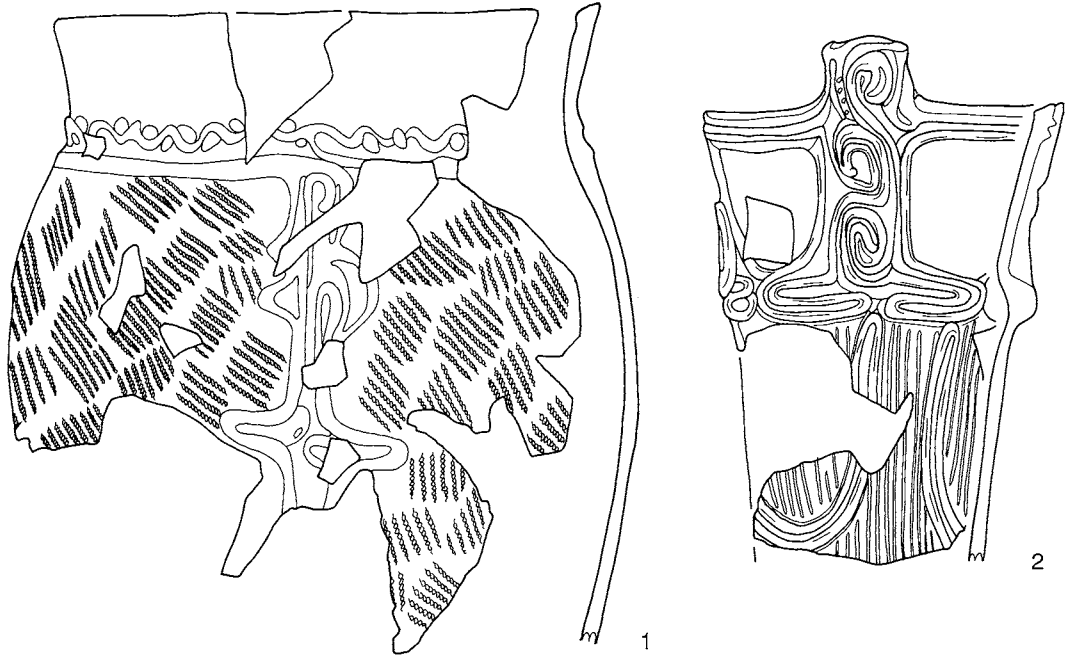
第88图 第32号住居址出土土器



第89図 第33号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）

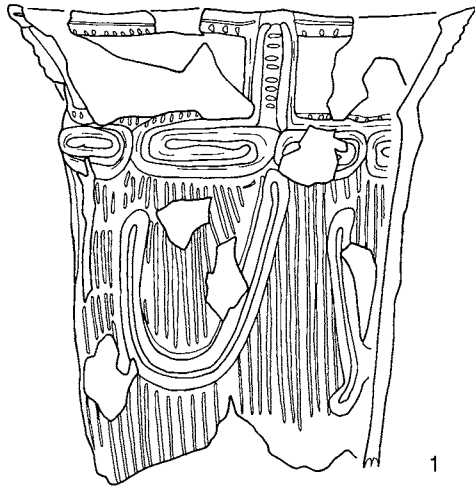


第90図 第33号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

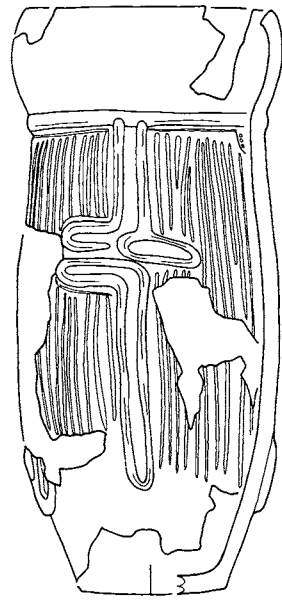


0 10 20cm

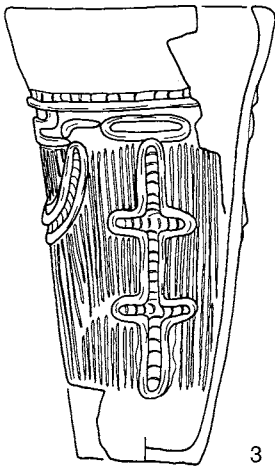
第91图 第33号住居址出土土器 (1:4)



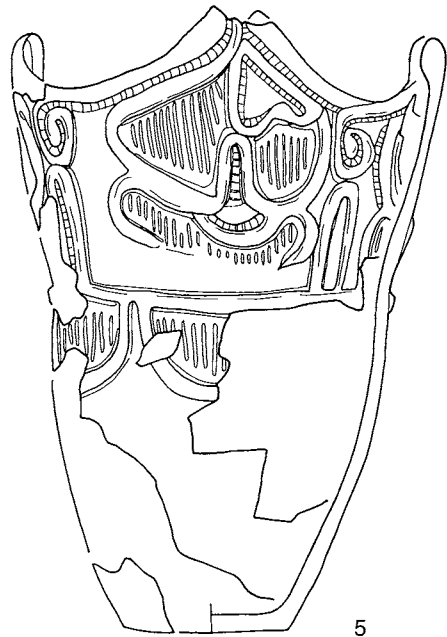
1



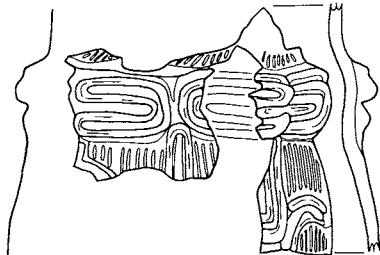
2



3



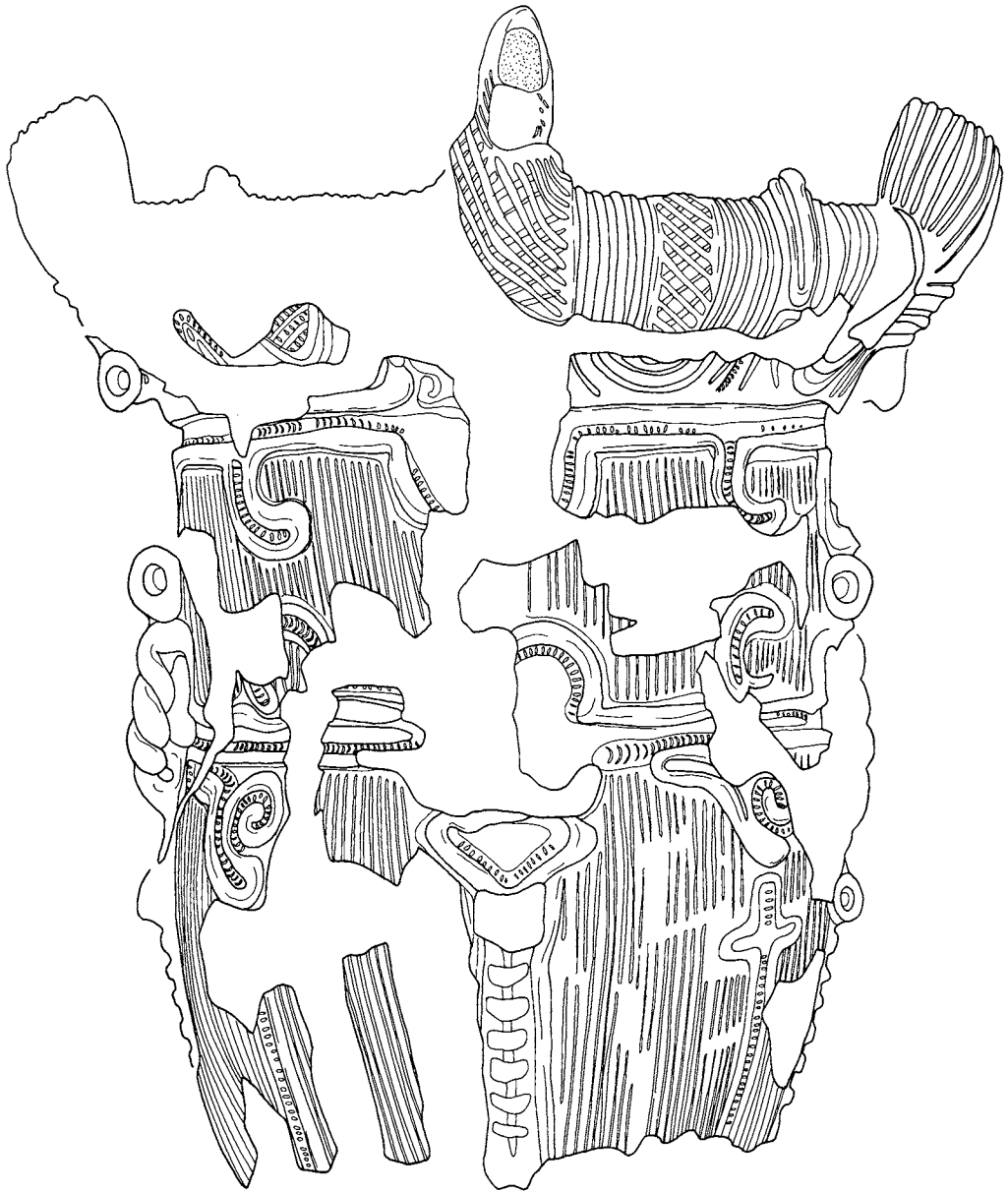
5



4

0 10 20cm

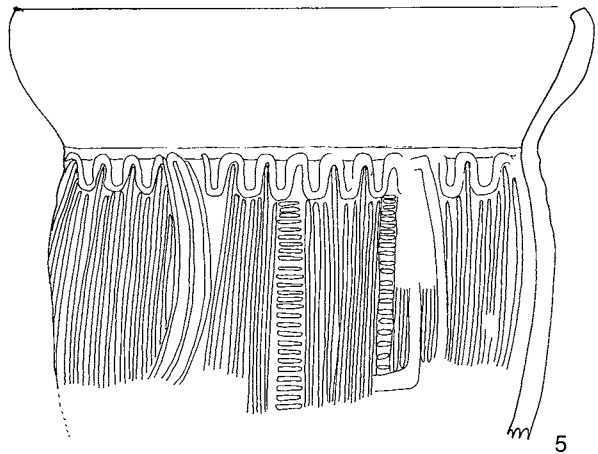
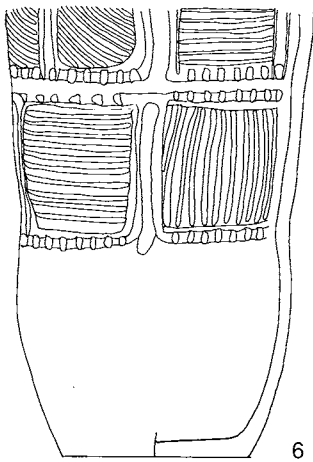
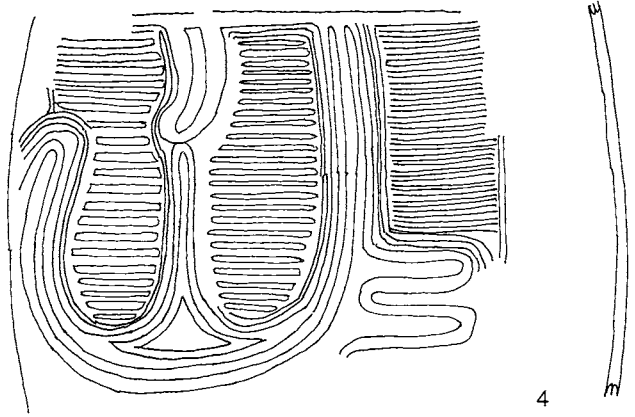
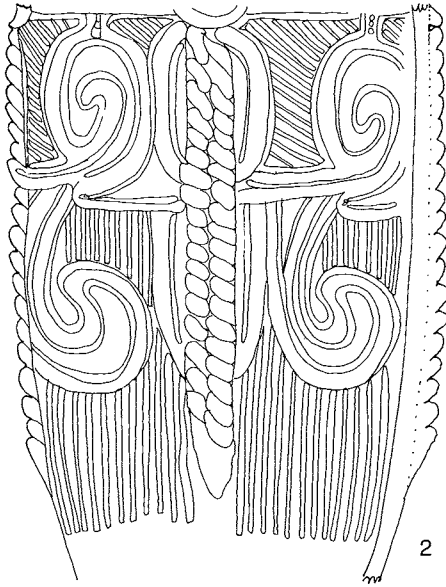
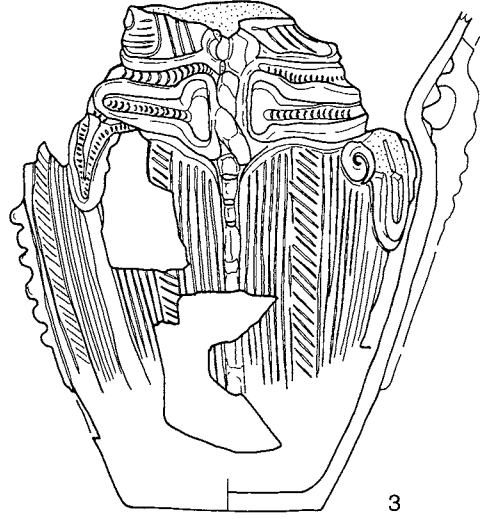
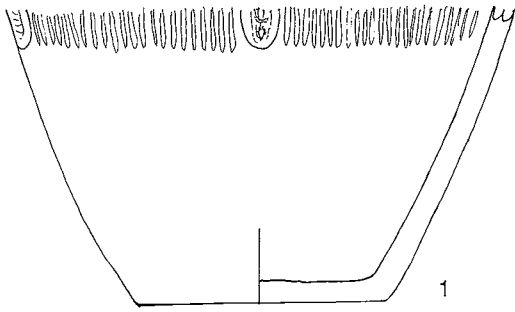
第92图 第33・34号住居址出土土器 (1:4)
(1~2-33住、3~5-34住)



6

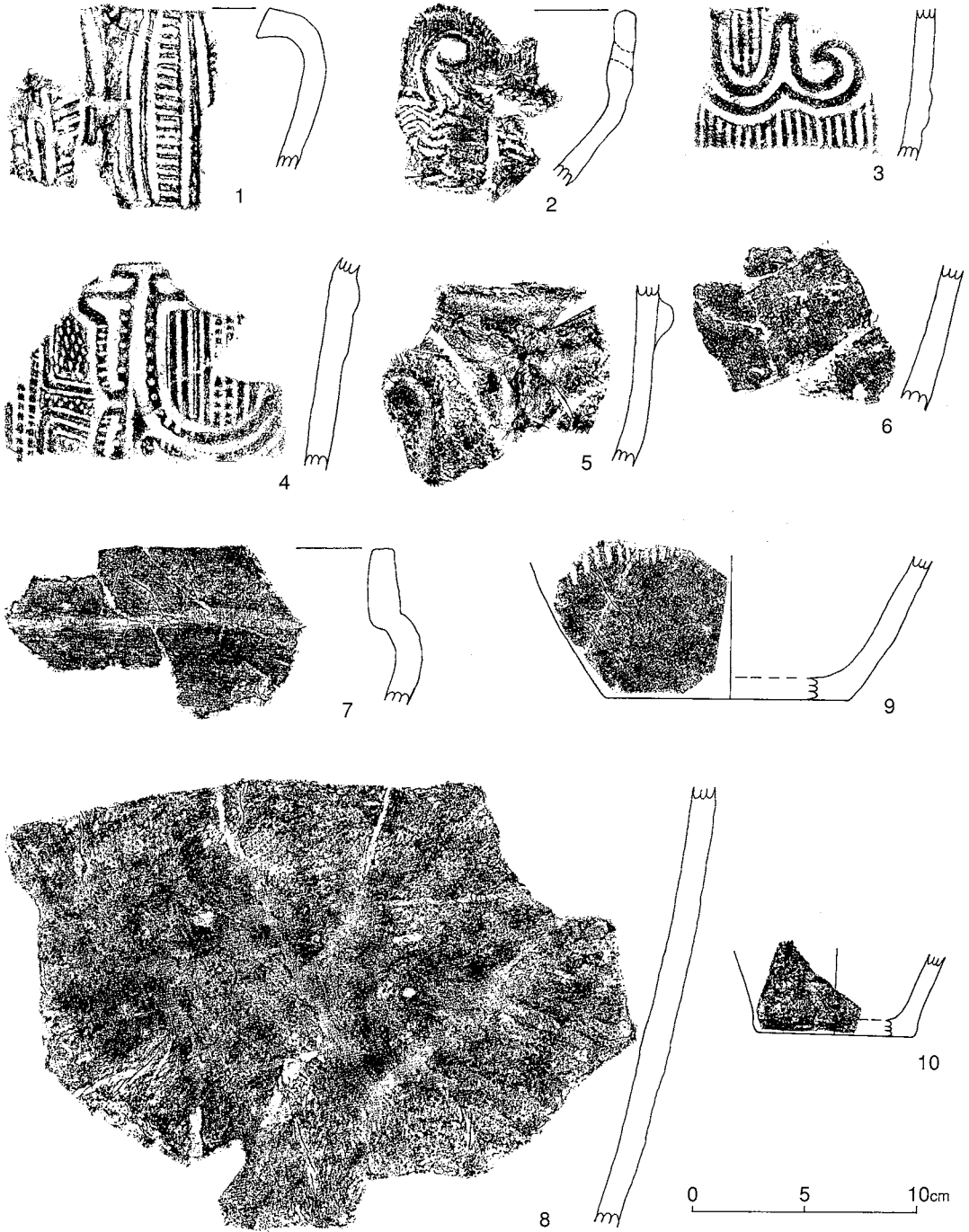
0 10 20cm

第93图 第34号住居址出土土器 (1:4)

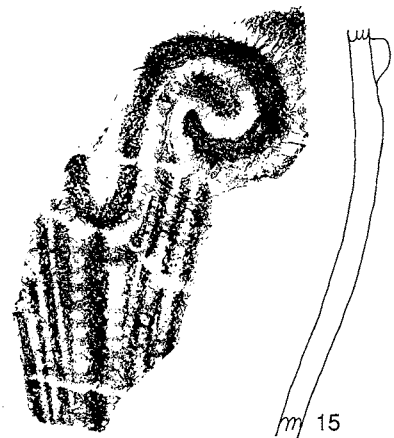
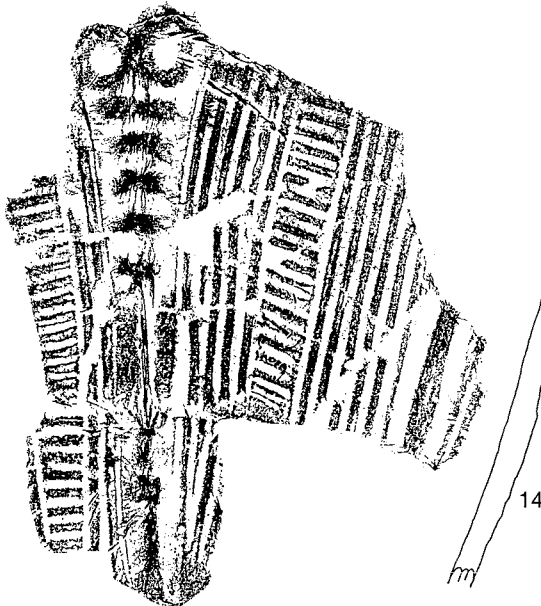
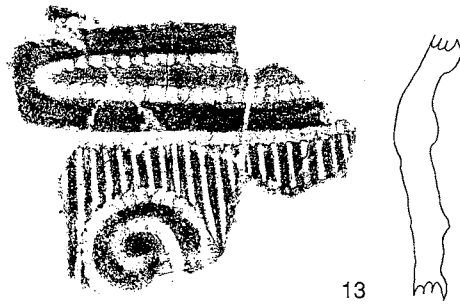
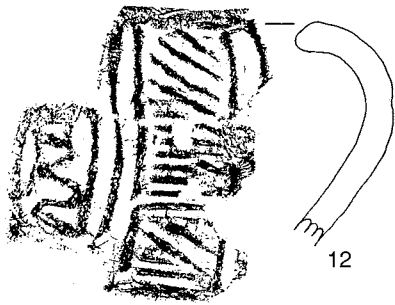
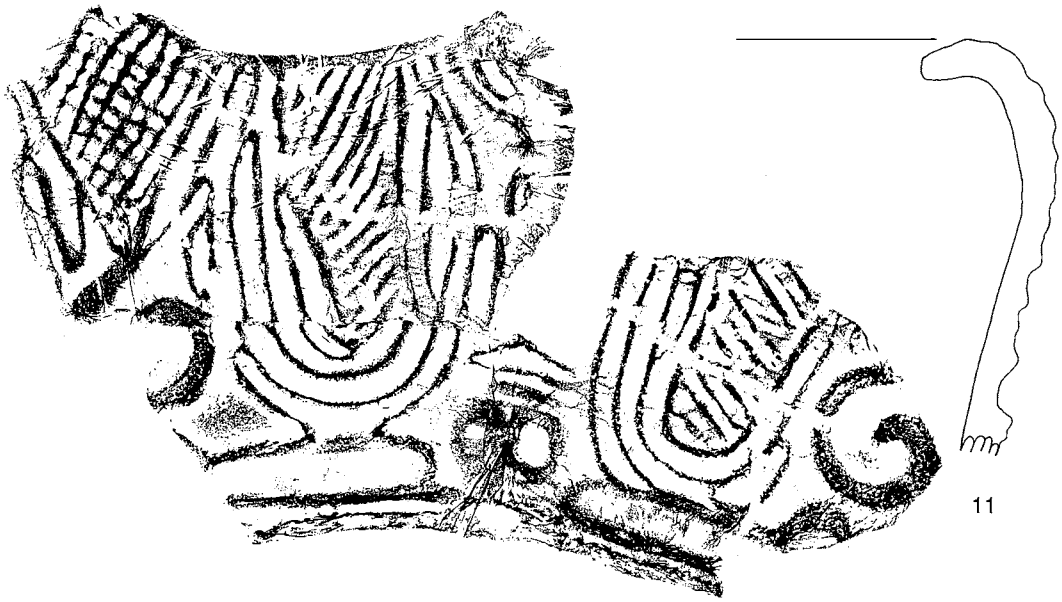


0 10 20cm

第94图 第34·36·37号住居址出土土器 (1:4)
(1~4-34住、5-36住、6-37住)

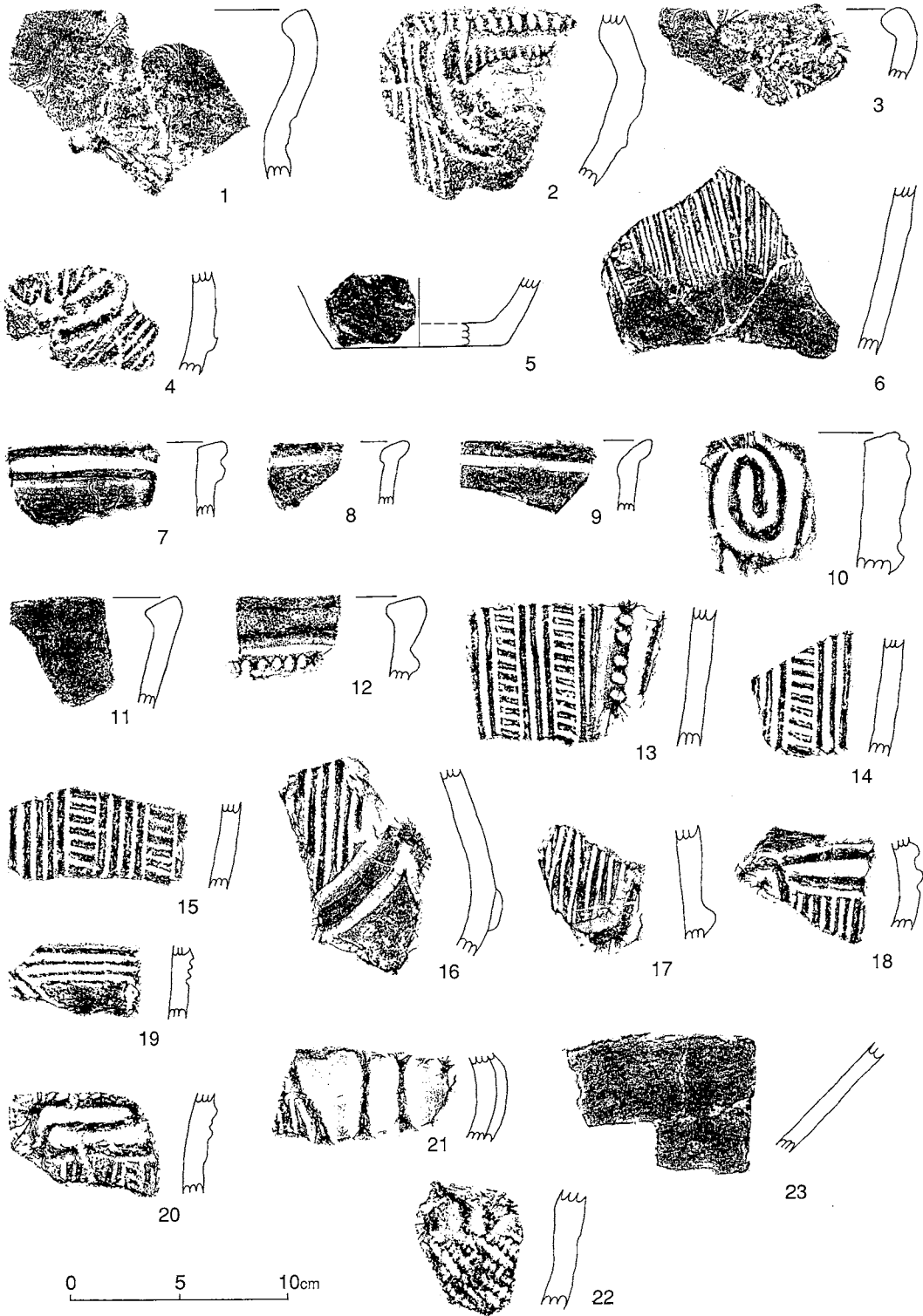


第95図 第34号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）

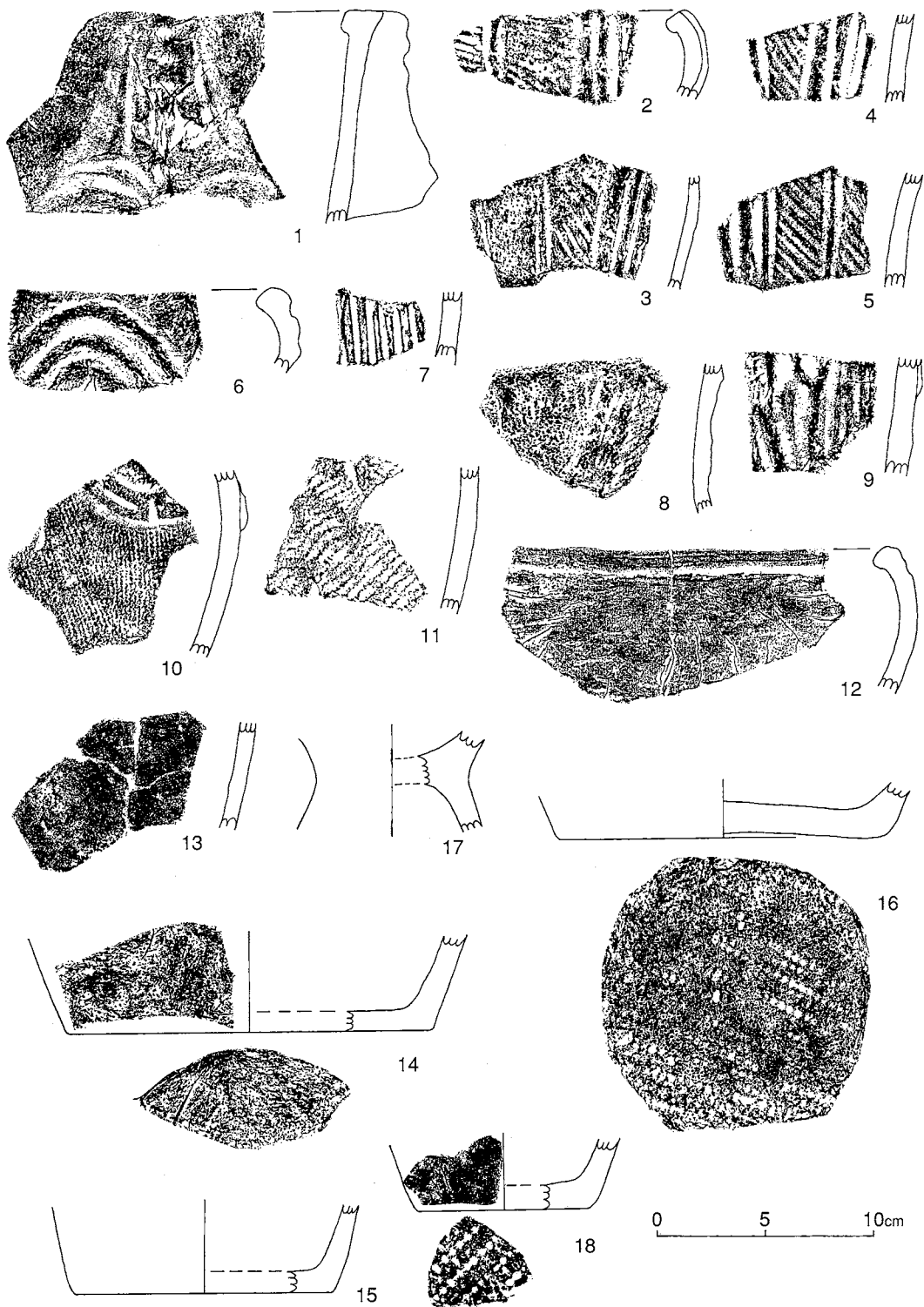


0 5 10cm

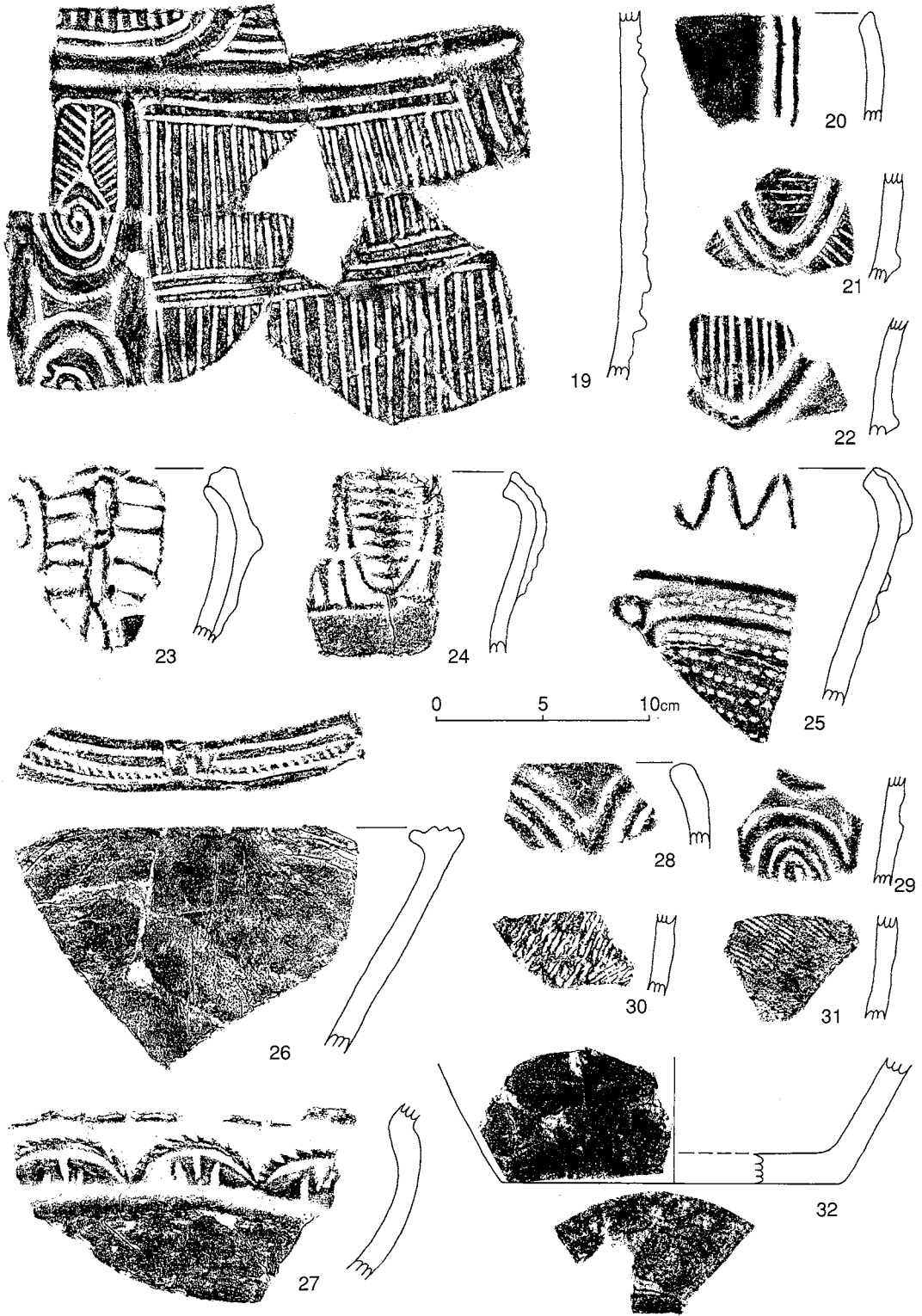
第96図 第34号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）



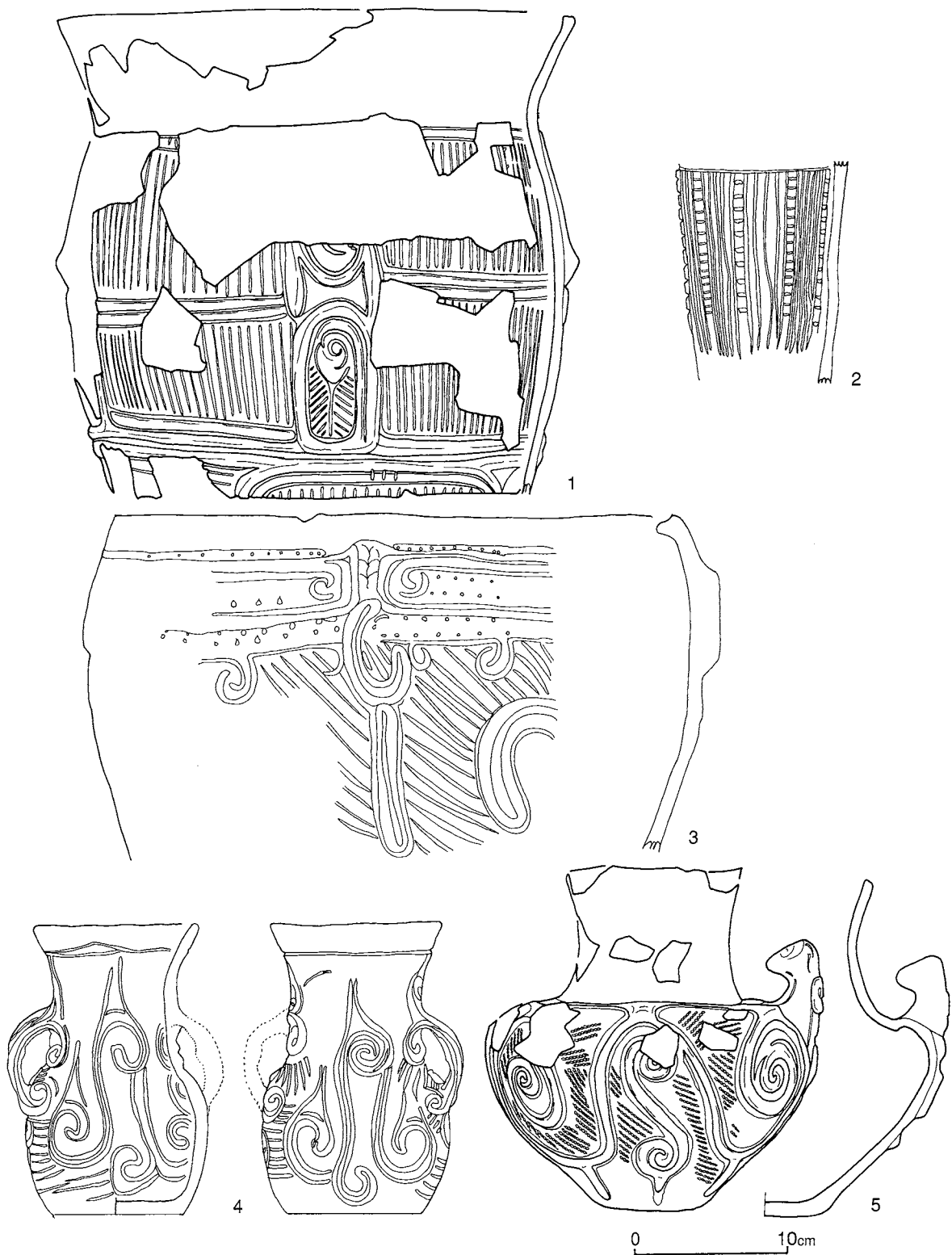
第97图 第36号住居址出土土器拓影 (1:3)



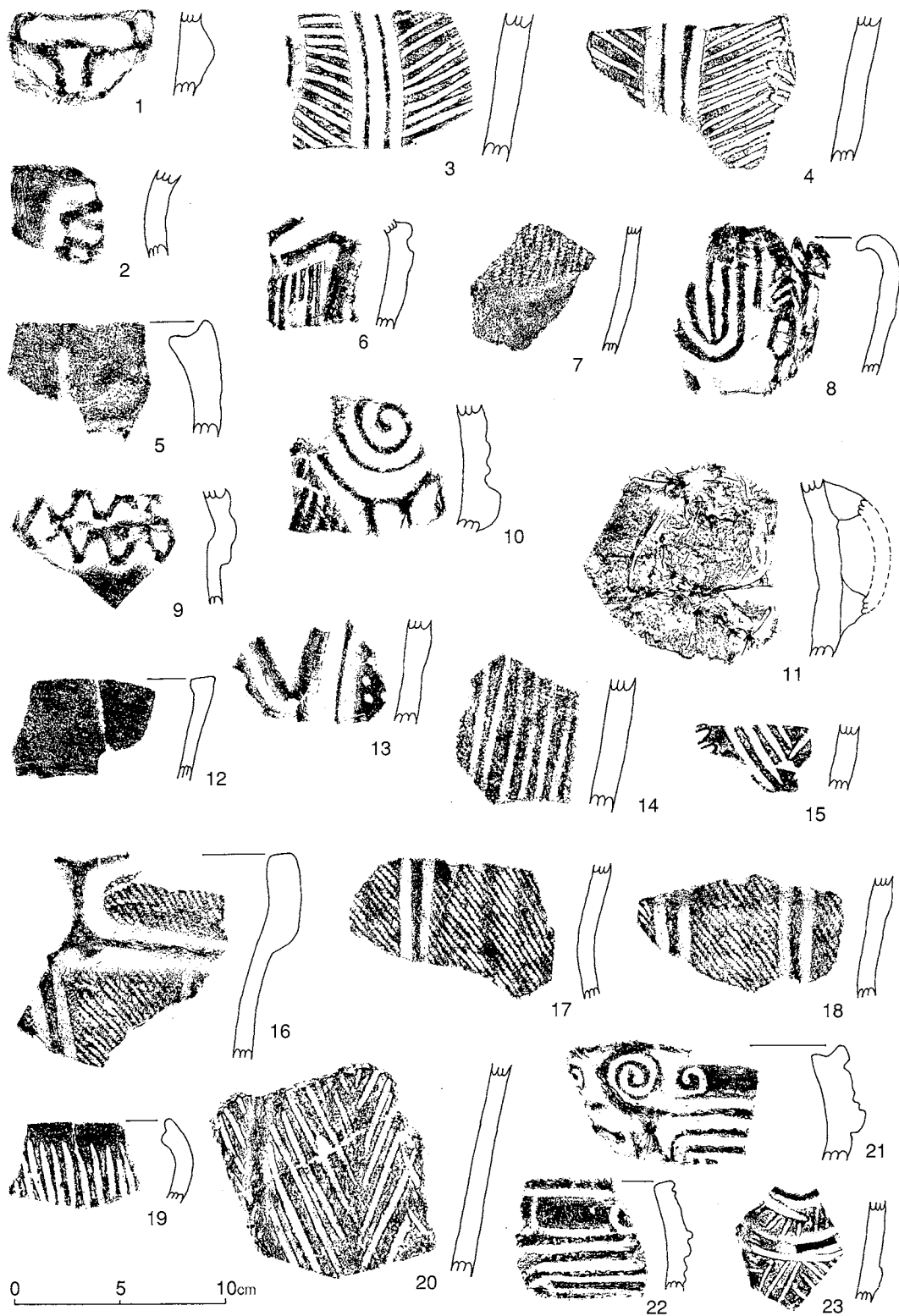
第98図 第37号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）



第99図 第37号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

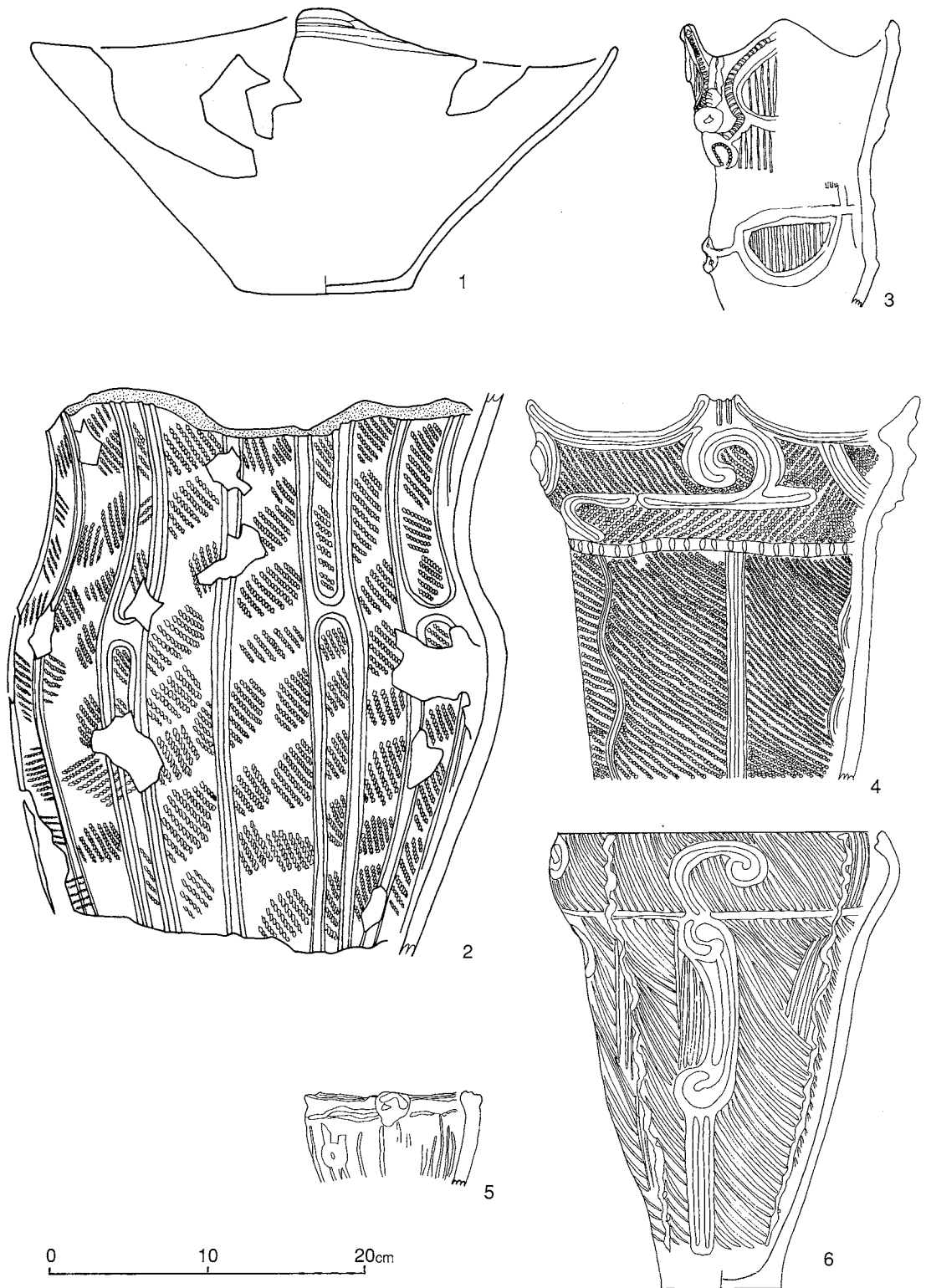


第100图 第37·38号住居址出土土器 (1:4)
 (1~2-37住、3~5-38住)



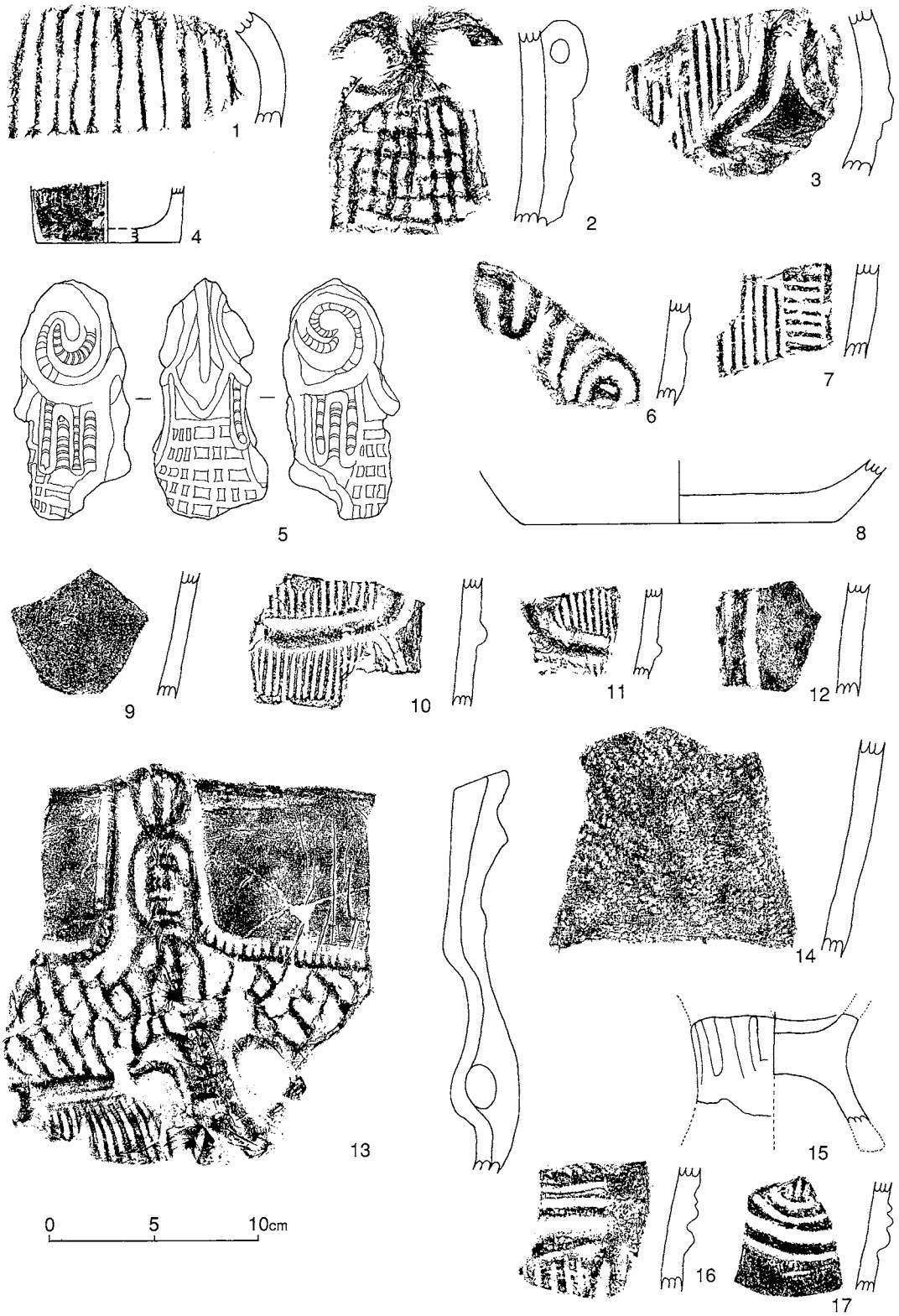
第101图 第38·39号住居址出土土器拓影 (1:3)

(1~15-38住、16~23-39住)

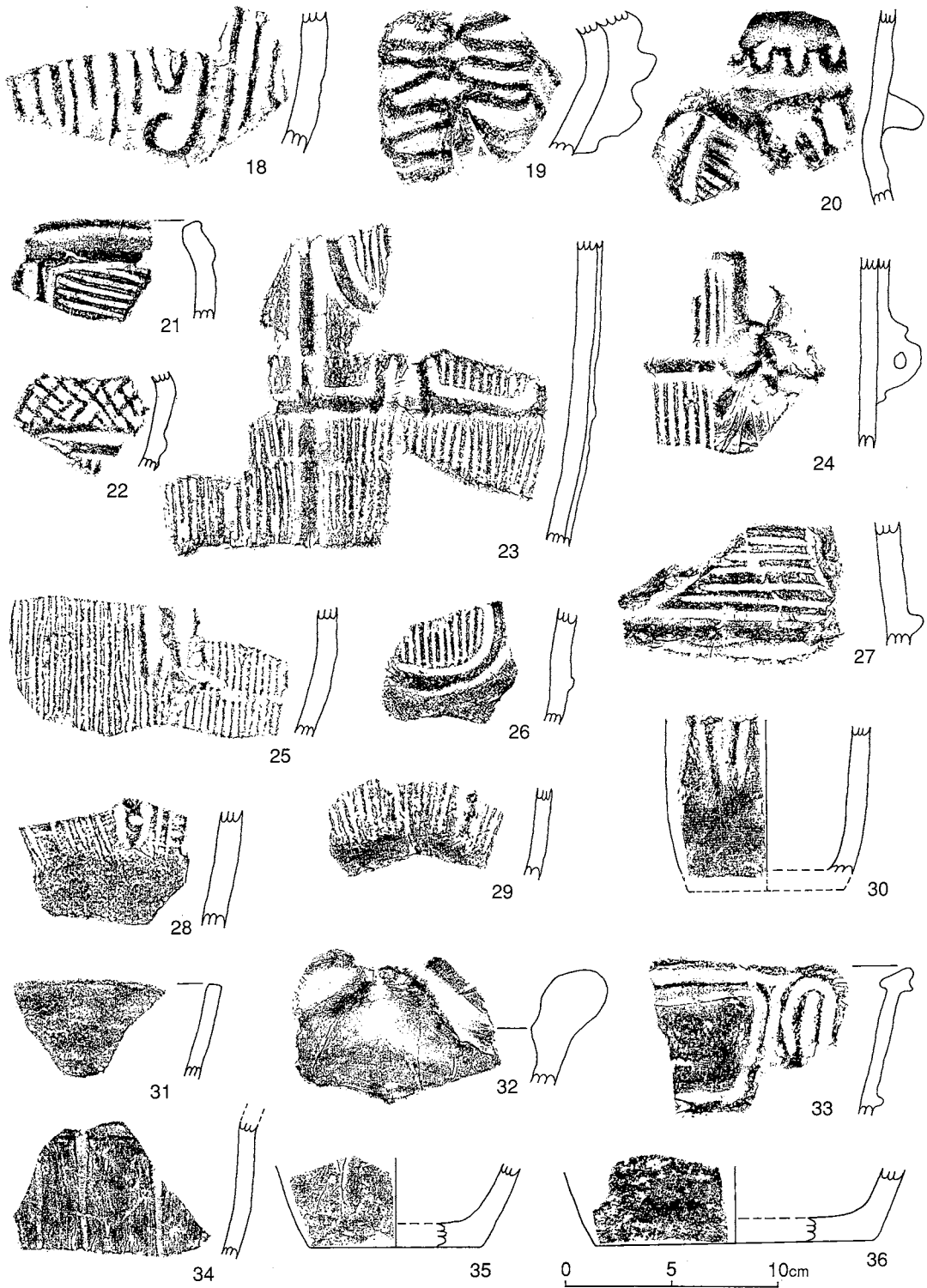


第102图 第38·39·40·42号住居址出土土器 (1:4)

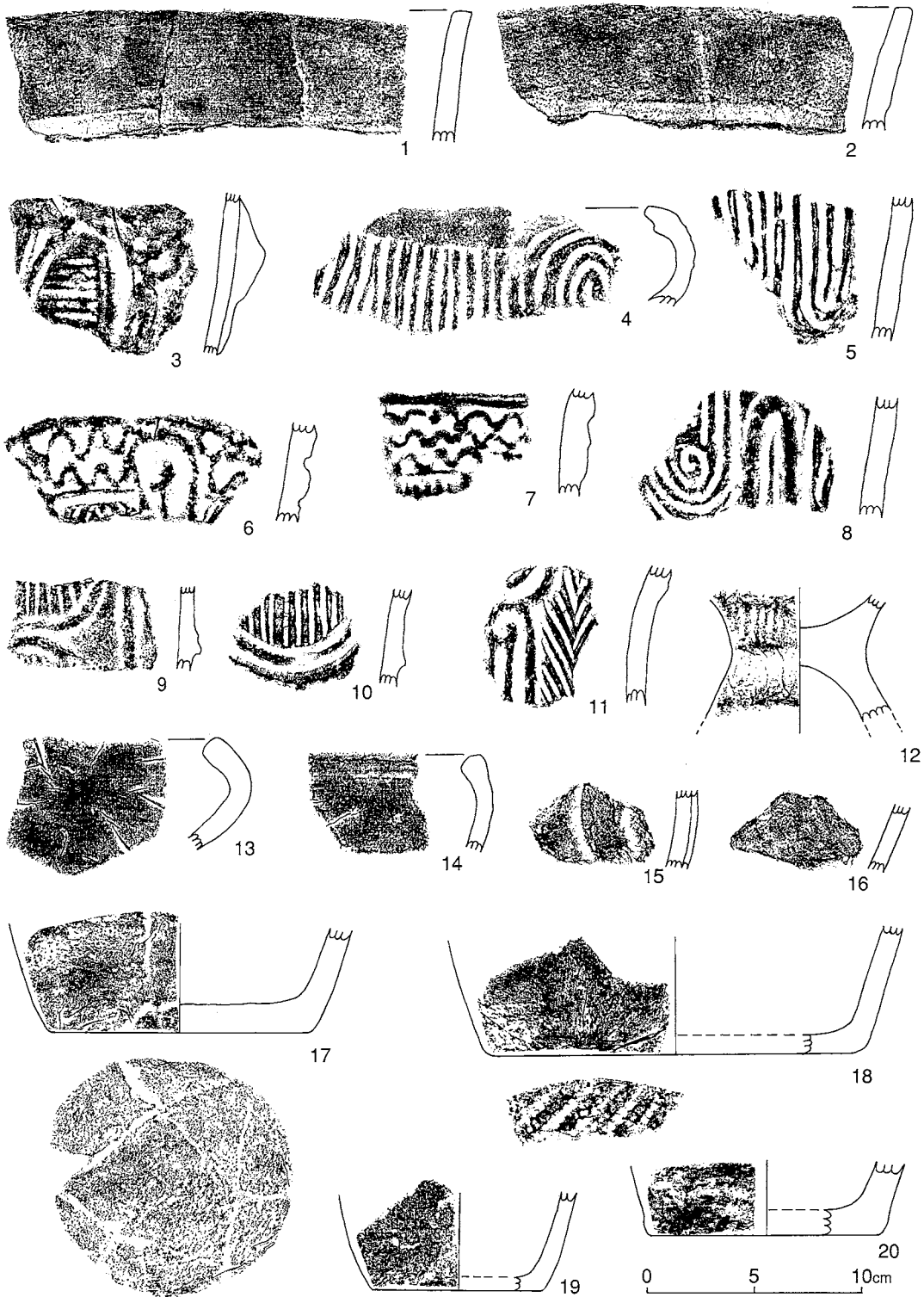
(1-38住、2-39住、3~4-40住、5~6-42住)



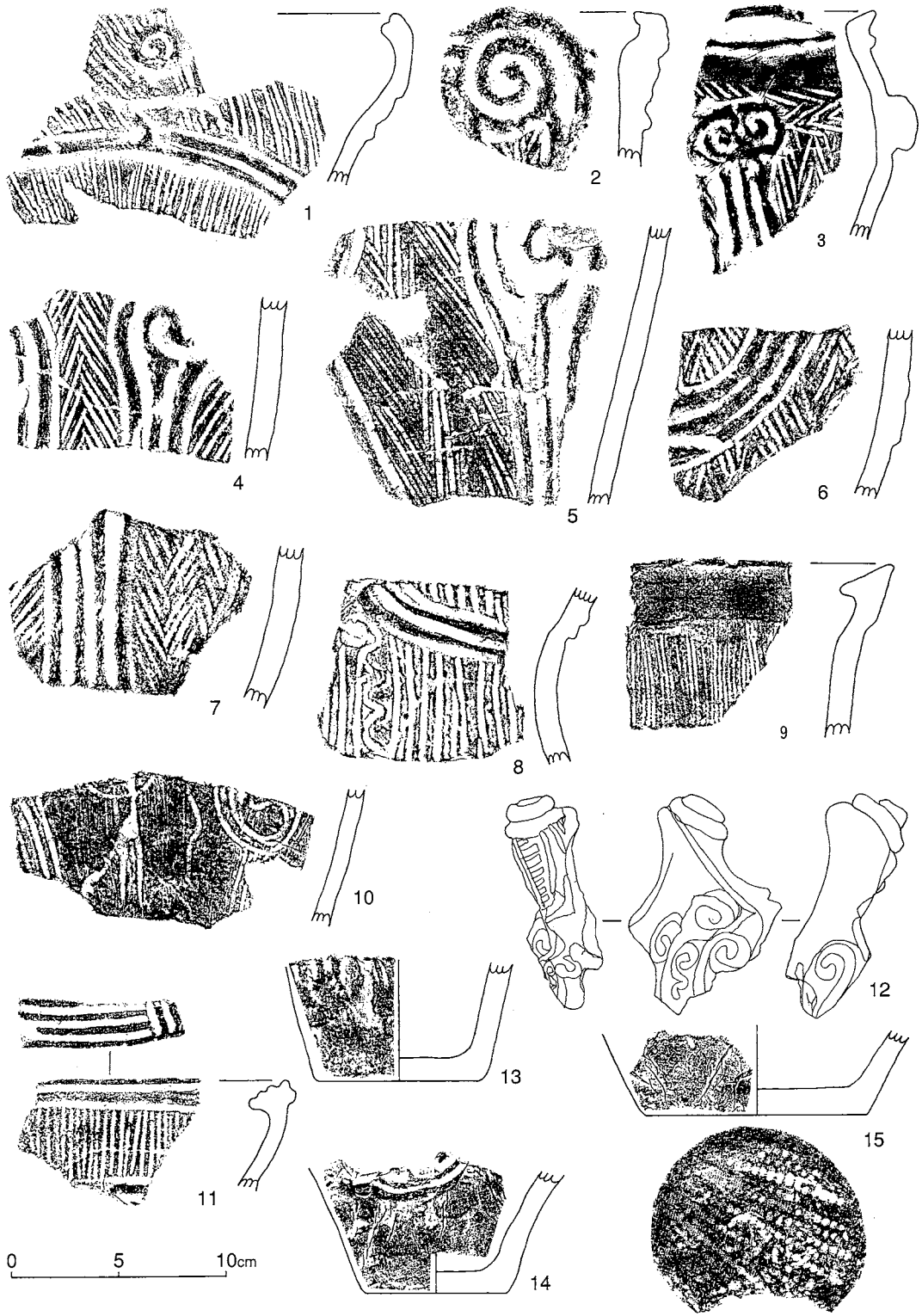
第103図 第40号住居址出土土器拓影(その1)(1:3)



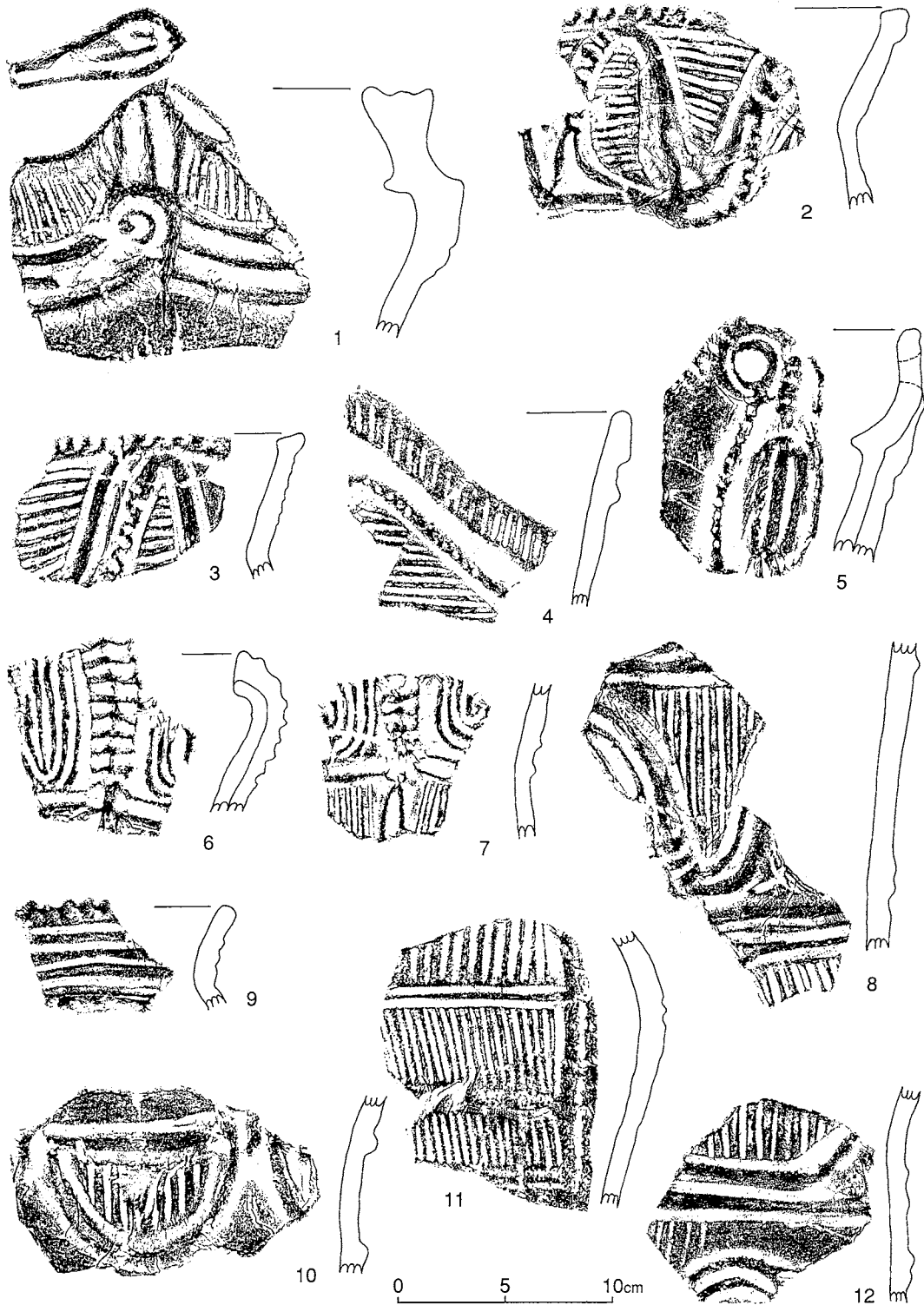
第104図 第40号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）



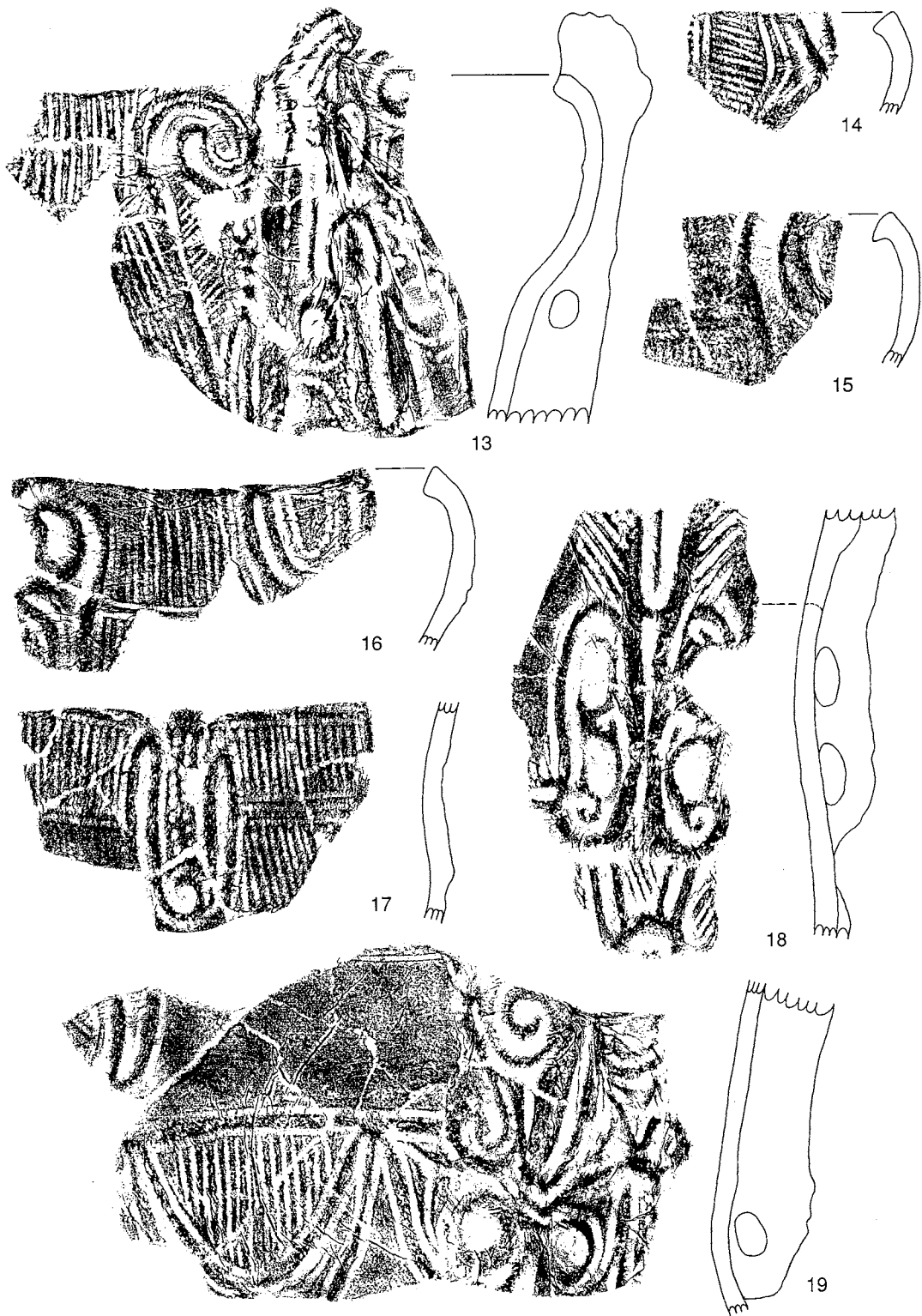
第105图 第41号住居址出土土器拓影 (1:3)



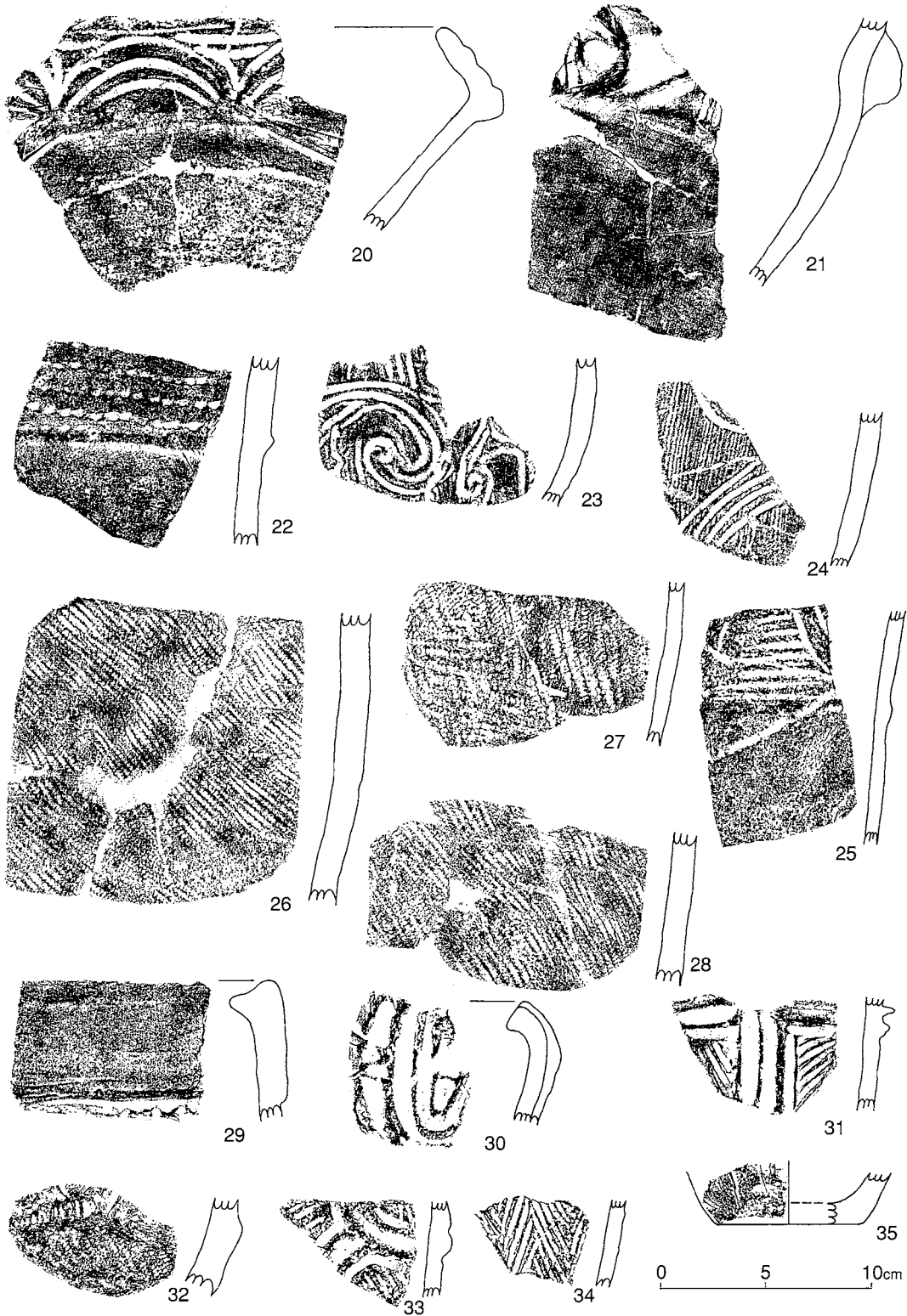
第106图 第42号住居址出土土器拓影 (1:3)



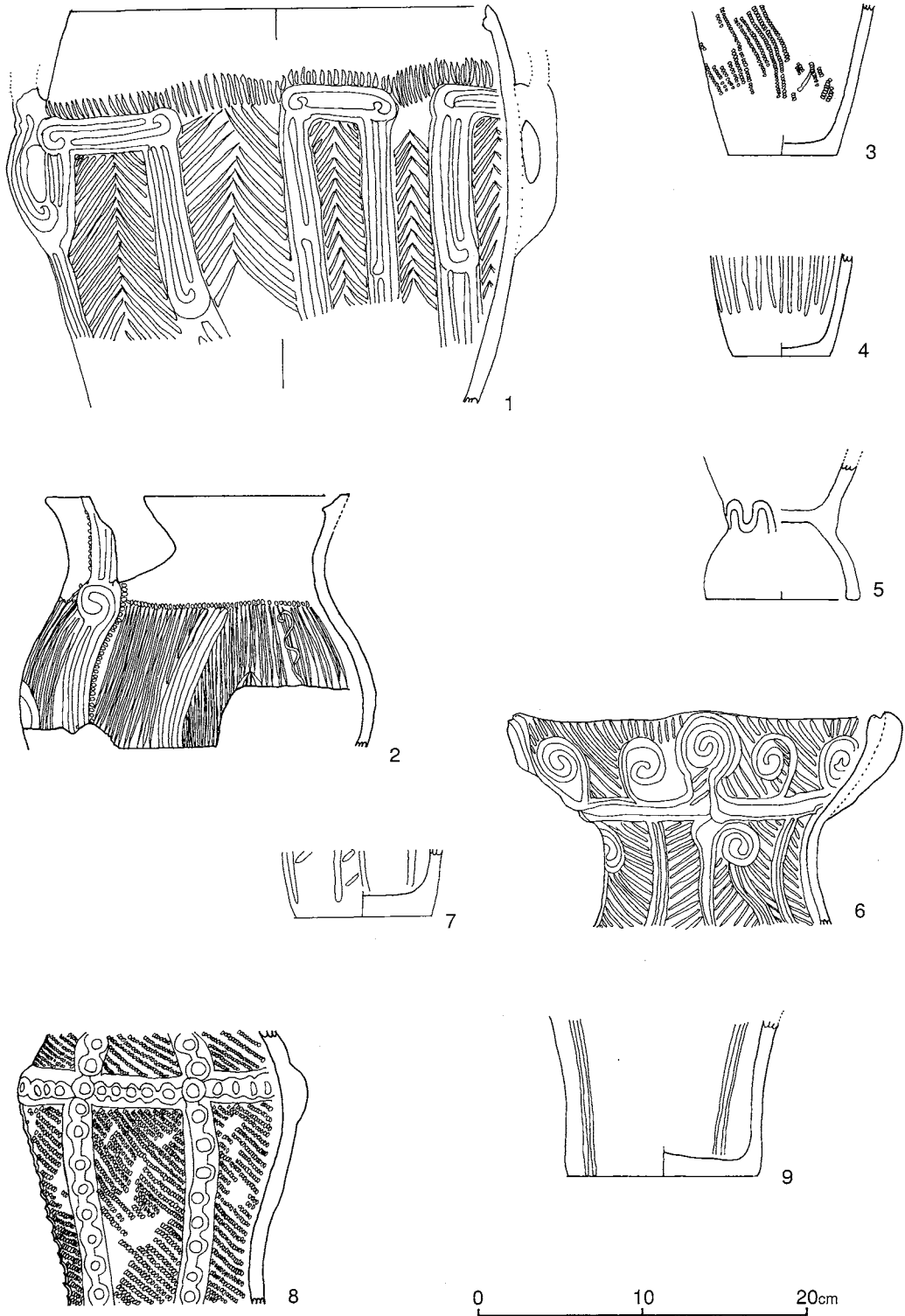
第107図 第43号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）



第108図 第43号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

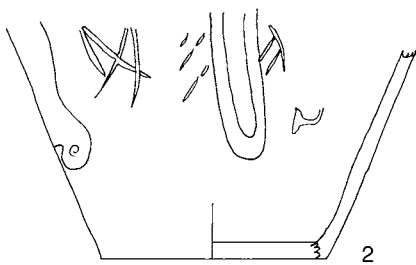


第109図 第43号 (その3)・44号住居址出土土器拓影 (1:3)
 (20~28-43住、29~35-44住)



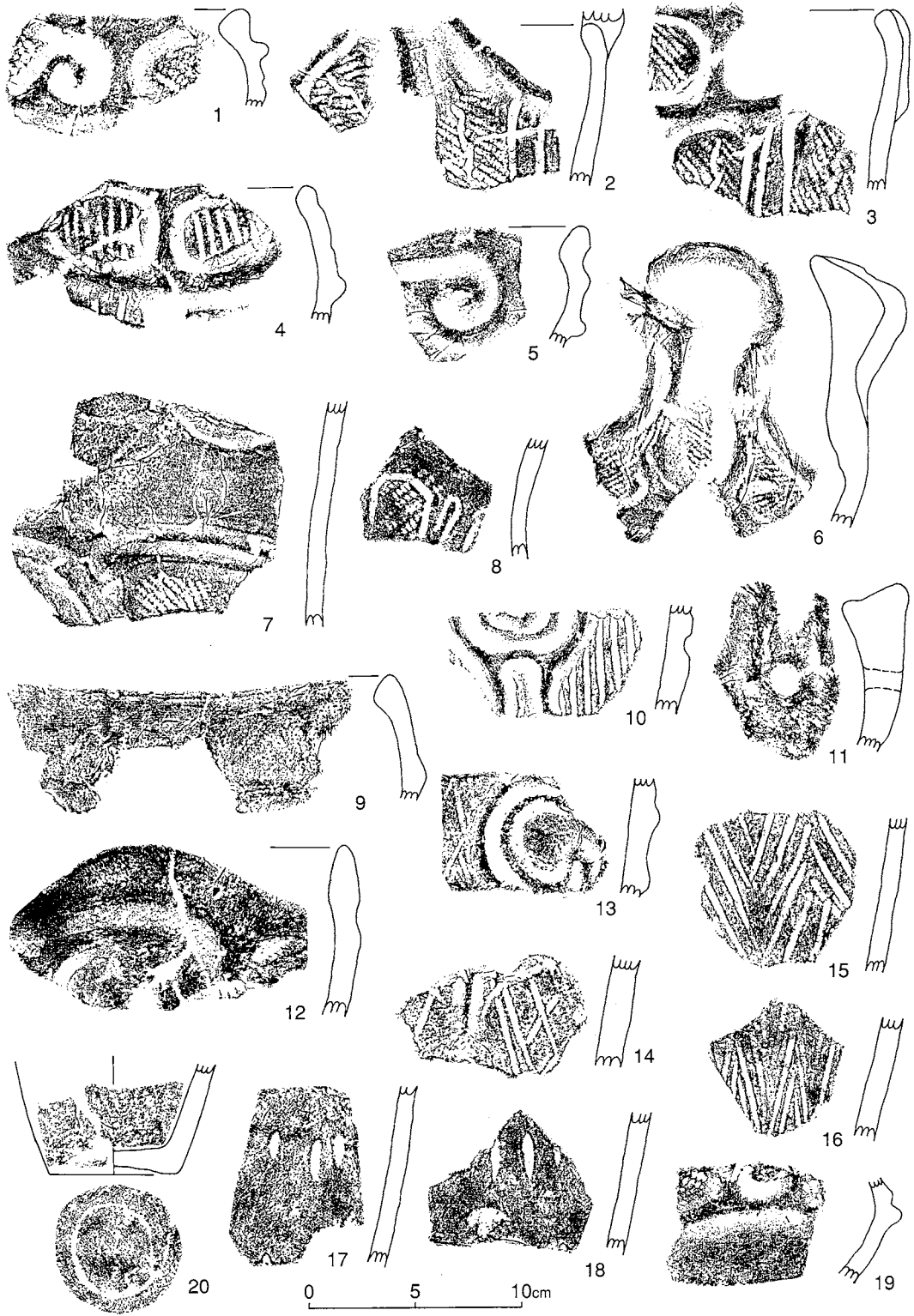
第110图 第43·44·51·52号住居址出土土器 (1:4)

(1~5-43住、6~7-44住、8-51住、9-52住)

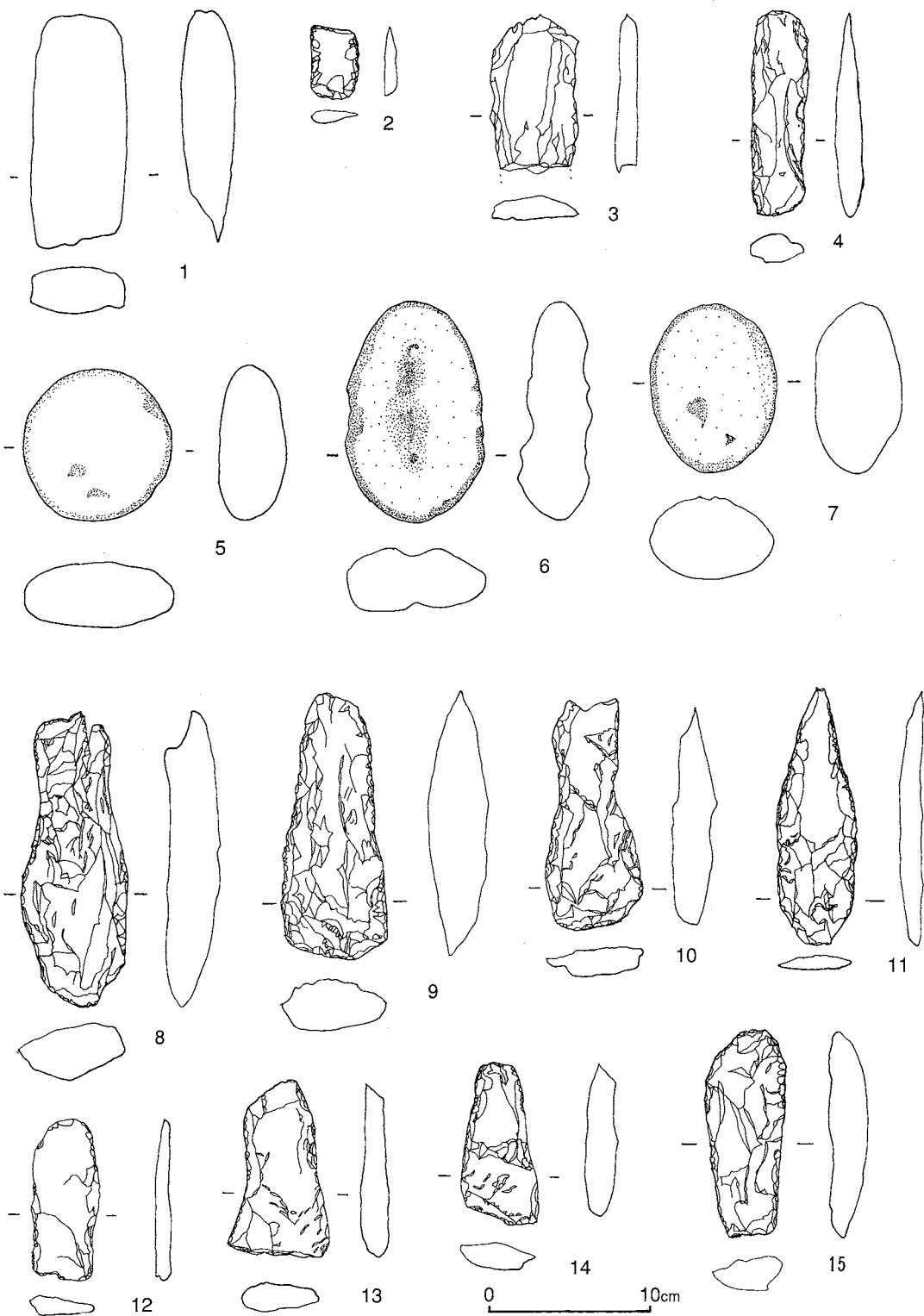


0 10 20cm

第111图 第45号住居址出土土器 (1:4)



第112图 第45号住居址出土土器拓影 (1:3)

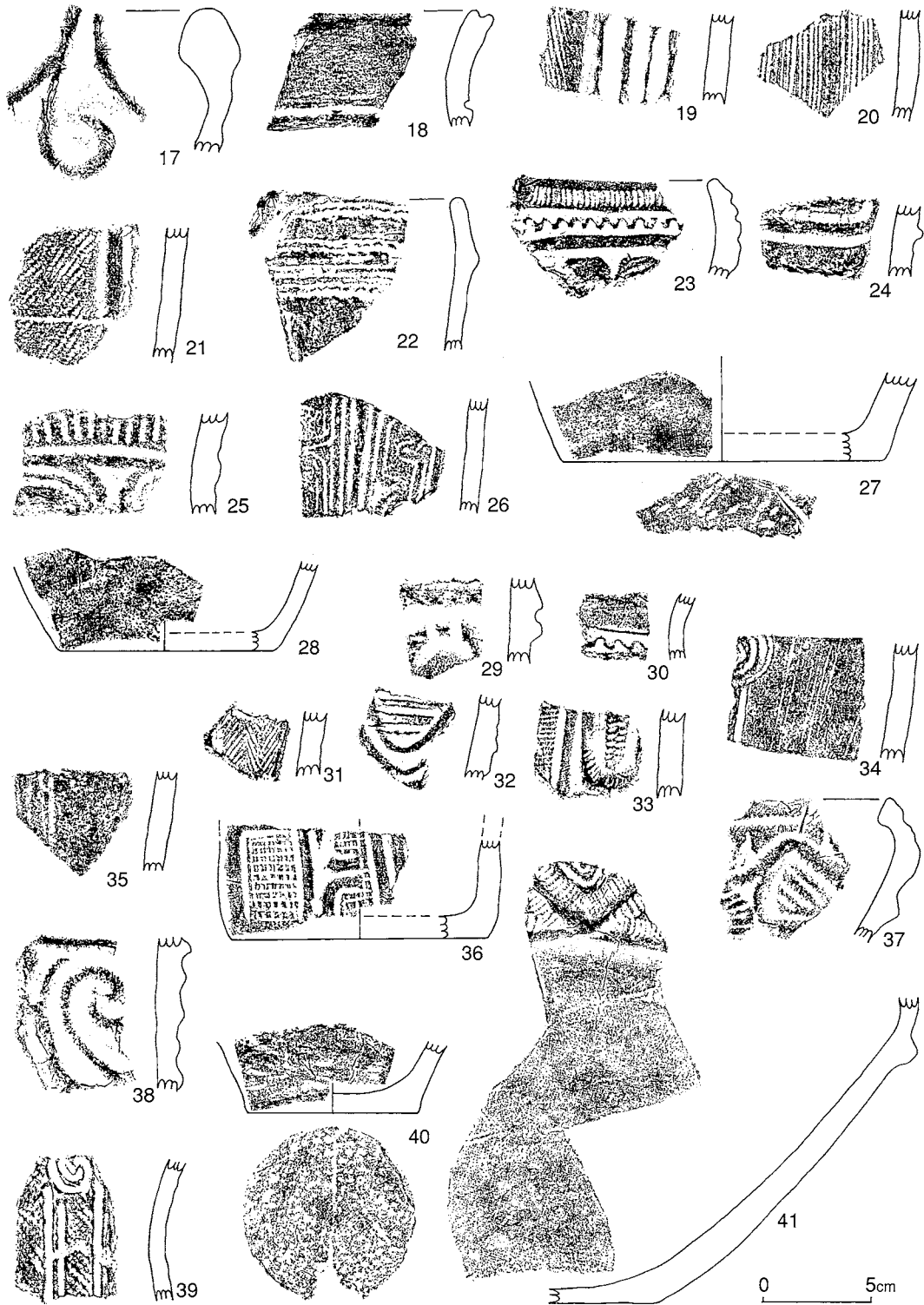


第113图 第33·36·37·40·44·45·47·52号住居址出土土器 (1:4)

(1-33住、2-36住、3-37住、4-40住、5-44住、6~7-45住、8-47住、9~15-52住)

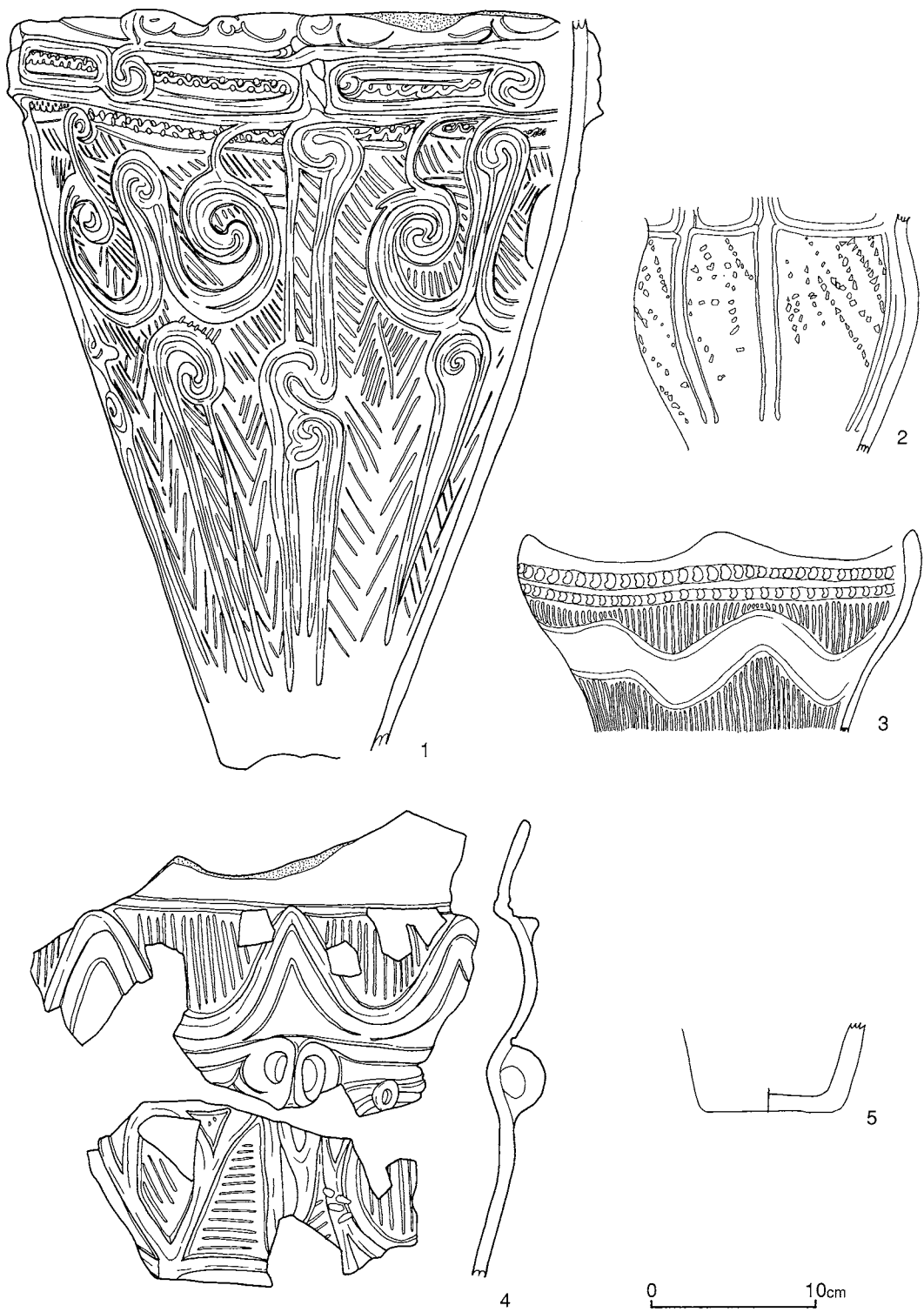


第114図 第46・47号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）
 （1～3 - 46住埋甕炉、4～16 - 47住覆土）

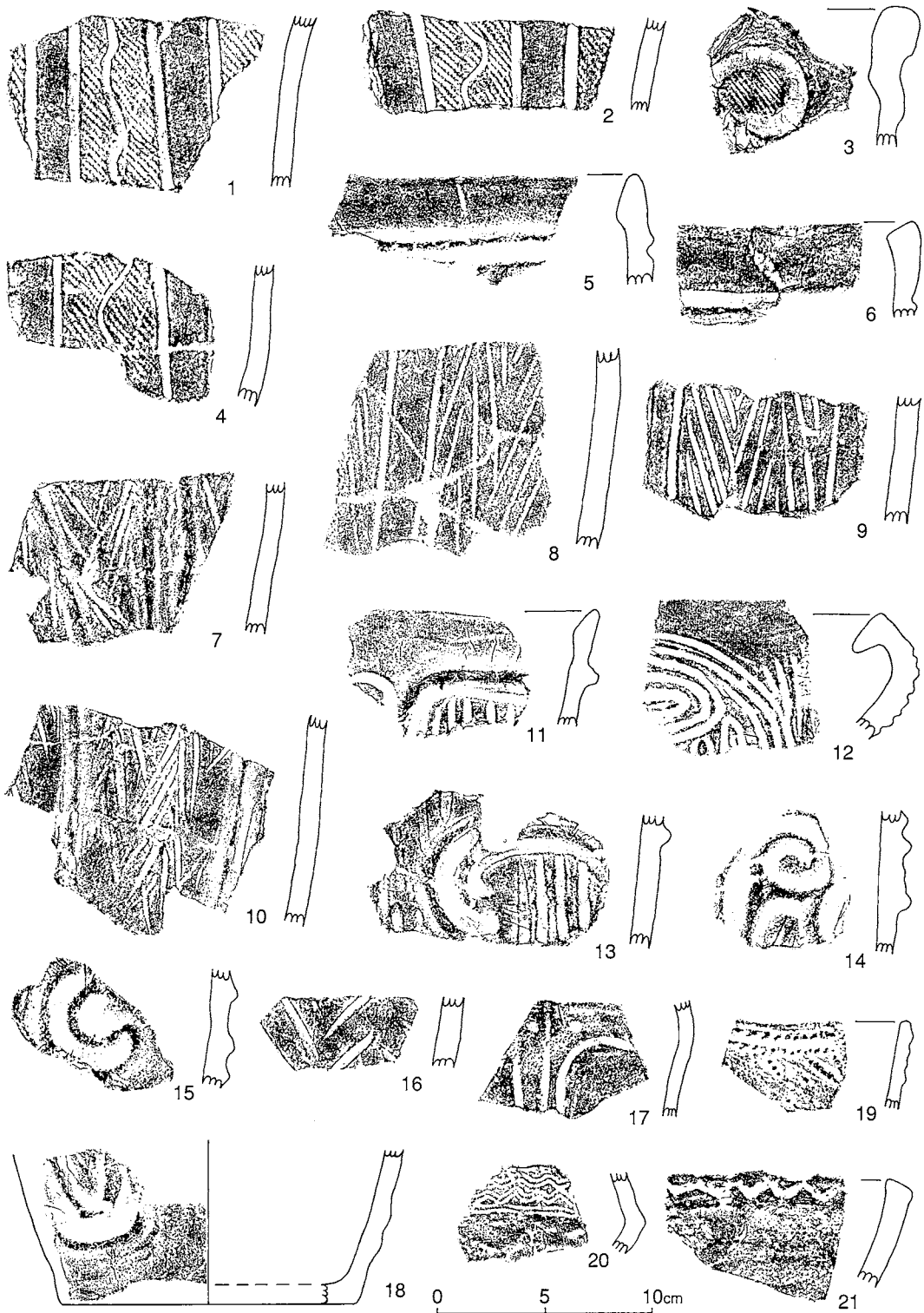


第115図 第47号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

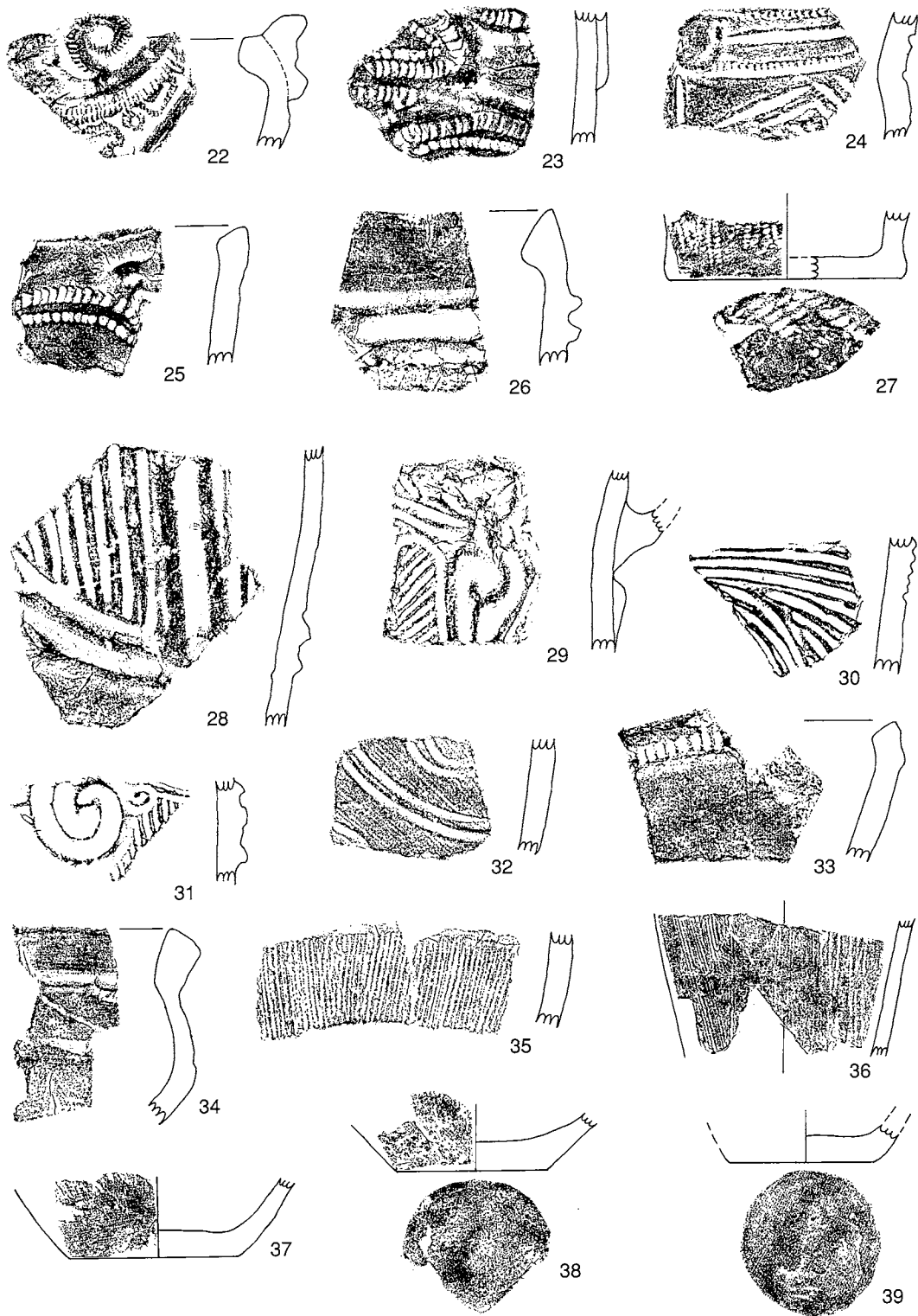
（17～28 - 覆土、29～35 - P₁、36～69・41 - 北壁、40 - No. 2）



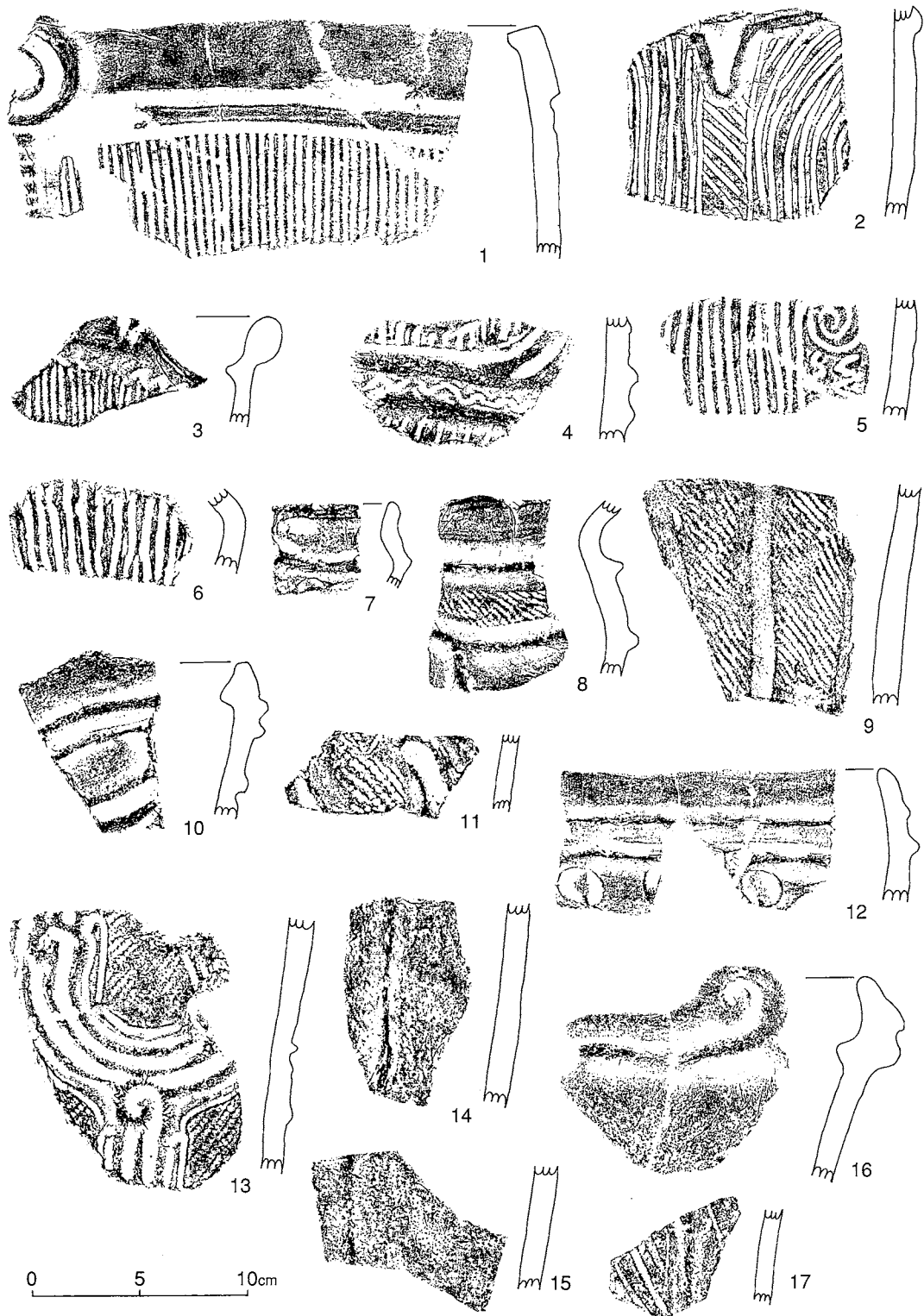
第116图 第47·50号住居址出土土器 (1:4)
 (1~3-47住、4~5-50住)



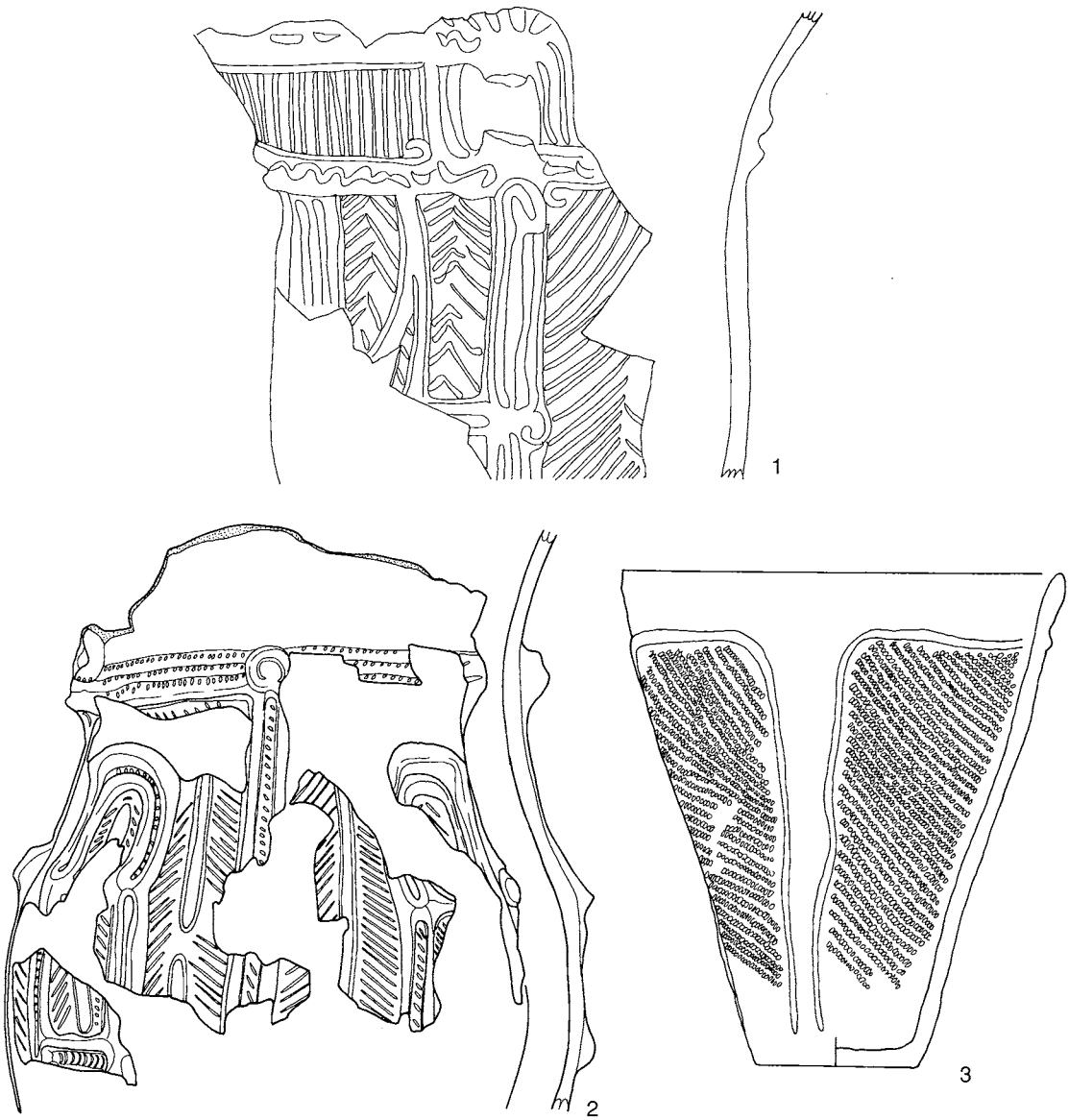
第117図 第48号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）



第118図 第48号（その2）・49号住居址出土土器拓影（1：3）
 (22～27-48住、28～39-49住)

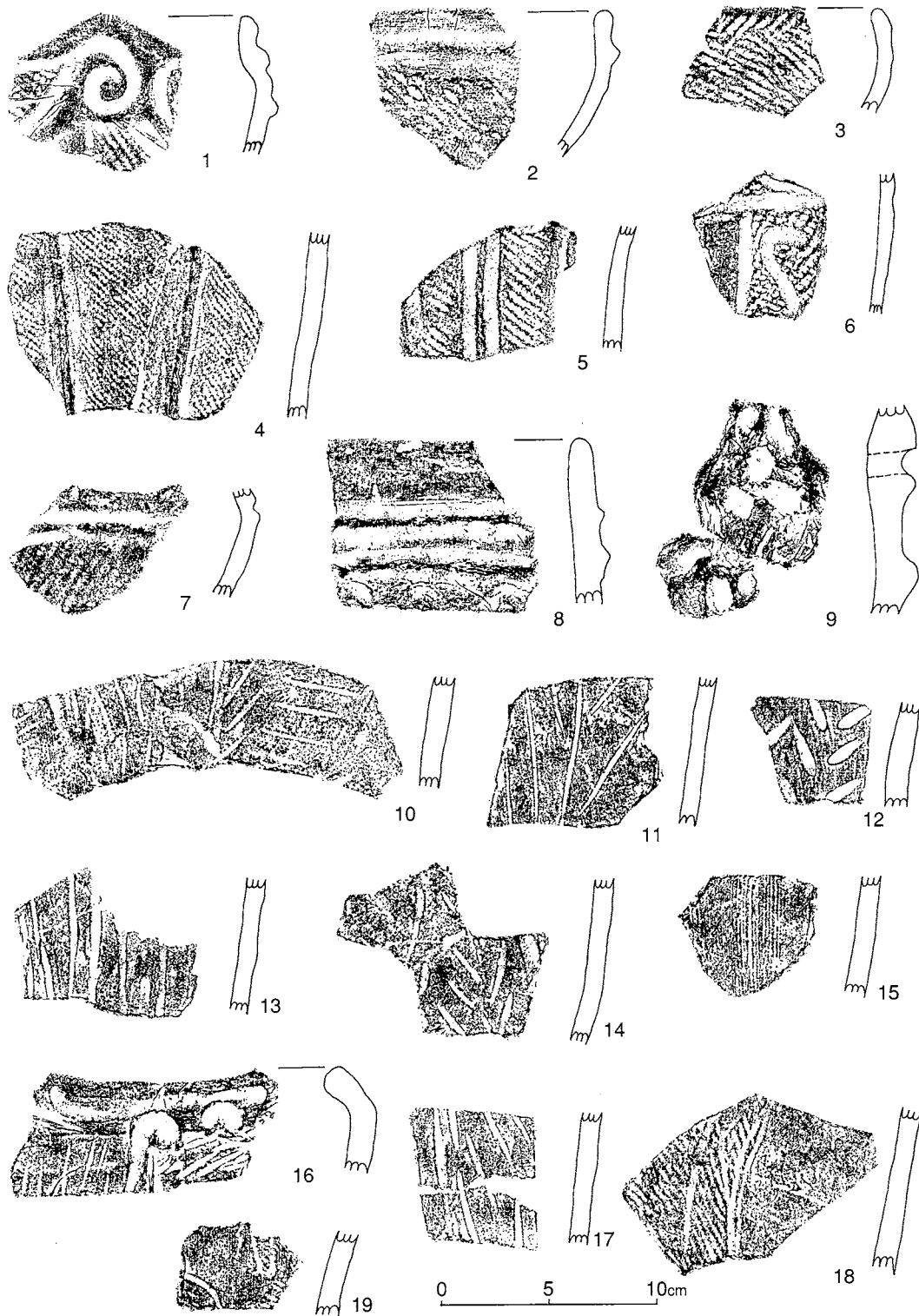


第119图 第50号住居址出土土器拓影 (1:3)

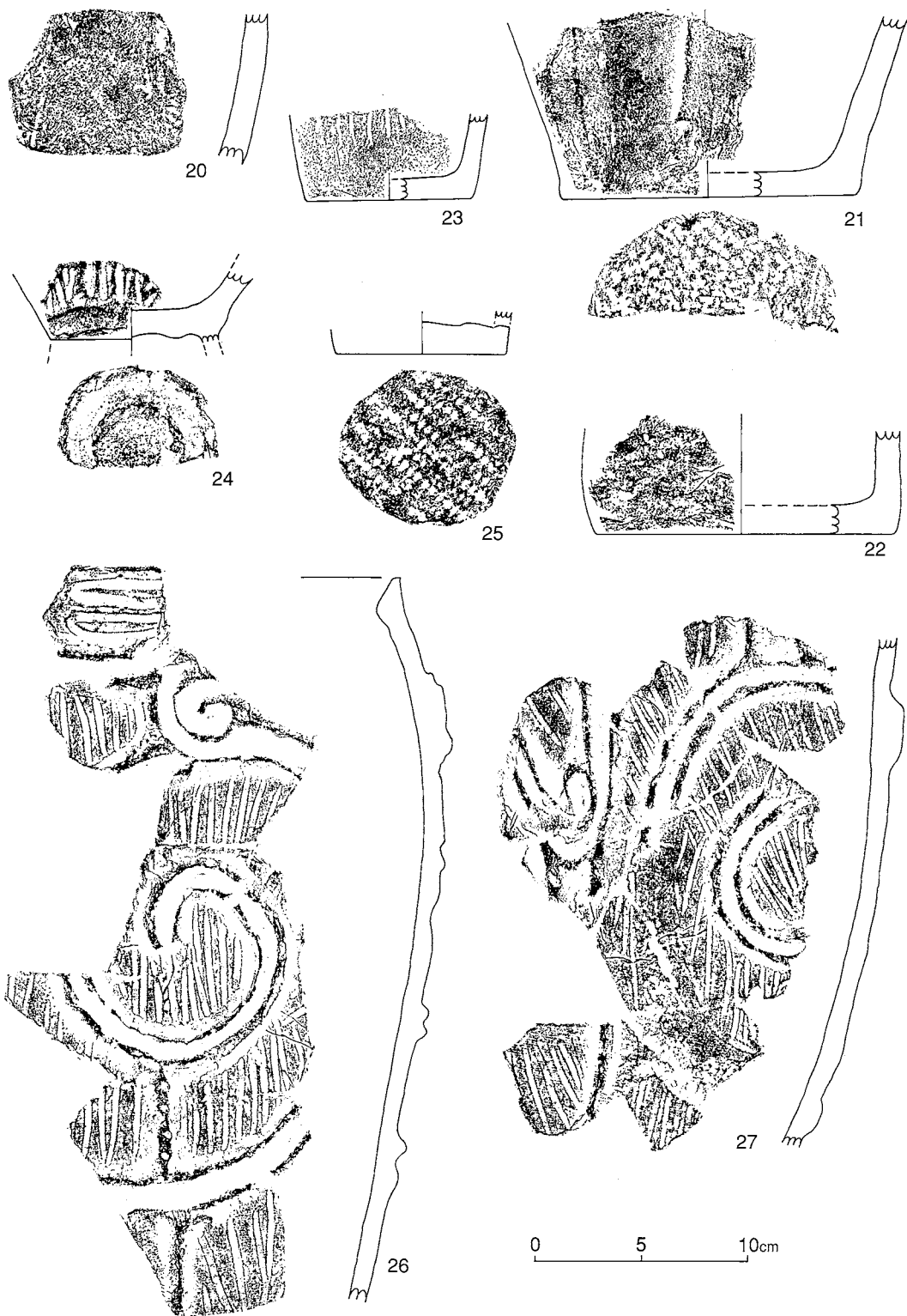


第120図 第50号住居址出土土器及び埋甕1 (1:4)

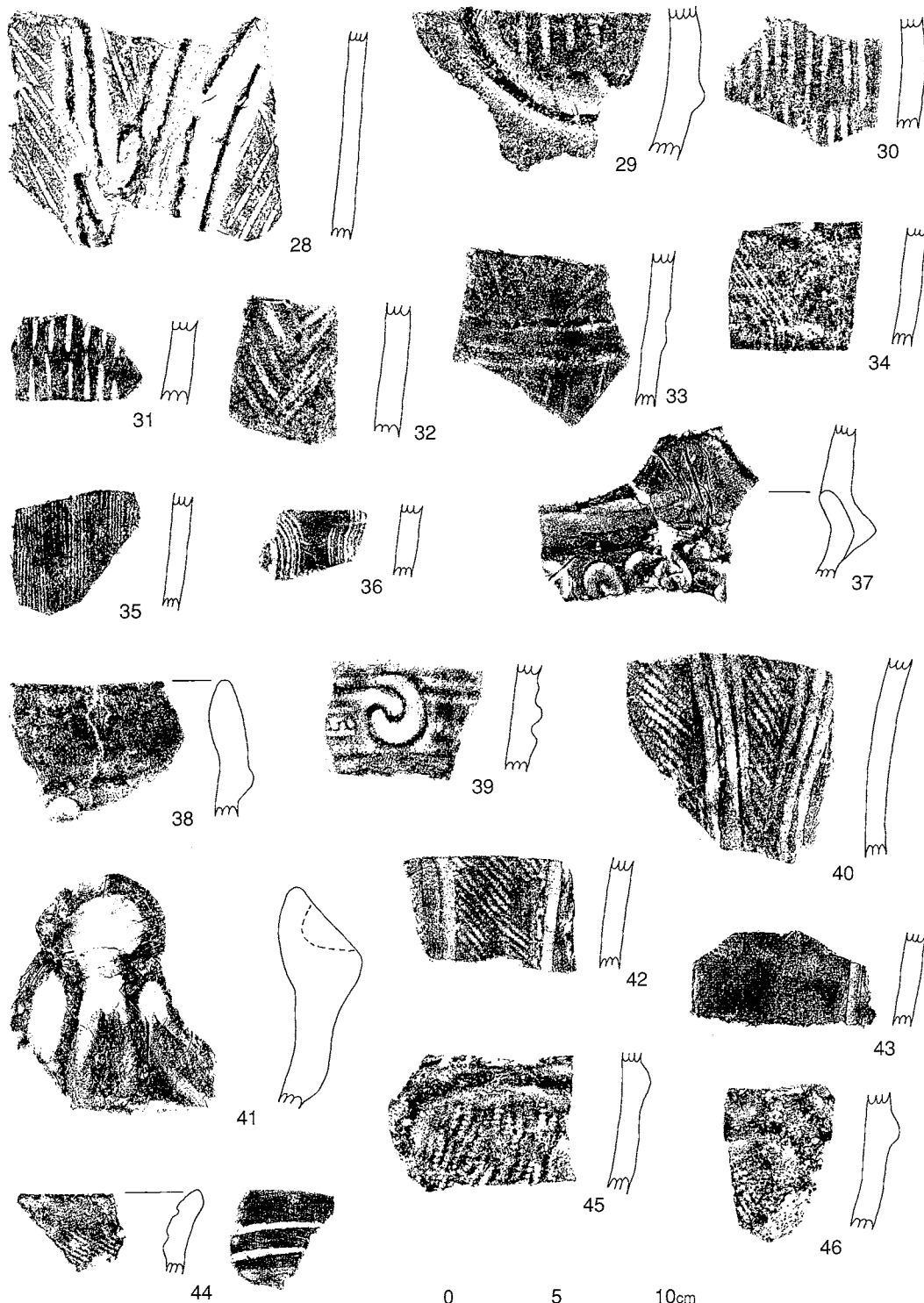
(1~2-50住、3-埋甕1)



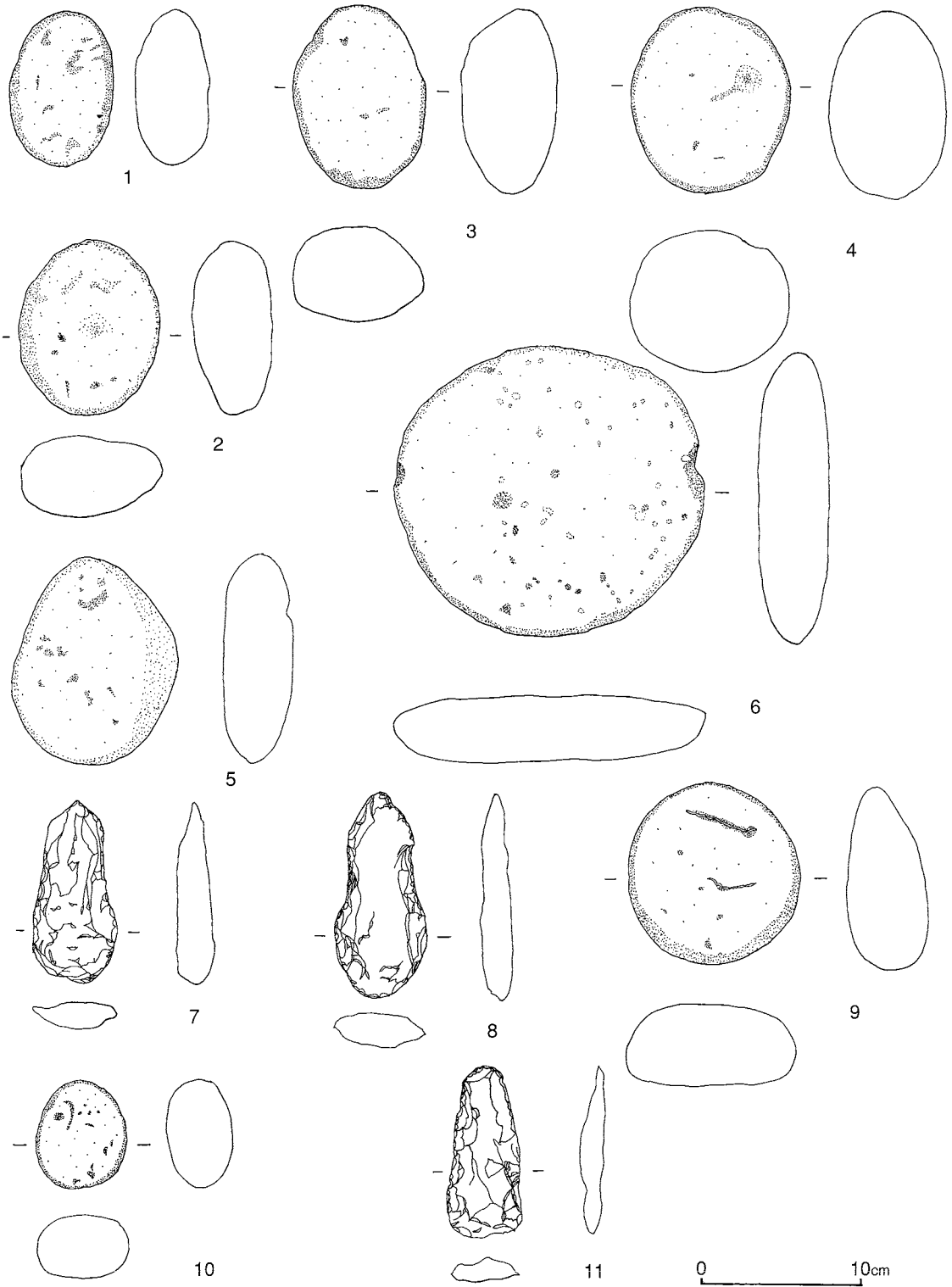
第121図 第52号住居址出土土器拓影（その1）（1：3）



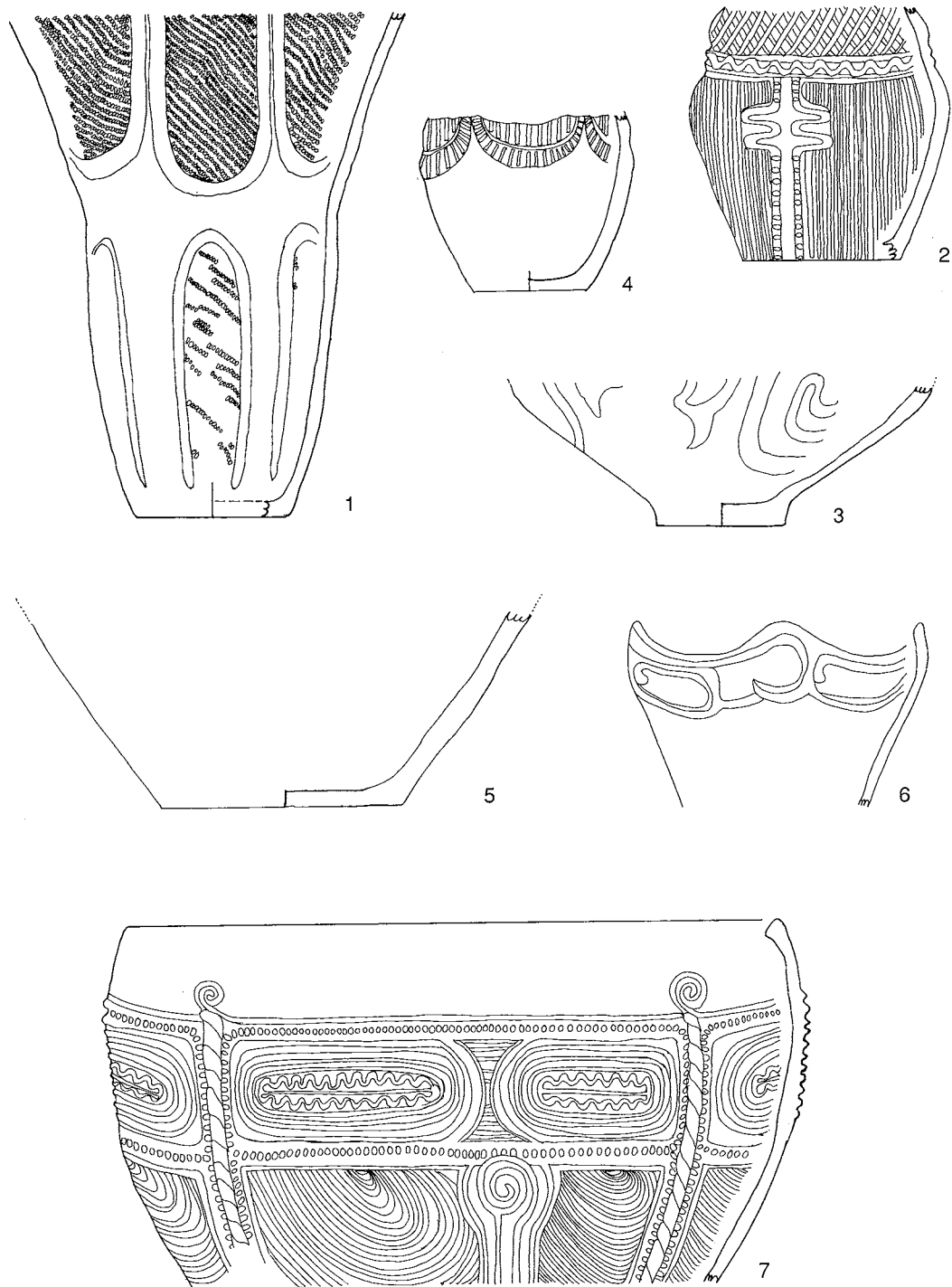
第122図 第52号住居（その2）・53号住居（その1）土器出土土器拓影（1：3）
 （20～25-52住、26～27-53住）



第123図 第53号住居址出土土器拓影（その2）（1：3）

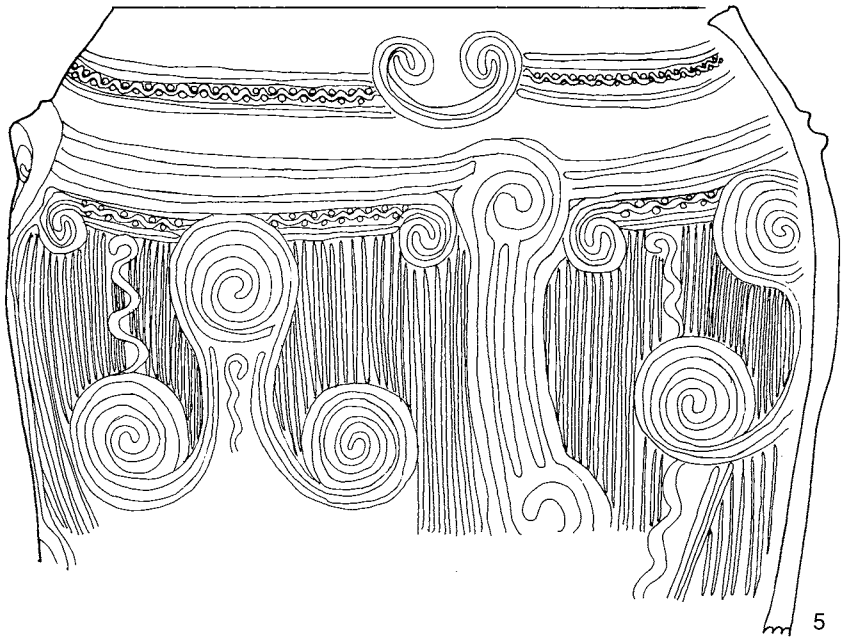
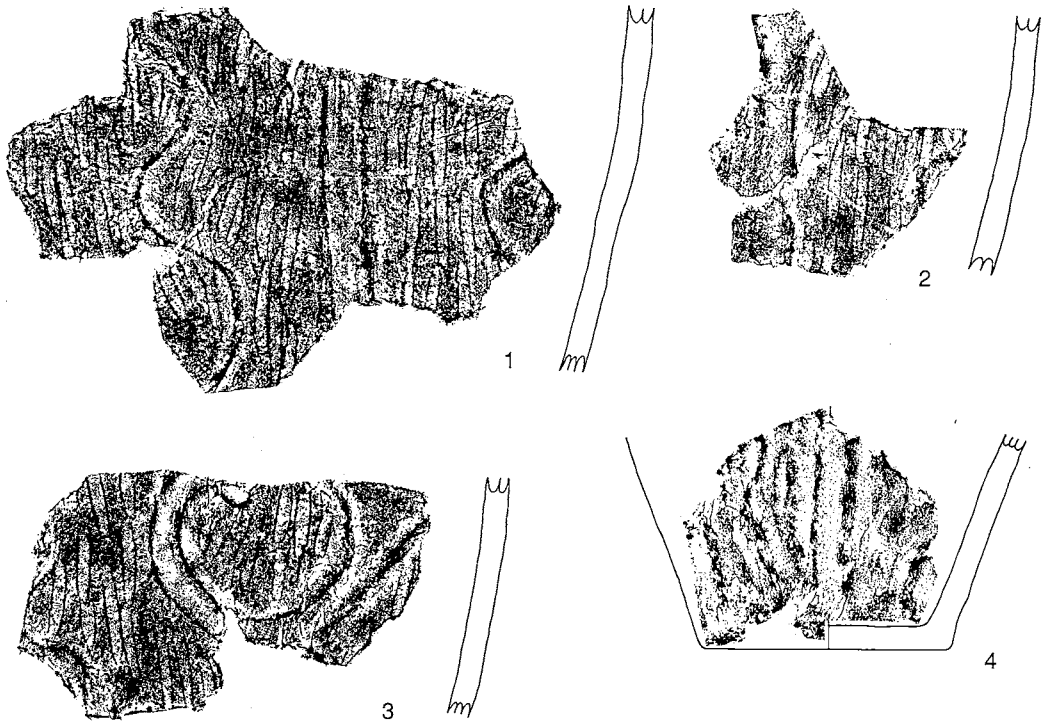


第124图 第51・52・53号住居址出土石器
 (1~6-51住、7~10-52住、11-53住)



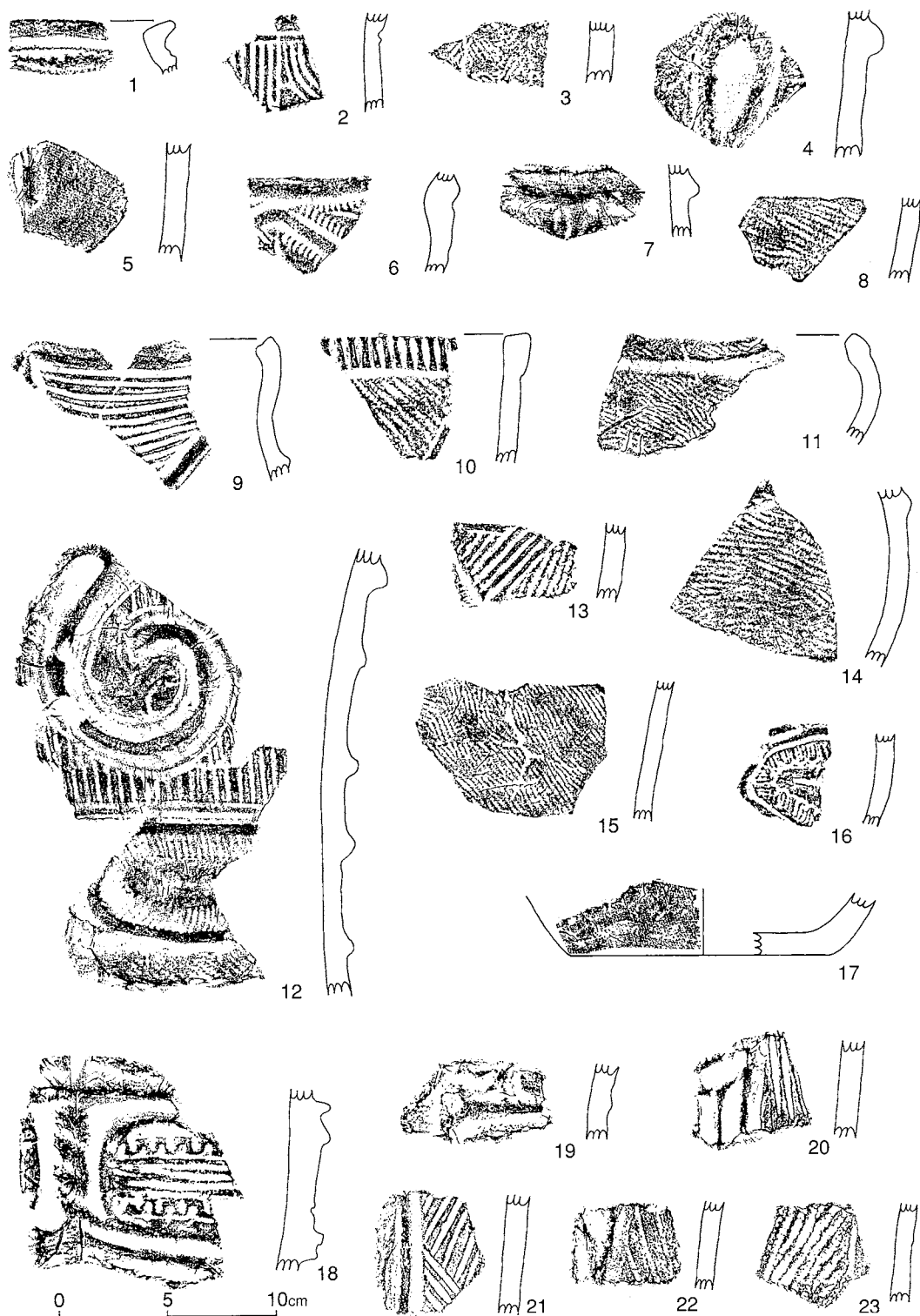
第125図 埋甕2・土坑及び遺構外出土土器（1：4）

（1 - 埋甕2、2 - 土坑189、3 - 土坑234、4 - 土坑240、5 - 土坑152、6 - B区、7 - M区埋甕）



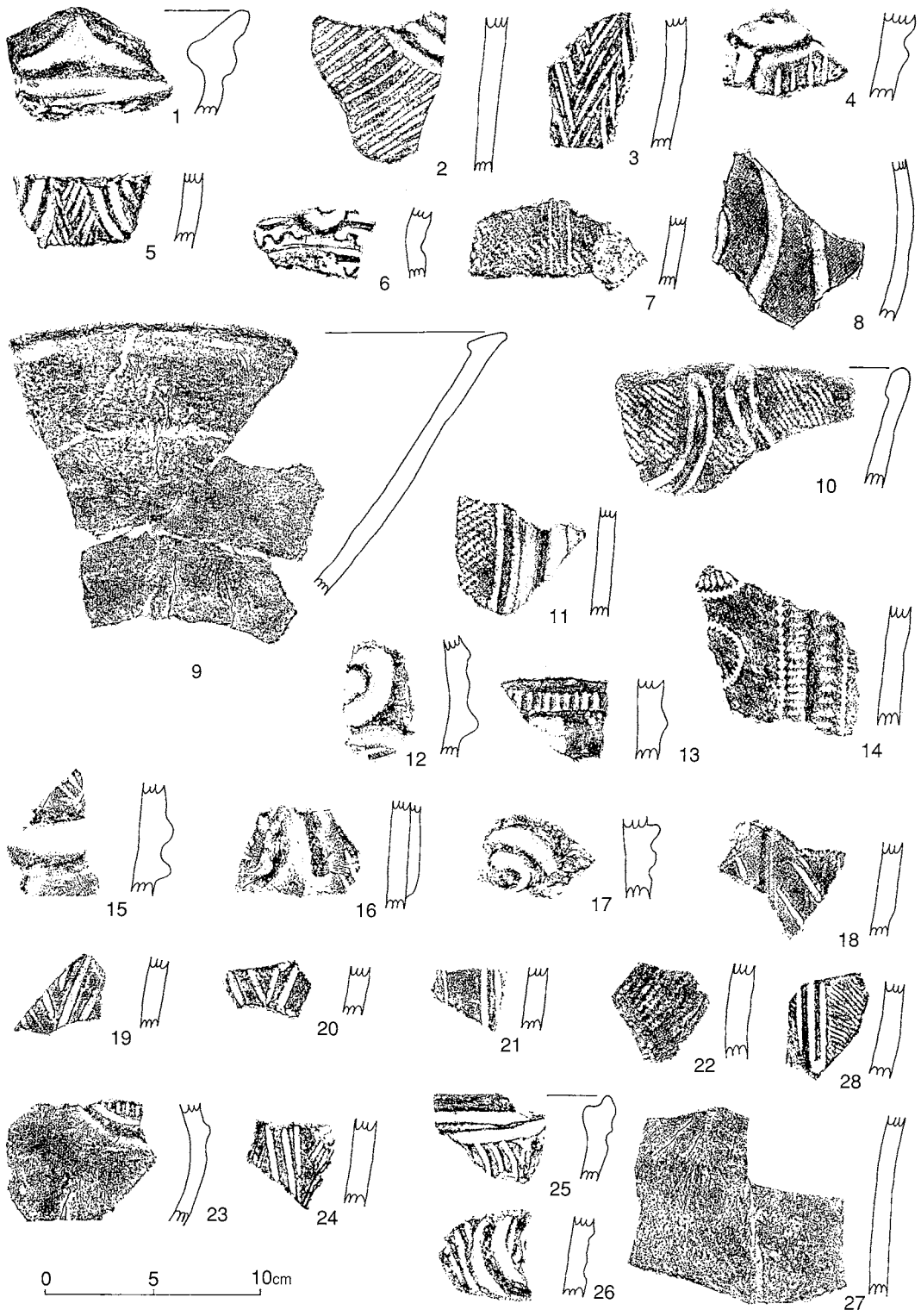
0 5 10cm

第126图 埋甕3拓影(1~4)·埋甕4(5)

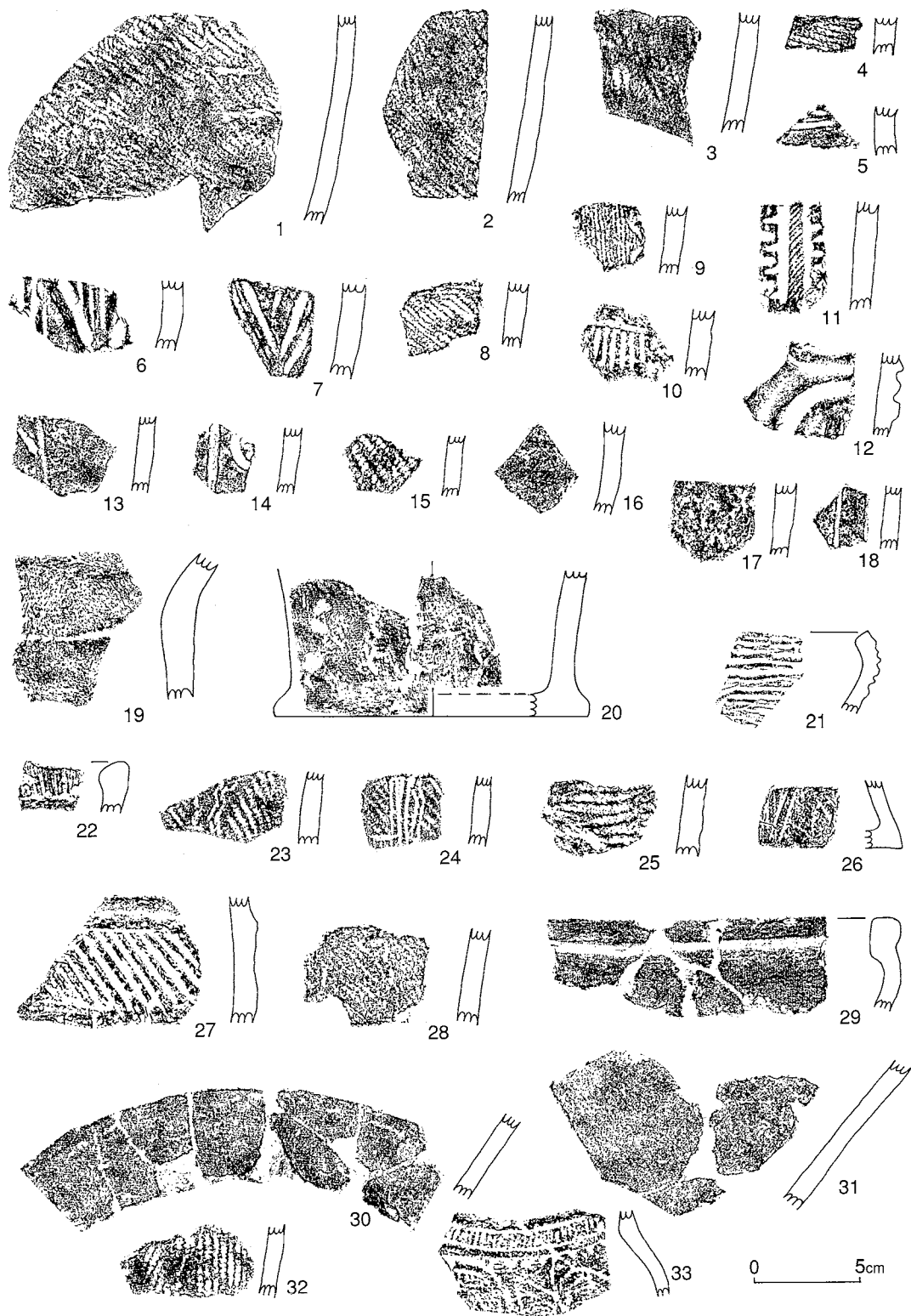


第127图 土坑145·149·151·152·153出土土器拓影(1:3)

(1-145、2~4-149、5~8-151、9~17-152、18~23-153)

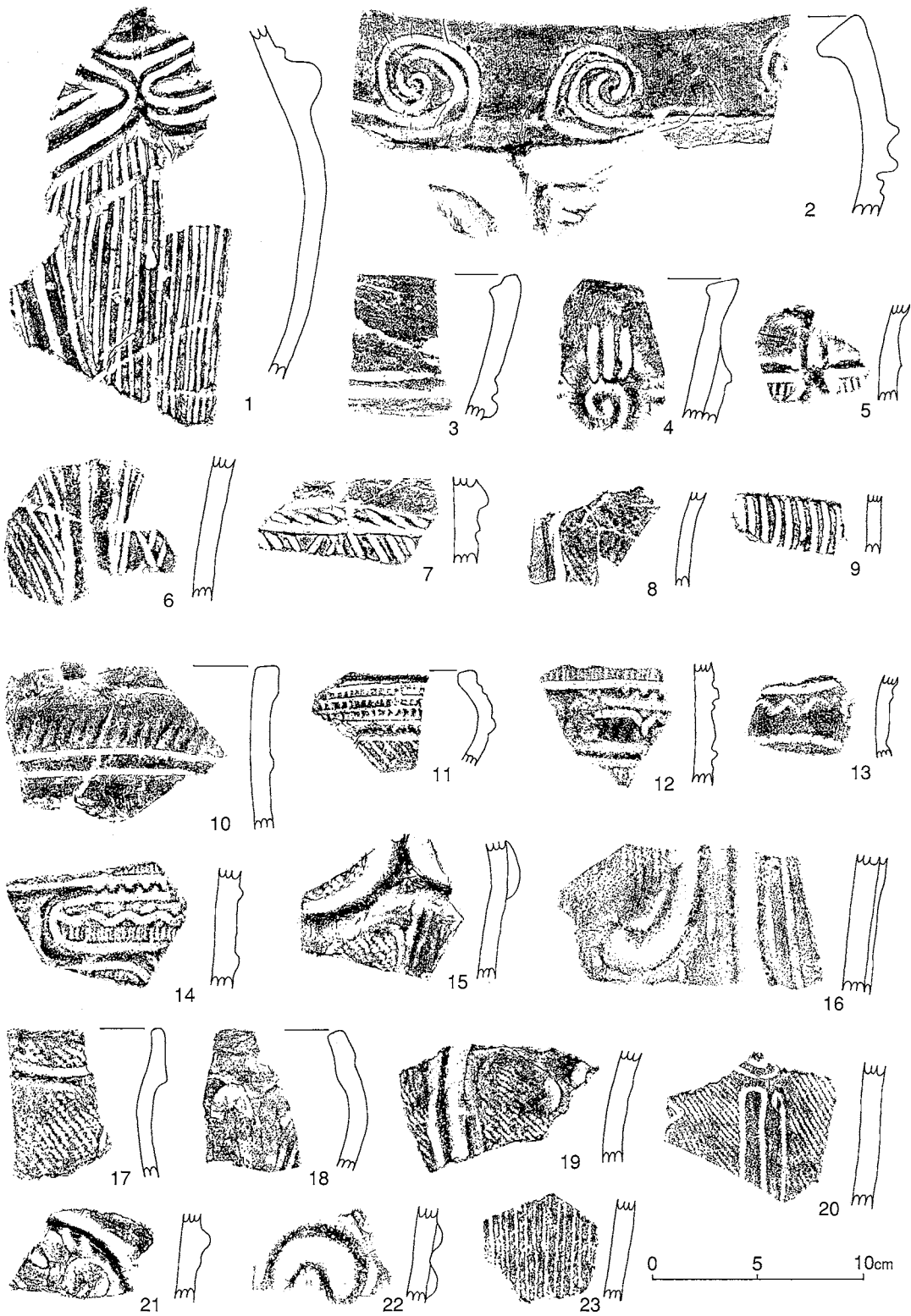


第128图 土坑154·155·158·159·160出土土器拓影(1:3)
 (1~8-154、9~14-155、15~22-158、23~24-159、25~28-160)

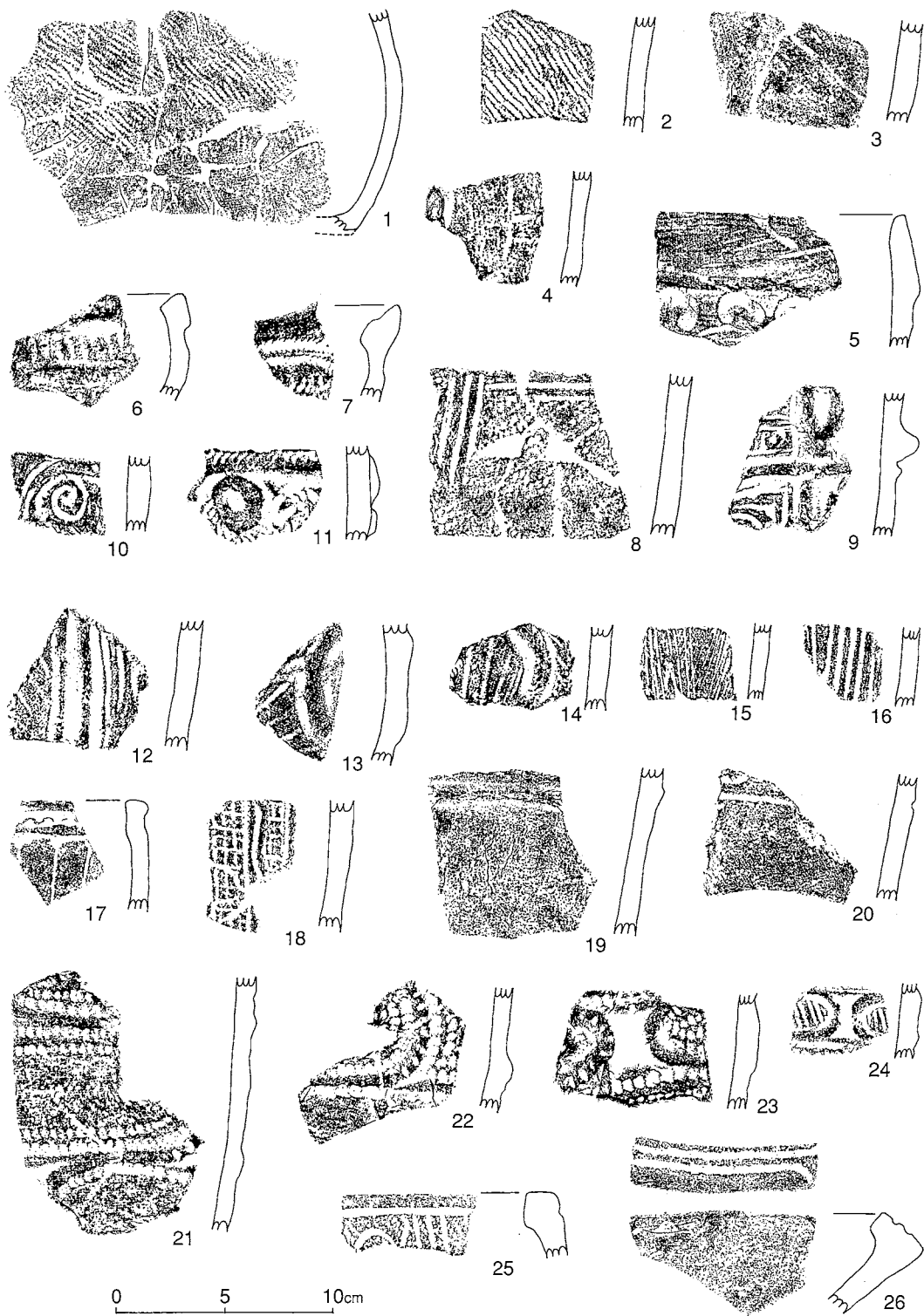


第129图 土坑161·165·166·168·172·175·176·186·189出土土器拓影(1:3)

(1~3-161, 4~5-165, 6~12-166, 13~16-168, 17~18-172, 19~20-175, 21~26-176, 27~28-186, 29~33-189)

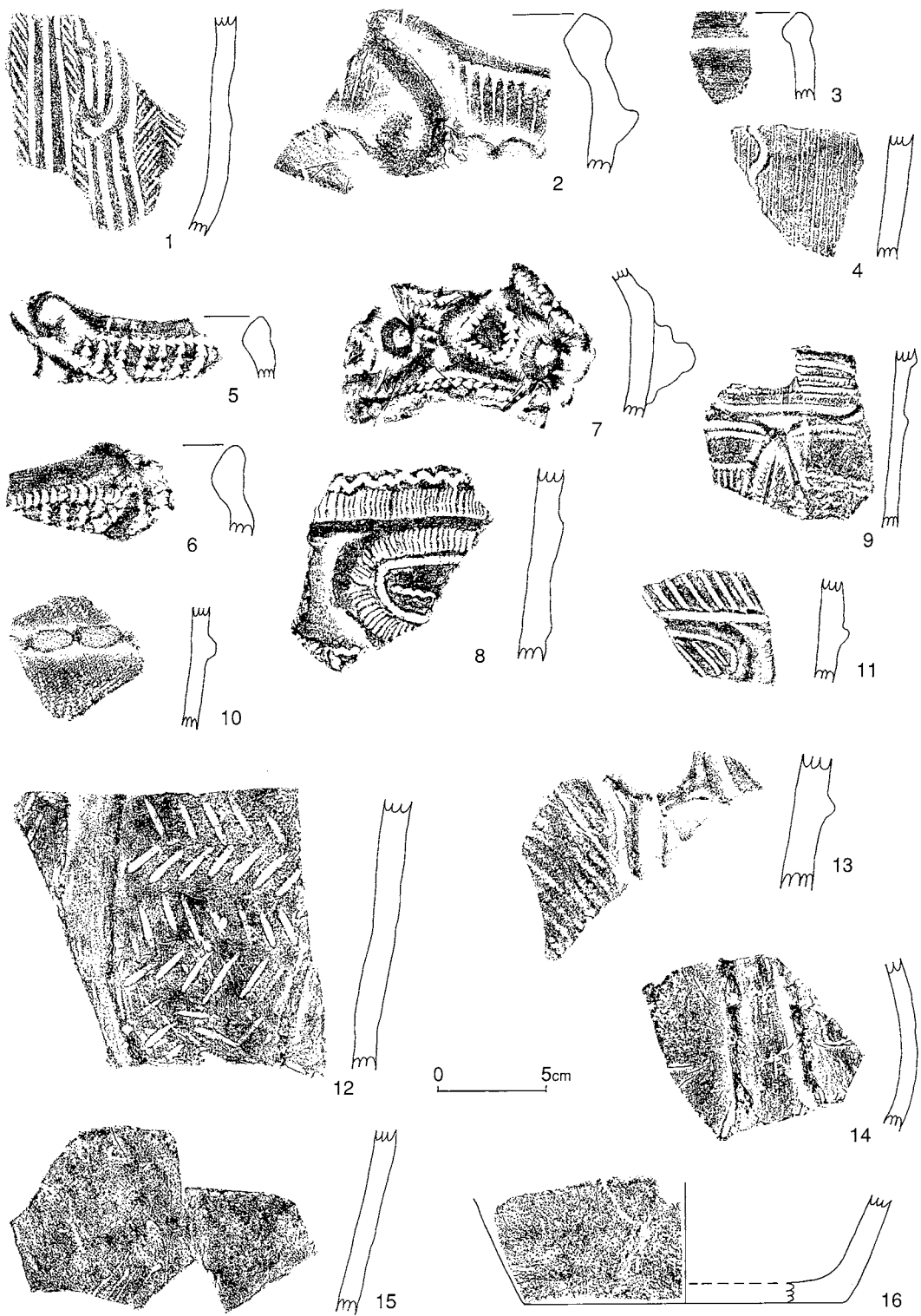


第130图 土坑200·212·214·226出土土器拓影 (1:3)
 (1-200、2-212、3~9-214、10~23-226)

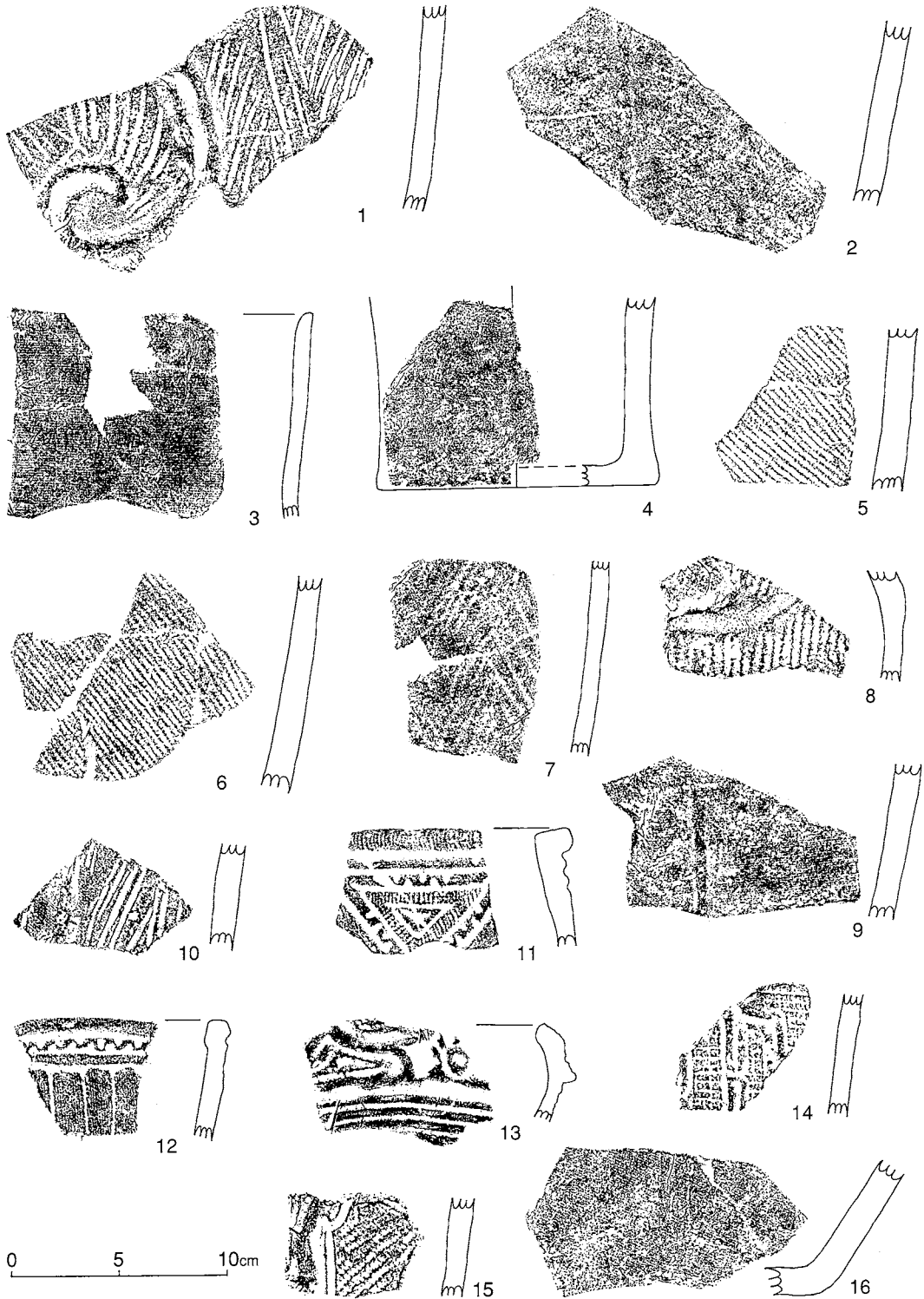


第131图 土坑227·228·229·231出土土器拓影(1:3)

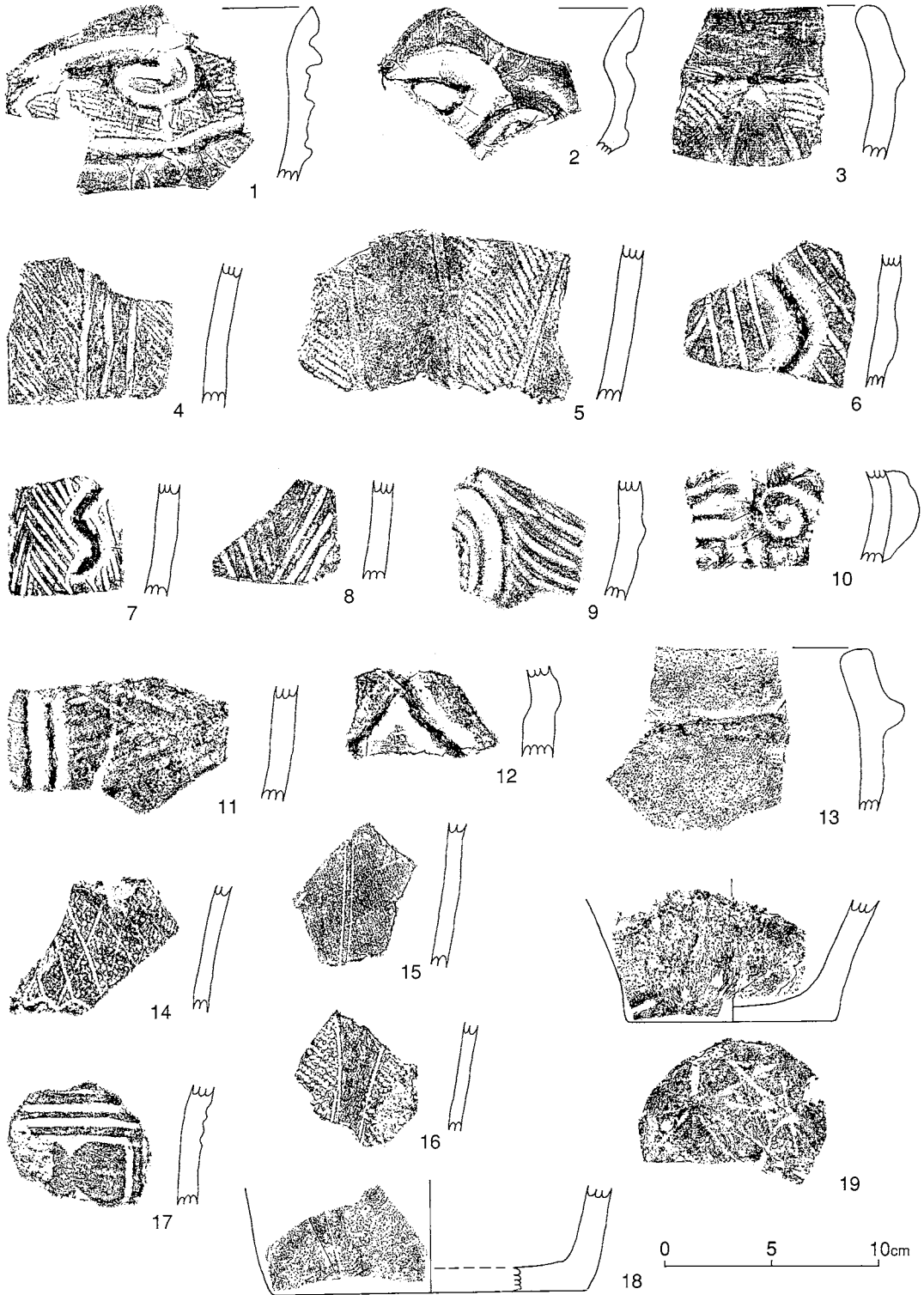
(1~4-227、5~11-228、12~20-229、21~26-231)



第132图 土坑232·233·234出土土器拓影 (1:3)
 (1-232、2~4-233、5~16-234)



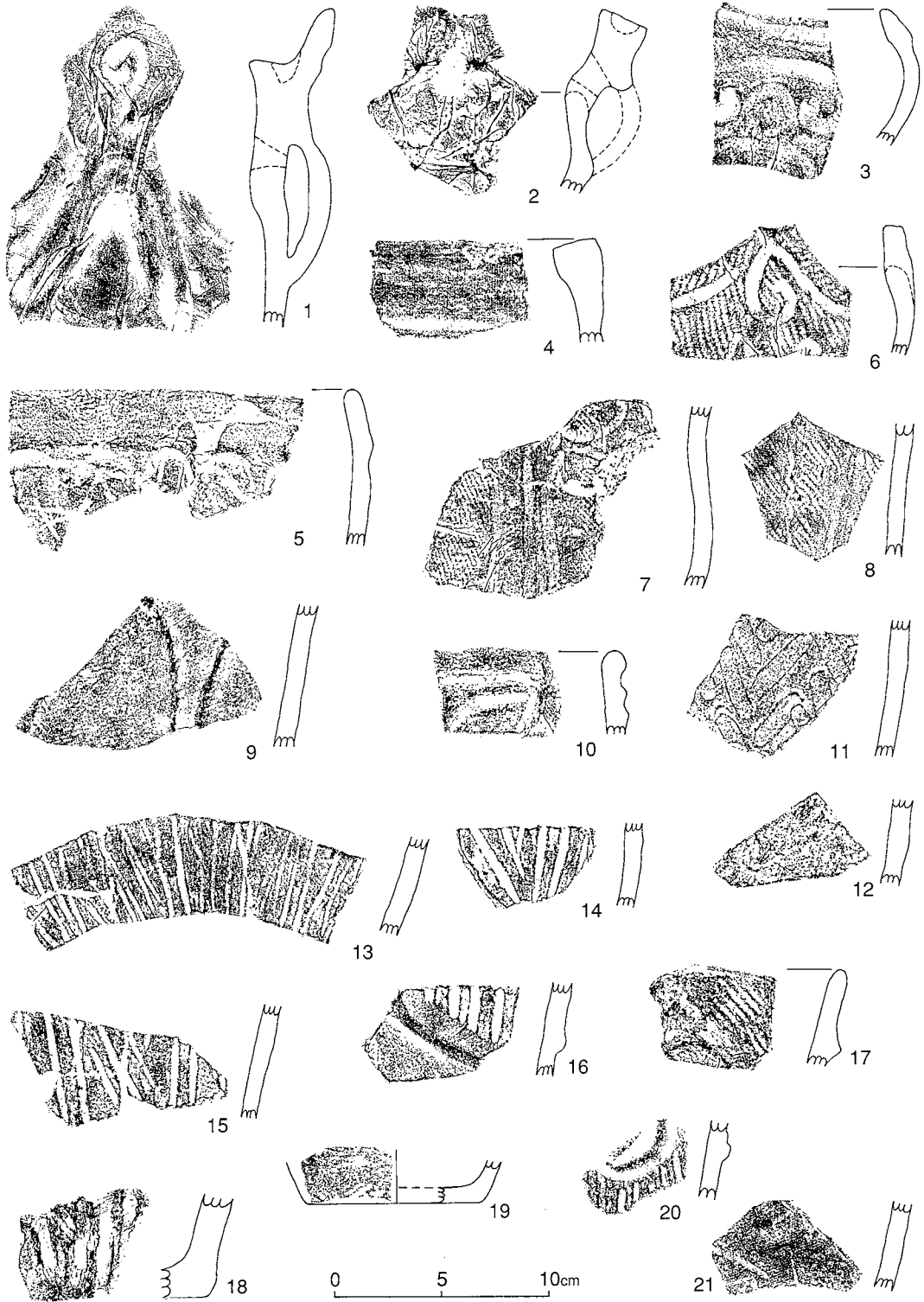
第133图 土坑236出土土器拓影 (1:3)



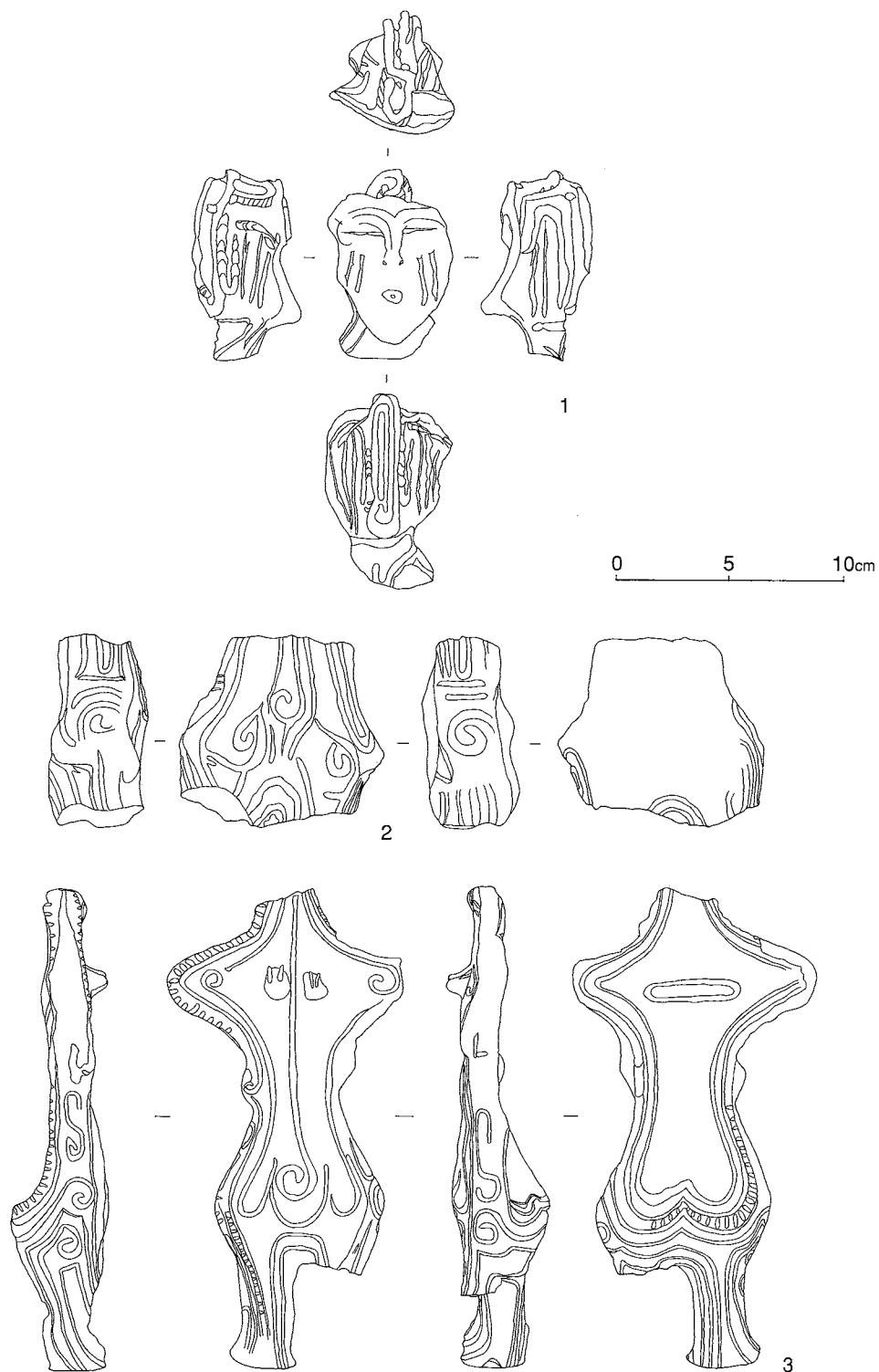
第134图 土坑238出土土器拓影 (1:3)



第135图 第49号住居址・240出土土器拓影 (1:3)
 (1~6-49住、7~12-240)

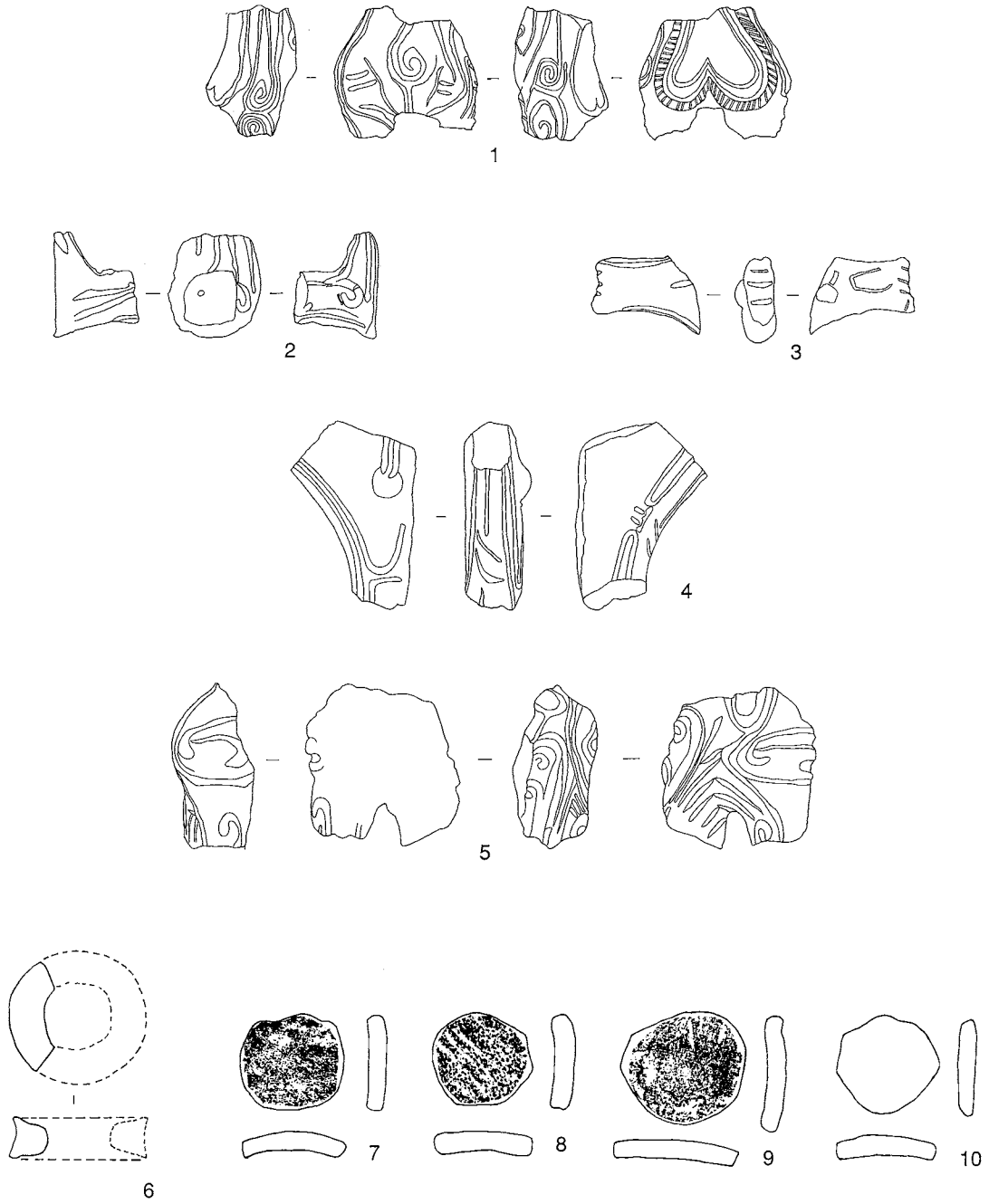


第136图 第51号住居址・244・集石1・竖穴1出土土器拓影(1:3)
 (1~9-51住、10~12-244、13~19-集石1、20~21-竖穴1)



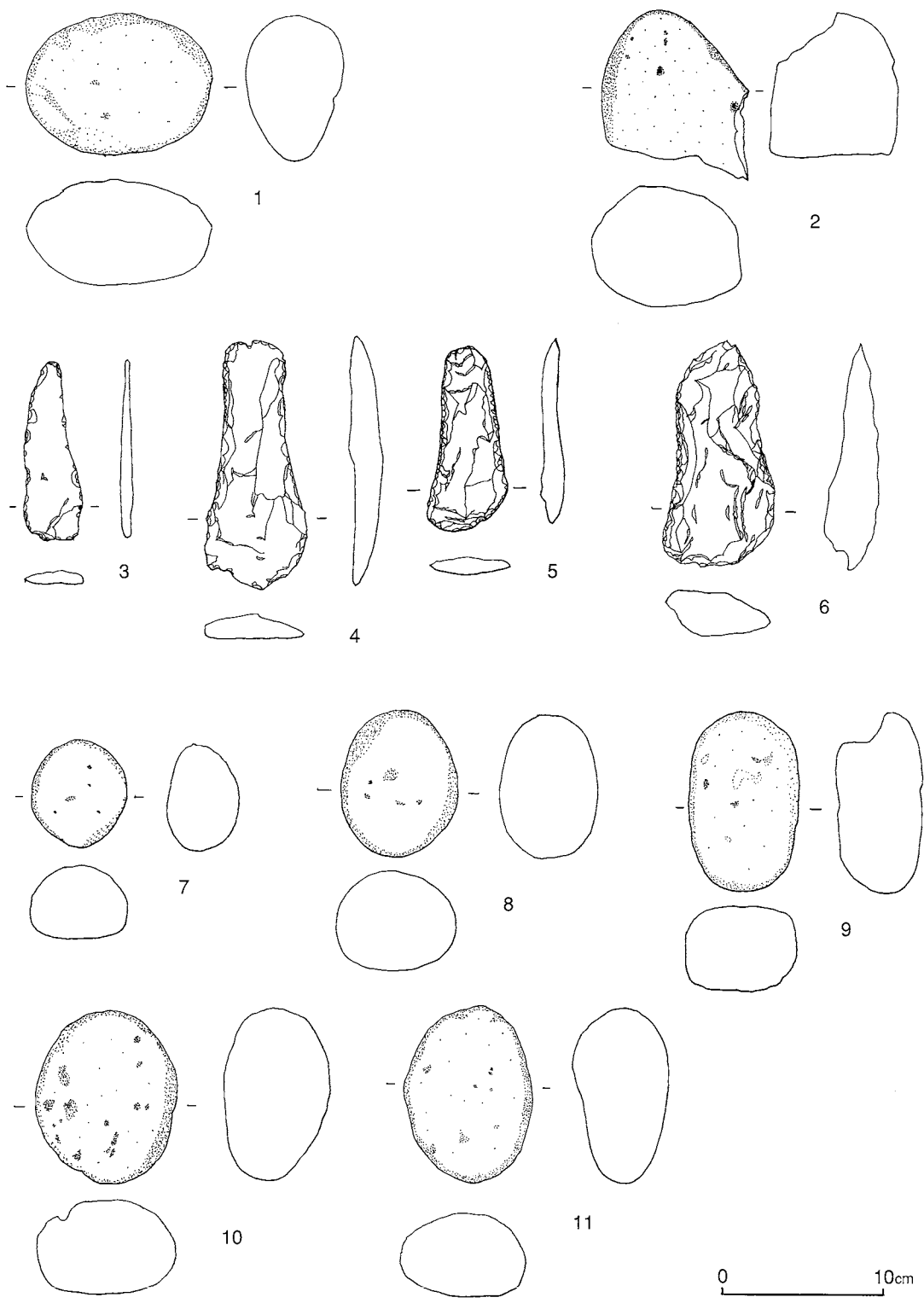
第137图 土偶

(1 - 26住、2 - 33住、3 - 36住)



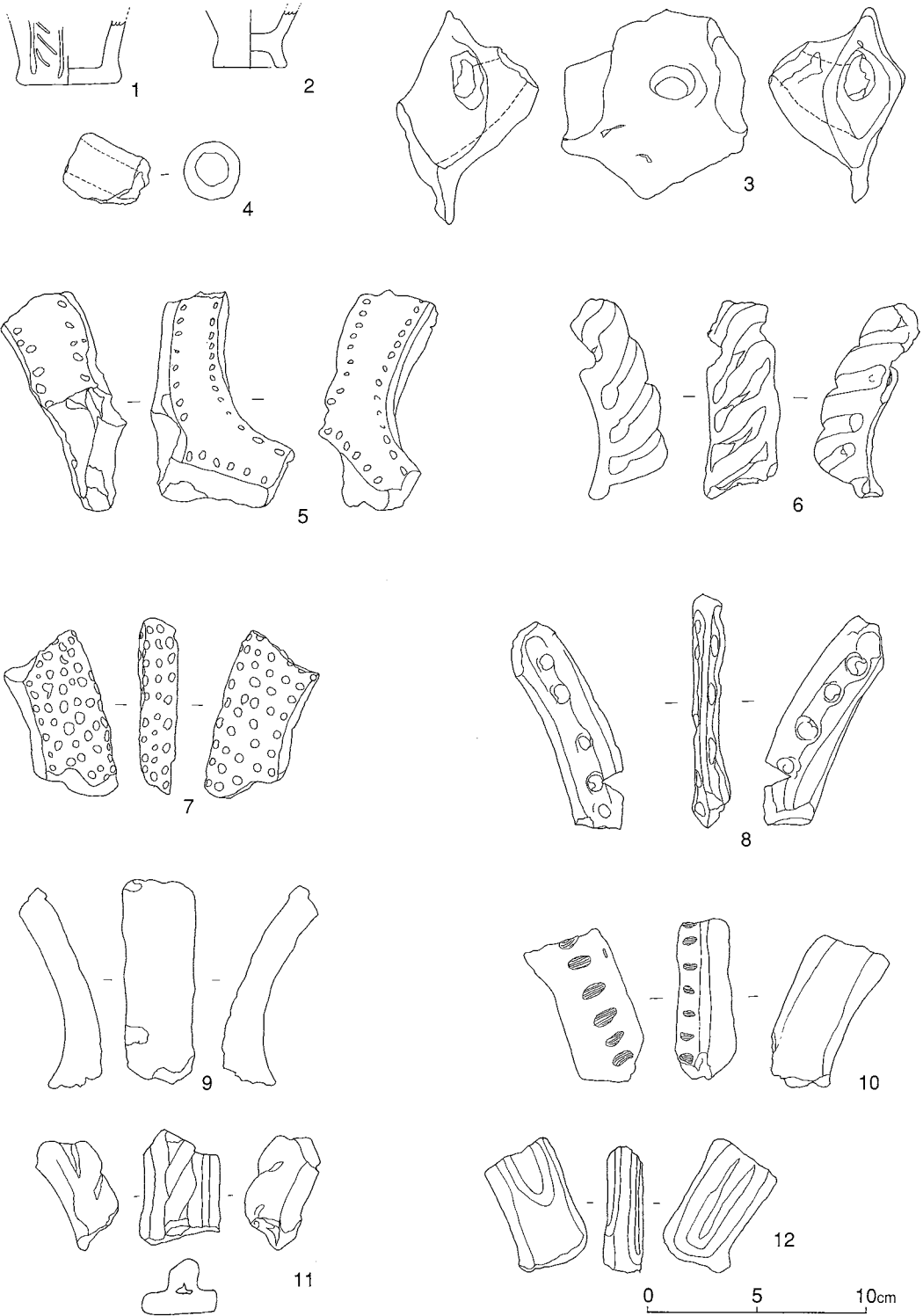
第138図 土偶・耳飾り・土製円盤

(1～2-37住、3-45住、4-47住、5-49住、6-M区検出面、7-26住、8-33住、9-40住、10-土坑238)

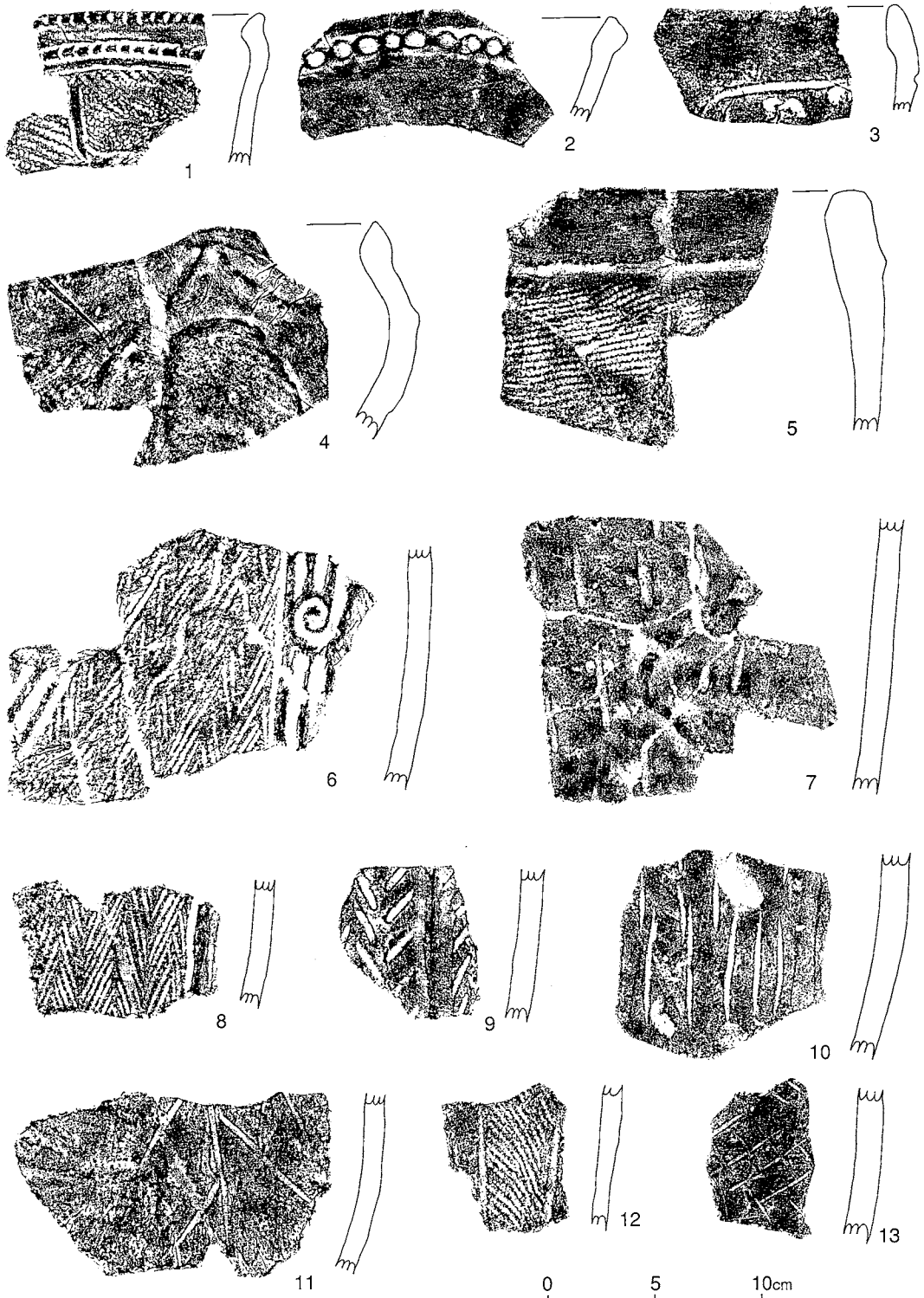


第139図 土坑・埋甕3覆土内・遺構外出土石器

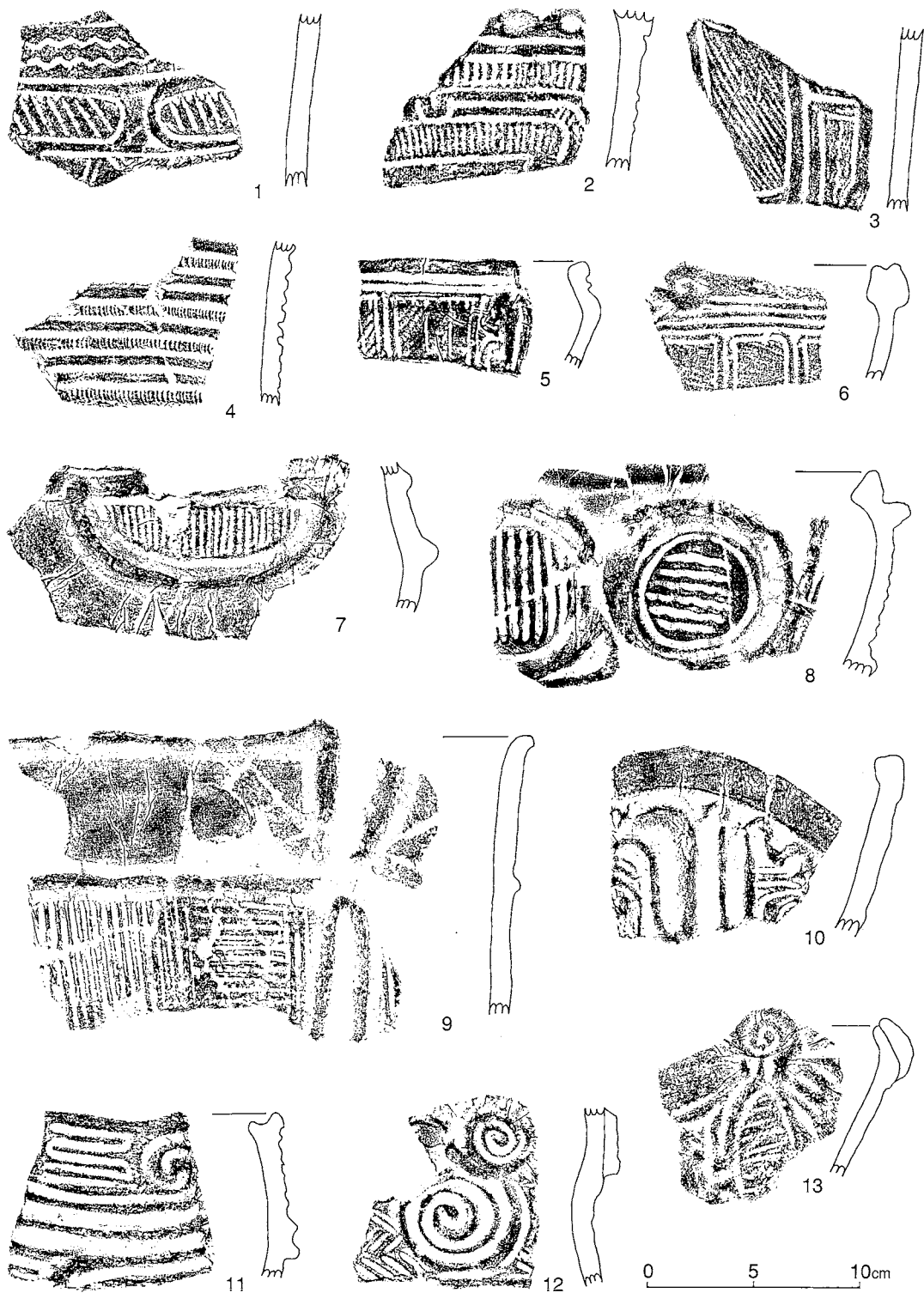
(1-土160、2-埋甕3、3-土189、4~5-土238、6-アルプス学園前、7~11-遺構外)



第140図 遺構外出土ミニチュア土器・注口土器・釣手土器片実測図 (1:3)
 (1~2-M区GT、3・4・6・9-アルプス学園前、5・7・11・12-B区BT、8・10-M区G11)

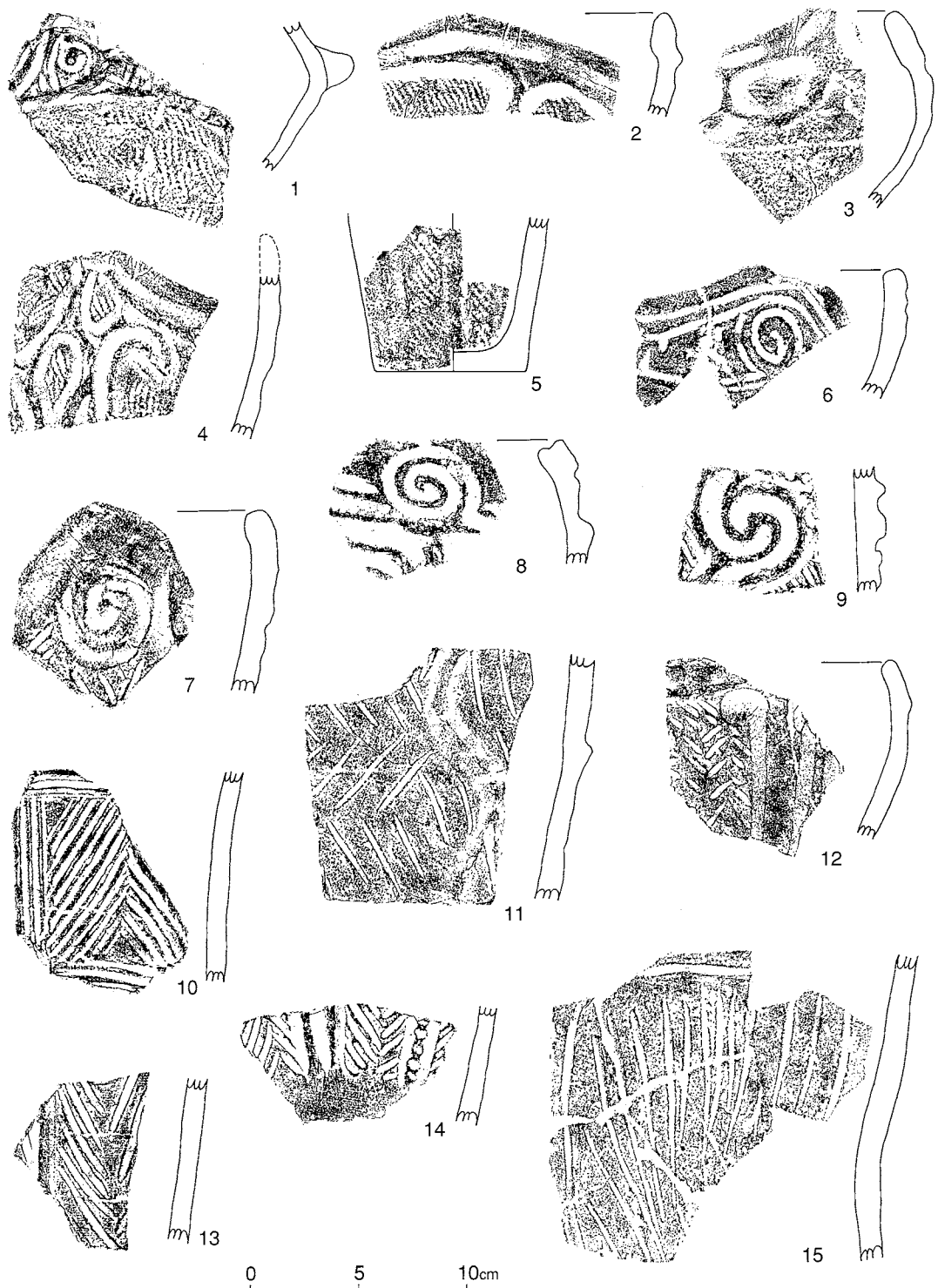


第141図 遺構外（アルプス学園前附近）出土土器拓影（1：3）



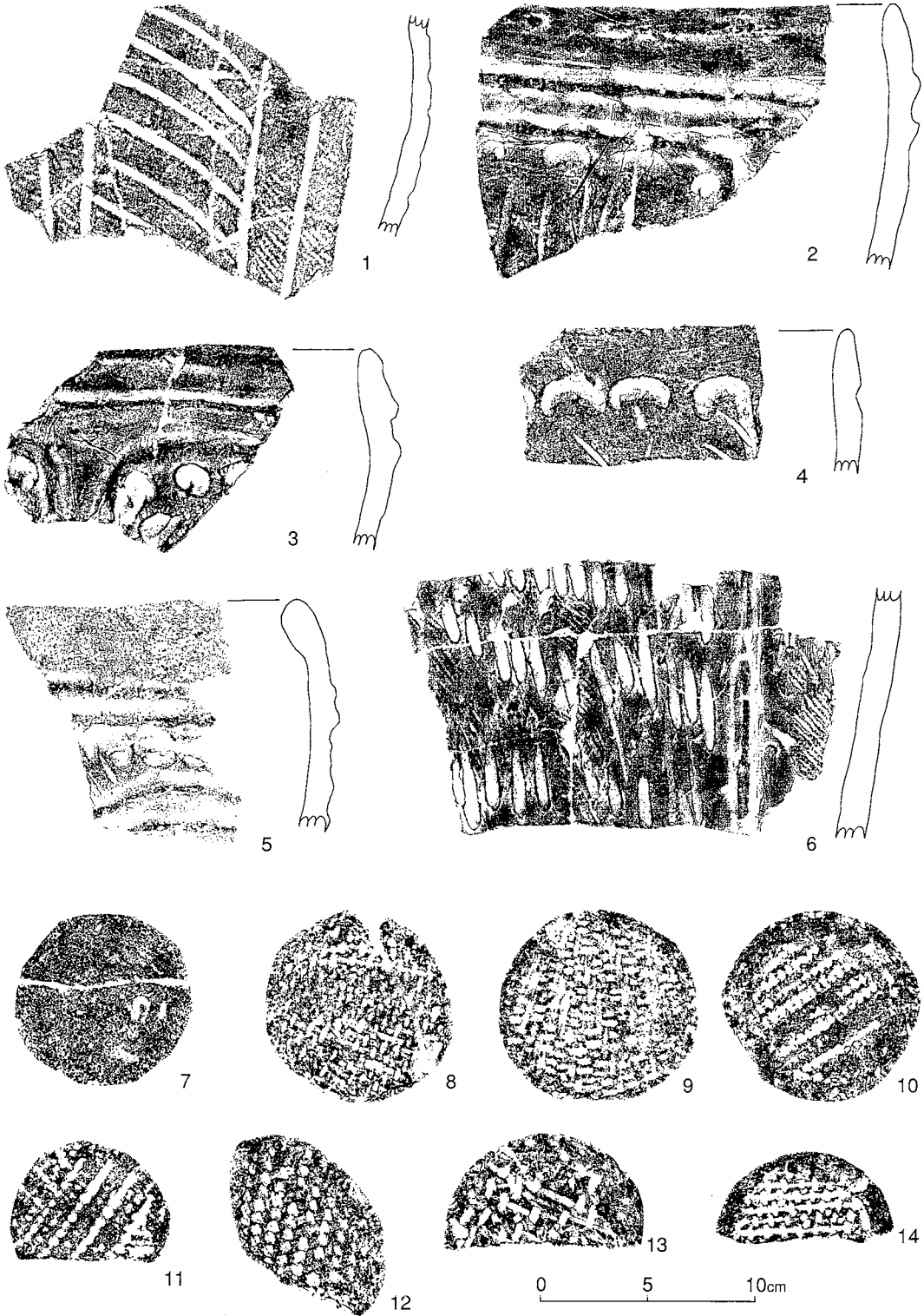
第142图 遺構外出土土器拓影 (1:3)

(1-K区、2~3·13-B区、4-A区、5~6·12-L区、7-I区、8-H区、9-F区、10-G区、11-M区)

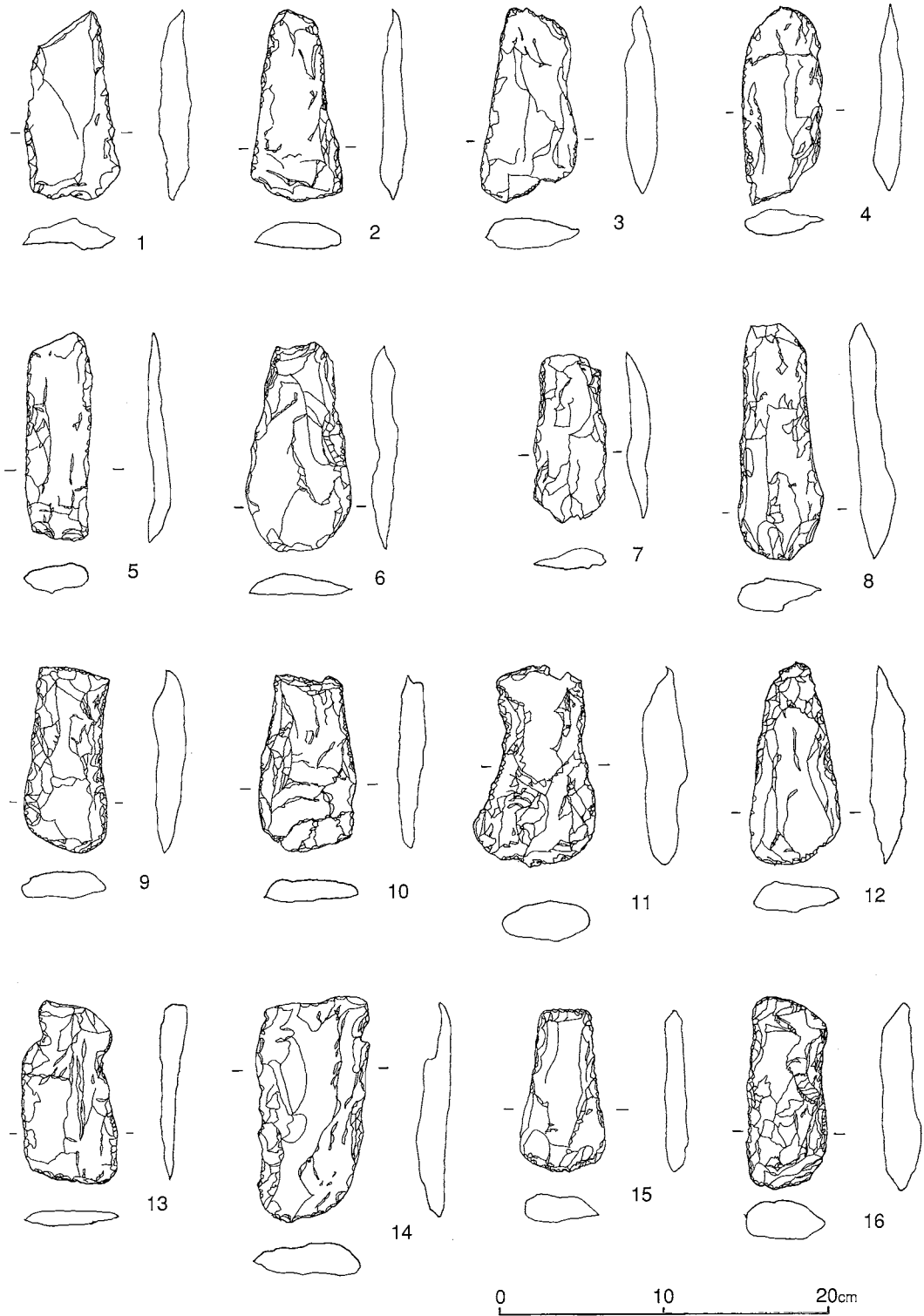


第143图 遺構外出土器拓影 (1:3)

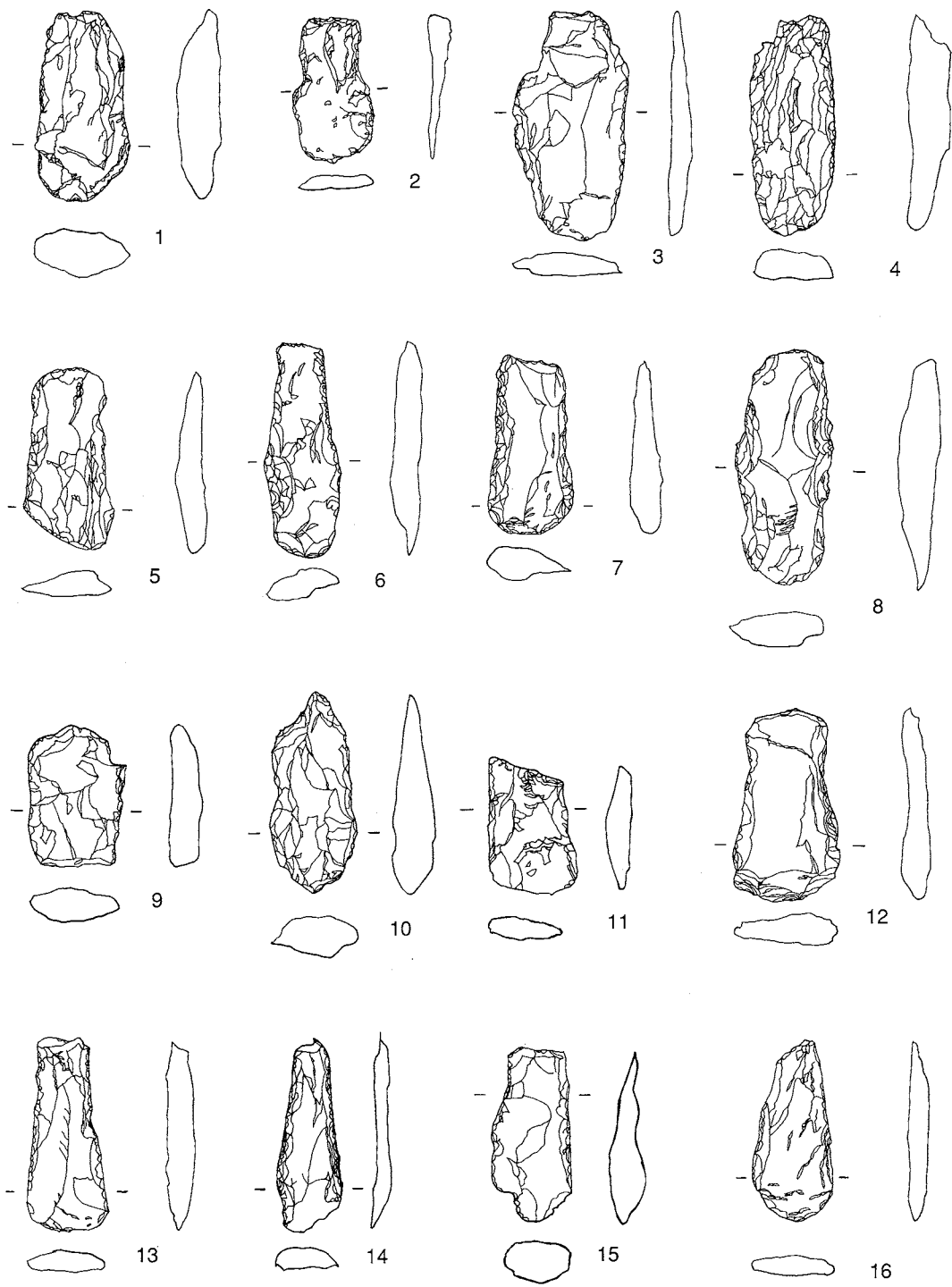
(1·14-G区、2~5·7~9·11~13-B区、6·15-A区、10-K区)



第144図 遺構外出土土器拓影及び土器底面拓影 (1:3)
 (1~4・6-M区、5・7~14-B区)

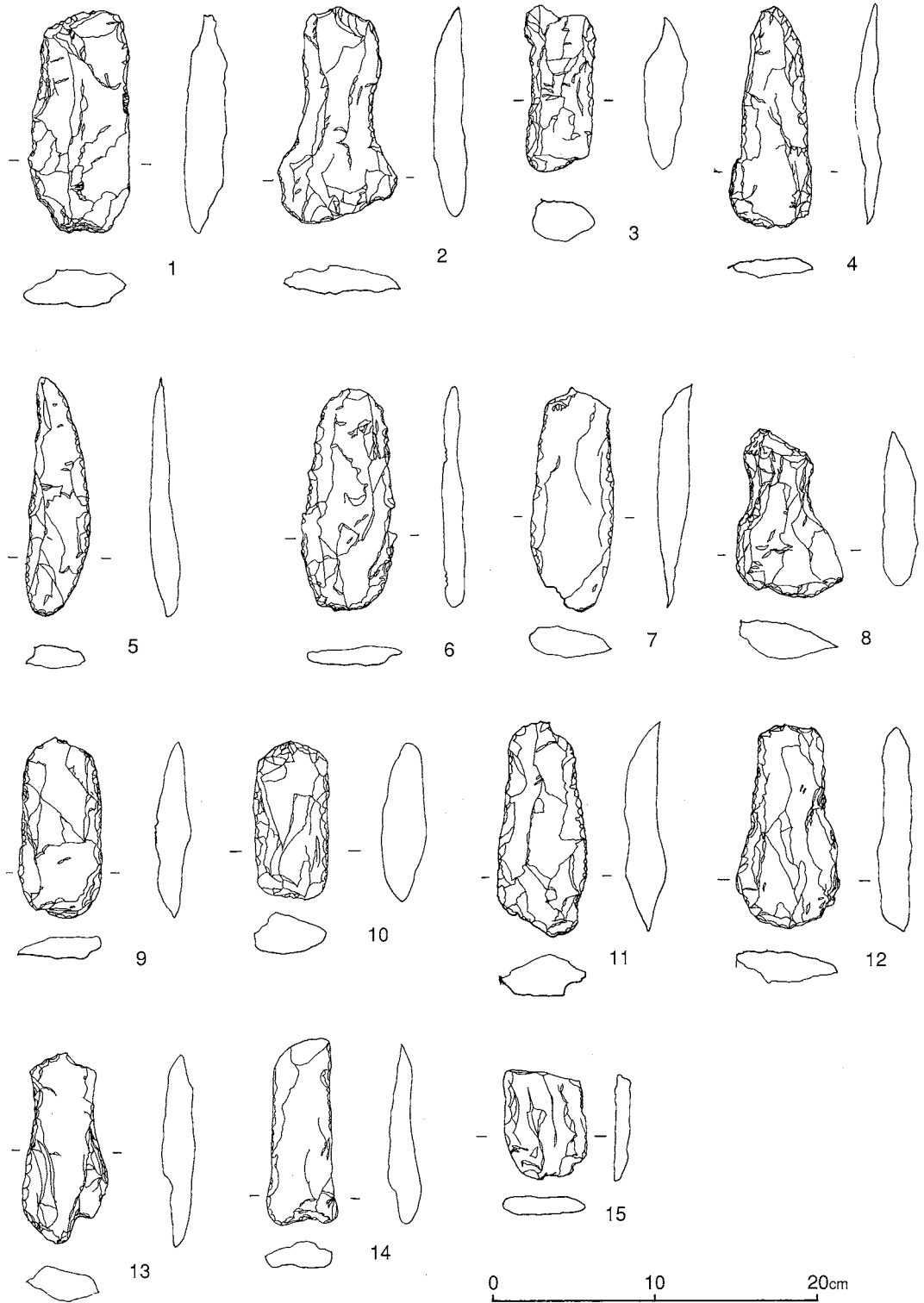


第145图 遺構外出土石器 (1:4)

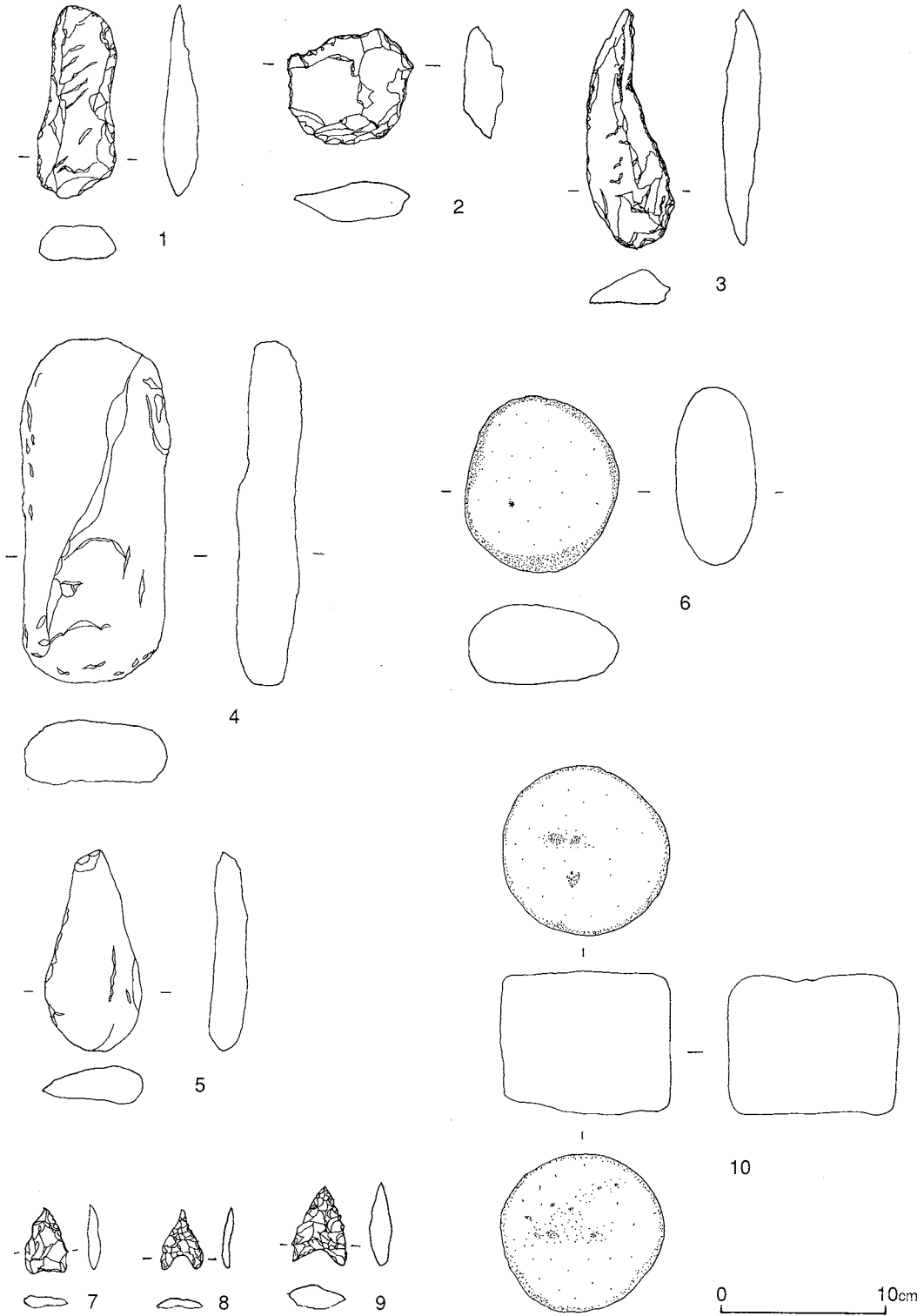


0 10 20cm

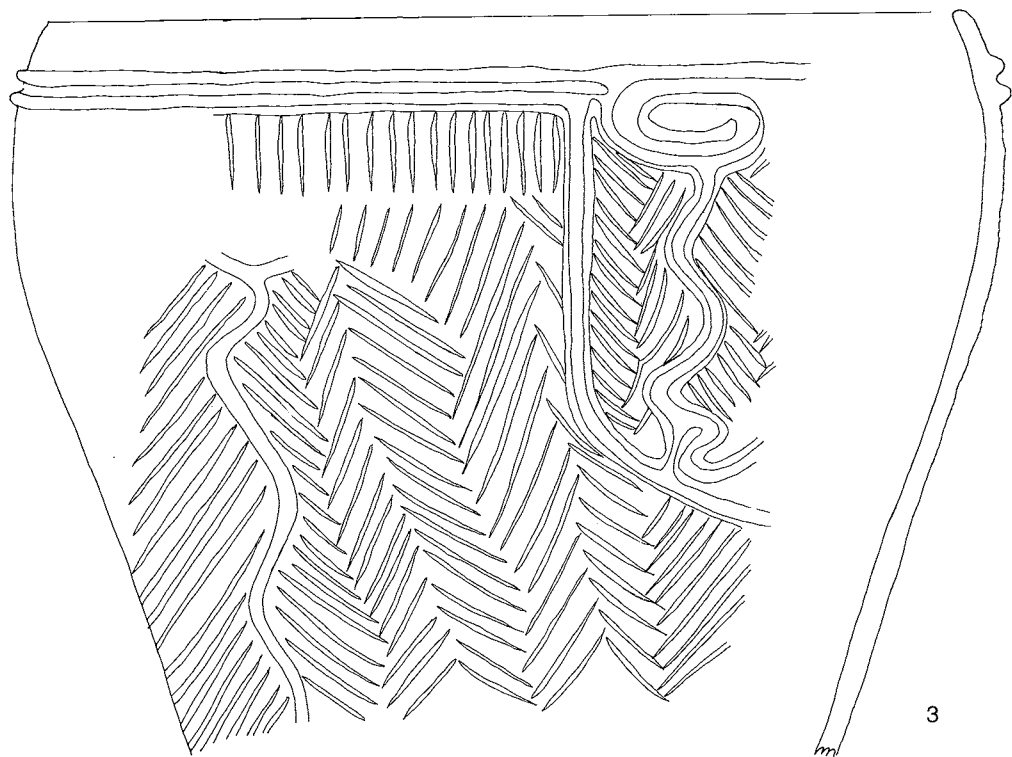
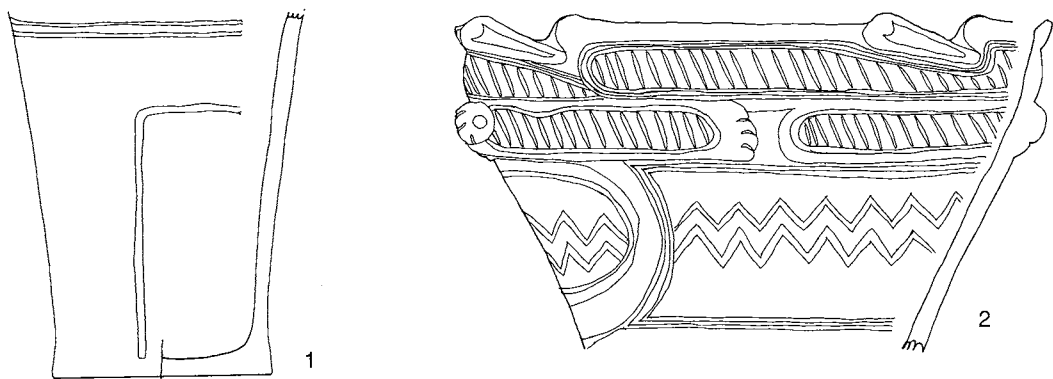
第146图 遺構外出土石器 (1:4)



第147图 遺構外出土石器 (1:4)



第148図 遺構外出土石器 (1:4、7~9は1:2)



0 10 20cm

第149図 遺構外出土器

長野県南安曇村三郷村等出土黒曜石産地推定結果

左側の表……分析番号・遺物番号・推定産地

右側の表

判別図判別群：判別図法によって推定された産地

判別分析と結果が異なるときは“*”をつけて示す。

判 別 分 析：第1候補産地…判別分析により推定された産地の第1候補

第2候補産地…判別分析により推定された産地の第2候補

判別群 候補産地記号

⇒判別図法による産地と通常は一致する。

距 離 試料から候補産地までのマハラノビス距離

⇒値が小さいほど候補産地と類似性が高い。

確 率 試料が候補産地に属する確率

⇒1に近いほど類似性が高い。

長野県南安曇村三郷村等出土黒曜石製石器産地推定結果

右：判別図法・判別分析からの最終推定結果分 左：判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

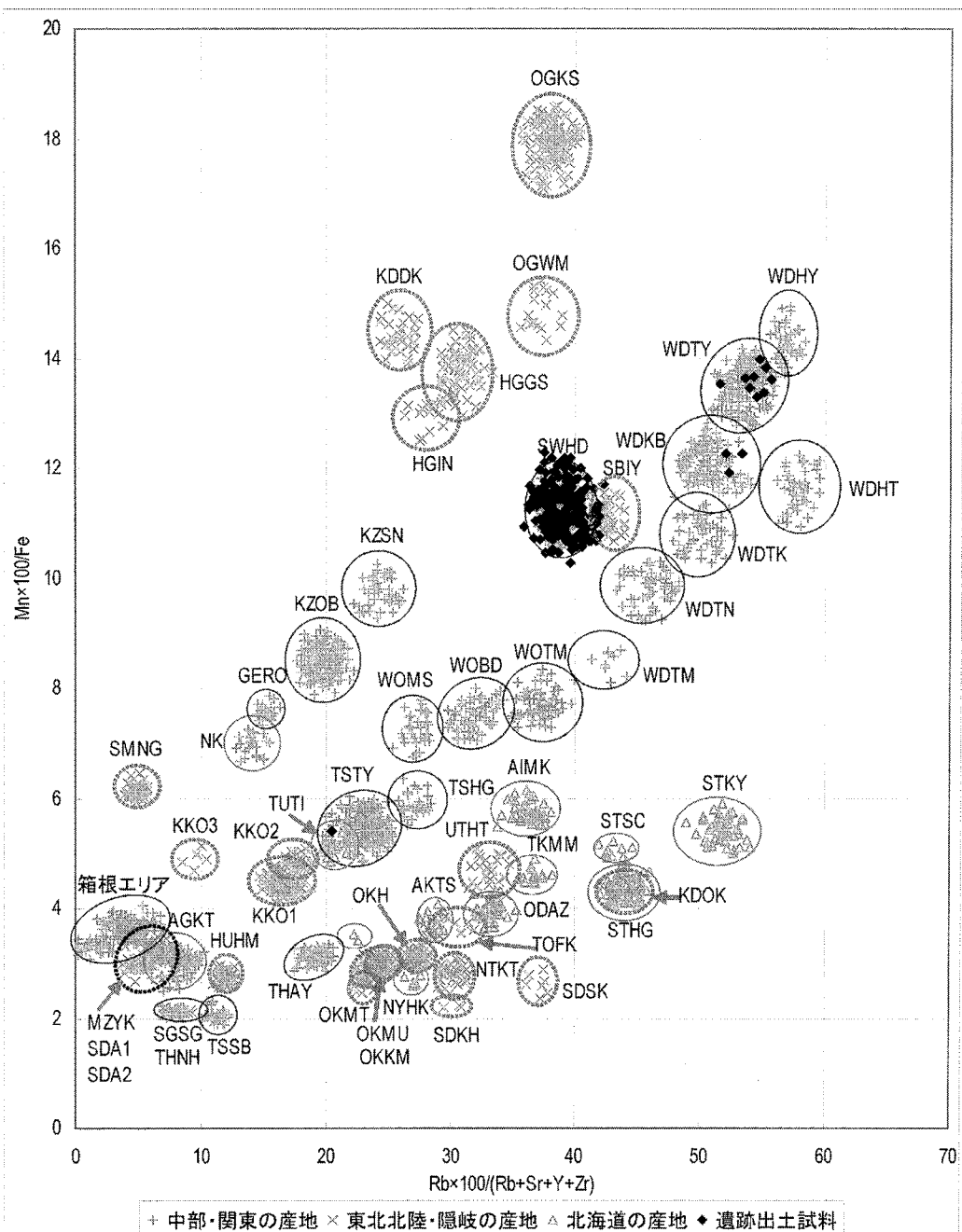
研究室 年間通番	分析番号	遺物 番号	推定産地	判別図 判別群	判別分析					
					第1候補産地			第2候補産地		
					判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
MKO 2-17226	MSM-1		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.62	1	SBIY	54.86	0
MKO 2-17227	MSM-2		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.93	1	SBIY	106.16	0
MKO 2-17228	MSM-3		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.18	1	SBIY	85.37	0
MKO 2-17229	MSM-4		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	23.6	1	SBIY	76.56	0
MKO 2-17230	MSM-5		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.35	1	SBIY	77.69	0
MKO 2-17231	MSM-6		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	22.53	1	SBIY	50.43	0
MKO 2-17232	MSM-7		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.07	1	WDTN	93.98	0
MKO 2-17233	MSM-8		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.36	1	SBIY	81.24	0
MKO 2-17234	MSM-9		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	20.44	1	SBIY	69.37	0
MKO 2-17235	MSM-10		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.29	1	WDTM	89.93	0
MKO 2-17236	MSM-11		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.81	1	SBIY	102.35	0
MKO 2-17237	MSM-12		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.37	1	SBIY	76.71	0
MKO 2-17238	MSM-13		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	23.08	1	SBIY	100.47	0
MKO 2-17239	MSM-14		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.73	1	SBIY	82.64	0
MKO 2-17240	MSM-15		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.8	1	SBIY	119.6	0
MKO 2-17241	MSM-16		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.02	1	SBIY	89.01	0
MKO 2-17242	MSM-17		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.69	1	WDTN	88	0
MKO 2-17243	MSM-18		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.77	1	WDTN	101.56	0
MKO 2-17244	MSM-19		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.31	1	WDTN	104.19	0
MKO 2-17245	MSM-20		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	19.15	1	SBIY	59.44	0
MKO 2-17246	MSM-21		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.28	1	SBIY	95.34	0
MKO 2-17247	MSM-22		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.49	1	SBIY	91.09	0
MKO 2-17248	MSM-23		和田小深沢群	WDKB	WDKB	2.78	1	WDTY	29.93	0
MKO 2-17249	MSM-24		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.89	1	SBIY	89.93	0
MKO 2-17250	MSM-25		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.64	1	WDTN	95.7	0
MKO 2-17251	MSM-26		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.81	1	SBIY	115.36	0
MKO 2-17252	MSM-27		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.33	1	SBIY	118.42	0
MKO 2-17253	MSM-28		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.32	1	SBIY	115.47	0
MKO 2-17254	MSM-29		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.19	1	WDTN	64.94	0
MKO 2-17255	MSM-30		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.41	1	WDTN	82.93	0
MKO 2-17256	MSM-31		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.11	1	SBIY	123.63	0
MKO 2-17257	MSM-32		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.15	1	SBIY	81.62	0
MKO 2-17258	MSM-33		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.16	1	SBIY	82.54	0
MKO 2-17259	MSM-34		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.81	1	SBIY	95.13	0

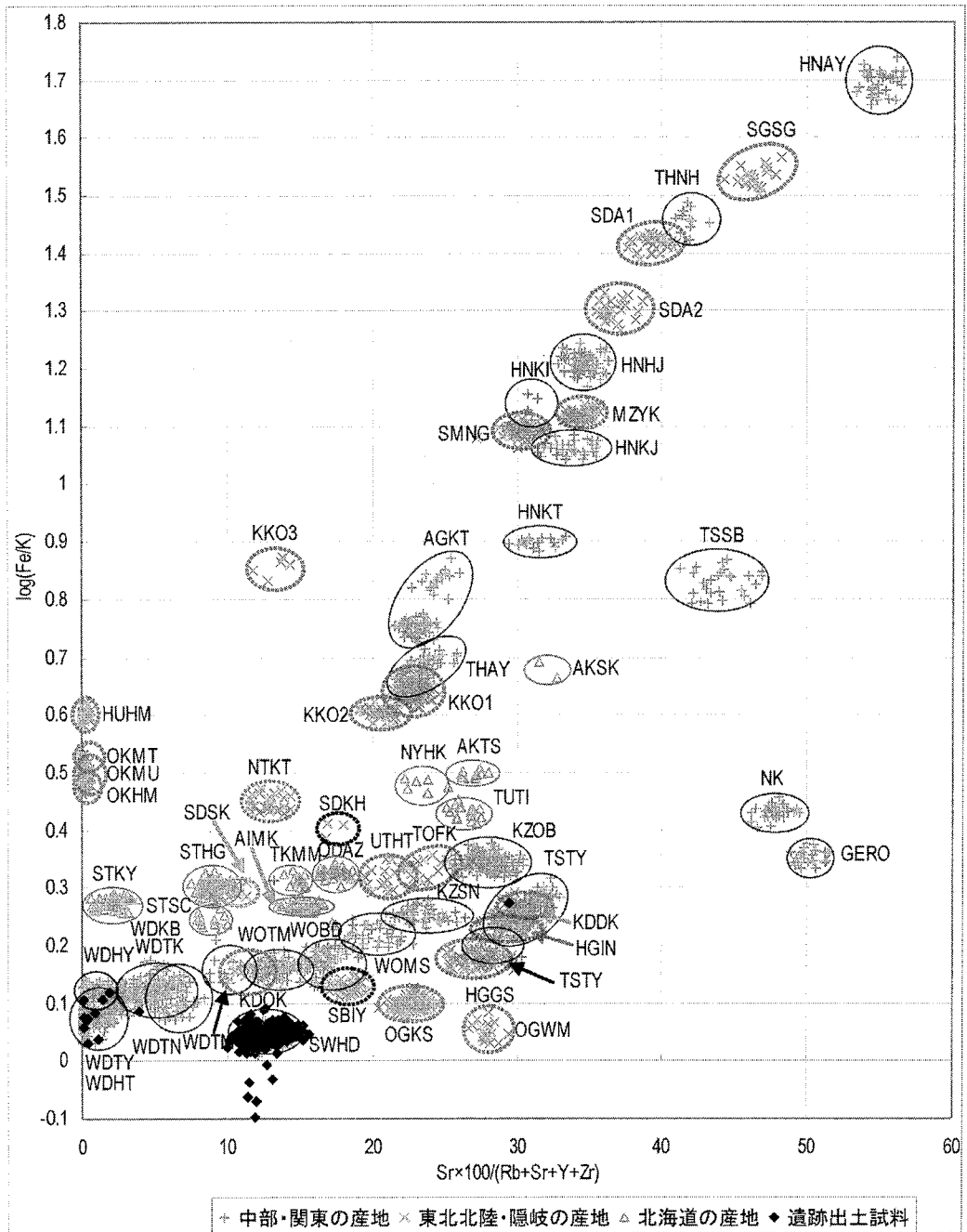
MKO 2-17260	MSM-35		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.49	1	WDTN	100.39	0
MKO 2-17261	MSM-36		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.24	1	WDTN	101.68	0
MKO 2-17262	MSM-37		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.75	1	SBIY	66.28	0
MKO 2-17263	MSM-38		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.27	1	SBIY	109.34	0
MKO 2-17264	MSM-39		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.32	1	SBIY	90.22	0
MKO 2-17265	MSM-40		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.59	1	WDTN	115.26	0
MKO 2-17266	MSM-41		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.97	1	SBIY	98.16	0
MKO 2-17267	MSM-42		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.66	1	WDTN	96.9	0
MKO 2-17268	MSM-43		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.57	1	SBIY	70.21	0
MKO 2-17269	MSM-44		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.42	1	SBIY	89.99	0
MKO 2-17270	MSM-45		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.38	1	SBIY	104.63	0
MKO 2-17271	MSM-46		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.78	1	SBIY	84.23	0
MKO 2-17272	MSM-47		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.08	1	WDTN	83.17	0
MKO 2-17273	MSM-48		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.83	1	SBIY	59.61	0
MKO 2-17274	MSM-49		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.69	1	SBIY	109.13	0
MKO 2-17275	MSM-50		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.79	1	SBIY	102.7	0
MKO 2-17276	MSM-51		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.52	1	SBIY	82.08	0
MKO 2-17277	MSM-52		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.51	1	SBIY	78.11	0
MKO 2-17278	MSM-53		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.86	1	WDTN	72.43	0
MKO 2-17279	MSM-54		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.98	1	SBIY	71.85	0
MKO 2-17280	MSM-55		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.48	1	SBIY	64.4	0
MKO 2-17281	MSM-56		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.09	1	SBIY	80.01	0
MKO 2-17282	MSM-57		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.92	1	SBIY	80.67	0
MKO 2-17283	MSM-58		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.96	1	SBIY	85.72	0
MKO 2-17284	MSM-59		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.97	1	SBIY	99.66	0
MKO 2-17285	MSM-60		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	0.9	1	SBIY	84.01	0
MKO 2-17286	MSM-61		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.43	1	WDTN	67.9	0
MKO 2-17287	MSM-62		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.12	1	WDTN	123.07	0
MKO 2-17288	MSM-63		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.23	1	SBIY	76.19	0
MKO 2-17289	MSM-64		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.54	1	SBIY	99.81	0
MKO 2-17290	MSM-65		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.25	1	WDTN	117.62	0
MKO 2-17291	MSM-66		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.29	1	SBIY	114.33	0
MKO 2-17292	MSM-67		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.14	1	SBIY	66.48	0
MKO 2-17293	MSM-68		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.61	1	WDTN	93.99	0
MKO 2-17294	MSM-69		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.12	1	SBIY	123.85	0
MKO 2-17295	MSM-70		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.65	1	SBIY	94.54	0
MKO 2-17296	MSM-71		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.37	1	WDTN	146.24	0
MKO 2-17297	MSM-72		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.77	1	SBIY	52.36	0
MKO 2-17298	MSM-73		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	17.97	1	SBIY	48.29	0
MKO 2-17299	MSM-74		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.39	1	SBIY	121.95	0
MKO 2-17300	MSM-75		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.41	1	WDTN	83.74	0
MKO 2-17301	MSM-76		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.3	1	SBIY	59.97	0

MKO 2-17302	MSM-77		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	18.83	1	SBIY	137.95	0
MKO 2-17303	MSM-78		和田鷹山群	WDTY	WDTY	4.56	1	WDKB	39.31	0
MKO 2-17304	MSM-79		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.11	1	SBIY	76.19	0
MKO 2-17305	MSM-80		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	22.4	1	WDTM	77.76	0
MKO 2-17306	MSM-81		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.86	1	SBIY	88.48	0
MKO 2-17307	MSM-82		和田鷹山群	WDTY	WDTY	7.99	1	WDHY	17.55	0
MKO 2-17308	MSM-83		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.65	1	WDTN	90.65	0
MKO 2-17309	MSM-84		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.54	1	SBIY	102.12	0
MKO 2-17310	MSM-85		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.48	1	SBIY	87.79	0
MKO 2-17311	MSM-86		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.85	1	SBIY	49.59	0
MKO 2-17312	MSM-87		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.74	1	SBIY	80.34	0
MKO 2-17313	MSM-88		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.73	1	SBIY	134.91	0
MKO 2-17314	MSM-89		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.57	1	WDTN	101.61	0
MKO 2-17315	MSM-90		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.94	1	SBIY	52.65	0
MKO 2-17316	MSM-91		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.64	1	WDTN	89.64	0
MKO 2-17317	MSM-92		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.93	1	SBIY	62.14	0
MKO 2-17318	MSM-93		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.3	1	SBIY	87.22	0
MKO 2-17319	MSM-94		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.94	1	WDTN	137.64	0
MKO 2-17320	MSM-95		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.15	1	SBIY	113.14	0
MKO 2-17321	MSM-96		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.72	1	SBIY	64.78	0
MKO 2-17322	MSM-97		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.4	1	WDTN	65.4	0
MKO 2-17323	MSM-98		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.19	1	SBIY	62.17	0
MKO 2-17324	MSM-99		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	0.42	1	SBIY	84.37	0
MKO 2-17325	MSM-100		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.04	1	SBIY	84.25	0
MKO 2-17326	MSM-101		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.08	1	SBIY	80.78	0
MKO 2-17327	MSM-102		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.79	1	SBIY	95.63	0
MKO 2-17328	MSM-103		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.86	1	SBIY	112.25	0
MKO 2-17329	MSM-104		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.72	1	SBIY	120.27	0
MKO 2-17330	MSM-105		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.73	1	SBIY	98.94	0
MKO 2-17331	MSM-106		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	19.6	1	SBIY	88.16	0
MKO 2-17332	MSM-107		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.23	1	SBIY	77.95	0
MKO 2-17333	MSM-108		和田小深沢群	WDKB	WDKB	10.06	1	WDTY	24.93	0
MKO 2-17334	MSM-109		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.55	1	SBIY	94.61	0
MKO 2-17335	MSM-110		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.03	1	SBIY	103.68	0
MKO 2-17336	MSM-111		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.03	1	SBIY	77.76	0
MKO 2-17337	MSM-112		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.85	1	SBIY	88.15	0
MKO 2-17338	MSM-113		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.01	1	WDTN	140.05	0
MKO 2-17339	MSM-114		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.73	1	SBIY	86.83	0
MKO 2-17340	MSM-115		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.35	1	SBIY	86.19	0
MKO 2-17341	MSM-116		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.39	1	WDTN	60.19	0
MKO 2-17342	MSM-117		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.15	1	WDTN	107.25	0
MKO 2-17343	MSM-118		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.25	1	WDTN	74.7	0

MKO 2-17344	MSM-119	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.99	1	SBIY	60.37	0
MKO 2-17345	MSM-120	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.35	1	SBIY	86.94	0
MKO 2-17346	MSM-121	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.62	1	SBIY	84.91	0
MKO 2-17347	MSM-122	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.51	1	SBIY	75.77	0
MKO 2-17348	MSM-123	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.29	1	WDTN	113.57	0
MKO 2-17349	MSM-124	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.42	1	SBIY	91.14	0
MKO 2-17350	MSM-125	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.75	1	SBIY	77.61	0
MKO 2-17351	MSM-126	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.43	1	SBIY	127.66	0
MKO 2-17352	MSM-127	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.61	1	SBIY	107.12	0
MKO 2-17353	MSM-128	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.31	1	SBIY	112.72	0
MKO 2-17354	MSM-129	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.32	1	SBIY	103.76	0
MKO 2-17355	MSM-130	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.94	1	WDTN	62.98	0
MKO 2-17356	MSM-131	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.52	1	WDTN	121.45	0
MKO 2-17357	MSM-132	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.53	1	SBIY	89.45	0
MKO 2-17358	MSM-133	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.84	1	SBIY	72.25	0
MKO 2-17359	MSM-134	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.72	1	WDTN	80.86	0
MKO 2-17360	MSM-135	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.15	1	SBIY	149.33	0
MKO 2-17361	MSM-136	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.75	1	SBIY	95.07	0
MKO 2-17362	MSM-137	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.8	1	SBIY	96	0
MKO 2-17363	MSM-138	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.07	1	SBIY	30.55	0
MKO 2-17364	MSM-139	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.61	1	SBIY	112.01	0
MKO 2-17365	MSM-140	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	0.69	1	SBIY	83.78	0
MKO 2-17366	MSM-141	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.63	1	SBIY	110.95	0
MKO 2-17367	MSM-142	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.89	1	WDTN	71.31	0
MKO 2-17368	MSM-143	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.27	1	WDTN	86.41	0
MKO 2-17369	MSM-144	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	15.13	1	SBIY	91.39	0
MKO 2-17370	MSM-145	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.46	1	WDTN	57.87	0
MKO 2-17371	MSM-146	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.74	1	SBIY	69.54	0
MKO 2-17372	MSM-147	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.98	1	WDTN	55.5	0
MKO 2-17373	MSM-148	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.08	1	SBIY	94.72	0
MKO 2-17374	MSM-149	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	5.77	1	SBIY	70.2	0
MKO 2-17375	MSM-150	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.53	1	SBIY	82.51	0
MKO 2-17376	MSM-151	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.05	1	WDTM	94.31	0
MKO 2-17377	MSM-152	和田小深沢群	WDKB	WDKB	9.84	1	WDTK	24.84	0
MKO 2-17378	MSM-153	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.38	1	WDTN	69.2	0
MKO 2-17379	MSM-154	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.54	1	SBIY	110.87	0
MKO 2-17380	MSM-155	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.4	1	WDTN	71.87	0
MKO 2-17381	MSM-156	和田鷹山群	WDTY	WDTY	1.67	1	WDHY	17.4	0
MKO 2-17382	MSM-157	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.88	1	WDTN	80.59	0
MKO 2-17383	MSM-158	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.2	1	SBIY	97.53	0
MKO 2-17384	MSM-159	諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.07	1	SBIY	104.97	0
MKO 2-17385	MSM-160	和田鷹山群	WDTY	WDTY	4.08	1	WDHY	29.51	0

MKO 2-17386	MSM-161		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.08	1	WDTN	101.52	0
MKO 2-17387	MSM-162		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.41	1	SBIY	79.72	0
MKO 2-17388	MSM-163		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.57	1	WDTN	156.35	0
MKO 2-17389	MSM-164		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.12	1	SBIY	69.52	0
MKO 2-17390	MSM-165		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	14.29	1	SBIY	87.99	0
MKO 2-17391	MSM-166		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.15	1	WDTN	122.21	0
MKO 2-17392	MSM-167		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.34	1	SBIY	133.41	0
MKO 2-17393	MSM-168		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.81	1	SBIY	83.71	0
MKO 2-17394	MSM-169		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	11.43	1	SBIY	68.6	0
MKO 2-17395	MSM-170		和田鷹山群	WDTY	WDTY	1.09	1	WDHY	21.74	0
MKO 2-17396	MSM-171		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.49	1	SBIY	100.22	0
MKO 2-17397	MSM-172		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3	1	WDTN	85.63	0
MKO 2-17398	MSM-173		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.35	1	SBIY	84.6	0
MKO 2-17399	MSM-174		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.96	1	SBIY	91.68	0
MKO 2-17400	MSM-175		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.73	1	WDTN	138.21	0
MKO 2-17401	MSM-176		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.67	1	SBIY	105.7	0
MKO 2-17402	MSM-177		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	8.3	1	SBIY	46.16	0
MKO 2-17403	MSM-178		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.83	1	SBIY	67.74	0
MKO 2-17404	MSM-179		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	12.42	1	SBIY	66	0
MKO 2-17405	MSM-180		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.94	1	SBIY	99.44	0
MKO 2-17406	MSM-181		和田鷹山群	WDTY	WDTY	4.34	1	WDHY	24.83	0
MKO 2-17407	MSM-182		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	13.8	1	WDTN	55.07	0
MKO 2-17408	MSM-183		和田鷹山群	WDTY	WDTY	4.78	0.99	WDHY	11.83	0.01
MKO 2-17409	MSM-184		和田鷹山群	WDTY	WDTY	6.91	1	WDHY	15.66	0
MKO 2-17410	MSM-185		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.68	1	SBIY	105.03	0
MKO 2-17411	MSM-186		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.46	1	SBIY	80.84	0
MKO 2-17412	MSM-187		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	16.12	1	SBIY	124.59	0
MKO 2-17413	MSM-188		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.35	1	SBIY	107.67	0
MKO 2-17414	MSM-189		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	1.72	1	SBIY	87.34	0
MKO 2-17415	MSM-190		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.46	1	SBIY	77.66	0
MKO 2-17416	MSM-191		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	10.82	1	WDTN	63.86	0
MKO 2-17417	MSM-192		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	2.45	1	SBIY	90.54	0
MKO 2-17418	MSM-193		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	24.08	1	SBIY	129.29	0
MKO 2-17419	MSM-194		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	4.5	1	SBIY	107.99	0
MKO 2-17420	MSM-195		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	3.14	1	SBIY	77.51	0
MKO 2-17421	MSM-196		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.73	1	SBIY	103.69	0
MKO 2-17422	MSM-197		和田鷹山群	WDTY	WDTY	0.9	1	WDHY	23.75	0
MKO 2-17423	MSM-198		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	9.79	1	WDTN	88.55	0
MKO 2-17424	MSM-199		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	6.28	1	WDTN	106.62	0
MKO 2-17425	MSM-200		蓼科冷山群	TSTY	TSTY	11.63	1	TUTI	21.2	0
MKO 2-17426	MSM-201		諏訪星ヶ台群	SWHD	SWHD	7.57	1	WDTN	114.47	0





黒曜石産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110 L 蛍光 X 線分析装置による)

都道府県	地図 No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地 (分析数)							
北海道	1	白滝	八号沢群		STHG		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(31)、八号沢(79)、黒曜の沢(6)、幌加林道(4)							
			黒曜の沢群		STKY									
	2	上士幌	三股群		KSMM		十三ノ沢(16)							
	3	置戸	安住群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)							
	4	旭川	高砂台群		AKTS		高砂台(6)、雨紛台(5)、春光台(5)							
			春光台群		AKSK									
	5	名寄	布川群		NYHK		布川(10)							
	6	新十津川	須田群		STSD		須田(6)							
7	赤井川	曲川群		AIMK		曲川(25)、土木川(15)								
8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉(16)								
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)							
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎浜(40)							
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸(98)							
			脇本群		OGWM									
山形	12	羽黒	月山群		HGGS		月山荘前(30)、朝日町田代沢(18)、櫛引町中沢(18)							
			今野川群		HGIN									
新潟	13	新津	金津群		NTKT		金津(29)							
	14	新発田	板山群		SBIY		板山牧場(40)							
栃木	15	高原山	甘湯沢群	高原山1群	THAY	TKH 1	甘湯沢(50)、桜沢(20)							
			七尋沢群	高原山2群	THNH	TKH 2								
長野	16	和田 (WD)	鷹山群	和田峠1群	WDTY	WDT 1	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライト(87)、古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、土屋橋南(68)、丁字御領(18)							
			小深沢群	和田峠2群	WDKB	WDT 2								
			土屋橋北群	和田峠3群	WDTK	WDT 3								
			土屋橋西群	和田峠4群	WDTN	WDT 4								
			土屋橋南群	和田峠5群	WDTM	WDT 5								
			芙蓉ライト群		WDHY									
			古峠群		WDHT									
	17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ峰系	SWHD	KRM	星ヶ塔第1鉱区(36)、星ヶ塔第2鉱区(36)、星ヶ台A(36)、星ヶ台B(11)、水月霊園(36)、水月公園(13)、星ヶ塔のりこし(36)							
								18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山(33)、麦草峠(36)、麦草峠東(33)、渋ノ湯(29)、美し森(4)、八ヶ岳7(17)、八ヶ岳9(18)、双子池(34)
										双子山群		TSHG		双子池(26)
			播鉢山群		TSSB		播鉢山(31)、亀甲池(8)							

神奈川	19	箱根	芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
	20		畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)
			黒岩橋群	箱根系A群	HNKI	HKNA	黒岩橋(9)
静岡	21	鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)	
	22	天城	上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)
東京	23	神津島	柏峠群	柏峠	AGKT	KSW	柏峠(80)
			恩馳島群	神津島1群	KZOB	KOZ 1	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)
			砂糠崎群	神津島2群	KZSN	KOZ 2	砂糠崎(40)、長浜(5)
島根	24	隠岐	久見群		OKHM		久見パーライト中(30)、久見採掘現場(18)
			箕浦群		OKMU		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸浜(35)
			岬群		OKMT		岬地区(16)
その他			NK群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡試料)、原石産地は未発見

佐々木繁喜氏提供試料(まだ地図には入れていない)

青森	小泊	折腰内群	KDOK	小泊市折腰内(8)
岩手	北上川	北上折居1群	KKO 1	水沢市折居(36)、花巻日形田ノ沢(36)、雫石小赤沢(22)
		北上折居2群	KKO 2	水沢市折居(23)、花巻日形田ノ沢(8)、雫石小赤沢(2)
		北上折居3群	KKO 3	水沢市折居(5)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	宮崎町湯ノ倉(54)
	色麻	根岸群	SMNG	色麻町根岸(48)
仙台		秋保1群	SDA 1	仙台市秋保土蔵(17)
		秋保2群	SDA 2	仙台市秋保土蔵(35)
	塩竈	塩竈群	SGSG	塩竈市塩竈漁港(22)



長野県南安曇村三郷村 etc. 出土黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%	エリア	判別群	記号	試料数	%
和田 (WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0	羽 黒	月山	HGGS	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0		今野川	HGIN	0	0
	高松沢	WOTM	0	0	北上川	折居 1 群	KKO 1	0	0
和田 (WD)	芙蓉ライト	WDHY	0	0		折居 2 群	KKO 2	0	0
	鷹山	WDTY	9	4.48		折居 3 群	KKO 3	0	0
	小深沢	WDKB	3	1.49	宮 崎	湯ノ倉	MZYK	0	0
	土屋橋北	WDTK	0	0	仙 台	秋保 1 群	SDA 1	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0		秋保 2 群	SDA 2	0	0
	土屋橋南	WDTM	0	0	色 麻	根岸	SMNG	0	0
	古峠	WDHT	0	0	塩 竈	塩竈港群	SGSG	0	0
諏 訪	星ヶ台	SWHD	188	93.53	小 泊	折腰内	KDOK	0	0
蓼 科	冷山	TSTY	1	0.5	魚 津	草月上野	UTHT	0	0
	双子山	TSHG	0	0	高 岡	二上山	TOFK	0	0
	播鉢山	TSSB	0	0	佐 渡	真光寺	SDSK	0	0
天 城	柏峠 1	AGKT	0	0		金井ニッ坂	SDKH	0	0
箱 根	畑宿	HNHJ	0	0	隠 岐	久見	OKHM	0	0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0		岬地区	OKMT	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0		箕浦	OKMU	0	0
	上多賀	HNKT	0	0	白 滝	8 号沢	STHG	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0		黒曜の沢	STKY	0	0
神津島	恩馳島	KZOB	0	0	赤井川	曲川	AIMK	0	0
	砂糠崎	KZSN	0	0	豊 浦	豊泉	TUTI	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0	置 戸	安住	ODAZ	0	0
	七尋沢	THNH	0	0	十 勝	三股	TKMM	0	0
新 津	金津	NTKT	0	0	名 寄	布川	NYHA	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0	旭 川	高砂台	AKTS	0	0
深 浦	八森山	HUHM	0	0		春光台	AKSK	0	0
木 造	出来島	KDDK	0	0	不明産地 1	NK	NK	0	0
男 鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0	下呂石		GERO	0	0
	脇本	OGWM	0	0					
合 計								201	100
不可など								0	
総 計								201	

1. 蛍光X線分析は試料の表面を分析する手法である。三郷村の分析試料は表面状態が非常によく、汚れ、風化がほとんどない状態であった。そのため、分析結果は良好で201点すべての産地推定が可能であった。
2. 判別図法、判別分析（多変量解析）の二つの手法による推定結果はすべての試料で一致した。

3. 諏訪星ヶ台群188点 (93.5%)、和田鷹山群 9 点 (4.5%)、和田小深沢群 3 点 (1.5%)、蓼科冷山群 1 点 (0.5%) という結果は、現在までの木曾近辺の中期の遺跡の産地推定結果と類似した傾向である。

(沼津工業高等専門学校 望月 明彦)

東小倉遺跡の自然科学分析

はじめに

長野県三郷村に所在する東小倉遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代に比定される住居址等が検出されている。本報告では、本遺跡の38号住居址から出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定や樹種同定を実施し、遺構の年代観や木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、東小倉V遺跡G区38号住居址から出土した炭化材4点（炭No.1～4）である。これら試料のうち、樹種同定は全点、放射性炭素年代測定は炭No.2の1点を対象に実施する。なお、炭No.2は、同一試料名で、樹種同定用と年代測定用に分割されている。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得ている。測定方法は加速器質量分析（AMS）法を用い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。38号住居址から出土した炭化材の年代値（補正年代）は、4140 BPであった。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

一方、住居址内から出土した炭化材は、全点クりに同定された。以下に、主な解剖学的特徴を記す。

• クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

表4 炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地区	遺構	試料名	樹種	補正年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 (BP)	Code No.
G 区	38号住	炭No.1	クリ				
		炭No.2 樹種同定用	クリ				
		炭No.2 年代測定用	クリ	4140 ± 50	-22.61 ± 1.19	4100 ± 40	IAAA-30524
		炭No.3	クリ				
		炭No.4	クリ				

4. 考察

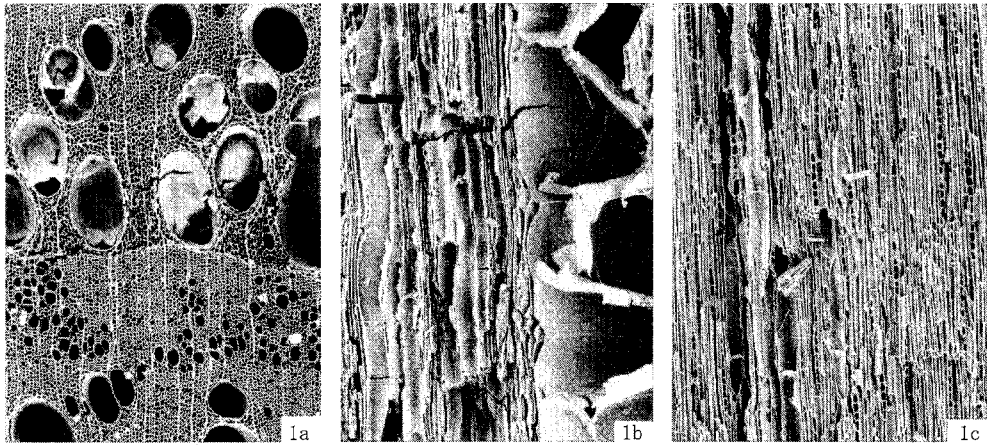
放射性炭素年代測定の結果、38号住居址から出土した炭化材（炭No.2）は、約4100年前の値を示した。この年代値は、既存の分析例（キーリ・武藤，1982；谷口，2001）によれば、中部地方における縄文時代中期頃の年代に相当する。したがって、38号住居址はこの頃に構築あるいは使用された可能性がある。

一方、放射性炭素年代測定に用いた試料を含めた5点の炭化材は、いずれも落葉広葉樹のクリであった。クリは、重硬で強度や耐朽性に優れた材質を有しており、強度等が必要とされる住居構築材などに適した種類である。

長野県内では、北村遺跡（明科町）、郷土遺跡（小諸市）、屋代遺跡群（更埴市）等で縄文時代の住居址内から出土した住居構築材と考えられる炭化材についての分析調査例がある（鈴木・能城，1993；パリノ・サーヴェイ株式会社，1993；高橋，2000）。これら結果を見ると、クリを利用した例が多い。今回分析を行った試料については、出土状況などから用途等を検討する必要があるが、住居構築材であれば県内で認められているクリを多用する傾向とよく一致する。クリが多用される傾向は、中部地方に隣接する関東地方でも認められており（高橋・植木，1994）、また、クリ栽培との関連も指摘されている（千野，1983）。ただし、クリの多用とクリ栽培の関連については不明な点が多く、今後さらに検討する必要がある。

今後は、本分析結果について評価するため38号住居址における出土遺物の年代観との比較や、炭化材の出土状況からその用途について検証する必要がある。また、木材利用についても、本遺跡や周辺の遺跡の分析調査例などを蓄積し、さらに検討したいと考えている。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）



1. クリ (VG区38号住 炭No. 3)
a:木口、b:柀目、c:板目

200 μm : a
200 μm : b, c

引用文献

- 千野裕道 (1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生. 東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p. 27-42.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1993) 郷土遺跡出土炭化材の同定. 「小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集 郷土—長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書—」, p. 52-57, 小諸市教育委員会.
- 鈴木三男・能城修一 (1993) 長野県北村遺跡出土炭化材の樹種. 「(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡 本文 編・図版編」, p. 167-168, 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター.
- 高橋 敦 (2000) 炭化材の樹種. 「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書51 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴市内その3—更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原 遺跡)—縄文時代編—本文」, p. 249-253, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.
- 高橋 敦・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p. 5-18.
- 谷口康浩 (2001) 縄文時代遺跡の年代. 季刊考古学, 77, p. 17-21, 雄山閣.

表5 土器形式による住居址の時期区分

中期中葉	I期		
	II期		
	III期		
	IV期	27	
	V期		
	VI期		
中期後葉	I期	33・34・36・37・40・41・43	
			44・I～II
	II期	11・14・15・26・38・39・42・47・50・51	
			17・II～III
	III期	7・10・18・24・25・45・48・49	
			22・III～IV
			30・III～IV
			52・III～IV
			53・III～IV
IV期	19・20・21・23・31		

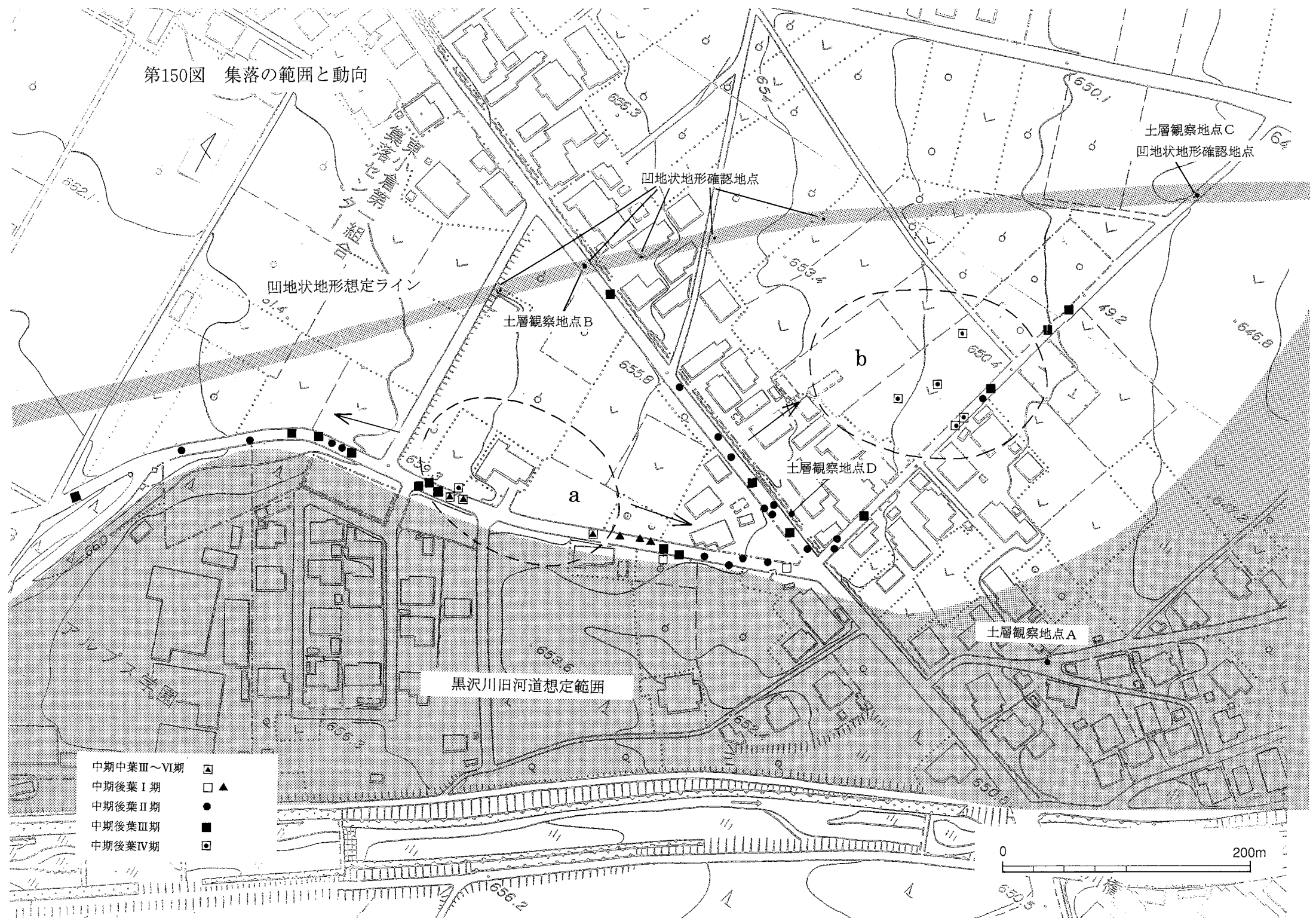
表6 各遺跡の住居址時期区分

	三郷村東小倉遺跡	穂高町他谷遺跡	山形村殿村遺跡	朝日村熊久保遺跡
中期中葉 I期				2・4・27
II期		11・13・18・24・ 25・28・29		
III期	27	10・15・16・41		
IV期		1・20・31	11IV～V・21IV～ V	
V期				24・25・28
VI期	26・32	2・4	32	6・9・14・18・ 23
中期後葉 I期	33・34・36・37・41・ 43	6・7・12・19・ 30・32・35		6・10
II期	11・14・15・17・42・ 44・50・51	3・14・23・27・ 34・40	2・3・5・25	3・11・16・19・ 31
III期	7・10・18・22・24・ 25・28・30・38・39・ 45・48・52・53	5・9・17	17・22・27	7・8・13・15・ 17・20・21・22
IV期	1・2・3・4・19・ 20・21・23・31	21・26・36・37・ 38・42・43・44・ 45・46	19・24	1・5・12
時期不詳	5・6・8・9・12・ 13・16・29・35・46			

※東小倉遺跡については表5の時期区分に加えて、遺構の形態・炉の形態・切り合いなどを加味して時期区分を一部変更してある。

※数字は住居址番号

第150図 集落の範囲と動向



第150図 集落の範囲と動向

第5章 まとめ

東小倉遺跡Ⅲ～Ⅴ次調査では、縄文時代中期中葉～中期後半の住居址49軒を調査した。Ⅰ～Ⅱ次調査を合わせると53軒に上る。そこで、東小倉遺跡における縄文時代の集落の動向を一応概観してみたい。その前に、最近の集落研究の動向にふれた谷口康浩氏の論文（谷口1998）から引用すれば「住居やその他の遺構の時期決定に出土土器の形式が第一の手掛かりとされているのが一般的であるが、その点にさまざまな問題が内包されている……」、「集落分析の大前提とも言える同時性のある遺構群の抽出をどういった方法に求めるか難しい。」などとあり、集落を考える前提として重要な認識であると受けとめなくてはならないだろう。また、住居址遺物出土状況の把握、覆土埋没過程の理解などを中心とした遺構の同時性解明を探る考え方（土井・黒尾1999）や、遺物を中心とした遺構間接合を解明することから、同時あるいは非同時存在を判断する考え方もある。更に松本平の中期後半の土器型式を巡ってはまだ一致を見ていない。こうした点を踏まえ今回調査した住居址・土坑等出土の遺物については、長野県誌考古資料編の縄文時代中期後半の時期区分に従った。それによる遺構の時期区分を（表4）に示した。次に本遺跡住居址の平面形・柱穴配置・炉の形態・周溝・遺物出土状況などについて、同じ中期後半の住居址を数多く調査した穂高町他谷遺跡（他谷遺跡2001）朝日村熊久保遺跡（熊久保遺跡2003）・山形村殿村遺跡（殿村遺跡1987）における調査事例と比較し、共通点・類似点を探ることによって、土器形式による時期区分と相互比較を試みてみた（表5）。そこで、各時期ごと・各住居址ごとに幾つか見てみると、後Ⅰ期34住は炉に注目した。他谷6・19・30住の炉の形態に類似する。熊久保23住は同じ形態の炉をもつが1段階古く分類されている。後Ⅰ期36住は住居壁よりやや内側に巡る周溝と、その溝上に柱穴が配置される点が、熊久保9・10住・他谷2・12住と類似している。いずれも後Ⅰ期及びやや古い時期に分類されている。東小倉37・43住は炉石が環状を呈することと、大形の円形住居址・壁際に浅く周溝が巡るなどの共通点がある。炉の形態・平面形は、他谷2・4住、熊久保9住と類似点があり井戸尻Ⅲ～梨久保B式期に位置付けられている。本址も後Ⅰ期の古い段階と考えたい。26住は埋甕炉を持つ点から他の住居と大きく違う。出土遺物の時期と差があると思われ、もっと古い段階の住居址の可能性を指摘したい。同じく32住も住居址の中央に埋甕炉がある。また壁際からやや内側に周溝が巡り、柱穴が周溝上に掘られていることなどが、前述した東小倉36住・熊久保9・10住・他谷2・12住殿村32住と類似点があるため、井戸尻Ⅲ段階～後Ⅰ段階と考えたい。38住は殿村22・24住と共通点が多い。炉はいわゆる掘り炬燵状を呈す大型石囲い炉である点、床面が黄色土ロームを固くたたきしめてあること、住居址覆土下層、床面から5～10cmの厚さで黒色炭化物層が観察されて、焼失家屋と考えられている点などがあげら

れる。また、出入り口付近や奥壁寄りの空間における遺物出土状況にも共通点が見出される。38住は奥壁寄りを調査区の都合から調査できていない事が残念である。また、他谷26住は後Ⅳ期の敷石住居とされているが、覆土床面上に炭化物・焼骨混入焼土が3～5cm程堆積している点や、広耳付壺型土器がほぼ完形で出土している点が類似している。百瀬忠幸氏は殿村遺跡報告書の中で、住居址内施設や床面出土遺物の持つ意味について考察しているが、中でも22・24住は出入り口部や奥壁寄りの空間で行われた祭祀行為と焼失家屋という両面からとらえた特殊性に注目している。東小倉38住・他谷26住がそれぞれの集落内でどんな役割を担っているか、考える上で重要な指摘である。もっと多く事例にあたって考察してみたい。次に39住であるが、熊久保7住・他谷38住・殿村17・22・24・19住と方形～五角形の平面形・柱穴配置・出入り口部の埋甕の存在などの類似点から後Ⅳ期に含めたい。40住は炉と奥壁との間にある土坑状の掘り込みに注目する。石壇とは少し異なるが内面に20cm程の扁平な礫を敷き詰め黒色炭化物が厚く堆積していた様子から、調理施設以外の石壇的な性格をもった遺構を考えたい。遺物からは後Ⅰ期と判断されているが、炉の形態・位置・石壇的の遺構から後Ⅱ期の住居址との共通点が多い。50住は38住との共通点を挙げておきたい。炉址は無いが、掘り炬燵状石囲い炉と思われる深く大きな土坑が壁際寄りにある。また、黒色炭化物層が床面上に厚く堆積しているなどがある。後Ⅱ～Ⅲ期におきたい。以上いくつかの住居址についてみてきたが、土器型式からは、ある時期にまとめられるが、他の要素からは前後する時間差が読み取れる場合が少なからずあるように思われる。殿村遺跡を調査した百瀬忠幸氏は報告書の中で「唐草文系土器の形式区分に本遺跡出土土器を当てはめるとき、これらの段階区分ではその多くが特定の段階へ集中してしまい、伴出状況等から導かれる明らかな時期差が一つの段階に吸収されて不明確となる結果が生じた……。」と述べている。今回の調査でも中期土器型式からは、後Ⅱ～Ⅲ期に53軒中27軒と多く集中する結果となった。百瀬氏はこれに対し、殿村遺跡内に限定しているが細かな段階設定を行って、遺構間の時期差を解明しようと努めた。当然有効な方法であるが、住居址の持つ様々な属性に注目して、時期差を明らかにしていく方法も考えられよう。今回は調査区が巾2m前後と制約があり、遺構全体を伺える例が無く主要な属性である平面形・炉址・柱穴について判明する例が少ない点が残念だが、部分的な検討からも興味深いデータは示せたと思われる。繰り返すが遺構の時期決定・同時性のある遺構の抽出は大きな課題であり困難も予想される。そのためにも調査段階で遺構から多くの情報を読み取る努力を心がけなくてはならないと痛感する。以上を踏まえて、今回調査した住居址を土器型式・遺構の形態両方を加味した指標で時期区分を行った上で集落の動向を探ってみたい。まず、集落の範囲を考えるにあたって地形・地質を担当された木船 清氏の所見から、重要なポイントを挙げると、一つ目はA地点での土層観察から黒沢川の流路が当時はもっと北西寄り

を流れていたと考えられること。(想定される方向をスクリーントーンで示した。) 同じくD地点からA地点への傾斜が現在よりはるかに急であったことが判明した。次にB・C地点で発見された凹地状地形の土層観察では、巾5～6mの凹地状地形が縄文時代にすでに存在し水が流れ小川として機能していた。中期後半以降、洪水によって埋没していった過程が読み取れた。この所見と住居址の分布を重ねたものが第150図である。黒沢川と小河川に挟まれた段丘上の斜面に、集落の範囲を捕らえることができる。次に集落の動向も同じく第150図に示したが、a付近に中期中葉の集落が想定される。調査では3件の住居址しか発見されていないが、相当量の土器がこの地区から発見されていて、その根拠としたい。後葉に入ると東西に拡張し、北東側ではⅡ～Ⅲ期に最大となり、Ⅳ期にb付近に縮少していく。南西側は道路工事にも立ち会ったが、第53住居址から西へ50m付近からは遺構・遺物共に無くなる。北東部より範囲・住居址軒数とも小さいがⅡ～Ⅲ期の短い間の集落と考えられる。一応遺跡の範囲・集落の動向を概観してみた。今後未調査部分が解明されることで、また新たな知見が得られることを期待したい。誌数が尽きたので更なる分析・他遺跡との比較検討は、今後の課題としたい。三郷村教育委員会・発掘作業・整理作業に従事された皆さんに感謝し終わりたい。

(今村 克)

引用・参考文献

- 小口栄一郎 (2003) 「熊久保遺跡」東筑摩郡朝日村教育委員会
神村 透 (1999) 「私の姓は唐草紋。名は無し」長野県考古学会誌90
櫛原功一 (1984) 「縄文中期の環状集落と住居形態」
黒尾和久 (1995) 「シンポジウム縄文中期集落の新地平」
谷井 彪「中部地方中期後半土器群と加曾利E式土器」
谷口康浩 (1998) 「國學院大學考古学資料館紀要 第14輯」
土井義夫・黒尾和久 (1999) 「縄文文化研究の100年」
百瀬忠幸 (1987) 「殿村遺跡」東筑摩郡山形村教育委員会
守矢昌文 (1995) 「上の平遺跡」茅野市教育委員会
三上徹也「所謂唐草紋土器の構造・変遷と形式名に関する考察」
山下泰永 (2001) 「池谷遺跡」南安曇郡穂高町教育委員会

写 真 图 版



7号住居址



11号住居址



1



2



3



4



5



6

1 : 45号住居址
4 : 検出面下

2 ~ 3 : 26号住居址
5 : 30号住居址

6 : 26号住居址



26号住居跡



30号住居址



K区

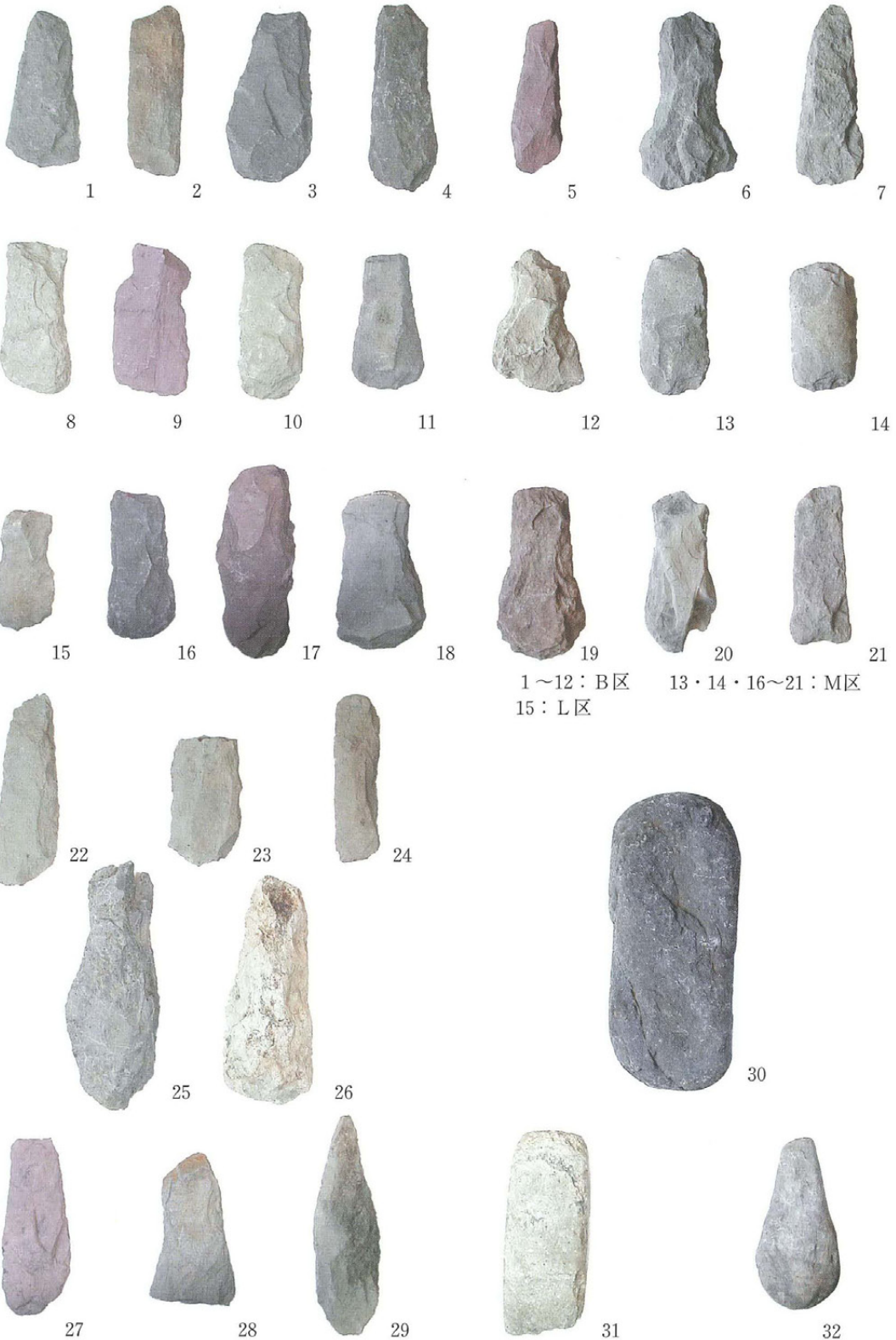


K区検出面



M区

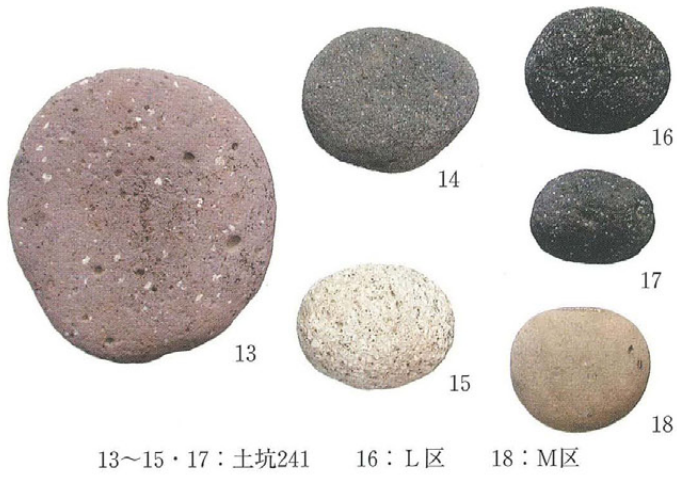
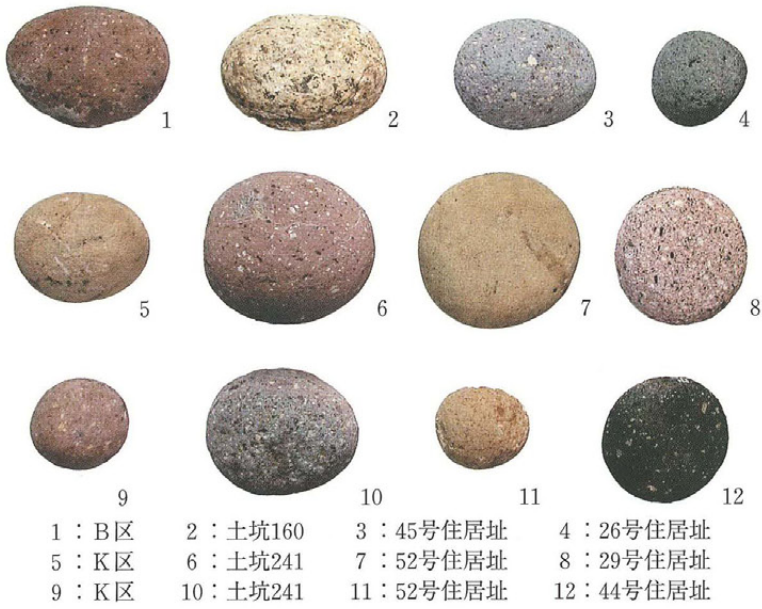
图版 2



1~12: B区
13·14·16~21: M区
15: L区

22·25·26·28·52号住居址
23: 47号住居址
24: 30号住居址
27: 37号住居址
29: 40号住居址

30: 33号住居址
31: M区③
32: M区①



图版 4



11号住居址



26号住居址



1

1 : 7号住居址



2

2~4 : 10号住居址



3



4

5 : 15号住居址



5



11号住居址



6

6 : 11号住居址



7

7 · 8 : 14号住居址



8

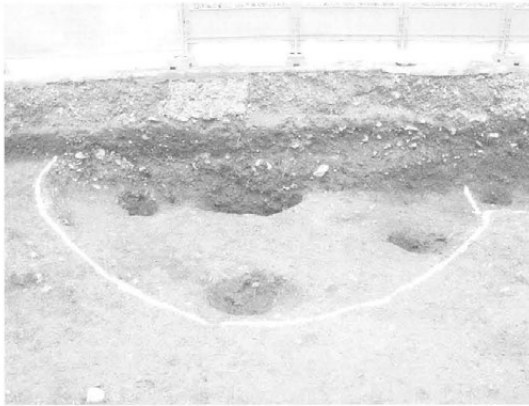
図版18 (第V次調査)



51号住居炉



51号住居遺物出土状況



52号住居全景



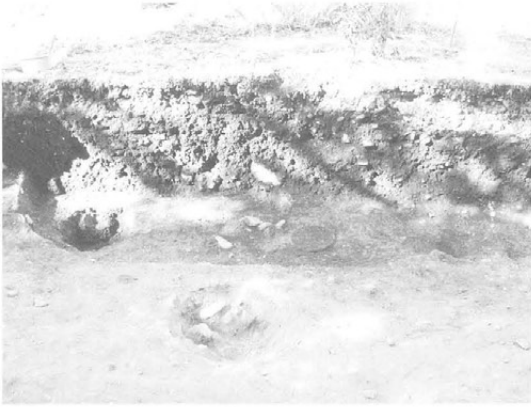
M区調査風景



松商学園放送部発掘体験 (平成14年11月2日)



三郷小学校5年生見学 (平成14年10月3日)



47号住居全景



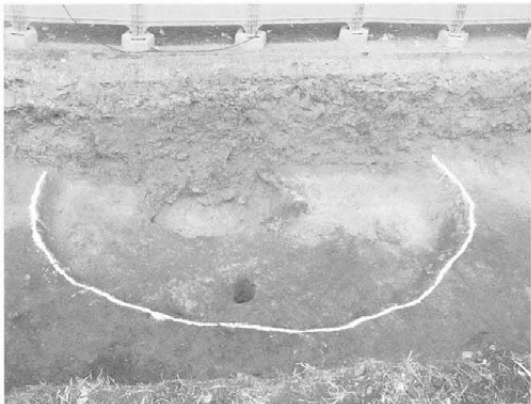
47号住居埋甕 (上から)



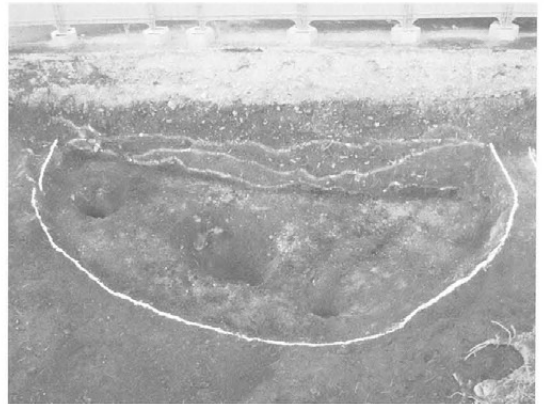
47号住居埋甕 (横から)



48号住居 (手前右) とL区全景



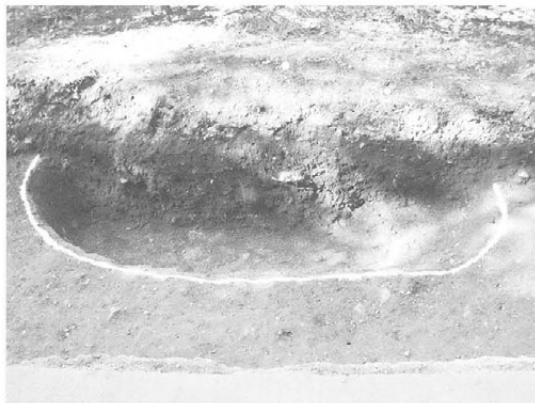
49号住居全景



50号住居全景



J区全景



45号住居全景



46号住居全景



46号住居埋甕炉



土坑266・竪1

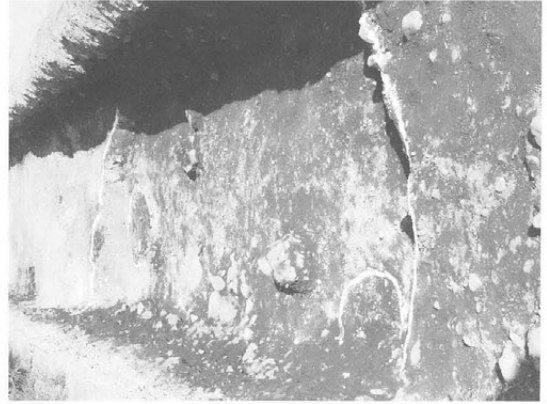


竪穴状遺構1

41号住居全景



42号住居全景



43号住居全景



43号住居遺物出土状況



44号住居全景



44号住居出土土器



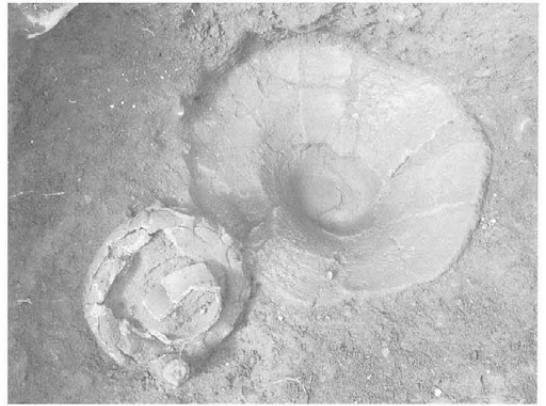
38号住居全景



38号住居炉



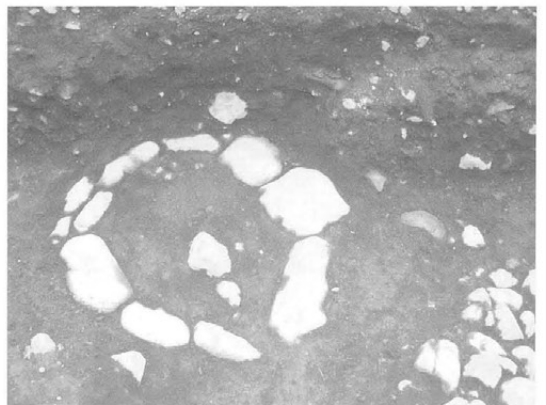
38号住居遺物出土状況



同 左



40号住居全景



40号住居炉



36号住居全景



36号住居土偶出土状況



37号住居全景



37号住居遺物出土状況



39号住居全景



39号住居埋甕

図版12 (第V次調査)



33号住居 (手前左)・35号住居 (手前右)・34号住居 (奥)



33号住居遺物出土状況



34号住居全景



34号住居炉



34号住居遺物出土状況



同 左



A・B区全景 (西より)



30号住居全景



31号住居埋甕と蓋石



32号住居全景



32号住居埋甕炉 (上から)



同 (横から)

図版10 (第V次調査)



28号住居全景



28号住居炉



右から埋甕1・同2・同3 (上から)



埋甕1



埋甕3



埋甕4



A区全景 (西より)



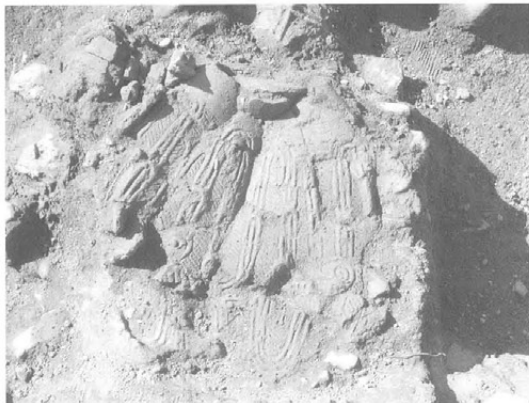
集石 1



26号住居 (手前)・27号住居 (奥) 全景



26号住居遺物出土状況



26号住居遺物出土状況

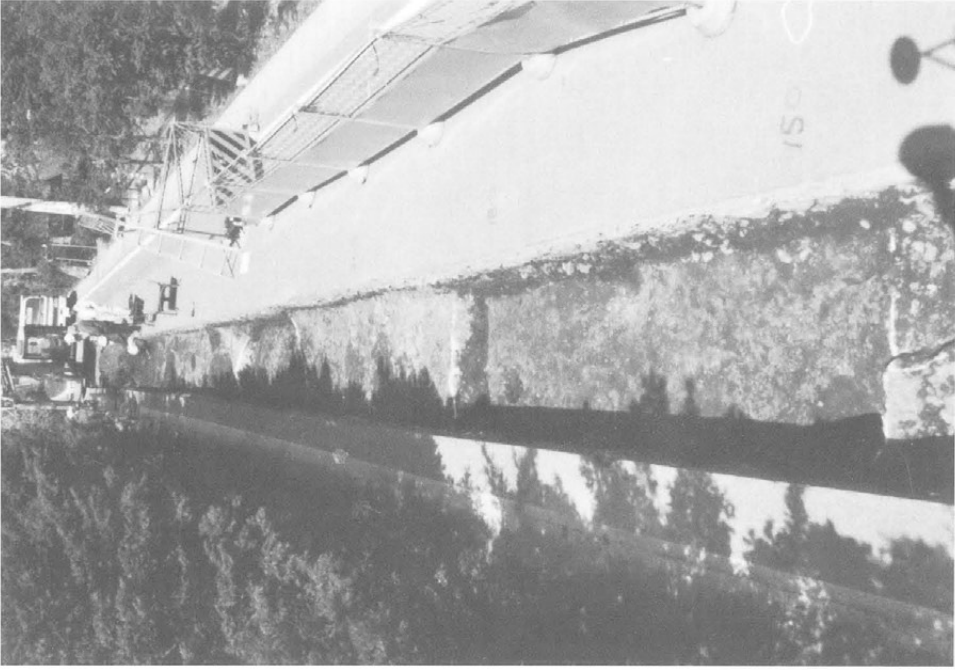


26号住居埋甕炉

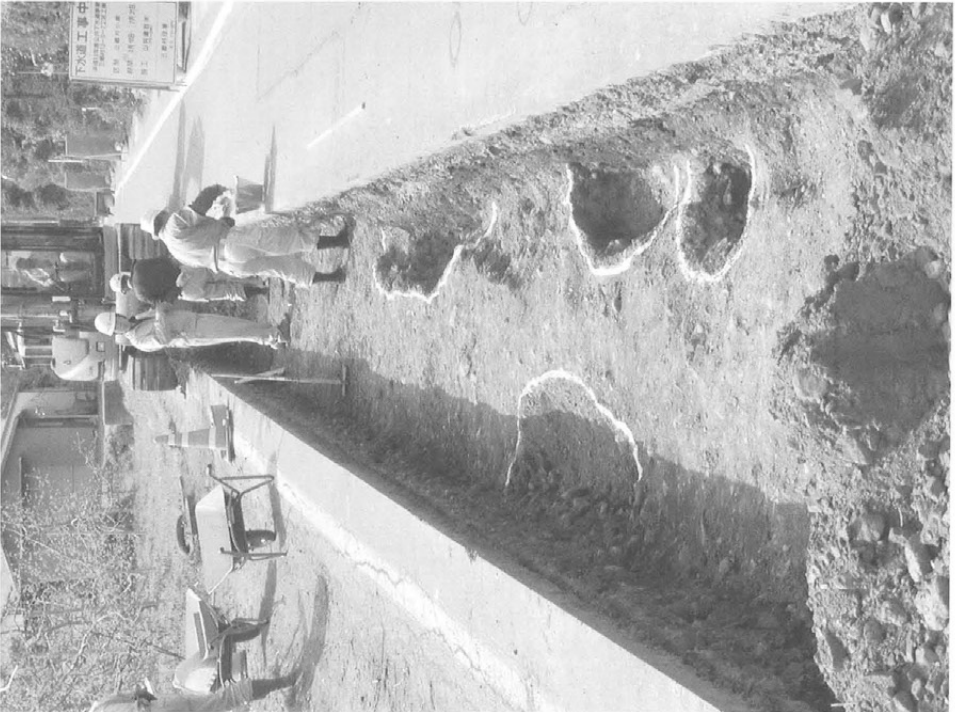
図版 8 (第三次調査)



溝 1 全景



10号住居址全景

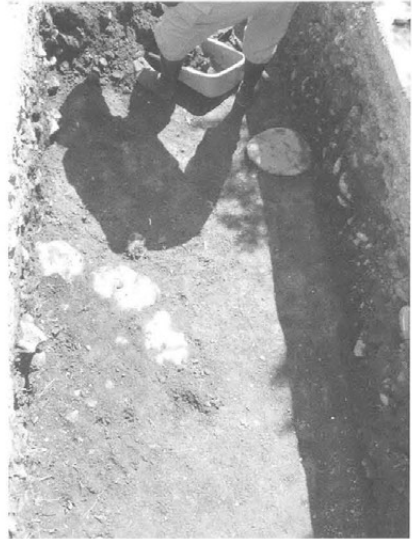


土坑53・54 (手前右側)・土坑55 (左側)・9号住居址 (奥右側)

図版6 (第三次調査)



5号住居址と周辺の土坑



10号住居址炉



11号住居址遺物出土状況



12号住居址礫出土状況



調査区遠景



調査風景

東小倉遺跡Ⅳ発掘調査報告書抄録

ふりがな	ひがしおぐらいせき							
書名	東小倉遺跡Ⅳ							
副書名	公共下水道工事・集落道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	三郷村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第6集							
編集者名	山田瑞穂、今村 克、那須野雅好、木船 清							
編集機関	三郷村教育委員会							
所在地	〒399-8192 長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810-1							
発行年月日	平成17年(2005)3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東小倉	ながのけんみなみあずみぐん 長野県南安曇郡 みさとむら おぐら 三郷村大字小倉	204668	6	36度 15分 14秒	137度 52分 01秒	平成14年 4月1日 } 11月9日	1020㎡	公共下水道工事及び集落道改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東小倉	集落跡	縄文時代	縄文中期 竪穴式住居址 38軒 小竪穴 1基 土坑 162基 溝状遺構 1箇所 集石 1基 単独埋甕 5	縄文中期土器 ミニチュア土器 土製品(土偶・ 円板・耳飾り) 石器(石鏃・打 製石斧・石匙・ 石皿・磨石・凹 石・敲打器) 石製品(石棒 片・碓)	線的な限られた調査にもかかわらず、数多くの遺構の検出を得て、予期通りの縄文中期の大集落址であることが判明した。第Ⅰ～Ⅳ次調査では検出の無かった縄文中期中葉の住居址も第Ⅴ次調査では確認でき、中葉から後葉に及ぶ集落であることも確認された。また集落の範囲も、ほぼ南西南北の限界が把握されて大きな成果を得たといえよう。			

三郷村の埋蔵文化財第6集

東小倉遺跡Ⅳ

平成17年3月25日 印刷

平成17年3月31日 発行

編集発行 三郷村教育委員会

長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810-1

印刷 電算印刷株式会社

